

来光寺跡  
来光寺遺跡  
立道遺跡  
平岩古墳

美作岡山道路建設に伴う発掘調査 1

2006

岡山県教育委員会



巻頭図版 1

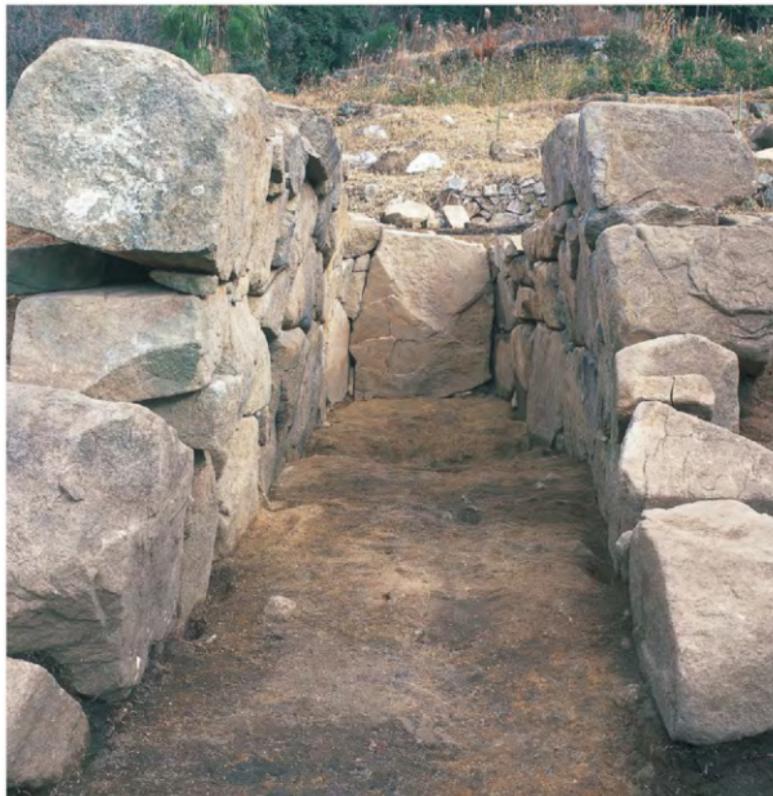


1 来光寺跡・来光寺遺跡全景（西上空から）中央に2基の基壇が見える



2 来光寺跡出土軒瓦

巻頭図版 2



1 平岩古墳横穴式石室（西から）



2 平岩古墳出土刀装具

## 序

本報告書には、赤磐市(旧赤磐郡吉井町)光木および石に所在する来光寺跡、来光寺遺跡、立道遺跡、平岩古墳の発掘調査結果を収載しました。

現在、岡山県では、県東部を南北に貫く地域高規格道路、美作岡山道路の整備を進めていますが、赤磐市北部の旧吉井町内では、その予定地内に来光寺跡をはじめとする複数の遺跡の存在が知られていました。岡山県教育委員会では、これらの遺跡の取り扱いについて関係機関と協議を重ねてまいりましたが、やむなく記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は平成9年度から11年度にかけて実施しました。調査の結果、来光寺跡では中世の仏堂と考えられる基壇建物を中心に寺院関連遺構が検出され、県内でも数少ない中世寺院の全面発掘調査例として重要な意味をもつものと思われます。来光寺遺跡では弥生時代から中・近世にいたる幅広い時代の集落跡を確認し、立道遺跡では平安時代の鍛冶遺構群が特筆されます。また平岩古墳は全長9mを超える大形の横穴式石室をもつことが判明し、出土品の中には銀象嵌文様を施した刀装具や金銅貼りの馬具を含むなど、有力な被葬者の姿をうかがうことができます。

これらの調査成果を収めた本書が、学術研究に寄与できるだけでなく、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を学ぶ上で広く役立つならば、これに過ぎる喜びはありません。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたりましては、当時の岡山県東備地方振興局建設部、地元の方々をはじめ、関係各位から多大な御指導と御協力を賜りました。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

平成18年2月

岡山県古代吉備文化財センター  
所長 松本和男



## 例　　言

- 1 本書は、美作岡山道路建設事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県東備地方振興局（現岡山県備前県民局東備支局）の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成9～11年度に発掘調査を実施した、来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡・平岩古墳の発掘調査報告書である。  
遺跡名は、発掘調査時の名称から一部変更しているが、その内容は第2章に記した。
- 2 来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡は岡山県赤磐市光木（旧赤磐郡吉井町光木）に所在し、平岩古墳は赤磐市石（旧赤磐郡吉井町石）に所在する。
- 3 確認調査は平成9・10年度に行い、本発掘調査は平成10・11年度に行った。担当調査員は浅倉秀昭・二宮治夫・内藤善史・澤山孝之・尾上元規・園奈歩（旧姓時實）・加藤和歲・安倉清博の8名で、調査面積は計13,260m<sup>2</sup>である。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては、美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、角南勝弘（平成16年度）、土居徹（平成9～11年度）、野崎貴博・間壁忠彦・松木武彦の各氏に委員を委嘱した。対策委員各氏からは、終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。
- 5 本書の作成は平成16年度に実施し、尾上が担当した。
- 6 出土遺物の鑑定・分析については、次の諸氏・機関に依頼し有益な教示を得た。また分析結果の一部については報告文をいただき、本書付載に収録した。記して感謝の意を表する。

・中・近世陶磁器の鑑定	大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
・石器・玉の石材同定	鈴木茂之（岡山大学理学部）
・鉄滓の鑑定・分析	大澤正己（株式会社九州テクノリサーチ・TACセンター）
・炭化材の樹種同定と年代測定	パリノ・サーヴェイ株式会社
- 7 本書の執筆は、二宮・内藤・澤山・尾上が担当し、目次に章または節ごとの分担を示したが、複数人で担当した箇所については、文末に文責を付した。全体の編集は尾上が行った。
- 8 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助をいただいた。
- 9 出土遺物および図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325・3）に保管している。

## 凡　　例

1 本書に用いた高度値は海拔高であり、方位は平面直角座標V系の座標北である。第7図・第48図・第75図・第76図・第111図・第112図の座標値は日本測地系に準據しており、報告書抄録に記載した經緯度は、世界測地系に準據している。

2 遺構および遺物の挿図縮尺は図中に示したが、おむね次のとおり統一している。

<遺構> 壓穴住居・段状遺構：1/60　　掘立柱建物・柱穴列：1/100　　ガ<sup>1</sup>：1/30・1/20

　　土壌：1/30・1/20　　溝断面：1/30

<遺物> 土器：1/4・1/5　　瓦：1/5　　石器：1/2・1/3　　鉄器：1/3

　　銅錢：1/2　　玉類：1/1

3 遺構配置図に示した遺構略称は、次のとおりである。

住：壓穴住居　　段：段状遺構　　土：土壌　　建：掘立柱建物　　基建：基壇建物

樹：石組樹　　墓：火葬墓　　盛土：盛上遺構　　湧水：湧水遺構　　立石：立石遺構

柱列：柱穴列

4 遺物番号は、遺跡ごとに通し番号とし、土器以外についてはその材質等により番号の前に次の略号を付して別番号とした。

瓦：R　　石製品：S　　土製品：C　　金属製品・鉄滓類：M　　ガラス：G

5 揭載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

6 遺構図において、被熱範囲と炭の分布範囲については以下のように示した。

被熱範囲 

炭の分布範囲 

7 土層断面図の土色は、各調査員の記述に従っており特に統一していない。付載3の土器観察表に示した色調は、基本的に『新版標準土色帳』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修)によっている。

8 第2図は国土地理院発行の1/25,000地形図「周匝」、第3図は国土地理院発行の1/50,000地形図「周匝」「和氣」を複製・加筆したものである。

9 時代・時期区分は一般的なものを用い、特に統一していない。また西暦による年代等を併用している。

# 目 次

卷頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 遺跡の位置と環境.....	(尾上元規) 1
第2章 発掘調査の経緯と経過.....	(尾上元規) 3
第1節 調査にいたる経緯.....	3
第2節 発掘調査の経過.....	4
第3章 来光寺跡.....	9
第1節 調査前の来光寺跡.....	(内藤善史) 9
第2節 調査区の概要.....	(尾上元規) 9
第3節 中・近世の遺構と遺物.....	(内藤善史・尾上元規) 11
第4章 来光寺遺跡.....	43
第1節 調査区の概要.....	(尾上元規) 43
第2節 弥生時代の遺構と遺物.....	(二宮治夫・尾上元規) 43
第3節 古墳時代～古代の遺構と遺物.....	(尾上元規) 49
第4節 中・近世の遺構と遺物.....	(二宮治夫・尾上元規) 51
第5章 立道遺跡.....	63
第1節 調査区の概要.....	(尾上元規) 63
第2節 縄文・弥生時代の遺物.....	(尾上元規) 63
第3節 古代の遺構と遺物.....	(二宮治夫・澤山孝之・尾上元規) 66
第4節 中・近世の遺構と遺物.....	(二宮治夫・澤山孝之・尾上元規) 73
第5節 「立道古墳群」について.....	(尾上元規) 88
第6章 平岩古墳.....	(二宮治夫) 89
第1節 立地と調査前の状況.....	89

第2節 調査の概要.....	90
第7章 考 察.....	101
第1節 中世の来光寺と瓦.....	(尾上元規) 101
第2節 近世以降の来光寺跡.....	(尾上元規) 110
第3節 立道遺跡における古代の鍛冶.....	(澤山孝之) 112
付載1 立道遺跡から出土した炭化材の年代と樹種.....	(パリノサーヴェイ株式会社) 116
付載2 立道遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査.....	(大澤正己) 121
付載3 遺物観察表.....	141
付載4 新旧遺構名称対照表.....	156

#### 図 版

報告書抄録

# 図 目 次

<b>第1章 遺跡の位置と環境</b>	
第1図 遺跡位置図	1
第2図 周辺の遺跡分布図（1/25,000）	2
<b>第2章 発掘調査の経過</b>	
第3図 予定路線と主な対象遺跡（1/80,000）	3
第4図 光木地区調査位置図（1/2,000）	5
<b>第3章 来光寺跡</b>	
第5図 「积迦堂」と石碑A	9
第6図 石碑B	9
第7図 遺構配置図（1/500）	10
第8図 基壇建物1①（1/80）	12
第9図 基壇建物1②（1/80）	13
第10図 基壇建物2（1/80）	14
第11図 基壇建物2周辺出土遺物（1/5・1/3）	15
第12図 瓦溜1（1/80）	16
第13図 瓦溜1出土遺物①（1/5）	18
第14図 瓦溜1出土遺物②（1/5）	19
第15図 平瓦凸面のタタキ痕	20
第16図 瓦溜1出土遺物③（1/5）	20
第17図 瓦溜1出土遺物④（1/5）	21
第18図 瓦溜1出土遺物⑤（1/5）	22
第19図 瓦溜1出土遺物⑥（1/5）	23
第20図 瓦溜1出土遺物⑦（1/4・1/3・1/1）	24
第21図 瓦溜2出土遺物（1/5・1/4・1/3）	25
第22図 石組樹1（1/60）・石組樹2（1/40）	26
第23図 池（1/80）・出土遺物（1/40）	27
第24図 道1（1/80）	27
第25図 道2（1/80）・出土遺物（1/4）	28
第26図 涝水遺構（1/30）	28
第27図 盛土遺構（1/80）	29
第28図 石列（1/50）	29
第29図 立石遺構（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）	30
第30図 溝（1/120・1/50）・出土遺物（1/4）	31
<b>第31図 立石列（1/100）</b>	31
第32図 掘立柱建物1（1/100）・出土遺物（1/2）	32
第33図 掘立柱建物2（1/100）	33
第34図 掘立柱建物3（1/100）・出土遺物（1/4）	33
第35図 焼1～5（1/30）・焼1出土遺物（1/4・1/3）	34
第36図 火葬墓（1/50）	35
第37図 火葬墓および周辺出土遺物（1/4・1/10）	36
第38図 土壙1（1/30）・出土遺物（1/4・1/1）	37
第39図 土壙2（1/30）・出土遺物（1/3）	38
第40図 土壙3（1/30）・出土遺物（1/4）	38
第41図 土壙4（1/30）・出土遺物（1/5）	38
第42図 土壙5（1/30）・出土遺物（1/4・1/3・1/2）	39
第43図 土壙6（1/30）	39
第44図 土壙7（1/30）	39
第45図 土壙8～11（1/30）	40
第46図 その他の遺物①（1/4）	41
第47図 その他の遺物②（1/3・1/2・1/1）	42
<b>第4章 来光寺遺跡</b>	
第48図 遺構配置図（1/500）	44
第49図 竪穴住居1・段状遺構1（1/60）・竪穴住居1出土遺物（1/4）	45
第50図 竪穴住居2（1/60）・出土遺物（1/4）	46
第51図 段状遺構2（1/60）・出土遺物（1/4）	47
第52図 段状遺構3（1/60）	47
第53図 段状遺構4（1/60）	48
第54図 土壙1～3（1/30）・土壙3出土遺物（1/4）	48
第55図 その他の遺物（1/4・1/3）	49
第56図 段状遺構5（1/60）・出土遺物（1/4）	50

第57図	土壤4(1/20)・出土遺物(1/4).....	50	(1/4) .....	73																																																																																			
第58図	その他の遺物(1/4).....	51	第90図	掘立柱建物2(1/100) .....	74																																																																																		
第59図	掘立柱建物1(1/100)・出土遺物 (1/4) .....	52	第91図	掘立柱建物3(1/100) .....	74																																																																																		
第60図	掘立柱建物2(1/100)・出土遺物 (1/3) .....	53	第92図	掘立柱建物4(1/100)・出土遺物 (1/4) .....	75																																																																																		
第61図	掘立柱建物3(1/100) .....	53	第93図	掘立柱建物5・6(1/100) .....	76																																																																																		
第62図	掘立柱建物4(1/100)・出土遺物 (1/4) .....	54	第94図	柱穴列1(1/100) .....	76																																																																																		
第63図	柱穴列1~3(1/100)・柱穴列2出土 遺物(1/4) .....	55	第95図	柱穴列2(1/100) .....	77																																																																																		
第64図	段状遺構6(1/60) .....	55	第96図	段状遺構2・3(1/60) .....	77																																																																																		
第65図	炉(1/30) .....	56	第97図	炉6(1/30) .....	78																																																																																		
第66図	土壤5(1/20)・出土遺物(1/4) .....	56	第98図	炉7~11(1/30) .....	79																																																																																		
第67図	土壤6・7(1/30) .....	56	第99図	土壤4・5(1/30) .....	79																																																																																		
第68図	土壤8~11(1/30) .....	57	第100図	土壤6~10(1/30) .....	80																																																																																		
第69図	土壤12~18(1/30) .....	58	第101図	土壤11~15(1/30) .....	81																																																																																		
第70図	土壤19~24(1/30) .....	59	第102図	土壤16(1/30)・出土遺物(1/4) .....	82																																																																																		
第71図	たわみ出土遺物(1/4) .....	60	第103図	土壤17(1/30)・出土遺物(1/4) .....	83																																																																																		
第72図	溝1~8(1/30) .....	60	第104図	土壤18(1/30)・出土遺物(1/4) .....	83																																																																																		
第73図	その他の遺物①(1/4) .....	61	第105図	溝3~11・道(1/30) .....	84																																																																																		
第74図	その他の遺物②(1/4・1/2・1/3) .....	62	第106図	その他の遺物①(1/4) .....	85																																																																																		
<b>第5章 立道跡</b>			第107図	その他の遺物②(1/4・1/1) .....	86																																																																																		
第75図	遺構配置図①B区(1/400) .....	64	第108図	その他の遺物③(1/4・1/3・1/2) .....	87																																																																																		
第76図	遺構配置図②A区(1/400) .....	65	第109図	「立道1号墳」(1/100)・石組裏 込め出土遺物(1/4) .....	88																																																																																		
第77図	縄文・弥生時代の遺物(1/4・1/2) .....	65	<b>第6章 平岩古墳</b>																																																																																				
第78図	段状遺構1(1/60)・出土遺物(1/4) .....	66																																																																																					
第79図	炉①(1/20) .....	67	第80図	炉②・3(1/30) .....	67	第110図	周辺地形図(1/1,000) .....	89	第81図	炉④・5(1/30) .....	68	第82図	溝1(1/30)・出土遺物(1/4) .....	68	第111図	調査前の状況(1/200) .....	90	第83図	溝2(1/30)・出土遺物(1/4) .....	69	第84図	土壤1(1/30)・出土遺物(1/4) .....	69	第112図	墳丘(1/120) .....	91	第85図	土壤2(1/30)・出土遺物(1/4) .....	70	第86図	土壤3(1/20)・出土遺物(1/4) .....	71	第113図	墳丘内列石(1/80) .....	91	第87図	その他の遺物①(1/4) .....	72	第88図	その他の遺物②(2/3) .....	72	第114図	墳丘断面(1/80) .....	92	第89図	掘立柱建物1(1/100)・出土遺物				第115図	横穴式石室(1/60) .....	94			第116図	奥壁部床面遺物出土状況(1/20) .....	95			第117図	出土遺物①(1/4) .....	96			第118図	出土遺物②(1/2) .....	97			第119図	出土遺物③(1/3) .....	98			第120図	出土遺物④(1/3) .....	99			<b>第7章 考 察</b>					第122図	中世の主要遺構(1/600)と遺物(1/8)	
第80図	炉②・3(1/30) .....	67	第110図	周辺地形図(1/1,000) .....	89																																																																																		
第81図	炉④・5(1/30) .....	68	第82図	溝1(1/30)・出土遺物(1/4) .....	68	第111図	調査前の状況(1/200) .....	90	第83図	溝2(1/30)・出土遺物(1/4) .....	69	第84図	土壤1(1/30)・出土遺物(1/4) .....	69	第112図	墳丘(1/120) .....	91	第85図	土壤2(1/30)・出土遺物(1/4) .....	70	第86図	土壤3(1/20)・出土遺物(1/4) .....	71	第113図	墳丘内列石(1/80) .....	91	第87図	その他の遺物①(1/4) .....	72	第88図	その他の遺物②(2/3) .....	72	第114図	墳丘断面(1/80) .....	92	第89図	掘立柱建物1(1/100)・出土遺物				第115図	横穴式石室(1/60) .....	94			第116図	奥壁部床面遺物出土状況(1/20) .....	95			第117図	出土遺物①(1/4) .....	96			第118図	出土遺物②(1/2) .....	97			第119図	出土遺物③(1/3) .....	98			第120図	出土遺物④(1/3) .....	99			<b>第7章 考 察</b>					第122図	中世の主要遺構(1/600)と遺物(1/8)										
第82図	溝1(1/30)・出土遺物(1/4) .....	68	第111図	調査前の状況(1/200) .....	90																																																																																		
第83図	溝2(1/30)・出土遺物(1/4) .....	69	第84図	土壤1(1/30)・出土遺物(1/4) .....	69	第112図	墳丘(1/120) .....	91	第85図	土壤2(1/30)・出土遺物(1/4) .....	70	第86図	土壤3(1/20)・出土遺物(1/4) .....	71	第113図	墳丘内列石(1/80) .....	91	第87図	その他の遺物①(1/4) .....	72	第88図	その他の遺物②(2/3) .....	72	第114図	墳丘断面(1/80) .....	92	第89図	掘立柱建物1(1/100)・出土遺物				第115図	横穴式石室(1/60) .....	94			第116図	奥壁部床面遺物出土状況(1/20) .....	95			第117図	出土遺物①(1/4) .....	96			第118図	出土遺物②(1/2) .....	97			第119図	出土遺物③(1/3) .....	98			第120図	出土遺物④(1/3) .....	99			<b>第7章 考 察</b>					第122図	中世の主要遺構(1/600)と遺物(1/8)																			
第84図	土壤1(1/30)・出土遺物(1/4) .....	69	第112図	墳丘(1/120) .....	91																																																																																		
第85図	土壤2(1/30)・出土遺物(1/4) .....	70	第86図	土壤3(1/20)・出土遺物(1/4) .....	71	第113図	墳丘内列石(1/80) .....	91	第87図	その他の遺物①(1/4) .....	72	第88図	その他の遺物②(2/3) .....	72	第114図	墳丘断面(1/80) .....	92	第89図	掘立柱建物1(1/100)・出土遺物				第115図	横穴式石室(1/60) .....	94			第116図	奥壁部床面遺物出土状況(1/20) .....	95			第117図	出土遺物①(1/4) .....	96			第118図	出土遺物②(1/2) .....	97			第119図	出土遺物③(1/3) .....	98			第120図	出土遺物④(1/3) .....	99			<b>第7章 考 察</b>					第122図	中世の主要遺構(1/600)と遺物(1/8)																												
第86図	土壤3(1/20)・出土遺物(1/4) .....	71	第113図	墳丘内列石(1/80) .....	91																																																																																		
第87図	その他の遺物①(1/4) .....	72	第88図	その他の遺物②(2/3) .....	72	第114図	墳丘断面(1/80) .....	92	第89図	掘立柱建物1(1/100)・出土遺物				第115図	横穴式石室(1/60) .....	94			第116図	奥壁部床面遺物出土状況(1/20) .....	95			第117図	出土遺物①(1/4) .....	96			第118図	出土遺物②(1/2) .....	97			第119図	出土遺物③(1/3) .....	98			第120図	出土遺物④(1/3) .....	99			<b>第7章 考 察</b>					第122図	中世の主要遺構(1/600)と遺物(1/8)																																					
第88図	その他の遺物②(2/3) .....	72	第114図	墳丘断面(1/80) .....	92																																																																																		
第89図	掘立柱建物1(1/100)・出土遺物				第115図	横穴式石室(1/60) .....	94			第116図	奥壁部床面遺物出土状況(1/20) .....	95			第117図	出土遺物①(1/4) .....	96			第118図	出土遺物②(1/2) .....	97			第119図	出土遺物③(1/3) .....	98			第120図	出土遺物④(1/3) .....	99			<b>第7章 考 察</b>					第122図	中世の主要遺構(1/600)と遺物(1/8)																																														
		第115図	横穴式石室(1/60) .....	94																																																																																			
		第116図	奥壁部床面遺物出土状況(1/20) .....	95																																																																																			
		第117図	出土遺物①(1/4) .....	96																																																																																			
		第118図	出土遺物②(1/2) .....	97																																																																																			
		第119図	出土遺物③(1/3) .....	98																																																																																			
		第120図	出土遺物④(1/3) .....	99																																																																																			
		<b>第7章 考 察</b>																																																																																					
		第122図	中世の主要遺構(1/600)と遺物(1/8)																																																																																				

1 / 10) .....	101	第126図 古代末～中世の寺院遺跡における 礎石建物 (1 / 400) .....	108
第123図 来光寺跡出土の中世瓦 (1 / 10) .....	102	第127図 立道遺跡A区古代の遺構 (1 / 400) · 遺物 (1 / 8) .....	112
第124図 同瓦 (1 / 4) .....	103		
第125図 東備地域における中世瓦の変遷 (一部他地域の資料を含む、1 / 6) .....	105		

## 表 目 次

第1表 協議対象となった旧赤磐郡吉井町 の遺跡 .....	4	第3表 文化財保護法に基づく提出書類一覧 .....	8
第2表 関連調査一覧 .....	6	第4表 県内出土の象嵌刀装具 .....	97

## 卷頭図版目次

卷頭図版 1 1 来光寺跡・来光寺遺跡全景 (西上空から)	卷頭図版 2 1 平岩古墳横穴式石室 (西から) 2 平岩古墳出土刀装具
2 来光寺跡出土軒瓦	

## 図版目次

来光寺跡	2 火葬墓 (北から)
図版 1 1 来光寺跡ほか遠景 (西から) 2 基壇建物 1・2周辺 (上が南)	図版 7 1 石列 (北から) 2 灼 <sup>1</sup> 1 (東から)
図版 2 1 基壇建物 1・2周辺 (東から) 2 基壇建物 1・2周辺 (南東から)	3 灼 <sup>1</sup> 2 (西から) 4 灼 <sup>1</sup> 3 (南から)
図版 3 1 基壇建物 1・瓦溜 1 ほか (南から) 2 基壇建物 2・石組樹 1 ほか (南から)	5 上壇 1 (南から) 6 土壇 2 (東から) 7 土壇 5 (西から)
図版 4 1 石組樹 2 (南西から) 2 道 2周辺 (北東から) 3 渕水遺構 (西から)	8 D区柱穴群 (北から) 図版 8 瓦溜 1 出土遺物①
図版 5 1 盛土遺構 (西から) 2 溝 (北東から) 3 立石列 (東から)	図版 9 1 瓦溜 1 出土遺物② 2 軒丸瓦B類瓦当の主な範囲
図版 6 1 立石遺構 (北から)	図版 10 1 瓦溜 1 出土遺物③ 2 瓦溜 2 出土遺物 図版 11 火葬墓および周辺出土遺物

図版12	遺構出土遺物	2 炉 <sup>1</sup> (南東から)
図版13	1 鉄製品 2 銅銭	3 土壙3 (西から)
図版14	1 砥石・ガラス玉 2 土壙5出土鍛冶関連遺物	図版24 1 掘立柱建物1 (南西から) 2 掘立柱建物4周辺 (北東から)
来光寺遺跡		図版25 1 掘立柱建物5・6 (西から) 2 段状遺構2・3周辺 (南西から) 3 炉 <sup>6</sup> (北西から) 4 炉 <sup>7</sup> (南東から) 5 炉 <sup>9</sup> (北東から)
図版15	1 壴穴住居1 (北西から) 2 壴穴住居2 (北西から) 3 段状遺構2・5 (北から)	6 土壙8 (東から) 7 土壙12 (北西から) 8 土壙16 (南西から)
図版16	1 土壙1 (南から) 2 土壙2 (北東から) 3 土壙4 (北西から)	図版26 1 繩文・弥生時代の遺物 2 古代の土器①
図版17	1 掘立柱建物1周辺 (南西から) 2 掘立柱建物3周辺 (南東から)	図版27 1 古代の土器② 2 古代の小鍛冶関連遺物 (ピット出土)
図版18	1 土壙5 (北西から) 2 土壙5遺物出土状況 (北西から)	図版28 土壙2出土大鍛冶関連遺物
図版19	1 炉1 (北西から) 2 土壙7 (南東から) 3 土壙10 (南から) 4 土壙12 (北西から) 5 土壙15 (南東から) 6 溝1～3・柱穴列3 (南西から) 7 溝7 (北から) 8 溝8 (北から)	図版29 中・近世の遺物①
図版20	弥生時代の遺物	図版30 中・近世の遺物②
図版21	1 古代の土器 (土壙4) 2 中・近世の土器類	平岩古墳
図版22	1 鉄製品・銅製品 2 来光寺遺跡・立道遺跡出土中国産青磁	図版31 1 古墳遠景 (南から) 2 横穴式石室 (西から)
立道遺跡		図版32 古墳全景 (西から)
図版23	1 段状遺構1 (北西から)	図版33 1 墳丘内の列石 (北から) 2 石室南側壁 (北西から) 3 石室北側壁 (南西から)
		図版34 1 須恵器 2 鉄滓
		図版35 武器・馬具・刀子
		図版36 鉄釘ほか
		図版37 装身具

# 第1章 遺跡の位置と環境

岡山県赤磐市は、岡山県下三大河川の一つ、吉井川の中流域右岸にあり、また本書収載の遺跡が所在する赤磐市北部（旧赤磐郡吉井町）は、吉井川最大の支流である吉野川と合流する地点でもある。備前国と美作国の境界にもなっており、交通上要衝の地といえる。

遺跡の所在地は、吉井川に注ぎ込む高田川に沿った狭く急峻な谷筋である。この谷筋は古くからの街道筋となっており、倉敷往来と呼ばれた<sup>(1)</sup>。岡山城下を発し、町菖田（赤磐市）・周匝（赤磐市）を経て美作倉敷（現美作市林野）に至る道である。また岡山から因幡へも主にこの道を利用したようで、『赤磐郡絵図』（池田家文庫）では「因幡往還」とされる。

遺跡の所在する、倉敷往来より南東の地区は、古代の行政区画では佐伯郷にあたるが、郡名は転々とした。もとは備前国赤坂郡に属したが、天平神護2年（766）には藤野郡に編入、神護景雲3年（769）には郡名が改称され和氣郡となる。さらに延暦7年（788）年には和氣郡から磐梨郡が分立され、吉井川西岸の当地域は磐梨郡に編入されることになる。こうした激しい動きの背景には、和氣氏の積極的な活動があったと考えられている。

赤磐市北部の遺跡を見ると、旧石器時代の遺跡は知られておらず、縄文時代に入って土器の出土が見られるようになる。弥生時代には中期後半から後期を中心とした集落遺跡が認められるようになる。標高250mの高所にある北坂奥遺跡では発掘調査が行われ、中期後半から後期前半頃の竪穴住居などが検出されている<sup>(2)</sup>。

古墳時代前半期の古墳は少ないが、3基の小円墳からなる上田古墳群<sup>(3)</sup>はこの時期の可能性がある。横穴式石室をもつ後期古墳は、当地域にも点々と分布している。主要な古墳はいずれも倉敷往来に沿うように分布しており、古墳築造の背景に陸上および河川交通があつたことをうかがわせる。倉敷往来と吉井川が合流する位置にある小枝2号墳は、装飾をもつ家形陶棺が出土したことで著名である<sup>(4)</sup>。

古代になると、黒本庵寺や寂光寺跡など瓦を出土する遺跡があり、また火葬墓骨器や経塚なども知られている<sup>(5)</sup>。これらの仏教関連遺跡に加え、平城宮跡出土の木簡も重要である<sup>(6)</sup>。「備前国赤坂郡周匝郷訓釣十口 天平十七年（745）十月廿日」と書かれたもので、鉄および鉄器生産がさかんであったことをうかがわせる。

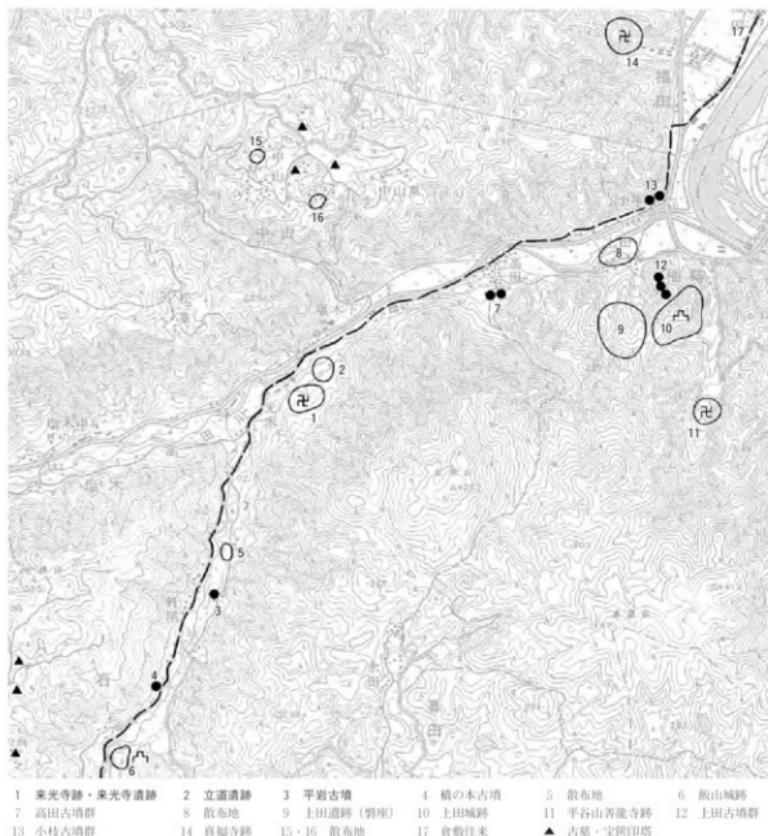
古代末から中世にかけて、当該遺跡周辺には佐伯庄が置かれた。詳細な場所は不明だが、もと平家没官領で、久我家領を経て室町時代には幕府の直轄領となっている。

赤磐市北部の中世遺跡では、本書収載の来光寺跡をはじめとする寺院跡のほか、山城跡が多い。吉井川の自然堤防上にある川平遺跡は中世後期の川湊集落と推定され<sup>(7)</sup>、交通上、戦略上重要な役割を果たした地域であった。

中世末期には備前南部の宇喜多氏の権力下に組み込まれ、近世には岡山藩に属することになる。



第1図 遺跡位置図



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

### 註

- (1) 雅波保夫「倉敷往来」『岡山県歴史の道調査報告書』第六集 岡山県教育委員会 1993
- (2) 浅倉秀昭「北阪奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』172 岡山県教育委員会 2003
- (3) 伊藤晃「考古編」『吉井町史』第2巻、資料編上 1991
- (4) 河本清「小枝2号墳」吉井町教育委員会 1990
- (5) 註3文献
- (6) 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡』1 1969
- (7) 註3文献

その他全般にわたって、『吉井町史』第1巻・通史編 1995を参照した。

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

岡山県は、県政の重要課題の一つである県内循環高速道路網の形成に取り組むなかで、既存の中圏貫自動車道（中国道）・山陽自動車道（山陽道）・中国横断自動車道岡山米子線（岡山道・米子道）に加え、地域高規格道路美作岡山道路の整備計画を策定した。岡山県東部、赤磐郡瀬戸町（山陽道）と勝田郡勝央町（中国道）を結ぶ、延長約36kmの区間である。

岡山県教育庁文化課（現文化財課）は、路線計画段階の平成4・5年度に、区間の一部である瀬戸～吉井間の遺跡詳細分布調査等を実施し、路線決定に備えた。そして、熊山IC（仮称）～吉井IC（仮称）間の延長約11kmについて路線が決定、用地買収等の条件整備が進展した平成8年度から、県東備地方振興局（現備前県民局東備支局）との本格的な協議が始まった。平成8年度末には、熊山IC（仮称）～吉井IC（仮称）間の遺跡について、県東備地方振興局長から文化財保護法第57条の3に基づく発掘の通知が提出され（平成9年3月26日付、東地振建第1246号）、用地内の遺跡については工事着手前に発掘調査を実施し、さらに調査の結果重要な遺構等が発見された場合は別途協議することとした（平成9年4月4日付、教文埋第6号、県教育長文書）。

こうして、平成9年度から熊山～吉井間の遺跡について確認調査及び本発掘調査が開始されることになった。

本書所収の旧赤磐郡吉井町の遺跡については、平成9年度に確認調査、平成10年度に追加の確認調査と本発掘調査、平成11年度に本発掘調査を実施し、平成16年度に整理作業を行った。



第3図 予定路線と主な対象遺跡 (1/80,000)

◆ 調査済み ◇ 未調査

(数字)は既刊の「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」番号

## 第2節 発掘調査の経過

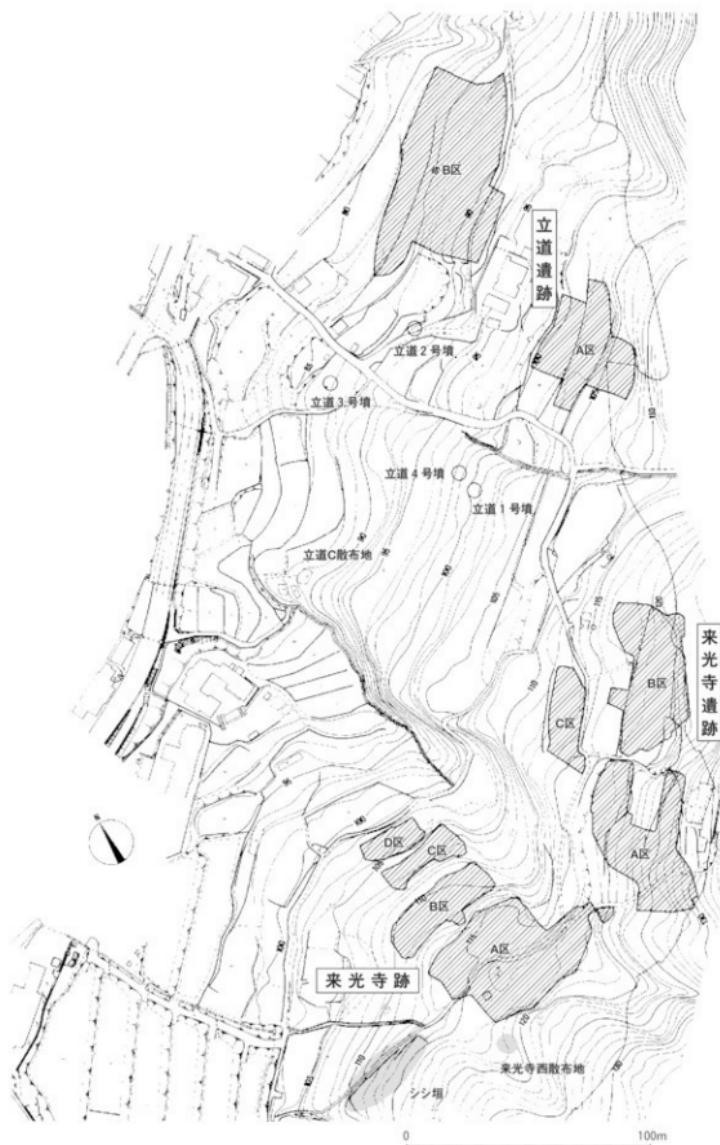
### 1 協議対象遺跡と確認調査

本道路事業の関連で、協議対象となった赤磐市（旧赤磐郡吉井町）光木・石地区の遺跡は計13か所である（第1表）。これは、主として平成5年度に行った詳細分布調査の成果に基づいている。光木地区に10遺跡（第4図）、それより南方およそ1kmの石地区に3遺跡があった。平成9・10年度には、これらの遺跡について現地踏査と確認調査を実施したが、このうち、シシ垣と立道2号墳は現地踏査と聞き取り調査の結果から遺跡ではないと判断され、確認調査対象から除外した。また平岩古墳については、現況から古墳の概要や規模等がある程度判明していたため、確認調査は行っていない。その他の10遺跡についてはトレンチ調査を実施し、遺跡の有無や内容の確認、本発掘調査の対象面積の決定等を行った。確認調査は主として平成9年6月から8月にかけて行い、残部を平成10年度に本発掘調査と並行しながら行った。

確認調査の結果、来光寺西散布地、立道3号墳、仁軒屋A遺跡、仁軒屋B遺跡の4遺跡においては遺構等が認められず、本発掘調査の対象となったのは、来光寺跡、立道A遺跡、立道B遺跡、立道古墳（立道1号墳）、立道4号墳、立道C散布地、平岩古墳の計7遺跡である。なお、本書ではこの段階の来光寺跡を「来光寺跡」（第3章）と「来光寺遺跡」（第4章）に区分し、立道A・B遺跡を一括して「立道遺跡」（第5章）としている。立道A・B遺跡は、本書の立道遺跡A区・B区にそれぞれ対応する。

第1表 協議対象となった旧赤磐郡吉井町の遺跡

所在地 (大字)	遺 跡 名	確認調査	踏査・確認調査等の所見	本発掘調査	本書収録遺跡名
光木	来光寺跡	H9・10年度	来光寺に隣接する方形の石組基壇、礎石建物跡を確認。 そのほか弥生時代～近世の集落遺構等を確認。	H10・11年度	来光寺跡（第3章） 来光寺道路（第4章）
	来光寺西散布地	H9年度	かつて埴輪片が採集され、古墳が所在する可能性があるといわれたが、確認調査の結果、遺構は検出されず。	—	—
	シシ垣	—	石垣が方筋にめぐり一部が開口する遺構。細い網状に判断された。	—	—
	立道A遺跡	H9・10年度	確認調査の結果、古代～中世をはじめとする遺物と柱穴等の遺構を確認。 ＊本書では「立道跡A区」	H10・11年度	立道遺跡（第5章）
	立道B遺跡	H9・10年度	確認調査の結果、中世をはじめとする遺物と柱穴等の遺構を確認。 ＊本書では「立道跡B区」	H10・11年度	立道遺跡（第5章）
	立道古墳	H9年度	石室とねじまき石組みが残存。確認調査の結果、径約18mの横穴式石室墳と推定された。	H10年度	立道遺跡（第5章）
	立道2号墳	—	巨石が集積するが、聞き取りの結果、古墳ではなく塀を立て埋めた跡と判断。	—	立道遺跡（第5章）
	立道3号墳	H9年度	墳丘とされる高まりは用地位外にあり、用地位内の確認調査では遺構は検出されず。	—	立道遺跡（第5章）
	立道4号墳	H9年度	石室とねじまき石組みが残存。確認調査の結果、径約12mの横穴式石室墳と推定された。	H10年度	立道遺跡（第5章）
	立道C散布地	H9年度	須恵器片の散布が認められた。確認調査の結果、谷部に遺物を含む小堆墳を確認。	H10年度	—
石	平岩古墳	—	墳丘が削平を受けているが、横穴式石室を主体とする古墳。	H11年度	平岩古墳（第6章）
	仁軒屋A遺跡	H10年度	煙内に集石があり「刃が3本埋めてお掘ってはならない場所」と伝える。確認調査の結果、遺構は検出されず。	—	—
	仁軒屋B遺跡	H10年度	仁軒屋A遺跡と同様、煙内の集石であるが、確認調査の結果、遺構は検出されず。	—	—



第4図 光木地区調査位置図 (1/2,000)

## 2 本発掘調査

確認調査の成果を受け、計7遺跡について、平成10・11年度に本発掘調査を行った。

平成10年度は、9月から3月の期間に調査員7名で調査を行った。対象遺跡は来光寺跡（旧来光寺跡1区）、来光寺遺跡（旧来光寺跡2区）、立道古墳、立道4号墳、立道遺跡（旧立道A・B遺跡）、立道C散布地である。このうち立道古墳、立道4号墳については約2か月間の調査を行ったが、古墳ではなく近世以降の石組み遺構であることが判明した。また、立道C散布地については1週間程度の調査であったが斜面堆積層のみを確認し、遺構は確認されなかった。

来光寺跡、来光寺遺跡、立道遺跡を中心に約5,800m<sup>2</sup>を調査し、残った部分は次年度に持ち越すことになった。この間、埋蔵文化財保護対策委員会を2回開催し（11月27日・3月9日）、指導を受けた。また、来光寺跡において基壇建物跡の全容が現れてきた12月11日には、ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を行っている。

平成11年度は、4月から3月の期間に調査員3名で調査を行った。ただし10月以降は調査員2名である。対象遺跡は来光寺跡、来光寺遺跡、立道遺跡、平岩古墳で、調査面積は計6,874m<sup>2</sup>であった。埋蔵文化財保護対策委員会は3回開催し（6月11日・11月16日・2月22日）、指導を受けた。

## 3 報告書の作成

報告書の作成は、発掘調査の終了から4年が経過した平成16年度に行い、年度を通じて調査員1名が担当した。遺物の復元、実測作業にはそれぞれ作業員2名があたり、9月にはほぼ終了した。1月には遺物の写真撮影や剖付作業を終了、それ以降原稿の執筆作業を行った。埋蔵文化財保護対策委員会は2回開催し（10月16日・2月17日）、指導を受けた。

第2表 関連調査一覧

年度	遺跡名	調査担当者	調査期間	遺物数 (箱)	面積 (m <sup>2</sup> )
H9	来光寺跡・来光寺西散布地・立道古墳・立道4号墳・立道A遺跡・立道B遺跡(確認)	二宮治夫	6.23~8.28	3	575
	来光寺跡(確認含む)	内藤善史・尾上元規・安倉清博	9.1~1.14	38	
	来光寺遺跡(確認含む)	浅倉秀昭・内藤善史・澤山孝之 尾上元規・時實奈歩・加藤和哉 安倉清博	9.1~3.31	10	3,002
H10	立道古墳・立道4号墳	浅倉秀昭・澤山孝之・時實奈歩 加藤和哉	11.2~12.24	11	618
	立道遺跡(確認含む)	浅倉秀昭・内藤善史・澤山孝之 尾上元規・時實奈歩・加藤和哉 安倉清博	12.3~3.12	13	1,983
	立道C散布地	浅倉秀昭	12.8~12.18	5	196
	仁軒屋A遺跡・仁軒屋B遺跡(確認)	浅倉秀昭・内藤善史	7.14~7.15	1	12
	来光寺跡	二宮治夫・尾上元規・安倉清博	4.1~6.15	10	
	来光寺遺跡	二宮治夫・尾上元規・安倉清博	5.12~10.22	18	4,360
H11	立道遺跡	二宮治夫・安倉清博	10.21~3.31	6	2,140
	平岩古墳	二宮治夫・安倉清博	12.6~2.25	3	374
			計	118	13,260

## 4 調査の体制

平成9年度（確認調査）

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 平岩 武

岡山県教育庁文化課

課長 高田 明香

課長代理 西山 猛

参事 葛原 克人

課長補佐（埋蔵文化財係長） 平井 勝

文化財保護主任 大橋 雅也

主事 三宅 美博

岡山県古代吉備文化財センター

所長 萩本 克之

次長 正岡 瞳夫

〈総務課〉

課長 小倉 畿

課長補佐（総務係長） 井戸 大二

主査 木山 伸一

〈調査第三課〉

課長 柳瀬 昭彦

課長補佐（第三係長） 下澤 公明

文化財保護主幹 二宮 治夫

（調査担当）

平成10年度（確認調査・本発掘調査）

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 平岩 武

岡山県教育庁文化課

課長 高田 明香

課長代理 西山 猛

参事 正岡 瞳夫

課長補佐（埋蔵文化財係長） 松本 和男

文化財保護主任 大橋 雅也

主事 三宅 美博

岡山県古代吉備文化財センター

所長 葛原 克人

次長 大村 俊臣

〈総務課〉

課長 小倉 異

課長補佐（総務係長） 安西 正則

主査 山本 恒輔

〈調査第二課〉

課長 伊藤 晃

課長補佐（第一係長） 浅倉 秀昭  
（調査担当）文化財保護主幹 内藤 善史  
（調査担当）文化財保護主任 澤山 孝之  
（調査担当）文化財保護主事 尾上 元規  
（調査担当）主事 時實 奈歩  
（調査担当）主事 安倉 清博  
（調査担当）主事 加藤 和哉  
（調査担当）

平成11年度（本発掘調査）

岡山県教育委員会

教育長 黒瀬 定生

岡山県教育庁

教育次長 宮野 正司

岡山県教育庁文化課

課長 松井 英治

課長代理 佐々部和生

参事 正岡 瞳夫

課長補佐（埋蔵文化財係長） 松本 和男

文化財保護主任 大橋 雅也

主任 奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

所長	葛原 克人	岡山県教育庁文化財課	
次長	大村 優臣	課長	芦田 和正
〈総務課〉		参事	田村 啓介
課長	小倉 昇	総括副参事（埋蔵文化財班長）	平井 泰男
課長補佐（総務係長）	安西 正則	主任	小林 利晴
主査	山本 恒輔	主事	秋山 良樹
〈調査第三課〉		岡山県古代吉備文化財センター	
課長	柳瀬 昭彦	所長	正岡 瞳夫
課長補佐（第二係長）	二宮 治夫 (調査担当)	次長（総務課長）	内田 猛
文化財保護主任	澤山 孝之	参事	松本 和男
文化財保護主事	尾上 元規 (調査担当)	参事	伊藤 晃
主事	安倉 清博 (調査担当)	総括副参事（総務班長）	笏本 弘忠
		主任	小坂 文男
		主任	小川 紀久
平成16年度（報告書作成）		〈調査第三課〉	
岡山県教育委員会		課長	柳瀬 昭彦
教育長	宮野 正司	総括副参事（第三班長）	山磨 康平
岡山県教育庁		主任	尾上 元規 (報告書担当)
教育次長	釜瀬 司		

第3表 文化財保護法に基づく提出書類一覧

### 埋蔵文化財発掘の通知（第94条／旧第57条の3）

岡山県文書番号 番号・日付	種類及び名称	所在地	面積(㎡)	目的	主体者	期間	整理の内容・理由
教文理 第72号 H19.4.4	散在地・集落跡・都城跡・ 城跡・社寺跡・古墳・ その他の墓前地6号埴 はづ	鹿児町可見下 71-12番地ほか	1,130,000	道路建設	東陽方面松原町長 住野直之	H19.未定～ H17.3.31	・工事着手前に発掘調査を実施する。 ・調査の結果重要な遺構等が発見された 場合は別途協議する。

### 発掘調査の報告（第99条／旧第98条の2）

岡山県文書番号 番号・日付	種類及び名称	所在地	面積(㎡)	目的	主体者	担当者	期間
教文理 第72号 H19.7.4	散在地・集落跡・古墳・ 生糸遺跡	赤磐市古井町光木本 社跡・立道跡・遺跡ほか	635	道路建設	岡山県教育委員会 教育長 黒瀬定生	二宮治夫	H19.6.25～H19.8.29
教文理 第77号 H19.9.25	散在地・集落跡・ 社跡・立道跡・遺跡ほか	赤磐市古井町光木本 社跡・立道跡・遺跡ほか	3,525	道路建設	岡山県教育委員会 教育長 黒瀬定生	浅谷秀昭 澤山孝之 加藤和哉 安貞清博	H19.9.1～H19.3.31
教文理 第140号 H19.4.21	集落跡・古墳末光寺跡・ 生糸遺跡・道田遺跡 仁村原 平行古墳	赤磐市古井町光木本、 仁村原	4,754	道路建設	岡山県教育委員会 教育長 黒瀬定生	二宮治夫 尾上元規 安貞清博	H19.4.1～H19.3.31

### 埋蔵文化財発見通知（第100条／旧第61条）

岡山県文書番号 番号・日付	物件名	出土土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文理 第155号 H19.3.31	弥生土器・中古墳の 上部(大・古む)・陶瓶器 3丁箱	赤磐市古井町光木本 末光寺跡ほか	H19.6.25～ H19.3.27	岡山県教育委員会 教育長 黒瀬定生	個人	岡山県古代吉備文化財センター
教文理 第154号 H19.3.31	上部(生土器・土師器・ 中古墳の上部)・陶瓶 3丁箱	赤磐市古井町光木本 末光寺跡・立道跡ほか	H19.9.1～ H19.3.31	岡山県教育委員会 教育長 黒瀬定生	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター
教文理 第173号 H19.3.21	須恵器・土師器・鐵器等 3丁箱	赤磐市古井町大字石 子字川原平吉古墳	H11.12.6～ H12.2.25	岡山県教育委員会 教育長 黒瀬定生	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター
教文理 第173号 H19.3.21	弥生土器・須恵器・土師器 3丁箱	赤磐市古井町光木本 末光寺跡ほか	H11.4.6～ H12.3.17	岡山県教育委員会 教育長 黒瀬定生	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター

## 第3章 来光寺跡

### 第1節 調査前の来光寺跡

来光寺は、明治8年の改正村名まで「磐梨郡佐伯莊來光寺村」という、村名にまで使われていた寺であるが、寛文7(1667)年池田藩主の圧迫によるものか廢寺となり、詳細はまったく不明である。

現在は、吉井川の支流である高田川に面した山麓に、一辺45m四方程の平坦面があり、境内であったと考えられる。その平坦面の中央からやや南西に寄ったところに、一辺が10m四方の基壇が遺存している。基壇の北側には幅1.5m程の道がかすめるように東西方向にのびている。基壇の中央部には、基壇とはやや方向を違えて2×1間の質素な「釈迦堂」が東向きに建立されている。

基壇上のこの「釈迦堂」の北側には、「村中建之」の「南無 正徳院 観光院 意照院 歴代先師」と彫られた碑（石碑A）が建てられている。また、基壇の西側に面した南端部には明和7(1770)年に建てられた「役行者大菩薩」の碑（石碑B）がある。なお、基壇の西側に面した平坦面は、「観音院踊場」と呼ばれ、かつては盆踊りなどが行われていたようである。

### 第2節 調査区の概要

「来光寺跡」とした調査区は、「堂成」と呼ばれる平坦面（A区）およびそこから北側へ階段状に造成された3つの平坦面（B・C・D区）である。A区が標高115m前後、B区が110m前後、C区が105m前後、D区が102m前後にある。

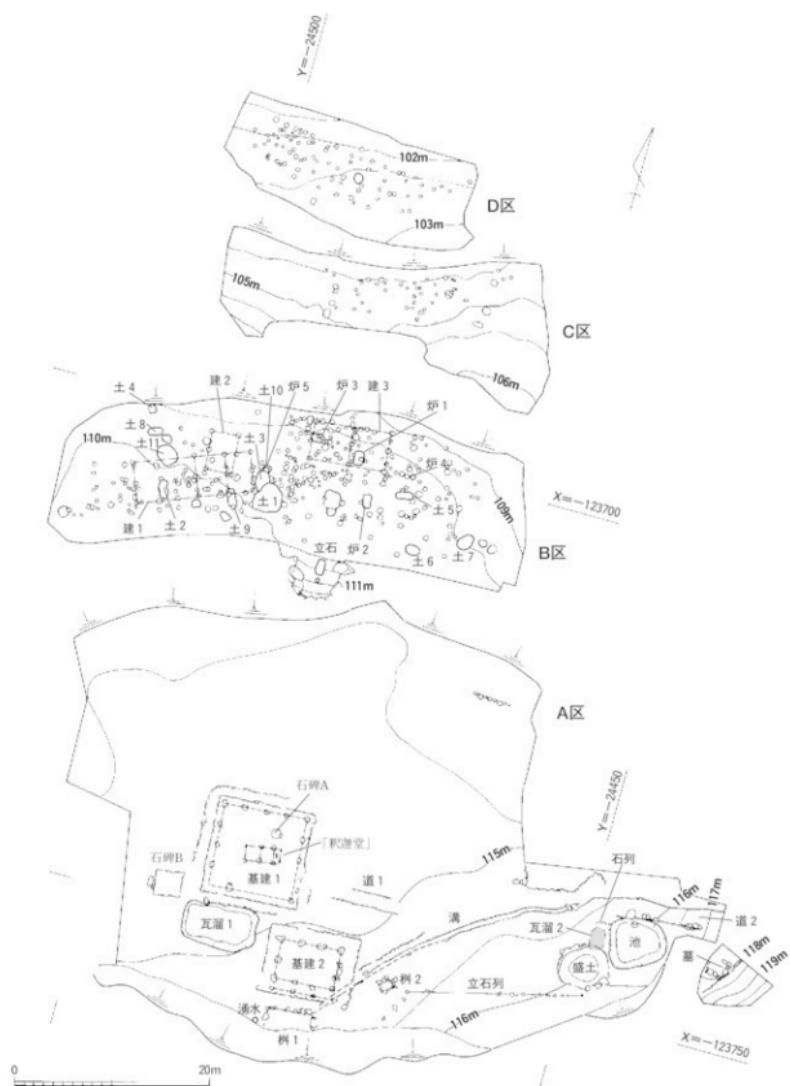
検出された遺構はすべて中・近世のもので、それ以前の遺構は認められない。遺構の状況はA区とB～D区とで大きく異なる。A区では柱穴がほとんど検出されず、石組の遺構が多い。また遺構のない広場が存在し、寺院の中心的な場所であることを示しているようである。一方、B～D区では柱穴が多数認められ、B区では掘立柱建物3棟を確認している。そのほか、B区では柱跡が多数検出され、寺院付属の鍛冶工房が設置されていた可能性がある。また数珠玉も出土し寺院との関連が深い。



第5図 「釈迦堂」と石碑A



第6図 石碑B（西から）



第7図 遺構配置図 (1/500)

### 第3節 中・近世の遺構と遺物

#### 1 基壇建物

##### 基壇建物1（第8図・第9図）

一辺が約45m四方ある平坦面の中央部から僅かに南西寄りの位置に、一辺の長さ10m程の方形の基壇がほぼ方位に沿って二段で築かれている。

一段目の基壇は、東側が遺存していないため明らかではないが、他の三辺の状況から推測して、一辺の長さ12m前後で高さ30~40cmを測る規模であったと考えられる。基壇の縁には20~40cmの山石が外側に面を揃えて並べられている。特に、北側と南側の辺はよく面が揃えられているが、西側の面には少し乱れがあり、使用されている石もやや小振りなものが主体である。一段目の基壇の南西部には後世に建てられたとみられる「役行者の碑」があり、その土台作りの際に基壇の石が使われて、かなり改変されたものと考えられる。

基壇の築かれている旧地形はほぼ平坦であるが、南東側が僅かに高く北西に向って下がっている。このため、一段目の基壇上面の高さは南側がやや高く仕上げられている。

二段目の基壇は、一段目の基壇から1m程内側に築かれている。一辺の長さは10mの方形で、高さは、一段目と同じく30~40cmを測る。基壇の縁には20~40cmの山石を並べ面を揃えている。角の石は意識されて積まれたものか、北西および南西角の石は立てて使われている。特に、北西角の遺存状態は良好なものとみられる。一段目の基壇の高低は二段目でほぼ補正されており、二段目の上面はほぼ水平になっている。

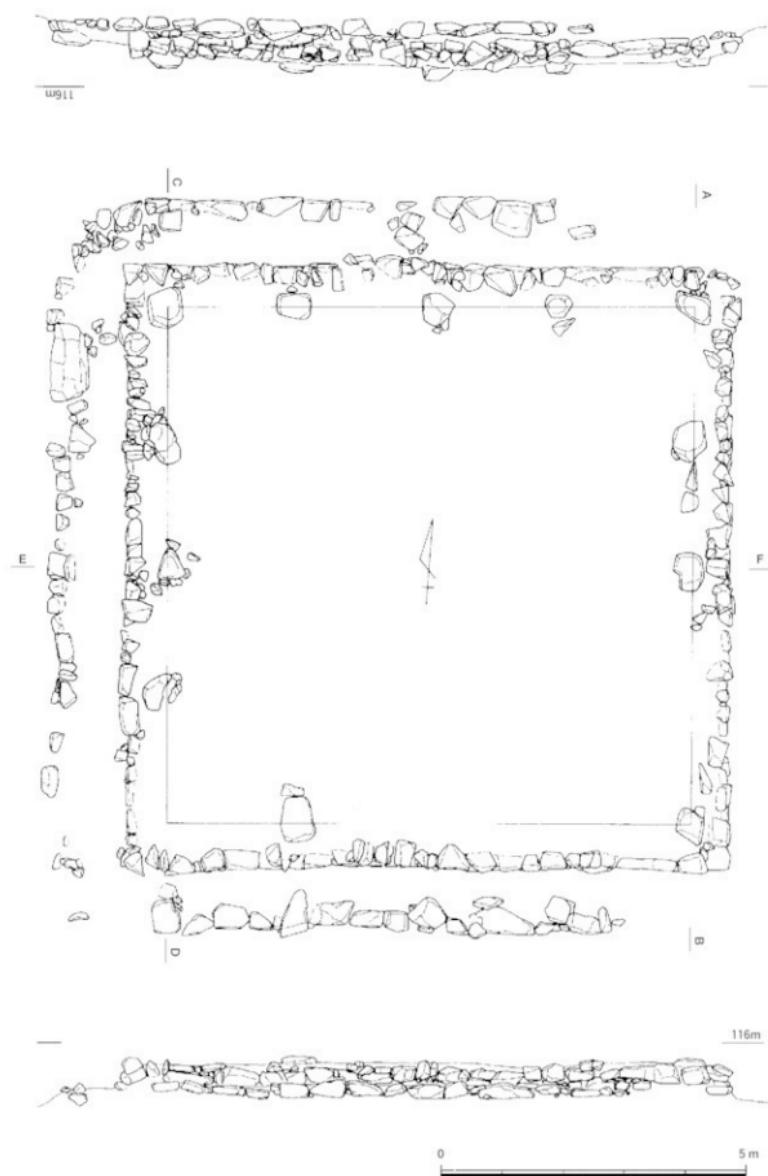
基壇の盛土は、地山の土を削った黄褐色土などを盛り上げて造成しているのみで、粘土を混入するなどして地盤を締めることなどは特に行われていない。

二段目の基壇上には、基壇の縁を巡る石の内側と接するように配置された、一辺40~60cm前後を測り上面が平らな石がほぼ等間隔に並べられている。一部は遺存していないところが見られるものの、1.5m程の間隔で並べられており、建物の礎石と考えられる。この内、北辺側の5石はすべて元の位置をとどめているとみられるが、西辺は南端を、東辺は南から二番目を欠いた4石が遺存している。また、南辺は、石がかなり移動されたものか、西から二番目と東端の2石を残すのみである。これらの礎石上面の高さは、115.7m前後を測る。このほかに元の位置をとどめているとみられる礎石が基壇内にはないが、遺存している礎石の状況から、ここには4×4間の方形の建物が建てられていたと想定される。

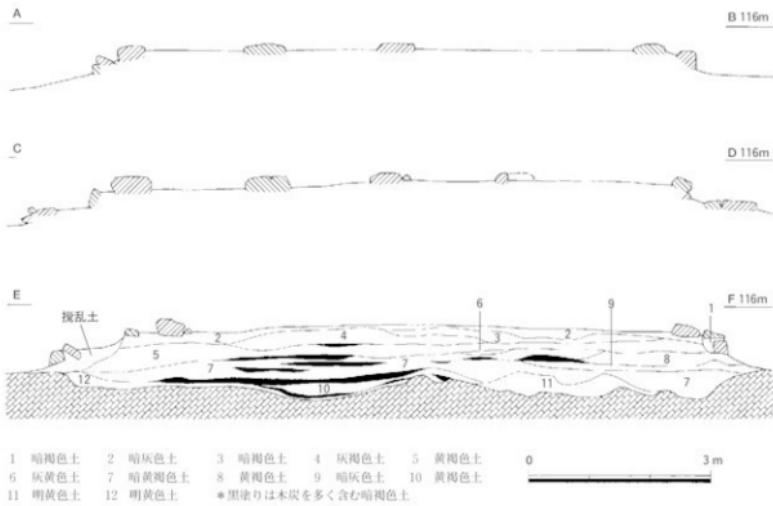
建物の規模は、礎石の配置から一辺が8.5m程の方形と考えられるものの、二段目の基壇の縁に非常に近接して建てられていたようである。なお、雨落ち溝と見られるような痕跡は確認できなかった。また、基壇の石積みと礎石のほかに階段などの施設は確認されず、建物の出入り口が何処に設けられていたのか判然としない。

基壇から遺物などはほとんど出土していないため、建立された時期も不明である。基壇の南西で検出された瓦溜1は、廐寺となつた折り片付けられた基壇建物の遺物と考えられる。

なお、基壇上に建立されていた「釈迦堂」は、寛文年間の彈圧による廐寺とすれば、それから180年の年を経て弘化4（1847）年に再建されたものである。  
(内藤)



第8図 基壇建物1① (1/80)



第9図 基壇建物1②(1/80)

## 基壇建物2(第10図・第11図)

基壇建物1の南東部に接して山側に築かれ、山際に設けられた樹1にはほぼ正対している。基壇の規模は、東西が約9.5mを測り基壇建物1の基壇にほぼ等しく築かれている。また、南北は樹1との重なりで改変されている可能性があるものの8.2m程を測り、奥行きは少し短い長方形である。

基壇は一段のみで、高さ30~40cmを測る。基壇の縁には大小の山石を取り混ぜ、外側の面を揃えて並べられている。旧地形が少し高くなっている南辺には、ほとんど小振りな石ばかりが並べられ、他の三辺と遺存状態が異なっている。なお、東辺および西辺の石積みも、北から4~4.5mまでは面を揃えて積まれているものの、南部には少し乱れが認められる。

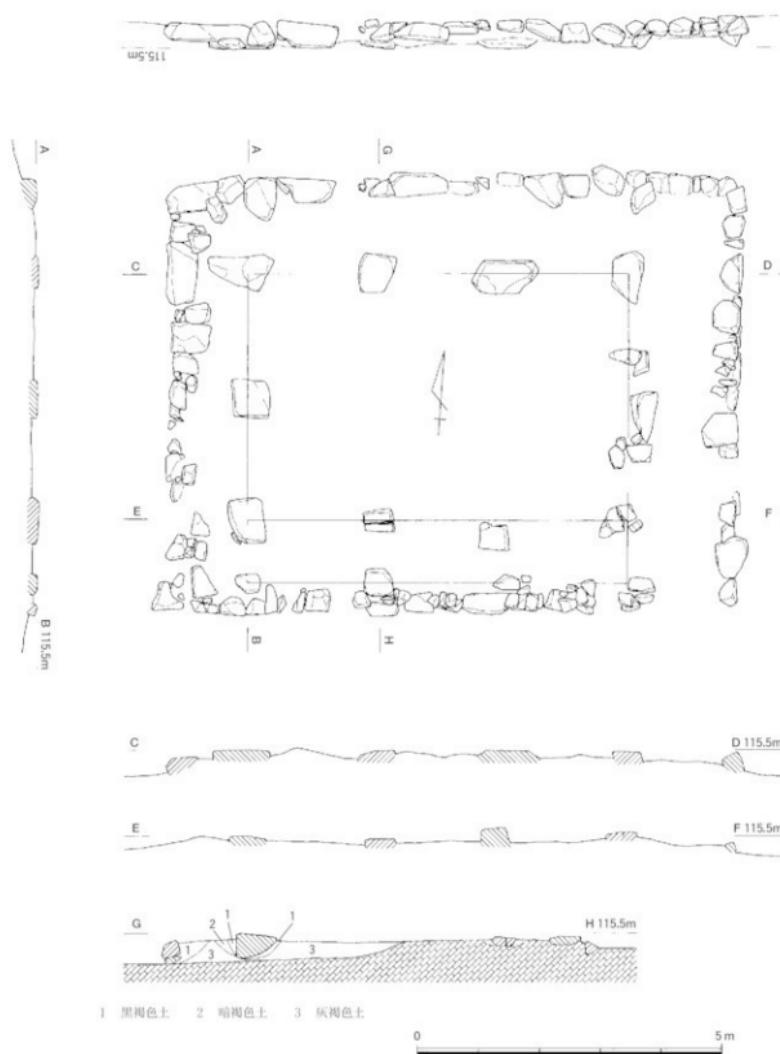
基壇は、地形が高くなっている南部は地表面を削り出し、北部には灰褐色土を盛って全体を水平にしているが、造成部分は特別に地盤の叩き締めなどを行っていない。

基壇の縁から北辺および東辺で1.8m、西辺で1.4m内側に5~60cm~1mを測る石が、平らな面を上にしてほぼ等間隔に配置されている。北辺には4石が、西辺には3石が芯々距離2mで並べられており、建物の礎石と考えられる。この上に東西6m・南北4m程を測る3×2間の長方形の建物が建てられていたと想定される。なお南辺側には1m外側の基壇の縁に巡らされた石の上に、30~50cm程の少し小さな石が4石配置されている。この建物には、南側に庇が設けられていたと考えられる。礎石の上面の高さは、基壇建物1より約20cm低い115.5m前後を測る。

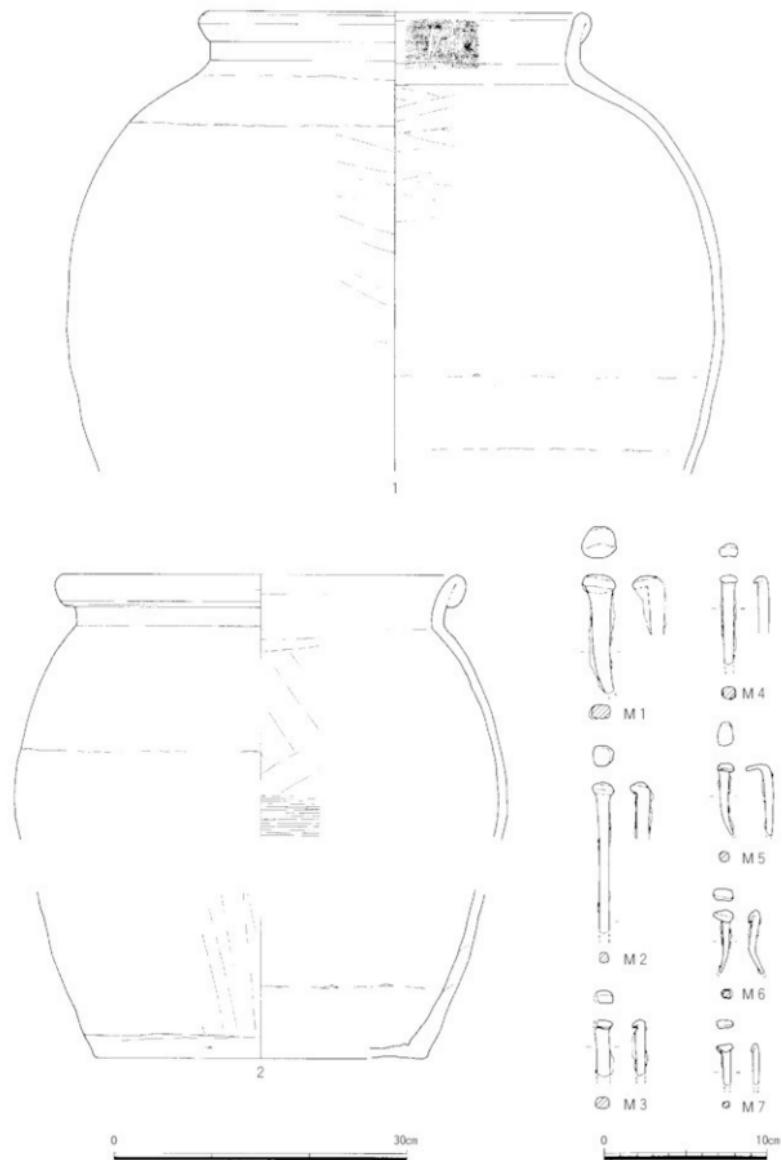
基壇建物2は、確認された基壇に並行して礎石が配置されているものの、南西側に大きく偏っており、基壇上に築かれていた建物が一垣廃棄され、後に再建された建物である可能性がある。

出土遺物としては、1・2の備前焼の大甕やM1~M7の鉄釘がある。1は口径38cm、胴部で最大直径67.5cmを測る。2は口径40cm、胴部で最大直径51cm程を測る。いずれも口縁端部を折り返して纏めたもので、南北朝期頃と考えられる。

(内藤)



第10図 基壇建物2 (1/80)



第11図 基壇建物2周辺出土遺物（1/5・1/3）

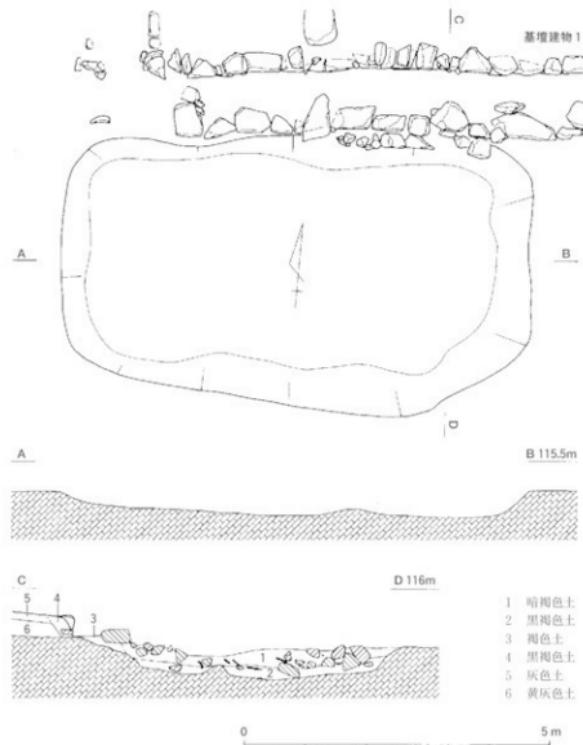
## 2 瓦溜

## 瓦溜1（第12図～第20図）

基壇建物1の南辺に接する位置にある。東西7.8m、南北4.7m、深さ0.4mでおおむね隅丸方形を呈し、底面は平坦である。基壇建物1の外側石列との重複がごく僅かであるため、土層観察から先後関係を見極めるのが困難であったが、瓦溜1の方が先行するように思われた。この点で基壇建物1の外側石列は後世に付加された可能性がある。すなわち、「基壇建物1→瓦溜1→基壇建物1外側石列付加」という順序が想定される。

埋土には多量の礫が含まれており、本遺構を検出した際には方形の石敷遺構のように見えた（図版3-1）。その石を除去しながら掘り進めると中世の瓦が土器類等とともに多量に出土し、掘りあげると最終的には土壤状の遺構となった。

出土遺物は以下の通りであり、瓦はコンテナ計20箱分が出土している。



第12図 瓦溜1 (1/80)

**軒丸瓦** 瓦当文様はすべて三巴文であるが、文様、製作技法、色調、焼成等の特徴からA、Bの2種類に分けられる。

A類（R6）：巴の頭部が尖って互いに接合し、尾が長い。珠文は小粒で大小が交互に配され、復元すると約32個になる。珠文帯の内側にのみ圈線がめぐり、巴の尾がそれに接する。外縁は高く突出する。焼成はやや甘く、表面が風化している。色調は灰色を呈する。破片2点が出土しているのみである。

B類（R1～R5）：巴の頭部が尖り、互いに接近するが接合していない。A類に比べ尾が短めで、圈線には接しない。珠文は大粒でやや横長の楕円形を呈し、16個を配す。珠文帯の内外に太めの圈線がめぐり、外縁の突出は低い。瓦当面にはハナレ砂が付く。焼成良好で、黄褐色であるが焼し焼きがなされて表面が黒みを帯びる部分がある。丸瓦部凹面には糸切痕（いわゆるコビキA）と密な布目が付く。なお、R1・R2・R5は文様断面が丸みを帯びるのに対して、R3・R4は断面が扁平という違いがある。しかしながら范傷痕（図版9-2）はすべてに一致するため、同范と考えられる。范傷痕は、珠文と圈線をブリッジ状につなぐ細い突線をなすもの（①～④）と、外縁と外周線の間の溝が浅くなっている部分（⑤）があり、いずれも范が欠けて生じたと考えられる。B類軒丸瓦は、破片も含め6点が出土している。

**軒平瓦**（R7～R12） 1種類のみである。瓦当文様は、圈線の中に菱形文が3個セットで連続する。顎貼り付け技法で、顎下面幅は3.4～3.9cmと深い。平瓦部の凹面はナデ調整で、部分的に布目が残り、凸面は粗大な格子目タタキでハナレ砂が付く。焼成、色調は軒丸瓦B類と共通し、組み合うことが明らかである。なお、瓦当を比較すると、同型式ながら湾曲の具合に差が認められ、R7が最も湾曲が強い。軒平瓦は小片を含め10点ほど出土している。

**丸瓦** 軒丸瓦と同様に、A、Bの2種類に分けられる。いずれも玉縁式である。

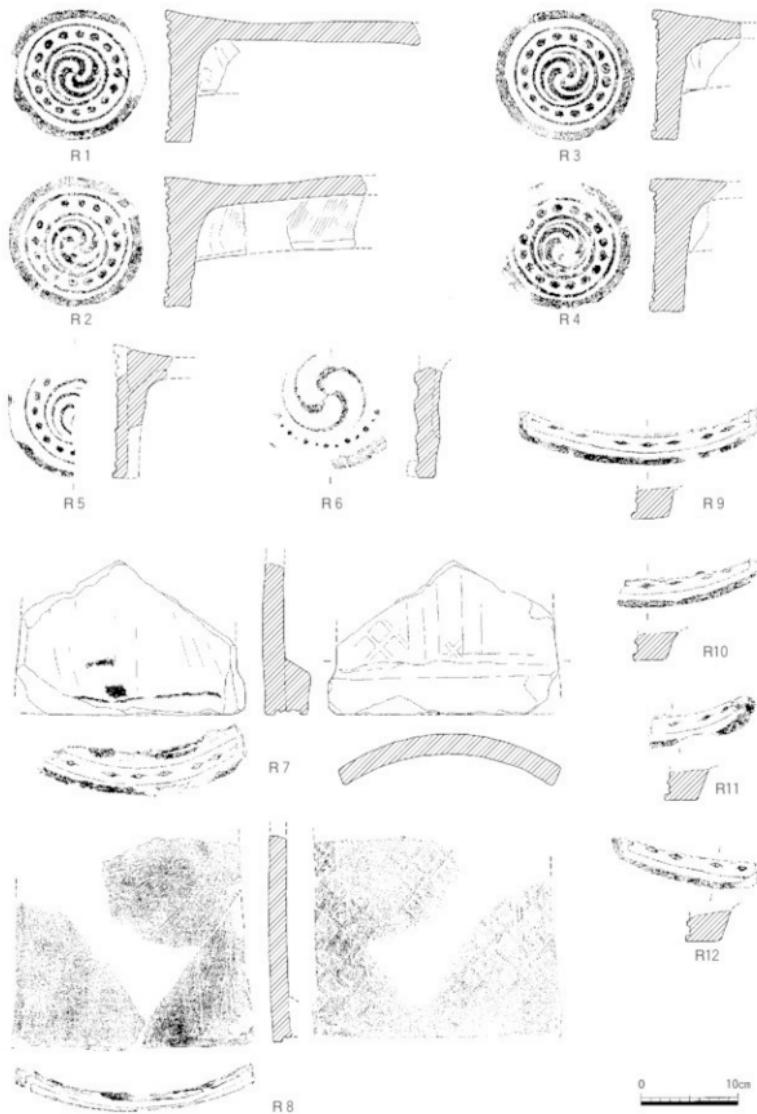
A類（R15～R17）：焼成、色調が軒丸瓦A類と共通するもので、B類よりやや厚手である。凹面には糸切痕と密な布目が付き、玉縁付近には、直線的で刺し縫い（破線）状の吊り紐痕が認められる（R15・R16）。凸面は丁寧なナデ調整である。釘穴を胴部に有するR16、玉縁部に有するR17、有しないR15がある。玉縁端部は面取りせず、胴部から玉縁にかけての側縁凹面側は幅広い面取りが行われる。

B類（R13・R14）：焼成、色調等が軒丸瓦B類と共通するもので、A類よりやや薄手である。凹面には糸切痕と密な布目が付き、吊り紐痕は確認できない。凸面は丁寧なナデ調整である。釘穴を玉縁部に有するR14と有しないR13がある。広端部の面取りはなされず、胴部から玉縁にかけての側縁凹面側に面取りがなされる。玉縁側縁の凸面側にも面取りが見られ、玉縁端部の凸面側は面取りするR13としないR14がある。

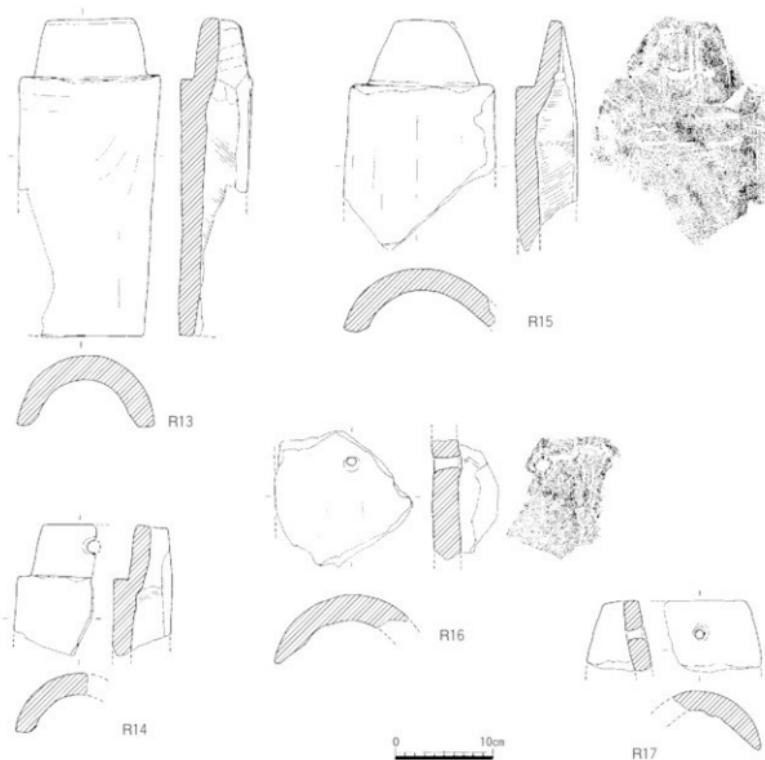
**平瓦** A、B、Cの3種類に分けられる。

A類（R18～R22）：焼成、色調等が軒丸瓦A類と共通するもので、B類よりやや厚手である。凹面は継ないし斜め方向の粗いナデ調整であるが、糸切痕が僅かに残り、凸面は粗大な斜格子タタキの後粗くナデ消している。凹凸両面にハナレ砂が付くものがあるが、主には凸面に認められる。狭端部凹面側の面取りが顯著である。釘穴をもつものは確認していない。多量に出土しており完形に近く復元できるものも多い。

B類（R24～R26）：焼成、色調、調整等が軒丸瓦B類と共通するもので、A類よりやや薄手である。



第13図 瓦窯1 出土遺物① (1/5)

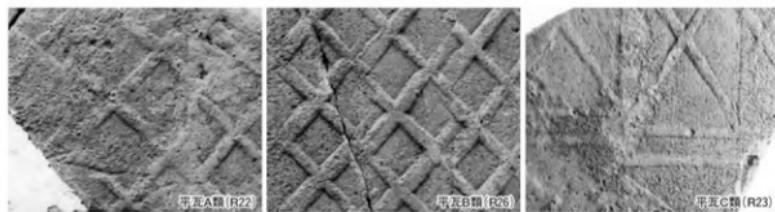


第14図 瓦溜1出土遺物② (1/5)

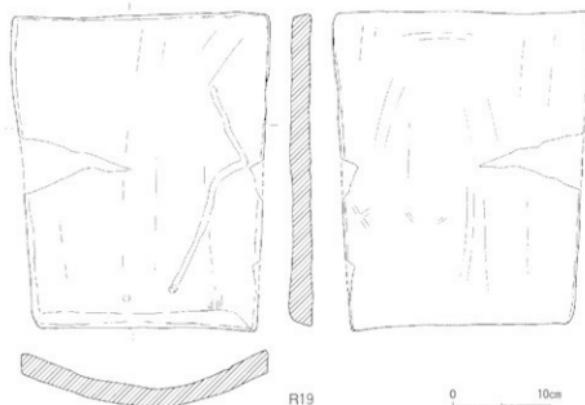
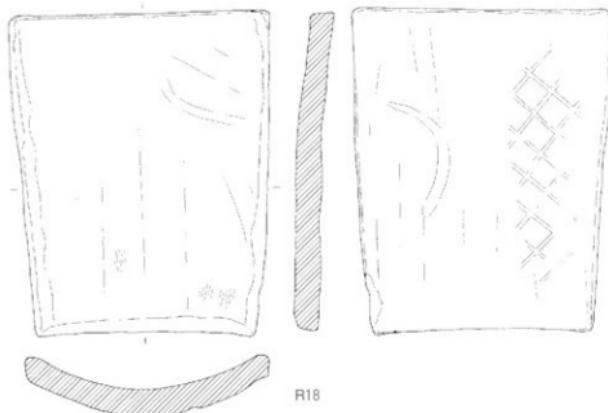
凹面は不定方向のナデ調整、凸面は粗大な斜格子タタキで基本的にナデ消さない。タタキ目はA類より若干細かく(第15図)、幅2~4cmの原体の単位が認められる。ハナレ砂は凸面のみに付き、周縁の面取りは一切行わない。釘穴をもつものはない。多量に出土しており、瓦類の中で最も多い。

C類(R23):焼成がやや甘く灰色を呈し、厚手である点でA類に近い。特殊な斜格子タタキをもち、タタキ目は凹凸両面に付くが、凹面は陰陽が逆になっている。製作後重ねて置いた際に付いたものであろうか。凹凸両面にハナレ砂が付き、釘穴が認められる。破片2点のみが出土している。

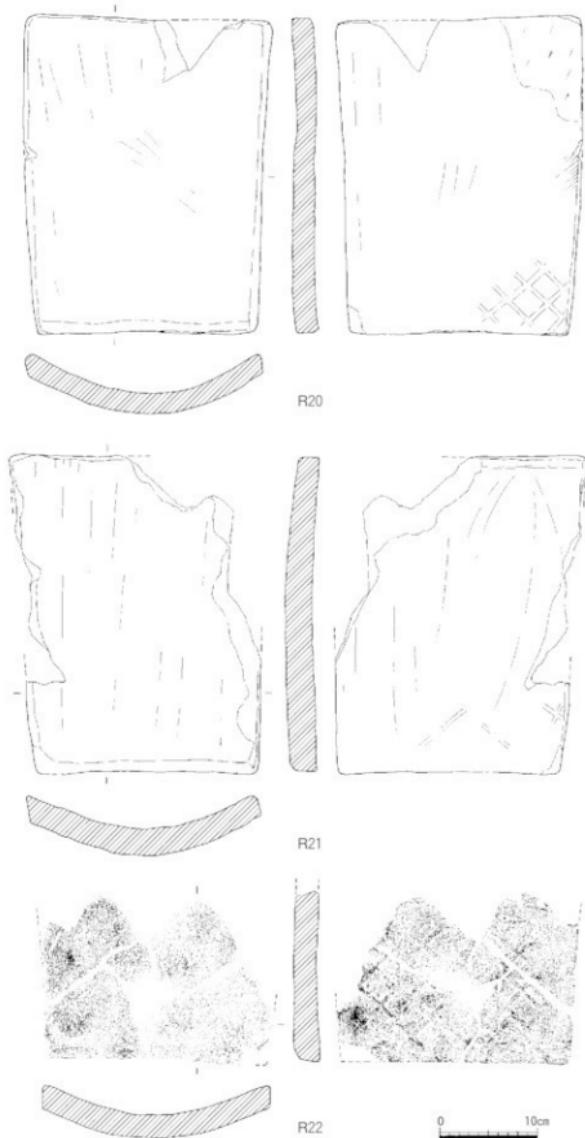
瓦の分類 以上の瓦類は、焼成、色調、厚み、調整などの特徴から、大きく2つの群に分けられる。一つは軒丸瓦A類・丸瓦A類・平瓦A類の一群であり軒平瓦が未確認である(以下、A群とする)。もう一つは軒丸瓦B類・軒平瓦・丸瓦B類・平瓦B類の一群である(以下、B群とする)。そして軒平瓦C類のみ孤立した状況にあるが、焼成、色調、厚みの特徴からいえばA群に含めることができるかもしない。なお、瓦の時期等については第7章で検討する。



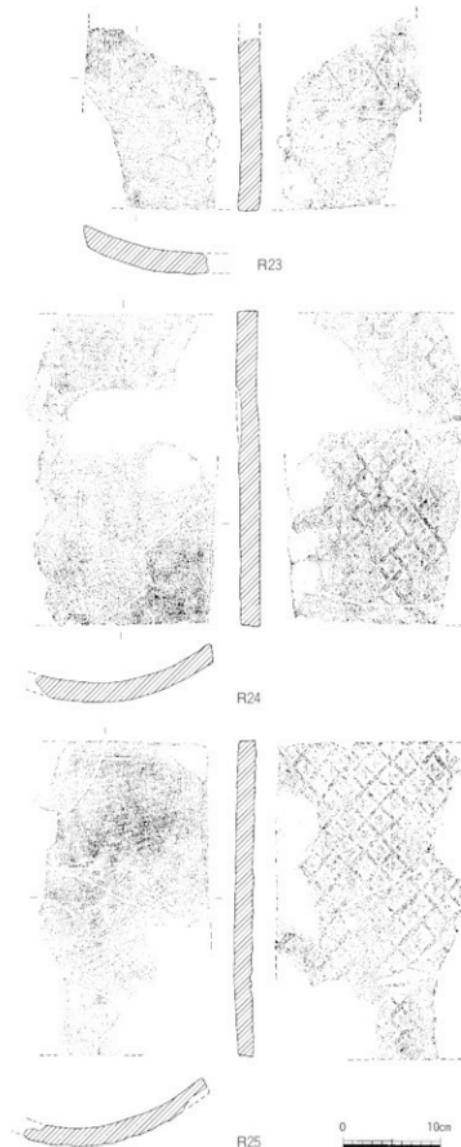
第15図 平瓦凸面のタタキ痕 (1/2)



第16図 瓦溜1出土遺物③ (1/5)



第17図 瓦溜1出土遺物④ (1/5)



第18図 瓦溜1出土遺物⑤ (1/5)

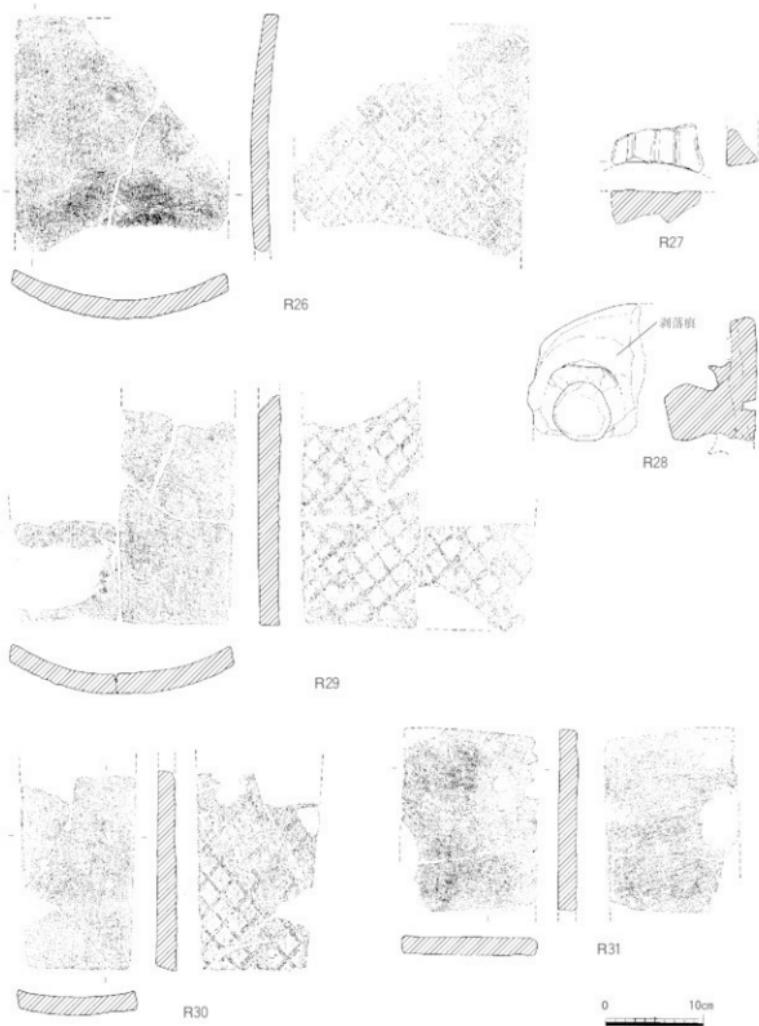
**鬼瓦** 2点が出土している。R27は下端部で、縦方向の線刻は鬼面の圍を表現したものであろう。R28は鬼面の左上角付近で、上端は弧を描く。高さ約6.5cmの眼と思われる突起があり、その周囲に断面三角形の突帯がめぐる。さらにその上にも円弧状の剥落痕があり、眉を表現したものと思われる。これらは、焼成、色調から、上記瓦のB群に該当する。

**製斗瓦** B類平瓦の凹面中軸に、焼成前に刻線を入れ、焼成後それに沿って2分割したものである。R29はそれが接合した例である。10個ほどを確認しているが、A類平瓦を分割した製斗瓦は確認できない。

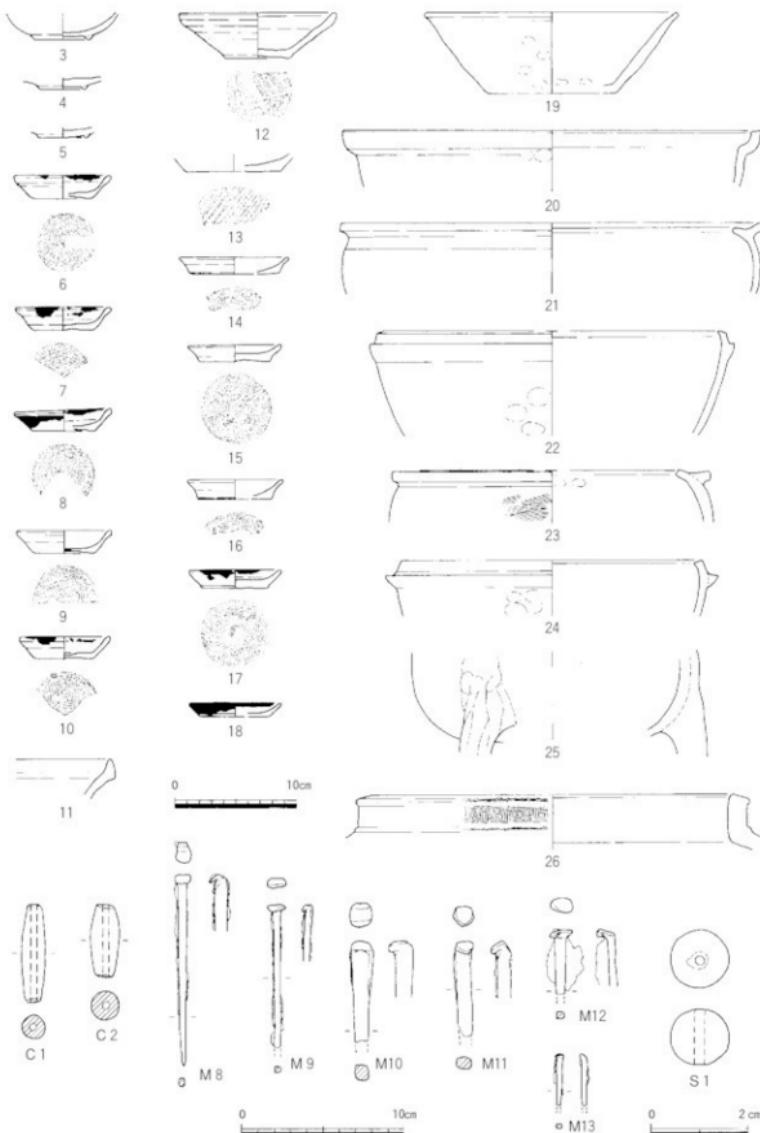
R31は平瓦を分割したものではなく、焼成前にこの大きさに成形された瓦であるが、その幅は上記の製斗瓦とおおむね一致する。表裏両面には糸切り痕が認められる。焼し焼きがなされB群瓦に該当する。

**土器類** 3~5は上師質高台付椀で、僅かな高台を付す。6~10は備前焼の皿で、底部は糸切り、口縁付近には煤の付着が顕著である。11は東播系須恵器のこね鉢である。12~18は土師質土器の皿で、12は底部糸切り、13は板目痕、他はヘラ切りで、口縁付近に煤の付着するものがある。19~26は土師質ないし瓦質焼成の土器で、鉢19、鍋20、羽釜21~25、火鉢26がある。これらの土器類はおおむね13~14世紀代の年代を示していると考えられる。

**その他** C1・C2は土錘、M8~M13は鉄釘である。S1は水晶製の玉で、透明度が高い。



第19図 瓦溜1出土遺物⑥ (1/5)

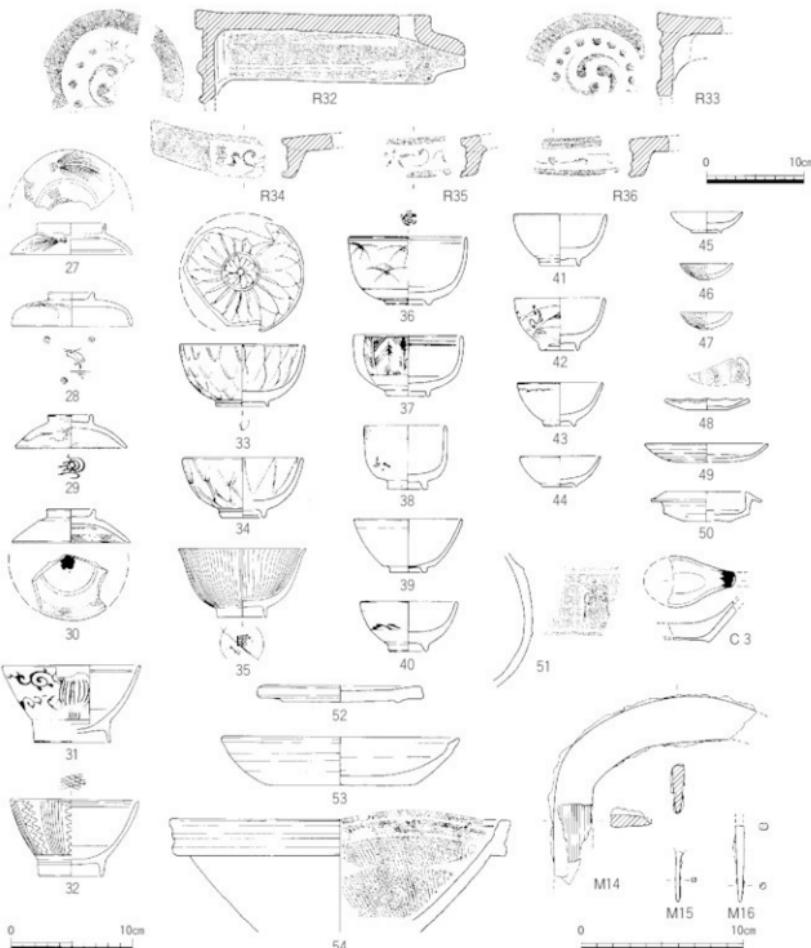


第20図 瓦溜1出土遺物⑦ (1/4・1/3・1/1)

## 瓦溜2（第21図）

A区東部、盛土遺構の脇で検出した。掘り方はなく、平面的に大量の瓦、陶磁器類などが集積していた。瓦は軒瓦をサンプル的に図示した。軒丸瓦は三巴文、軒平瓦は唐草文である。陶磁器類も大量に出土している。詳細は遺物観察表にゆずるが、肥前、備前を中心とし、瀬戸美濃、関西系などの陶磁器があり、時期は18世紀後半から19世紀前半のものが多い。近世後期以降の「稻廻堂」を拠点とする信仰に伴う遺物の可能性がある。

(尾上)



第21図 瓦溜2 出土遺物 (1/5・1/4・1/3)

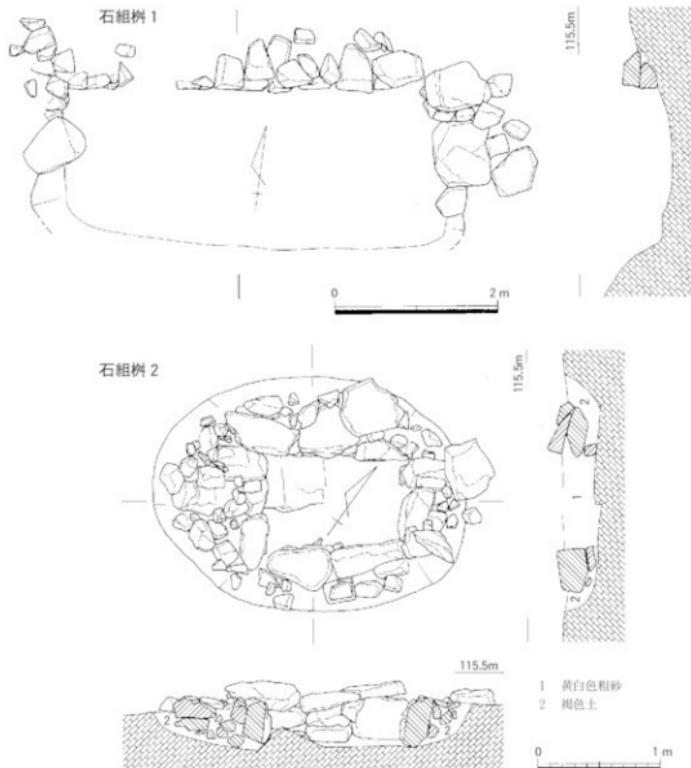
### 3 石組柵

#### 石組柵1（第22図）

基壇建物2の南、造成法面に接する位置にある。内法で東西約4.5m、南北約1.9m、深さ約0.6mで、南をのぞく3面に石組があり、おおむね2段に積まれている。近接して山水の湧水点（後述「湧水遺構」）があり、そこから流れ込む水で柵内は常に滞水している。内部からは中世の瓦片が出土した程度であるが、基壇建物2との位置関係などから、中世に属する遺構と考えられる。

#### 石組柵2（第22図）

基壇建物2の東で検出した。平面楕円形の掘り方の中に方形の石組柵を築いている。柵は、内法で約1.2m×約0.8m、深さ約0.35mである。石は2～3段に積まれている。出土遺物は皆無だが、後述の近世後期の溝に近接し、平行していることから、同様な時期の遺構と考えられる。（尾上）



第22図 石組柵1（1/60）・石組柵2（1/40）

## 4 池 (第23図)

A区東端部で検出された池状の遺構である。東西幅約6mで、平面形は不整形だが三角形に近い。深さは約1mあり、底面はほぼ平坦である。底面の北側には平坦な石材が2つ積まれた状態で出土しており、池の底に降りるための足場のようにも思われた。

出土遺物は、肥前の染付55・56があり、近世後期の年代を示す。他に、五輪塔の石材や備前焼壺の破片がいくらか出土しており、東上方にある火葬墓から転落したものだろう。(尾上)

## 5 道

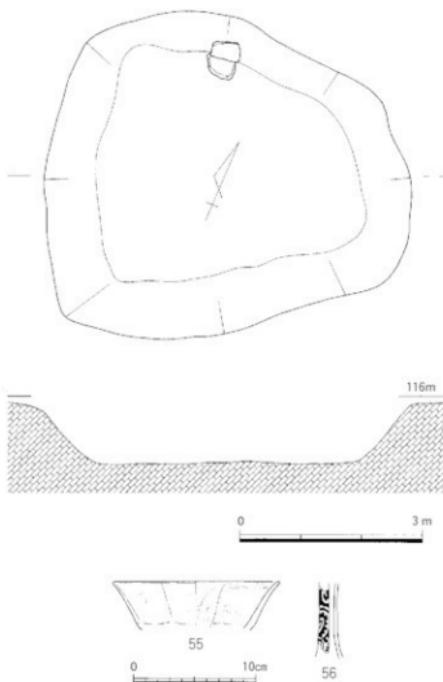
## 道1 (第24図)

基壇建物1の東側で検出した、東西に延びる道状の遺構である。南北両辺には石が並べられ、道幅は約1.6mである。東西の残存長は約7mある。石の底面の高さが基壇建物1の基底面の高さに近いことから、同時期の遺構と考えられるが、両遺構の関係は明らかでない。

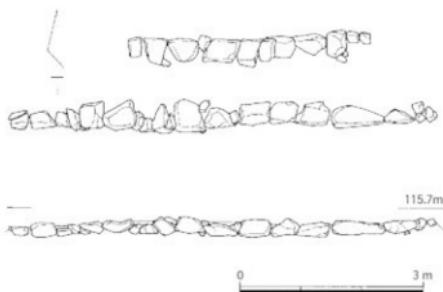
## 道2 (第25図)

A区の東端部にあり、東へ斜面を登っていく。道の南北両側面は部分的に石垣を築いている。道幅は一定しないが、平均すると2mほどである。南辺の石垣は東に向かって高さを増し、丘陵斜面にぶつかったところで途切れている。道の西端付近には、道を横断するように板石が並べられているが、性格不明である。

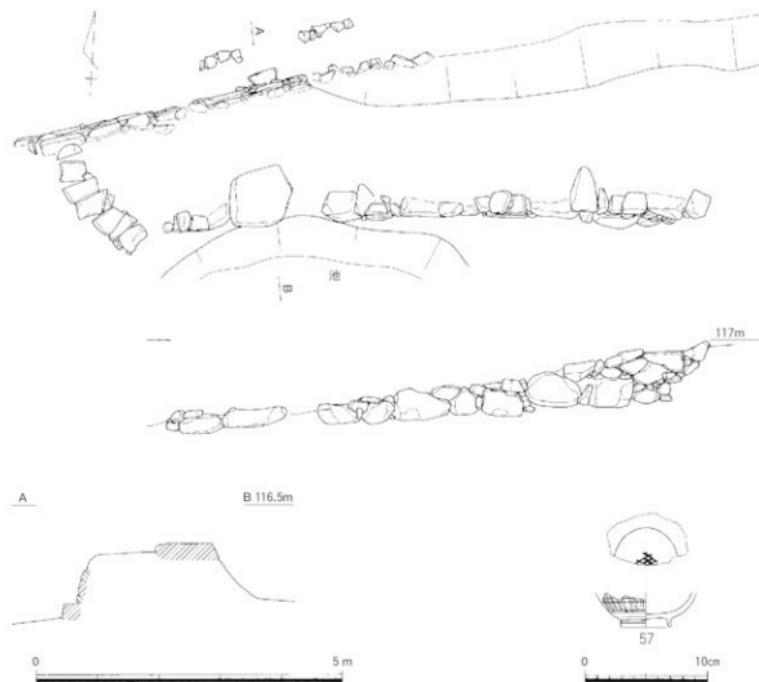
出土遺物のうち、図示した57は石垣の下端で出土した染付碗で、19世紀初頭頃のものである。(尾上)



第23図 池 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第24図 道1 (1/80)



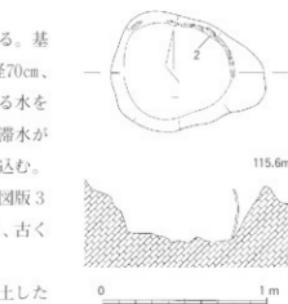
第25図 道2 (1/80)・出土遺物 (1/4)

## 6 湧水遺構 (第26図)

A区の平坦面を造成した丘陵カット面付近に、湧水地点がある。基壇建物2の裏(南)、石組樹1に近接する箇所である。そこに径70cm、深さ30cmほどの穴を掘り、備前焼甕の破片を壁に立て、湧き出る水を受ける遺構が検出された。発掘調査中にも常に深さ20cmほどの滯水が認められた。ここをあふれ出した水は、近接する石組樹1に注ぎ込む。

石組樹1の中には後世にコンクリート製の井筒が設置され(図版3-2)、近年まで丘陵裾の小学校などに給水していたと言うから、古くから比較的安定した湧水があったものと思われる。

湧水遺構に用いられた甕の破片は、基壇建物2の周辺から出土した甕2と接合している。中世の遺構か、あるいは周辺に散乱していた甕の破片を後世に利用した遺構かもしれない。ただし、周辺から近世の陶器などは出土していない。



第26図 湧水遺構 (1/30)

## 7 盛土遺構（第27図）

A区東端付近、池のそばにある遺構である。径5mほどの不整円形をなし、高さ1m弱の盛土がなされている。縁辺には大小の礫が並べられているようだが、盛土中にも礫を多く含むため、意図的に並べたものがどこまでか、判断の難しいところがあった。盛土中には近世後期の陶磁器や瓦を含んでおり、それ以降に築かれた遺構と考えられる。おそらく近接する池の掘削で出た土を盛り上げ、築山したものだろう。池とともに、実用的施設というより庭園的な機能をもった施設と考えられる。（尾上）

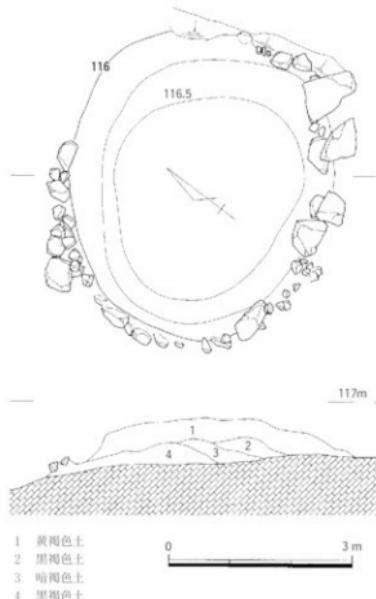
## 8 石列（第28図）

A区東端部、池の西側に接するように並んだ石列である。南北3mほどが残存し、北側で直角に折れ曲がる。50cm大以下の石材を使用し、外側に面をそろえる。方形区画の北東角をなす可能性もあるが、残存状況が悪く明らかでない。近接する池や盛土遺構との関係も不明だが、盛土遺構に比べて基底面が低く、より古い時期の遺構の可能性がある。（尾上）

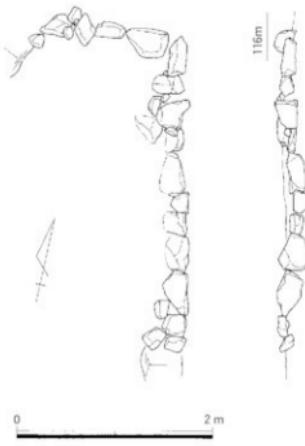
## 9 立石遺構（第29図）

A区とB区の間の法面に所在する。4m×4mほどの範囲を、露岩を含む大小の礫で囲み、ほぼ中央に1本の棒状石材を立てている。石回いの南側は小形の石材で石垣を築く。立石は高さ約1mで、その北側には隅丸方形の土壙がある。土壙は長さ約150cm、幅約90cmで、中には礫が多く含まれていた。土壙を墓壙、立石を墓標と考えれば、墓の可能性も考えられるが、根拠に乏しい。

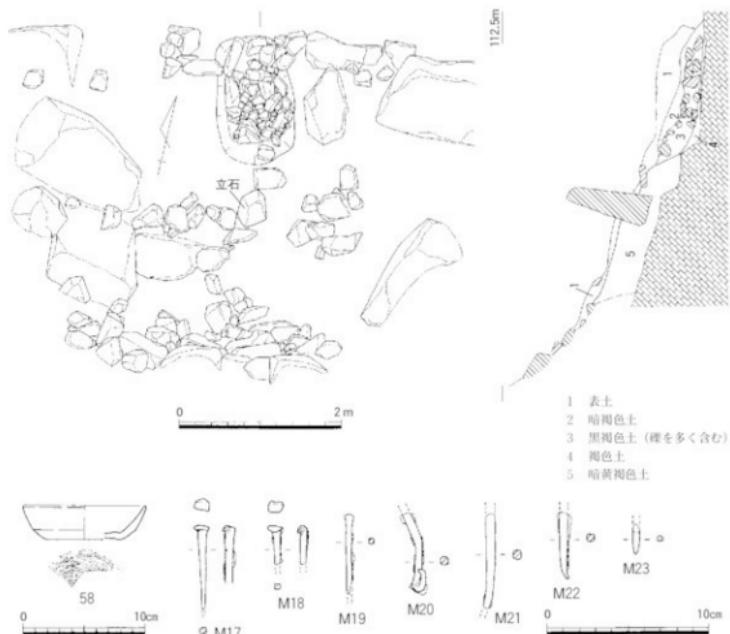
出土遺物には、陶器の皿58や鉄釘M17-M23などがあるが、いずれも表土層からの出土である。A区からの転落遺物も含んでいると思われ、遺構の時期は不明である。（尾上）



第27図 盛土遺構（1/80）



第28図 石列（1/50）



第29図 立石遺構 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3)

## 10 溝 (第30図)

A区の南東部、ほぼ等高線に沿って走る石組みの溝である。石組構1からあふれ出た水をA区北東の谷に流す。基壇建物2の南東角付近を通り、基壇を一部壊している。溝の幅は40~50cm、深さは北東に向かうにつれて深くなり北東端部付近で40~50cmある。溝の壁面は石組みの箇所が多いが、基盤層にも多くの礫を含むため、素掘りで安定する箇所には石を組んでいない。北東端部は道2へ向かう通路となっていたためか、板石2枚で蓋がなされる。また溝の北面には、幅60~70cmの石組みの堤が溝に沿って築かれており、長さ8mほどが残存している。大雨の際、南東の谷筋から大量の土砂が流入することを発掘調査中に経験した。土留めの機能をもった堤であろうか。

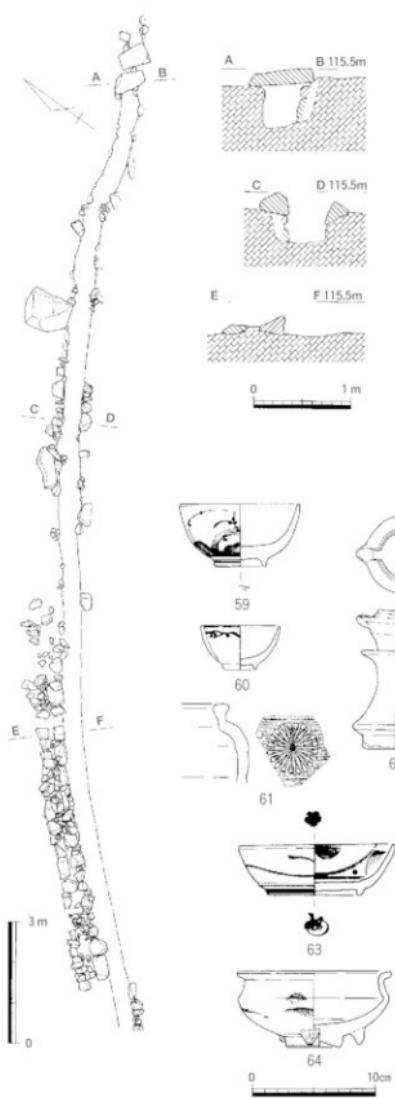
出土遺物は59~64の陶磁器があり、18世紀から19世紀前半の年代を示す。

(尾上)

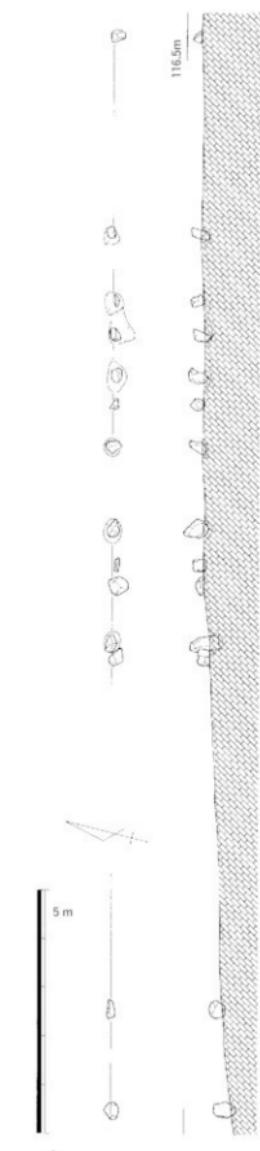
## 11 立石列 (第31図)

A区南東部に設けられた遺構である。石の欠落する箇所があるが、延長およそ22mにわたって14個の石が立て並べられている。石の大きさは最大60cmで、縦長に設置するものが多い。基盤が砂地であるため掘り方の検出は困難であったが、検出できたものもあった。遺構の性格、機能は不明である。周辺から出土する遺物はやはり近世後半期のものが多い。

(尾上)



第30図 溝（1/120・1/50）・出土遺物（1/4）



第31図 立石列（1/100）

## 12 挖立柱建物

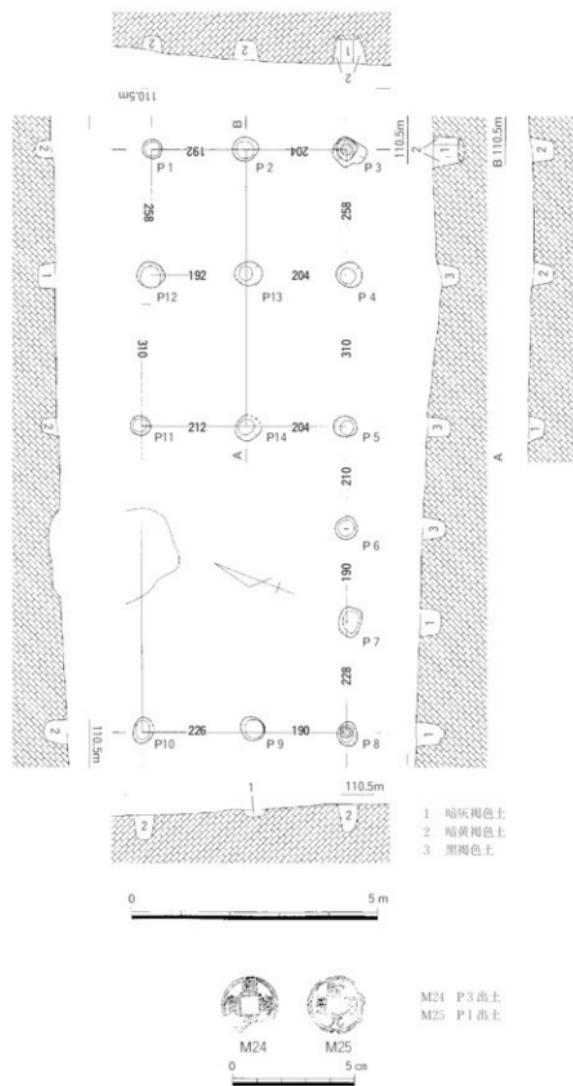
## 掘立柱建物1(第32図)

B区の西寄りで検出した。南北2間、東西5間の建物である。建物の規模は、東西約12m、南北約4mである。建物の東半2間分と西半3間分で柱穴の配置がやや異なり、東半は総柱、西半は側柱のみとなる。また西半部の北辺については、攢乱部分があるとはいえ、明確な柱穴が認められない。柱間の距離は約200~310cmとまちまちであるが、柱の通りは比較的よい。

柱穴の大きさ、深さはさまざまだが、南東角のP3が最も大きく、径約60cm、深さ約65cmある。また、このP3のみ底部に扁平な礎石が見られ、柱痕跡が観察された。

出土遺物は、P1・P3・P5・P6・P8・P9から瓦質土器、土師質土器、銅錢が出土している。M24は熙寧元宝、M25は開元通宝である。

出土遺物から、建物の時期は中世後半期と考えられる。



第32図 掘立柱建物1 (1/100)・出土遺物 (1/2)

## 掘立柱建物2（第33図）

掘立柱建物1と重複する位置にあるが、柱穴は重複していないため先後関係は不明である。

1×2間の建物で、ほぼ方位に沿って南北方向を向く。建物の規模は東西約2.8m、南北約4mで、柱間距離は東西が2.8m、南北が2mである。柱穴の規模はさまざまだが、柱穴底面の高さはほぼ一定している。

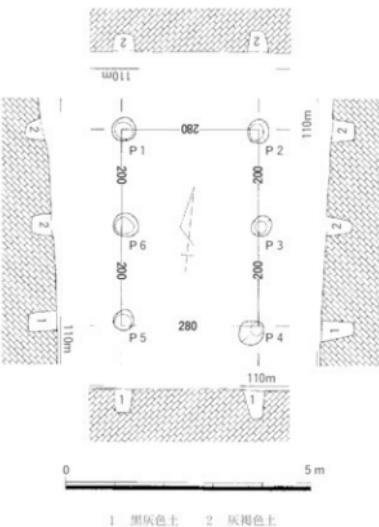
遺物は柱穴から瓦質土器、鉄釘が出土しているがいずれも小片である。時期は中世後半期であろう。

## 掘立柱建物3（第34図）

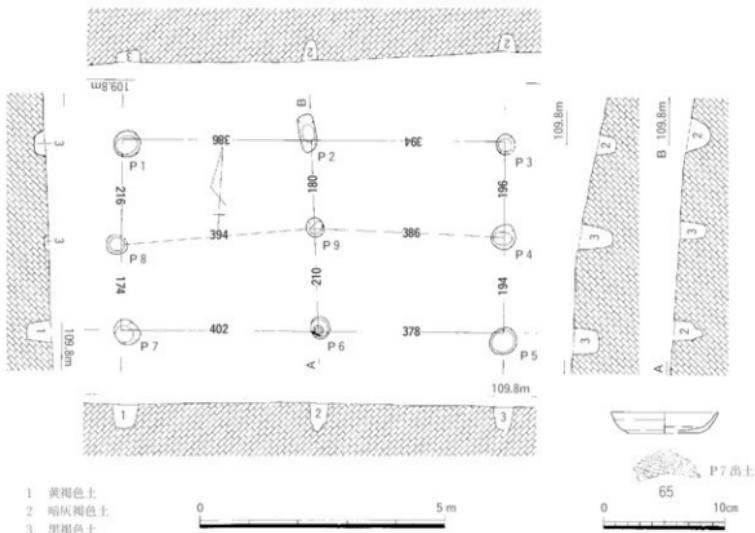
B区中央部で検出した。2×2間の建物で、ほぼ方位に沿って東西方を向く。建物の規模は東西約7.9m、南北約3.9mで、柱間距離は東西が約3.9m、南北が約2mである。

遺物は柱穴から土師器皿、瓦質土器、備前焼などが出土しており、P7出土遺物を図示した。

時期は中世後半期であろう。（尾上）



第33図 掘立柱建物2（1/100）



第34図 掘立柱建物3（1/100）・出土遺物（1/4）

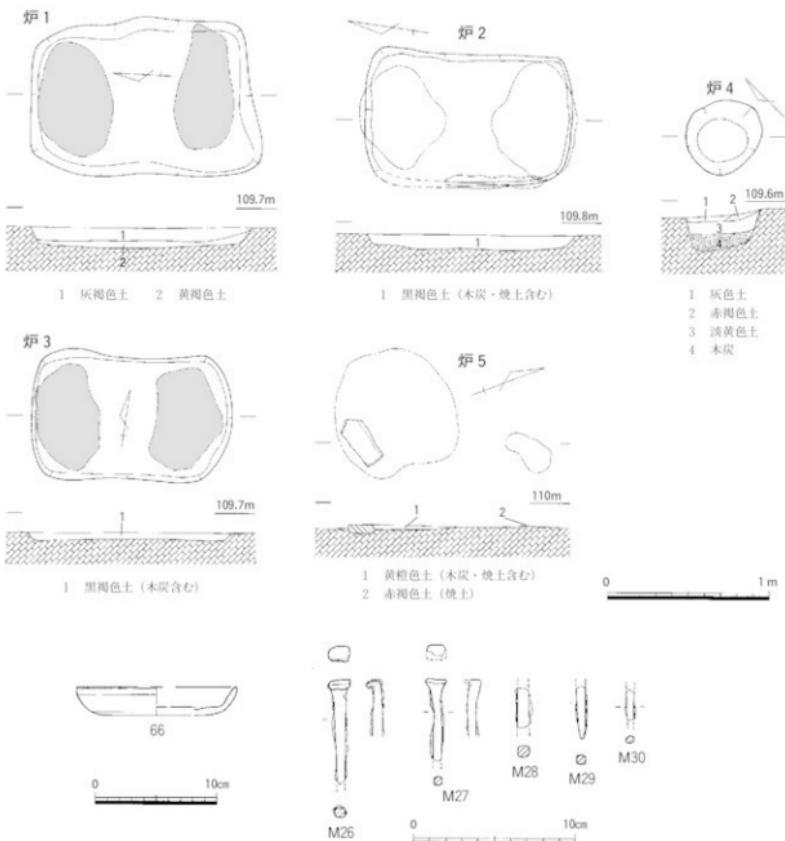
## 13 炉

## 炉1（第35図）

掘立柱建物3と重複する位置にある。長さ約140cm、幅約100cmの隅丸方形で深さは約12cmある。南北両端の床面と壁が被熱している。性格は不明だが、鍛冶に伴う製炭炉の可能性もある。埋土中から土器皿66と鉄釘M26～M30が出土している。時期は中世後期以降であろう。

## 炉2（第35図）

B区中央部にあり、炉1と方向をそろえる。炉1と同様の遺構で、長さ約130cm、幅約80cm、深さ約10cmである。南北両端の床面と壁が被熱する。炉1と同様、中世後期以降の遺構であろう。



第35図 炉1～5（1/30）・炉1出土遺物（1/4・1/3）

## 炉3（第35図）

炉1とともに、掘立柱建物3と重複する位置にある。炉1・2と同様の遺構で、炉1とは直交する方向である。長さ約120cm、幅約80cm、深さは数cmが残るにすぎない。やはり両端付近の床面と壁が被熱、赤化している。埋土には木炭を含み、遺物は土師器皿が出土している。炉1・2と同様、中世後期以降に属するであろう。

## 炉4（第35図）

B区北東部にある。径45cm、深さ25cmの掘り方があり、上面付近が被熱する。下部構造をもち4層は木炭層である。付近の土壤5からは鍛治滓、粒状滓、鍛造剥片が出土しており、炉4はそれらを排出した鍛冶炉と考えられる。遺物は伴わないが、中世の遺構と思われる。

## 炉5（第35図）

B区中央部西寄りにある。掘り方などはないが、地面が被熱し木炭・焼上が散布する。鉄床状の板石があり、鍛冶炉の可能性を考えられる。遺物は伴わないが、土壤3に切られており中世の遺構と考えられる。

(尾上)

## 14 火葬墓（第36図・第37図）

A区東端部のやや高いところにある。斜面の途中に等高線に沿って石列を配し、やや平坦な面を作つて、それとはやや異なる方向で方形の石組みを築いている。石垣は1～3段に積まれている。方形の石組みは一辺約2mの正方形で、その中央から備前焼の壺67が破碎された状態で出土した。藏骨器と考えられ、このほかにも周辺から68～73の壺が出土している。時期は67が最も古く14世紀代、68が15世紀代、70～73は16世紀以降のものであろう。

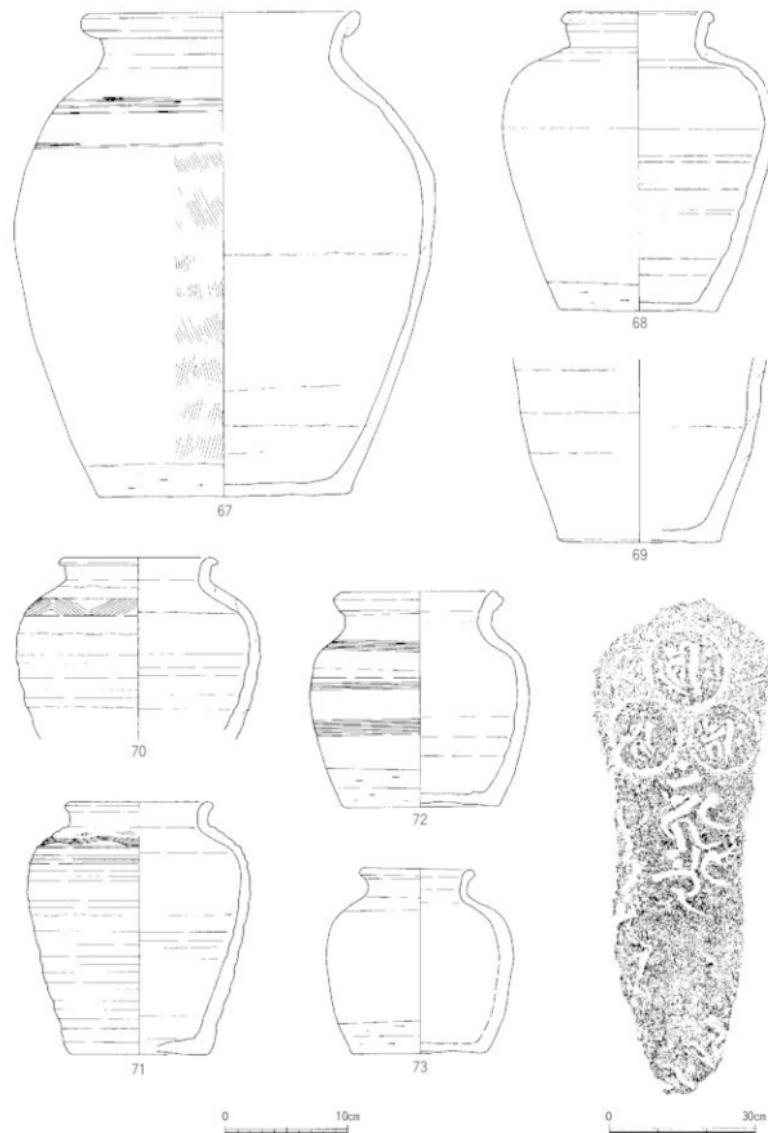
ほかに、五輪塔の石材が散乱しており、この火葬墓に伴った可能性があるが、周辺には近世、近代にいたるまでの墓地があり、上方から転落してきたものかもしれない。

また、火葬墓直下の池付近には自然石板碑が倒れており、この火葬墓と関係があるかどうか分からぬが、図示した。全長約105cmで、自然石を利用しているが頭部は山形をなす。表面は平坦で、上部に三尊種子を刻み、その下には不動明王を表すと思われる梵字が刻まれている。

(尾上)



第36図 火葬墓（1/50）



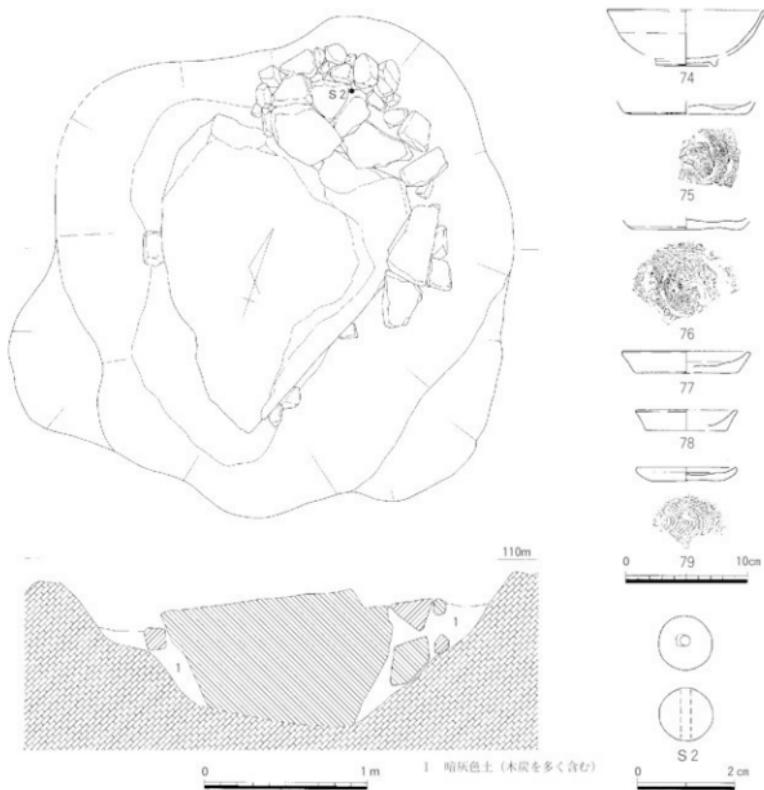
第37図 火葬墓および周辺出土遺物 (1/4・1/10)

## 15 土 壤

## 土壤1（第38図）

B区中央部や西寄りにある大形の土壤である。平面形は不整形で3m程度の規模をもち、深さは1mほどある。中央には上面の平坦な大石が入っており、北部にはその上面にそろえて礫が敷き並べられたような状態であった。礫の隙間や大石の脇からは、土師器の高台付椀74や皿75～79、またA区の瓦溜1と同様の水晶玉S2が出土した。水晶玉は瓦溜1と同じく1点のみの出土であり、数珠を構成するとすれば、他は木製玉であったと思われる。

地表に突出し邪魔になる露岩を地中に沈めた遺構の可能性もあるが、椀、皿、玉などの出土遺物があることから、地鎮など何らかの祭祀行為を伴った可能性がある。時期は、出土遺物から中世、13世紀以降と考えられる。



## 土壤2（第39図）

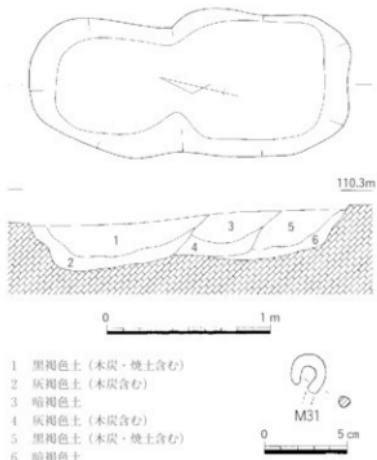
B区西部にある。南北長約195cmの土壤であるが、平面形および土層断面から3基ほどの土壤が切り合っていることが分かる。出土遺物はM31の不明鉄器がある。時期は不明である。

## 土壤3（第40図）

B区中央部やや西寄りにある。長さ220cm以上、幅約130cm、深さ約15cmの隅丸方形の土壤である。かび壁が多量に含まれていたが、被熱痕跡はない。土壤1に切られており、中世の遺構である。

## 土壤4（第41図）

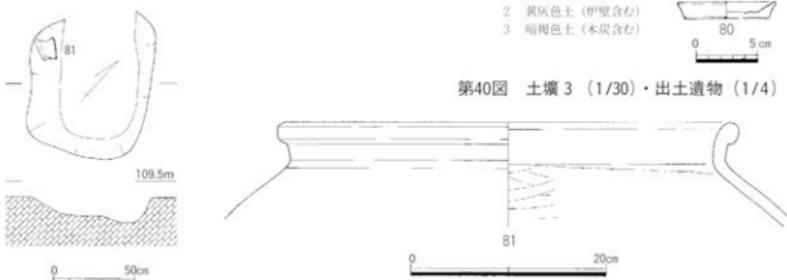
B区北西端部にある小規模な土壤で、一部を流失する。備前焼甕の破片が出土しており、14世紀代の年代を示している。



第39図 土壌2（1/30）・出土遺物（1/3）



第40図 土壌3（1/30）・出土遺物（1/4）

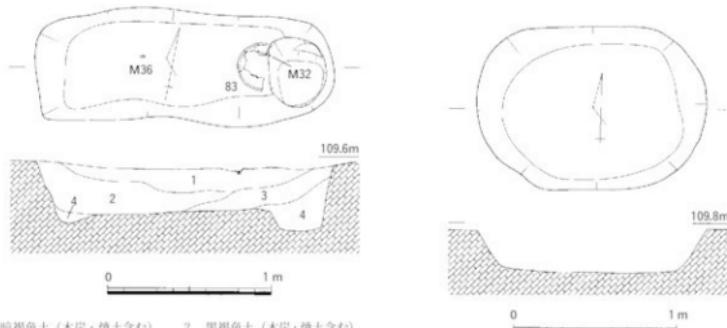


第41図 土壌4（1/30）・出土遺物（1/5）

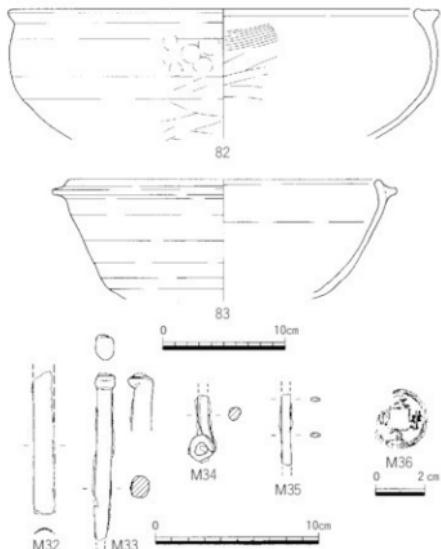
土壤5 (第42図)

B区東部にあり、東西方向に長軸を向ける。長さ約180cm、幅約60cm、深さ約30cmで、底部両端がややくぼむ。検出面付近で瓦質土器の羽釜83が伏せた状態で検出され、その下から楕円形をなす銅製品M32が出土している。底部付近からは銅鏡M36が出土した。掘り方の形態などから土壤墓と考えられ、時期は中世後半期であろう。

なお、埋土上層には木炭と焼土が含まれ、鍛冶滓、粒状滓、鍛造剥片も出土した(図版14-2)。近接する鍛冶炉(炉4)に起因するものと考えられる。



第42図 土壌5 (1/30)



第43図 土壌6 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)



第44図 土壌7 (1/30)

**土壤6（第43図）**

B区南東部にある。長径100cm以上、深さ約30cmの楕円形の土壤で、時期は不明である。

**土壤7（第44図）**

B区南東部にある。長径約180cm、深さ約15cmの不整楕円形の土壤で、時期は不明である。

**土壤8・9（第45図）**

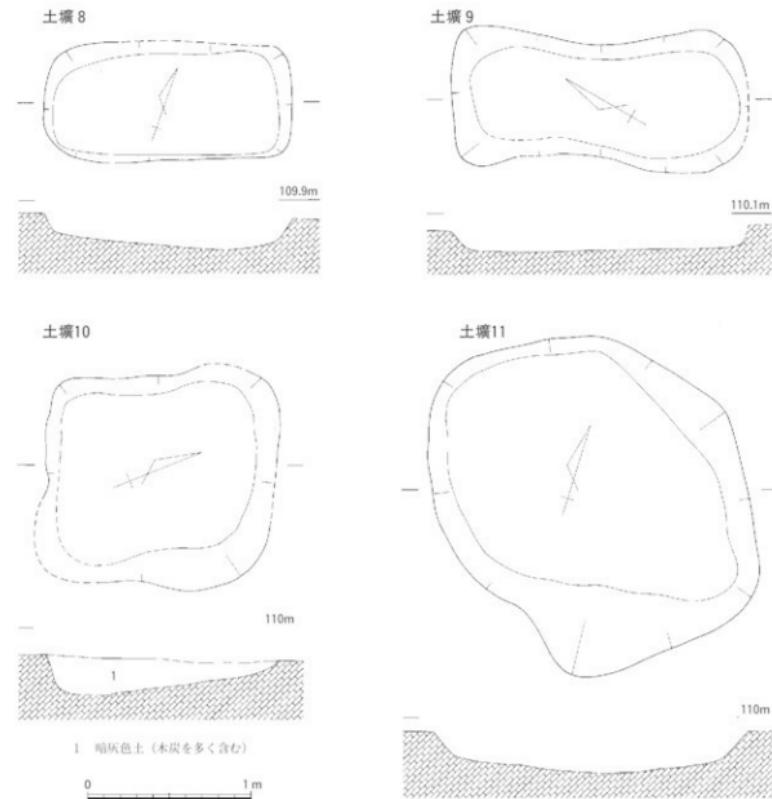
B区西半部にある。いずれも隅丸長方形で、規模も類似している。長さ約150～180cm、幅約75cm、深さ約15cmである。出土遺物はなく、時期不明である。

**土壤10（第45図）**

B区中央部にある、一辺約120cmの隅丸方形土壤である。出土遺物はなく、時期不明である。

**土壤11（第45図）**

B区西部にある、大形の不整形土壤である。瓦質土器片が出土し、中世以降と思われる。（尾上）

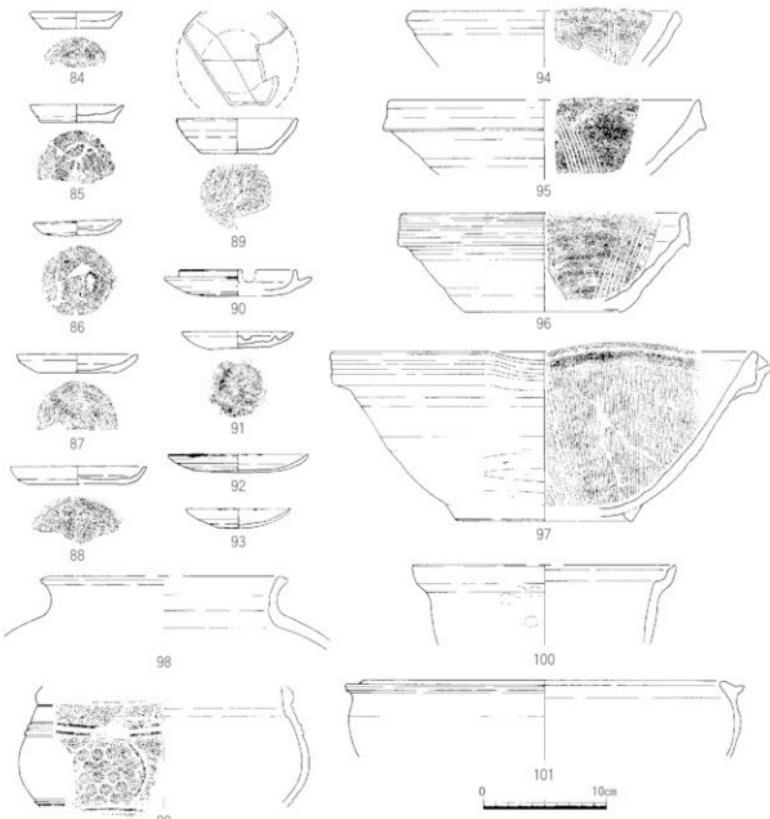


第45図 土壌8～11（1/30）

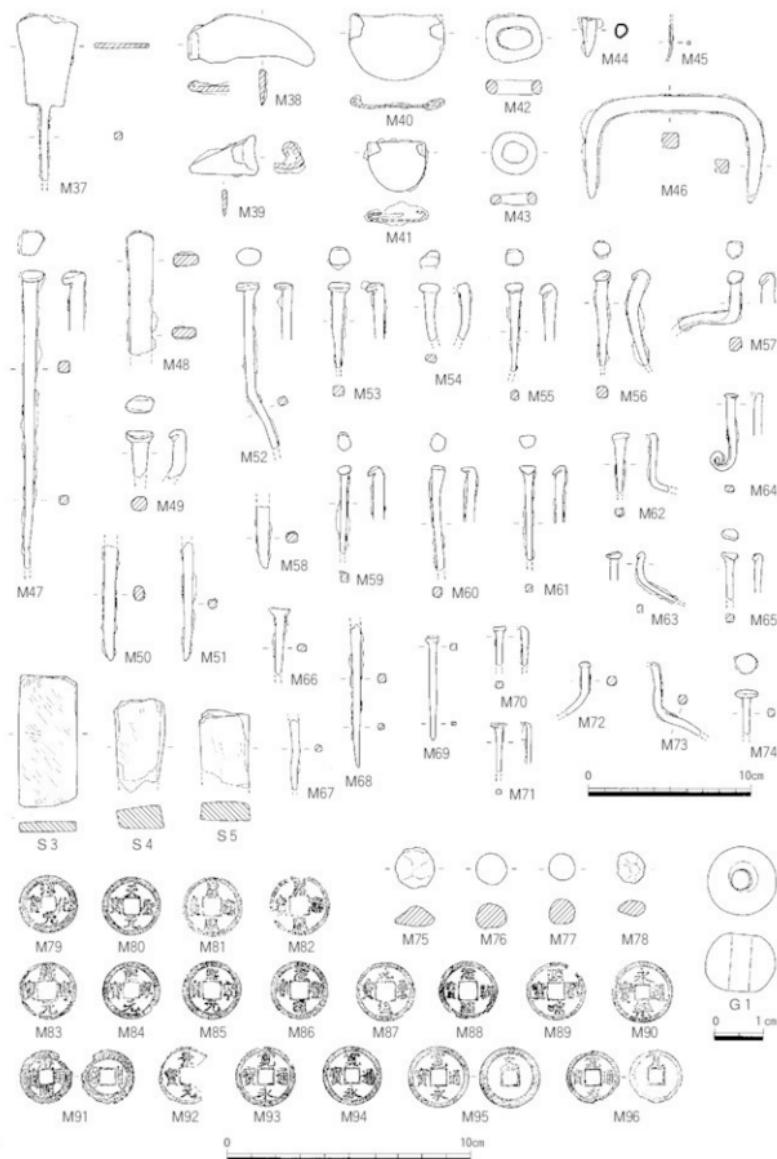
## 16 その他の遺物

包含層やピットなどから出土した遺物を示した。詳細は観察表にゆずるが、第46図は土器類で、鎌倉時代から近世末期のものまである。84～88は土師質土器の皿、89～93は備前焼などの陶器皿、94～98は備前焼で擂鉢、甕がある。99～101は瓦質土器で香炉、鍋、羽釜がある。これ以外に近世磁器が多く出土しているが、瓦溜2出土遺物で代表されるので省略した。第47図は金属・石・ガラス製品である。M37は方頭式の鉄鎌、M38・M39は鎌状の鉄器であるが用途不明、半月形の鉄器M40・M41も用途不明である。そのほか、鉄環M42・M43、石突状の鉄製品M44、針M45、鍔M46、釘M47～M74などがある。S 3～S 5は砾石、M75～M78は鉛製弾丸、M79～M96は銅銭である。G 1はガラス玉で、数珠玉であろう。

(尾上)



第46図 その他の遺物① (1/4)



第47図 その他の遺物② (1/3・1/2・1/1)

## 第4章 来光寺遺跡

### 第1節 調査区の概要

来光寺遺跡は、前章の来光寺跡とは、風呂谷と呼ばれる深い谷をはさんで隣接している。当初は一括して「来光寺跡」として調査に入ったが、調査の結果、寺院に直接関係する遺構は明確でなく、弥生時代や古代など、より広い時代の遺構が確認されたため、前章の寺跡とは区別し「来光寺遺跡」として報告する。

来光寺跡と同様、北西向きの斜面に立地しており、おそらく中世以降に階段状に造成され、それによってつくられた平坦面が屋敷地などに利用されてきたようである。現代には畠や荒れ地となったが、明治20年頃までは屋敷地があり、その後集落は丘陵裾付近に移って現在にいたるという。調査地付近にのこる「元屋」「中屋」などの字名が、これら屋敷地が存在したことを示している。ちなみにA区が字「前」、B区が字「元屋」、C区が字「中屋」である。なお、B区の北に接して「荒神谷」の字名があり（調査区外）、荒神をまつる祠等があった。

検出された遺構は、弥生時代・古代・中世・近世にわたるが、弥生時代や古代など古い時期の遺構はそれほど多くない。中世以降の地形の変更によって削平されたものもあったと思われる。中・近世になると、平坦面に掘立柱建物などがつくられ、遺構数は増加する。近世の文献に登場する「来光寺村」の一端を示しているものと思われる。

なお、C区では明治期に降る鍛冶遺構を検出し、金桶などの鍛冶具も出土したが、新しい時代のものであるので、本書では割愛した。

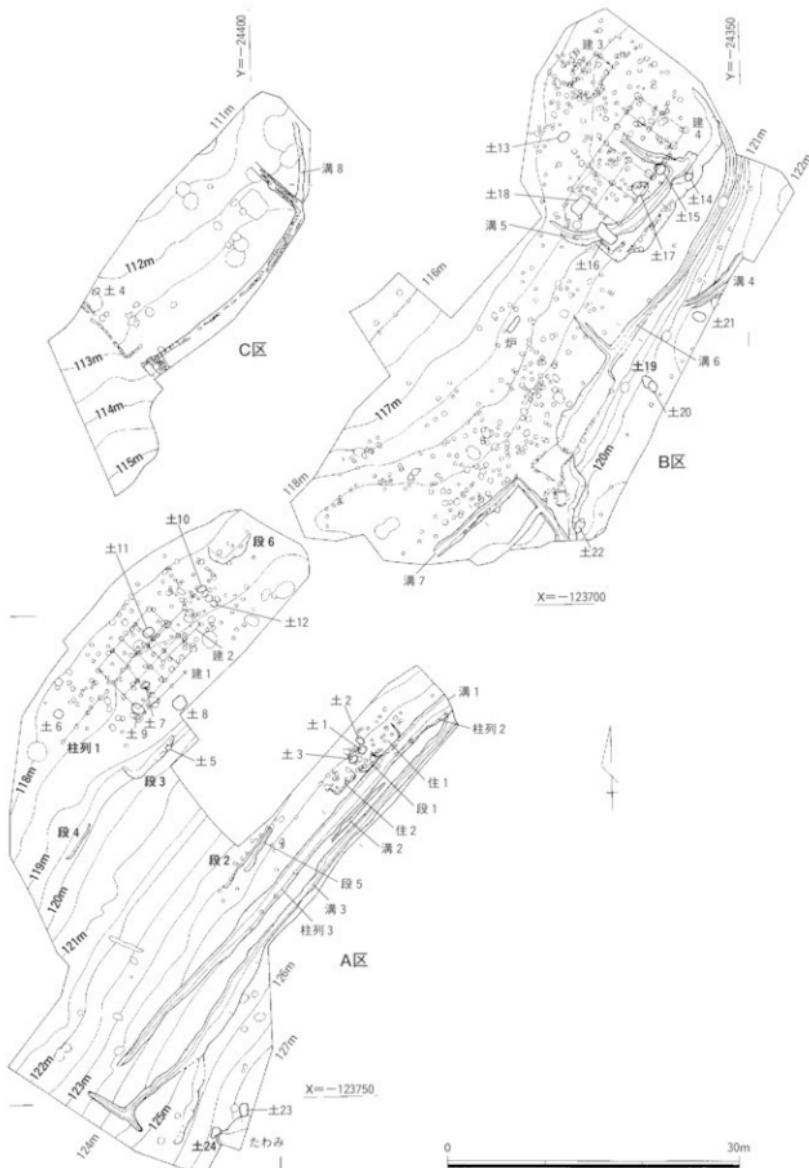
### 第2節 弥生時代の遺構と遺物

#### 1 概要

弥生時代の遺構は、A区の高位部、標高123～124m付近に最も集中しており、等高線に沿って並ぶように竪穴住居や段状遺構が検出された。また標高119～120m付近の斜面部にも若干認められた。この付近は中世以降の地形の変更がそれほど大きくなされておらず、遺構が残存したものと考えられる。また、A区下位部やB区、C区にも弥生土器を含む包含層があり、本来はもっと広い範囲に遺構が広がっていたと推定される。

検出された弥生時代の遺構はすべて集落関係のものであり、竪穴住居2軒、段状遺構4基、土壙3基がある。ただし段状遺構の中には時期の明確でないものもある。

なお、後で中・近世の遺構として取り上げる土壙8、土壙9は、造成時のカット面付近にあり、大きく削平を受けた弥生時代の貯蔵穴等の可能性もある。しかしながら出土遺物がなく積極的に弥生時代の遺構とする根拠がないため、中・近世の遺構に含めて掲載した。  
(尾上)



第48図 遺構配置図 (1/500)

## 2 壁穴住居

## 壁穴住居1（第49図）

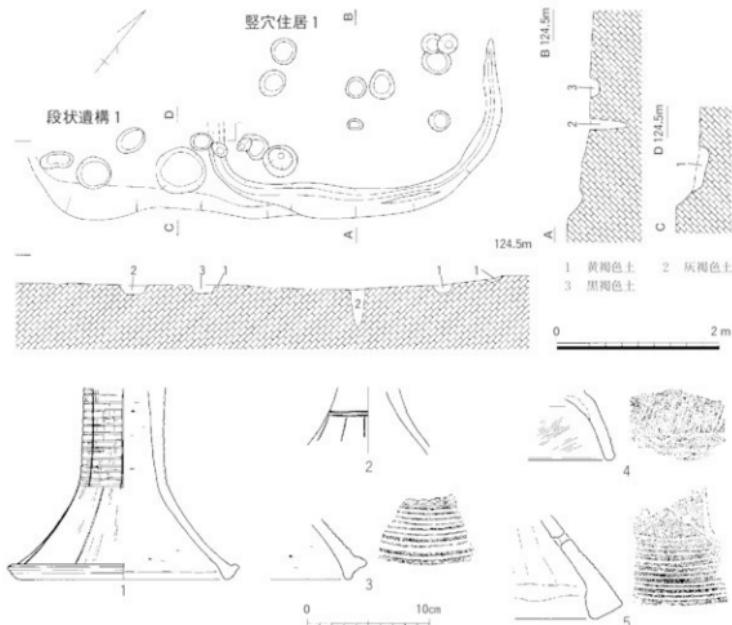
A区高位部、標高124m付近にある。平面形はおむね円形を呈するものと推定されるが、北側半分以上を流失している。南側でも残存状況は悪く、たわみ状の遺構として検出されたが、壁体溝が認められるため壁穴住居と判断した。東西長は約350cmで、南北長は不明である。床面のほぼ中央付近にやや深いピットがあるが、住居との関係は不明である。床面に相当する部分で検出されたピットをすべて図示したが、どれが住居に伴うのか明らかでない。

遺物は、土器が比較的多く出土しており、主なものとして高杯1・2・3、器台4・5を図示した。他はいずれも小片である。時期は弥生時代中期後葉であろう。

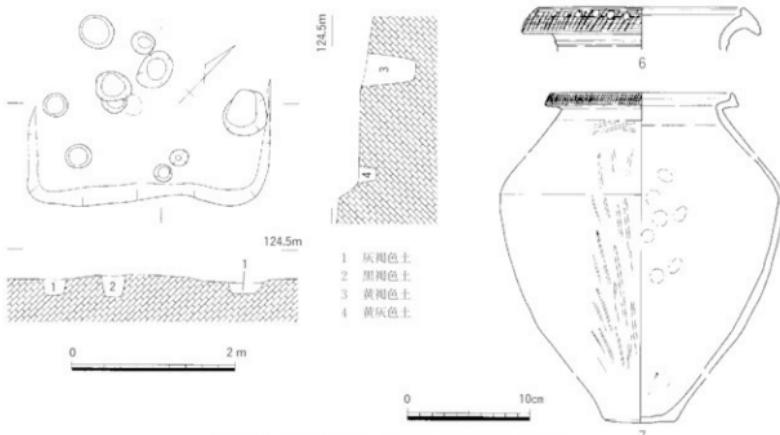
## 壁穴住居2（第50図）

A区高位部で壁穴住居1と並ぶ位置にある。平面形は方形と推定されるが、北西側半分を流失しており、東西長は約300cm、南北長は不明である。床面のほぼ中央に被熱部分があり、住居に伴うかと考えられる。床面部分で検出されたピットをすべて図示しているが、どれが住居に伴うのか不明である。

遺物は、壺が2点伴っており（6・7）、7はほぼ完形に復元できる資料である。時期は弥生時代中期後葉であろう。（尾上）



第49図 壁穴住居1・段状遺構1 (1/60)・壁穴住居1出土遺物 (1/4)



第50図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/4)

### 3 段状遺構

#### 段状遺構1 (第49図)

竪穴住居1と一部が重複している。床面のレベルは竪穴住居1とほぼ同じであり、両者の切り合い関係は必ずしも明確にし得なかったが、竪穴住居1の方が新しいものと思われた。

長さは3mほどが残存しているにすぎないが、竪穴住居1との位置関係から、最大で5mほどの規模を想定することができる。深さは壁際で最大20cmほどあり、壁体溝は認められない。伴うピットも明らかでなく、図示したピットには中世のものを含んでいる可能性もある。

出土遺物はなく、切り合い関係から竪穴住居1より古いが、やはり弥生時代中期だろう。 (尾上)

#### 段状遺構2 (第51図)

竪穴住居1・2より南西に10mほど離れた位置にある。床面の標高は約123.3mで竪穴住居1より70cmほど低い。長さは約8mあり、斜面を断面「L」字形にカットしているが床面はほとんど流失し、溝状の遺構として検出された。壁体溝は浅く部分的に検出され、つながらない。南西端部では溝が若干深くなっている終結しており、北西側にはつながっていない。

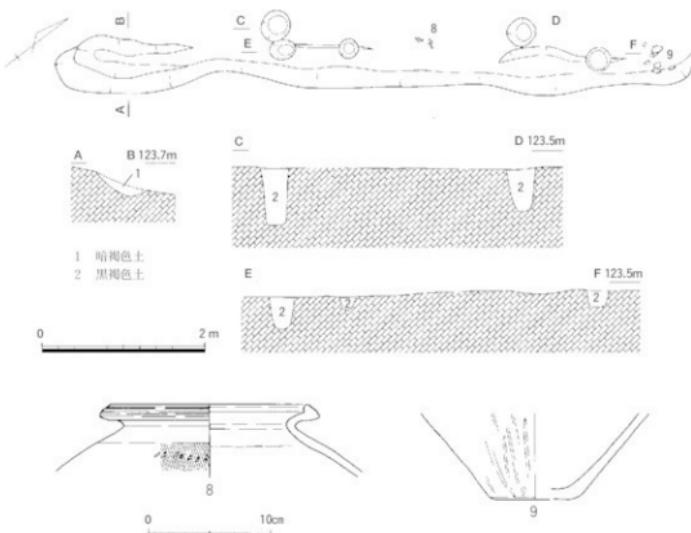
また、壁に沿ってピットが並ぶように存在するが、壁体溝と重複するものもあり、どれが伴うか明らかなでない。ピットの配置や規模などからみると、断面C-Dにかかるピット2つがこの段状遺構に伴う柱穴の可能性がある。ピットの深さは約55cmおよび約70cmである。

遺物は、壁際の床面2箇所に土器片が貼り付くように集中する部分があり、それぞれ8・9の土器に復元された。8は壺の口縁部、9は壺または甕の底部で、弥生時代中期後葉の時期を示すものと考えられる。

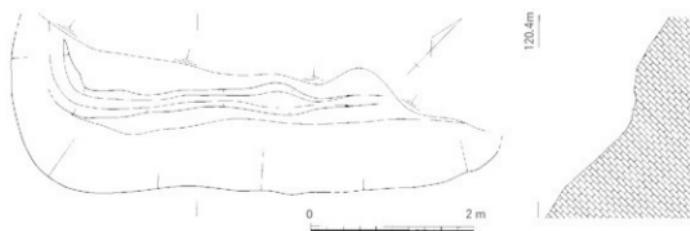
(尾上)

#### 段状遺構3 (第52図)

A区の中段中程に位置して検出された竪穴状の遺構の一部で、「段状遺構」と呼称される。丘陵斜面に段切りに造成された住居の一部と考えられる。



第51図 段状遺構 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第52図 段状遺構 3 (1/60)

検出された規模は南東辺がほぼ6mを測り、一部に床面とおぼしき平坦面を有し、壁際には住居址特有の浅い壁体溝が掘り込まれている。

この遺構には壁体溝以外に何ら伴う屋内施設は確認されなかったが、検出された形状から方形の住居であった可能性が考えられる。時期は弥生時代に比定されよう。  
(二宮)

#### 段状遺構4 (第53図)

段状遺構3の南西部に位置し、検出された海拔高、方位もほぼ同じで丘陵斜面部を段切りに造成した住居と考えられる。

検出された段状は床面と考えられる平坦面を伴っているが、段状遺構3のように屋内施設としての壁体溝は伴わなかった。段状遺構4と同時代の可能性が考えられる。  
(二宮)

## 4 土 壤

### 土壤1（第54図）

段状遺構1の前面に検出された3基の土壤（土壤1～3）のうちの1基である。長径約80～90cm、短径約75cmの不整楕円形を呈し、深さは約30cmである。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。遺物は弥生土器の小片が出土している。

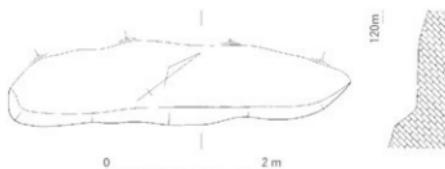
### 土壤2（第54図）

長径約85cm、短径約55cmの不整楕円形ないし隅丸方形を呈し、深さは最大約60cmである。底面は中央が深く、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土の上層には木炭粒が目立った。遺物は弥生土器の小片が出土している。

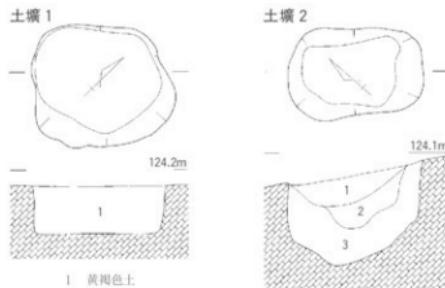
### 土壤3（第54図）

長径約100cm、短径約70cmの不整楕円形を呈し、深さは約40cmである。底面の形状は不整形である。埋土には木炭粒が目立った。遺物は弥生土器片が多く出土しているが、接合はあまり進まなかった。10・11の壺または甌の底部を示す。

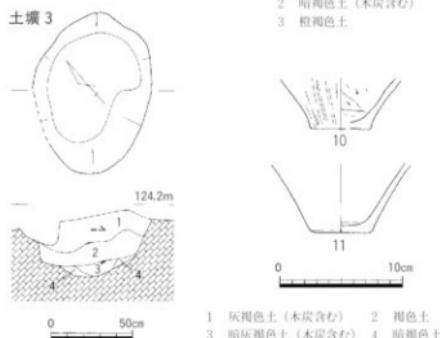
土壤1～3は近接した位置にあり、また長軸を平行あるいは直交する方向に向けるなど規則性がある。同時存在した遺構で、周辺と同様に弥生時代中期と考えられる。  
（尾上）



第53図 段状遺構4（1/60）



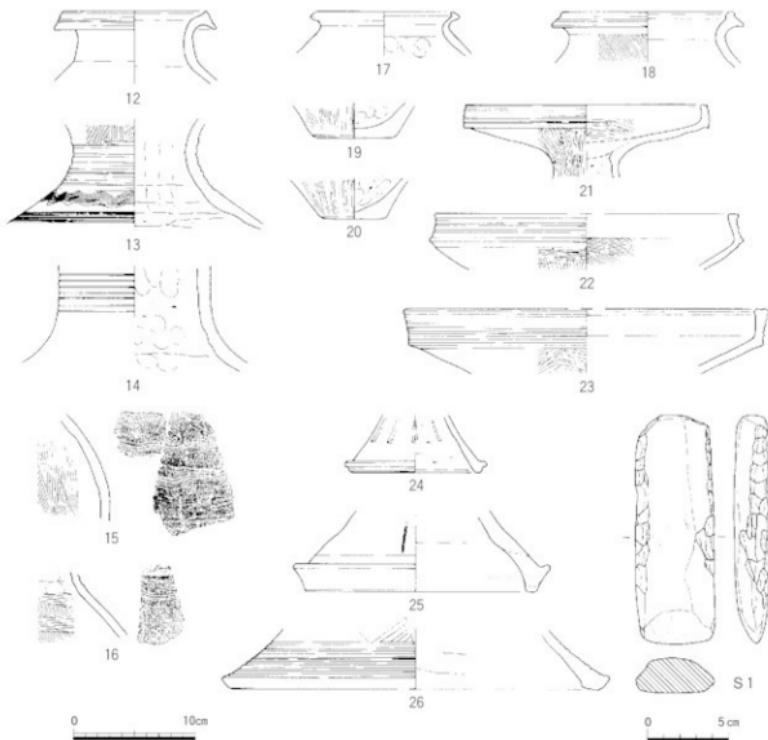
1 暗褐色土（木炭含む）  
2 暗褐色土（木炭含む）  
3 棕褐色土



第54図 土壤1～3（1/30）・土壤3出土遺物（1/4）

### 5 その他の遺物（第55図）

包含層やビットから出土した弥生時代の遺物を示した。弥生時代の遺構が多数検出されたA区上位部よりも、B区など下位部からの出土が多い。A区上位部では流失しているものと考えられる。各遺物の詳細は遺物観察表にゆずるが、竪穴住居などの遺構と同じく、弥生時代中期後葉を中心として後期前半にいたる時期のものを含んでいる。なお、S 1の磨製石斧は来光寺跡と来光寺遺跡との間付近で出土した石斧で、大型船刃石斧が縦に剥離したものを加工、再利用している可能性がある。ホルンフェルス製である。  
（尾上）



第55図 その他の遺物 (1/4・1/3)

## 第3節 古墳時代～古代の遺構と遺物

## 1 概要

古墳時代～古代の遺構・遺物は非常に少ない。特に古墳時代の遺構は皆無で、遺物も明確なものは1点（第58図-31）があるのみである。調査区内に多数あるピットの中には古墳時代に属するものもあるかもしれないが、時期を特定しにくい場合がほとんどである。

古代の遺構では、段状遺構1基、土壙1基がある。土壙は上器棺墓の可能性がある。位置は段状遺構がA区上位部、土壙がC区にあり、まとまった位置にあるという状況ではない。距離にして60m、高さにして11.5m離れている。弥生時代の遺構と同様、後世の地形変化によって削平された遺構もあったと思われるが、包含層等からの出土遺物は弥生土器に比べるとかなり少い。本来、非常に散漫な集落を形成していたと考えた方がよさそうである。

## 2 段状遺構

### 段状遺構5（第56図）

A区上位部の急斜面地で検出された。長さは約5mで、等高線に平行している。深さは壁際で最大20cmほどあるが、壁の傾斜は緩い。壁体溝は不明瞭だが、一部に認められた。この段状遺構に伴うピットは明らかでないが、段状遺構2の前面に並ぶ柱穴の中に伴うものがあるかもしれない。

遺物は、壁体溝の中から須恵器杯の小片が1点出土している(27)。遺構の時期を示すものかどうか明らかでないが、古代後期のものと思われる。

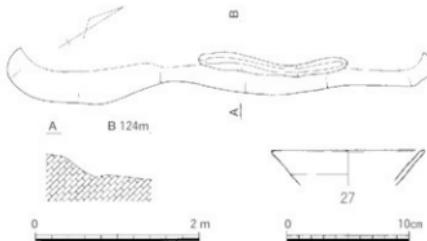
## 3 土 壤

### 土壤4（第57図）

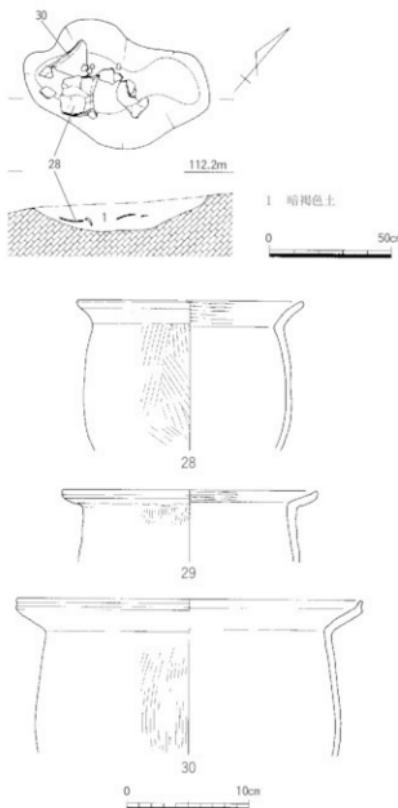
C区の北西角付近で検出された。近世のたわみが重複しており、また近世以降の造成による地形変更で上部を削平されている。掘り方は不整形で、長さ約75cm、幅約50cm、残存する深さは10数cmである。

土壤内の南西側を中心に、破碎された土器が出土しており、土師器甕3個体がある(28~30)。28はほぼ全周分が復元できる上器で、出土状況は、土壤の底に横たえて据えられているように思われた。29・30はごく一部の破片である。土壤が搅乱を受けているため、土器も必ずしも原位置を保っていないと思われるが、28の出土状況等から合わせ口の甕棺墓であった可能性も考えられる。そのほかに、須恵器の杯身の破片が1点出土しているが、小片であるため図示していない。

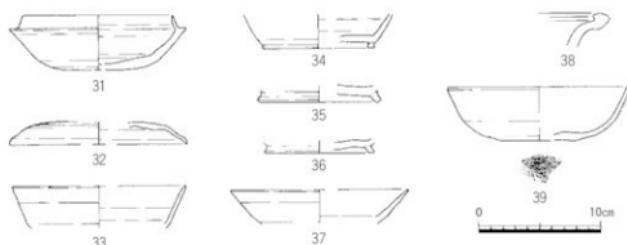
時期は古代に属すると考えられるが、詳細は明らかでない。



第56図 段状遺構5 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第57図 土壌4 (1/20)・出土遺物 (1/4)



第58図 その他の遺物 (1/4)

#### 4 その他の遺物

包含層等から出土した遺物を示している。少數しかなく、図化できるものをほとんど掲載した。出土地点はB区およびC区で、A区からは出土していない。31～38は須恵器、39のみ土師器である。31は古墳時代後期の杯身で、約半分が残存している。B区の南東斜面部から出土し、周辺を精査したが遺構は確認できなかった。他はいずれも比較的小さな破片である。32は7～8世紀代の杯蓋、33～36は8世紀頃の杯身、37は古代末頃の杯身、38は甌の口縁部である。39は底部糸切りの椀で、古代末頃であろうか。

#### 第4節 中・近世の遺構と遺物

##### 1 概要

中・近世では、多くの遺構が確認された。掘立柱建物4棟、柱穴列3列、段状遺構1基、が<sup>1</sup>1基、土壤20基、溝8条などがある。

掘立柱建物は、いずれも造成された平坦面に位置している。A区下位部の平坦面に掘立柱建物1・2が、B区北部の平坦面に掘立柱建物3・4がある。B区南部にも平坦面があり、ピットが多数検出されたが、建物としてまとめるることはできなかった。C区では「コ」の字形の石組み溝に囲まれる平坦面があるが、ここに掘立柱建物はなく、柱穴もほとんどない。おそらく近世後期以降の造成による平坦面で、礎石建物があったのだろう。ここでは近代に降る鍛冶遺構が検出され、金桶などの鍛冶具も出土したが、新しい時代のものであるため本書では割愛した。A区およびB区の4棟の掘立柱建物については、柱穴からの出土遺物等により、中世末期から近世前半期のものと推定された。

土壤は様々なものが多数検出されたが、その性格や機能が分かるものはほとんどない。また出土遺物にも乏しく時期を推定することも困難なもの多かった。その中で、土壤5は陶器が埋納されており特徴的である。

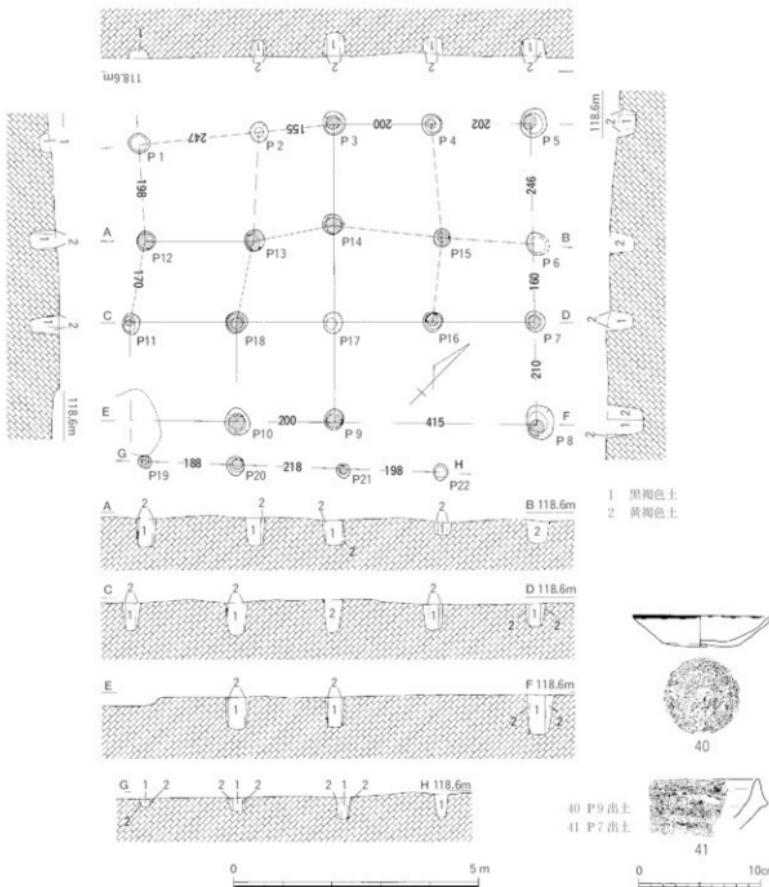
なお、検出された遺構は全体図にすべて示しているが(第48図)、近代に降る可能性の高い桶の埋設土壤や一部の石組み溝などは個別の説明を省略した。また、出土遺物がなく時期不明で、たわみ状の浅い土壤などについても省略したものがある。  
(尾上)

## 2 掘立柱建物

## 掘立柱建物1（第59図）

A区下位部の平坦面に検出された。4×3間の縦柱建物であるが、一部柱穴の欠落するところがあり、柱穴の並びも不均等である。建物の規模は約8m×約6mで、柱間距離は平均しておよそ2mである。また、南東辺の外側には庇状に柱穴4つが並んでいる。柱穴埋土には柱痕が残るものが多い。

遺物は、柱穴内より灯明皿として用いられた土師器皿40と備前焼擂鉢の小片41が出土している。40の皿から、近世前半期の建物と考えられる。



第59図 掘立柱建物1 (1/100)・出土遺物 (1/4)

## 掘立柱建物2（第60図）

A区下位部の平坦面に掘立柱建物1と重複して検出された、 $1 \times 2$ 間の掘立柱建物である。建物の規模は約2.7m × 約5.4mで、柱間距離は平均して2.7mである。柱穴は径50cm、深さ60cm前後のものが多い。

遺物は、P3から雁又式の鉄鎌M1が出土している。関は笠形に開くもので、茎の上に鉄板を巻き付けて関を作成している。時期は中世～近世前半期であろう。

## 掘立柱建物3（第61図）

B区北部の平坦面にある $1 \times 2$ 間の掘立柱建物である。建物の規模は約2.3m × 約4.2mで、柱間距離は短辺側が2.3m、長辺側が2.1mである。柱穴は径40cm前後、深さ30～50cmである。

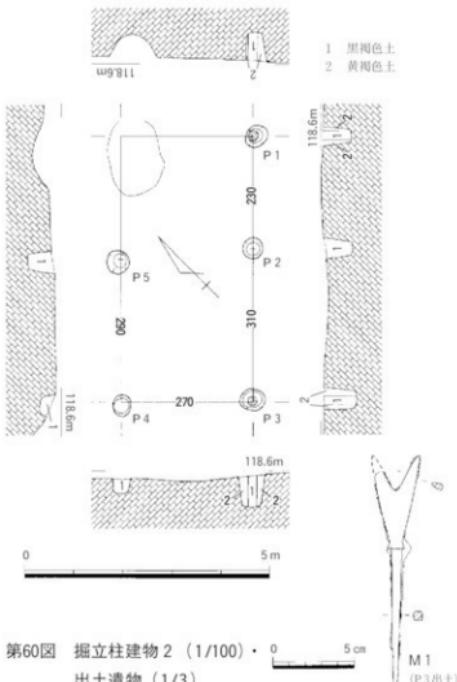
遺物はないが、他の建物と同様に中世～近世前半期であろう。

## 掘立柱建物4（第62図）

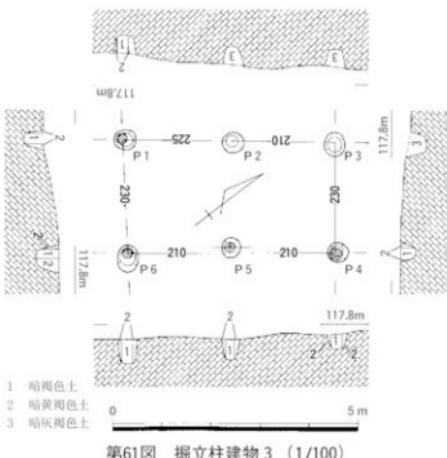
B区北部の平坦面にある $2 \times 5$ 間の掘立柱建物である。建物の規模は約6m × 約12mで、柱間距離は3mを基本とするが、北側半分の長辺側は約2mとなっている。柱穴は径40～50cm、深さ50～70cmのものが多い。

なお、南東側は建物を取り囲むように地山がコの字形にカットされ、南部では石垣が残存していた。石垣の南角部では建物の方へ降りるための斜路がつくられている。

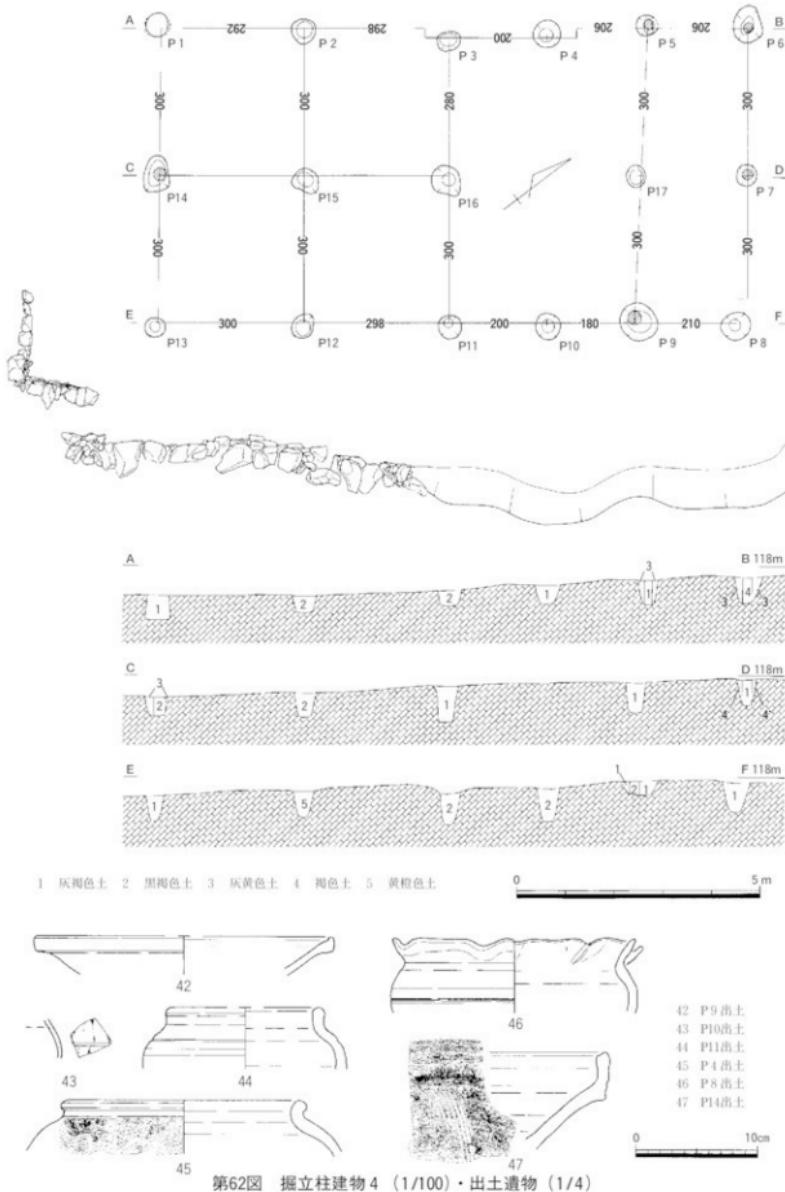
遺物は、柱穴から中国産青磁42・43と備前焼44～47が出土している。青磁は14世紀後半～15世紀中葉、備前焼は中世末頃である。備前焼の年代がほぼそろうことから、建物の時期は中世末期と考えられる。（尾上）



第60図 掘立柱建物2（1/100）・0  
出土遺物（1/3）



第61図 掘立柱建物3（1/100）



第62図 掘立柱建物4 (1/100)・出土遺物 (1/4)

### 3 柱穴列

#### 柱穴1～3（第63図）

柱穴が直線的に並ぶものである。柱穴列1は掘立柱建物1の柱穴と直線的に並び、建物と関係があるかもしれない。柱穴列2・3は溝1に沿っており、柱穴列2からは土師器の椀48が出土した。

中世のものだろう。

（尾上）

### 4 段状遺構

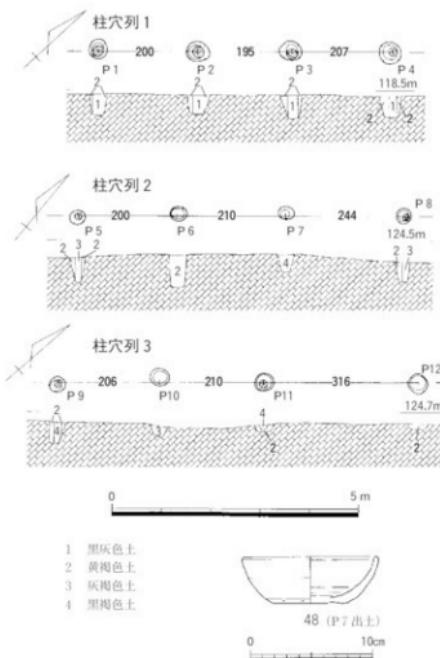
#### 段状遺構6（第64図）

A区の北端部にある。東西の長さは約450cm、深さは20cmほどである。壁体溝はL字形にめぐる。この段状遺構に伴うピットは明らかでない。

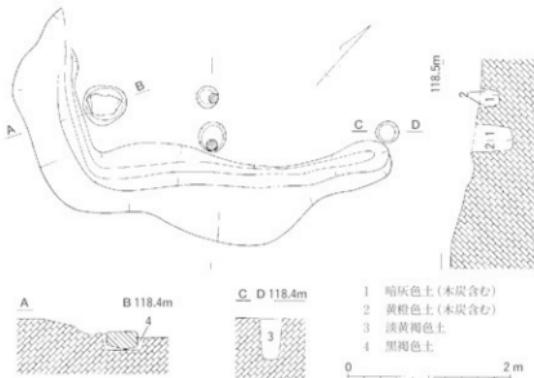
遺物は、埋土中から弥生土器が多く出土したため、当初は弥生時代の遺構と推定したが、最終的にはわずかながら備前焼の破片を含むことが判明し、中・近世の遺構と考えた。ただし詳細な時期は不明である。（尾上）

### 5 炉（第65図）

B区の中央付近にある。長さ約195cmの浅い溝状をなし、底面および壁面の一部が被熱する。炉あるいは窯と想定されるが、



第63図 柱穴列1～3（1/100）・柱穴列2出土遺物（1/4）



第64図 段状遺構6（1/60）

具体的な機能は不明、時期も不明である。  
(尾上)

## 6 土 壤

### 土壤5 (第66図)

段状遺構3に重なり検出された、平面形態が楕円形を呈し、径60cm×47cmを測る。丸味をもった底面から急斜に立ち上がる壁となっている。壇内から鉢49・把手付注口50がセットで出土する。出土状況から50は注口部分を欠落させ、胞衣容器として用いられたと考えられる。

(二宮)

### 土壤6 (第67図)

A区北西端部にある。一边約80cmの隅丸方形土壤である。遺物は出土しておらず、時期不明である。  
(尾上)

### 土壤7 (第67図)

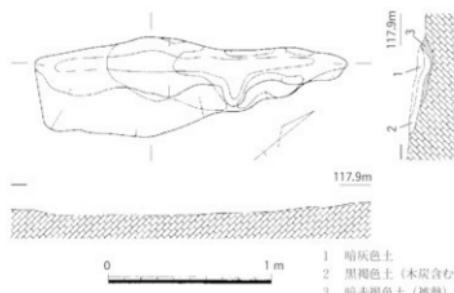
掘立柱建物1と重複する位置にある。長さ約100cm、幅約50cmの長方形土壤で、遺物はなく時期不明である。  
(尾上)

### 土壤8・9 (第68図)

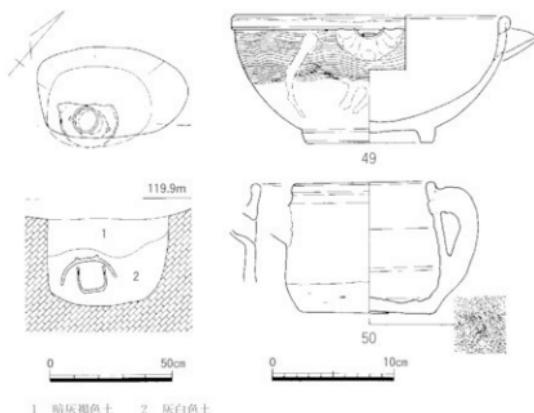
A区下位部の平坦面にある。底部は平坦、壁は急角度で立ち上がる。時期不明で、中・近世の遺構に含めたが、弥生時代の袋状土壤が削平されたものかもしれない。  
(尾上)

### 土壤10 (第68図)

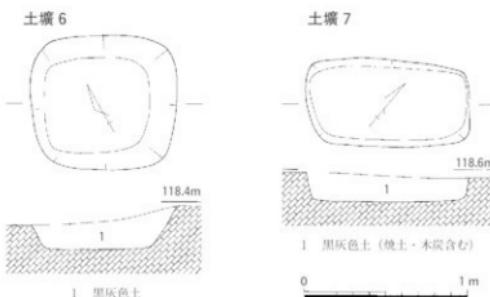
A区下位部にある楕円形土壤で、長径約100cm、短径約60cm、深さ約40cm、長側面と底面に板石を貼り、石櫛状になる。性格、時期とも不明である。  
(尾上)



第65図 爐 (1/30)



第66図 土壌5 (1/20)・出土遺物 (1/4)



第67図 土壌6・7 (1/30)

**土壤11（第68図）**

A区下位部の平坦面にある楕円形土壌で、底面は隅丸方形に近い。長径約120cm、短径約90cm、深さ約25cmである。出土遺物はなく、時期不明である。  
(尾上)

**土壤12（第69図）**

A区下位部の平坦面にある、径約70~80cmの円形土壌で、北半を流失している。深さは40cmほど残存している。壁と底面に石を貼っているが、性格、時期とも不明である。  
(尾上)

**土壤13（第69図）**

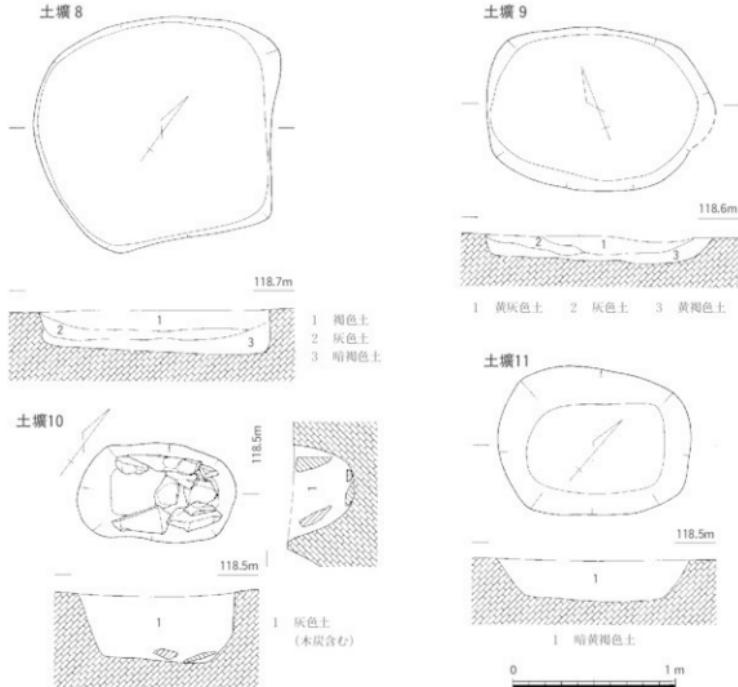
B区北部の楕円形土壌で、長径約120cmである。遺物は出土しておらず、時期不明である。  
(尾上)

**土壤14・15（第69図）**

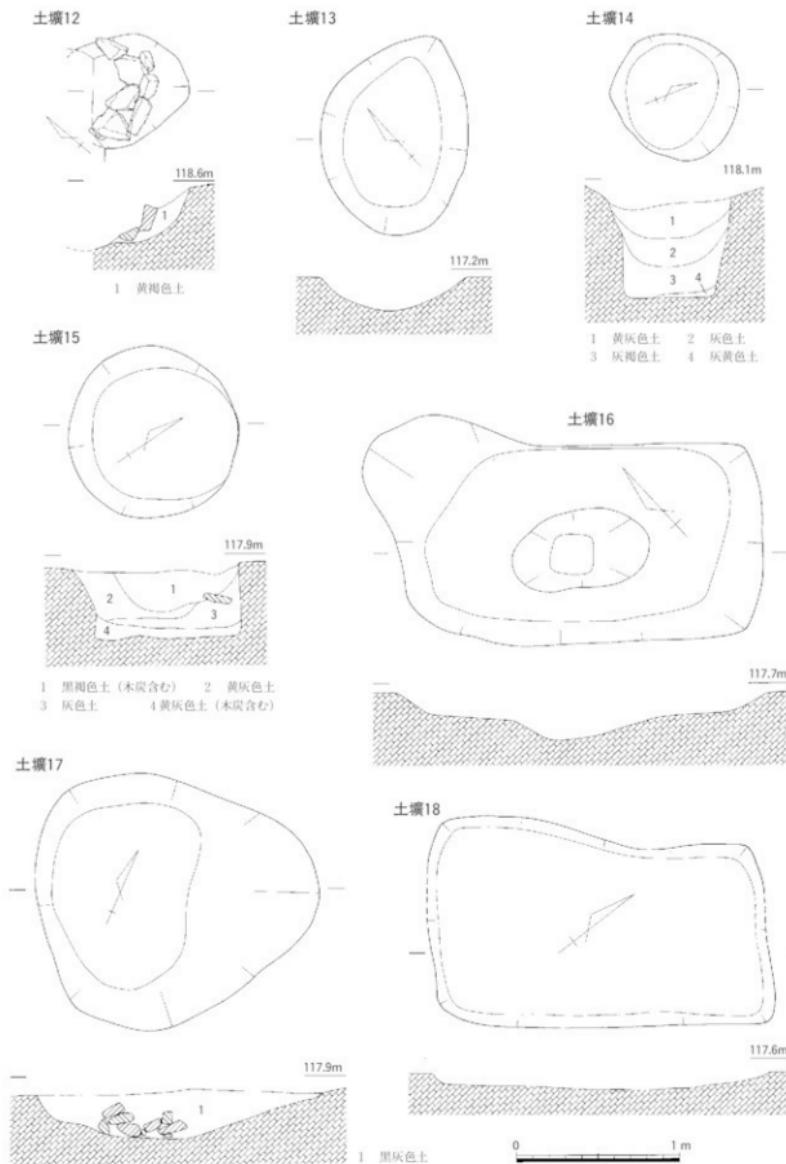
掘立柱建物4の南東付近にある円形土壌である。径約80~100cm、深さは50~60cmある。底面は平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。遺物は出土しておらず、時期不明である。  
(尾上)

**土壤16~18（第69図）**

掘立柱建物4の南部周辺にある大形の土壌で、土壤16・18はおむね隅丸長方形を呈する。深さはいずれも浅い。掘立柱建物4と関連する土壌かもしれないが、性格、時期とも不明である。  
(尾上)



第68図 土壌 8 ~11 (1/30)



第69図 土壠12~18 (1/30)

## 土壤19（第70図）

B区上段の中程に位置し、大部分が削平で消滅し、現状で梢円形と想定される形状であり、検出面規模不明、底面110cmを測る。墓の可能性がある。（二宮）

## 土壤20（第70図）

土壤19の南東部を切り込んで掘り上げられた梢円形状の平面形を呈し、若干丸味をもった底面で土壤内には人頭大から拳大の礫が認められている。（二宮）

## 土壤21（第70図）

土壤20の北東に位置する梢円形の平面形を呈し、深さは50cmを測る。平坦な底面から緩やかな傾斜の壁となっている。（二宮）

## 土壤22（第70図）

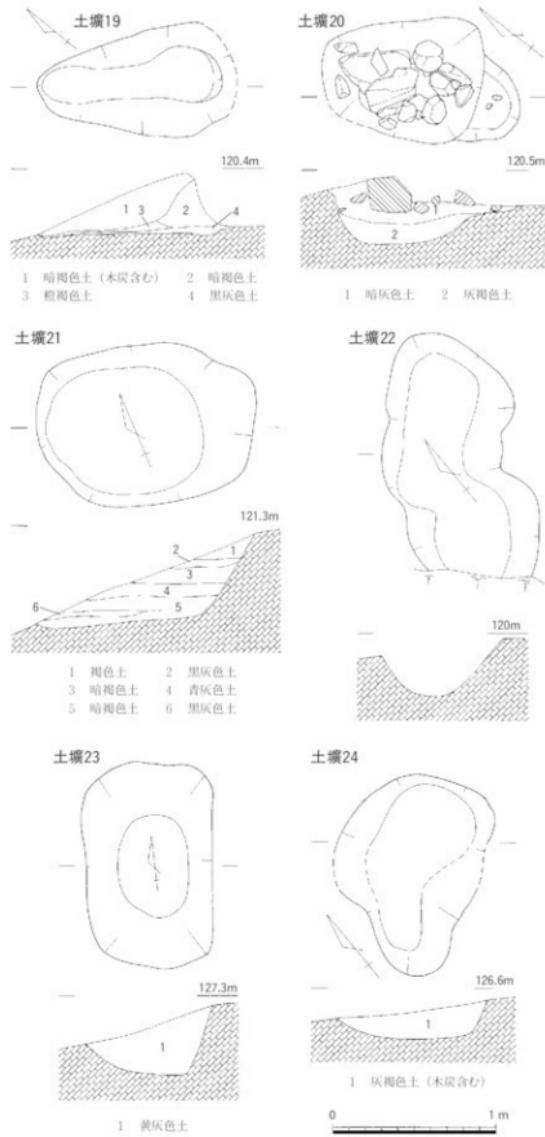
土壤20の南西15mに位置した不整梢円形の土壤で、深さは35cmを測る「U」字形断面を示し、長辺方向はほぼ平坦である。（二宮）

## 土壤23（第70図）

A区南東端部に位置し、南北125cm×東西75cmの隅丸長方形の平面形を示す。底面は狭いがほぼ平らな作りとなっている。（二宮）

## 土壤24（第70図）

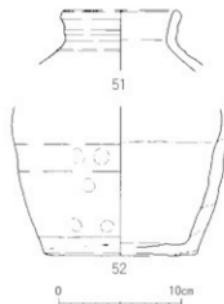
土壤23の南東に位置し、部分的にたわみに切られているが、本来の形状は隅丸長方形と考えられる。埋土に炭化物を含む。（二宮）



第70図 土壌19～24 (1/30)

## 7 たわみ (第71図)

A区南東端部に位置し、北に土壤23、西に土壤24が重なっている。  
検出地点が隅部であるため、規模等も安定しておらず、人為的に掘削されたかは不明である。51・52の壺が出土した。 (二宮)



第71図 たわみ出土遺物

## 8 溝

### 溝1～3 (第72図)

A区上位部で、等高線に平行する。溝3は南端で「T」字形に分岐する。溝1は道の可能性がある。時期は不明。 (尾上)

### 溝4 (第72図)

B区上段の北東部に位置する。検出時点で2条を確認することができたが、後世の削平により、両端は消滅し、本来の規模・用途等については不明である。 (二宮)

### 溝5 (第72図)

B区北部の平坦面にあり、掘立柱建物4の南側をめぐるように走る。中世末期であろう。 (尾上)

### 溝6 (第72図)

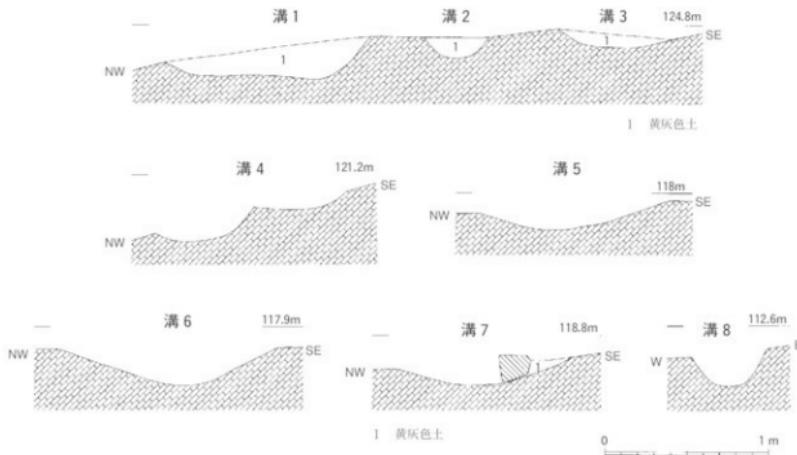
B区南端の谷筋から出る水を石組枠で受け、溝で北方の谷へ抜く。近世後期以降であろう。 (尾上)

### 溝7 (第72図)

B区南端にあり、谷筋から出る水を南方に流す。一部石組みで、近世後期以降であろう。 (尾上)

### 溝8 (第72図)

C区北部にある。近代の「コ」字形石組溝より古く、近世後期頃であろう。 (尾上)

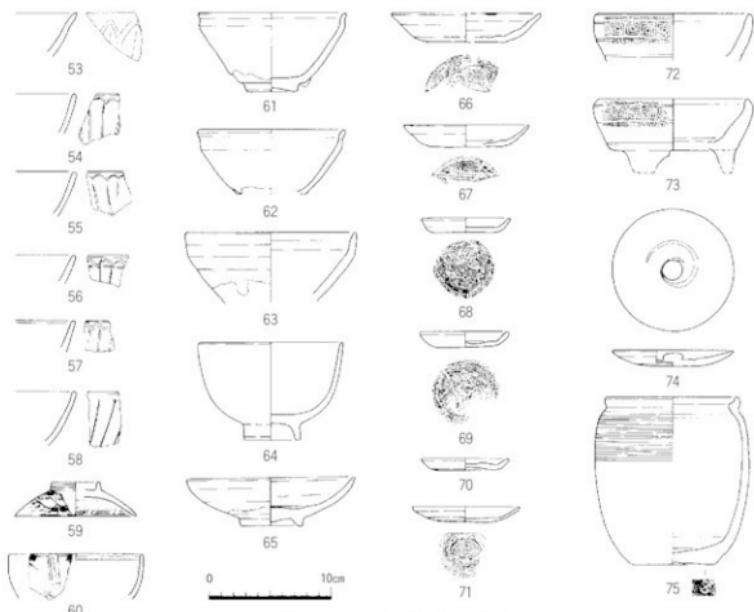


第72図 溝1～8 (1/30)

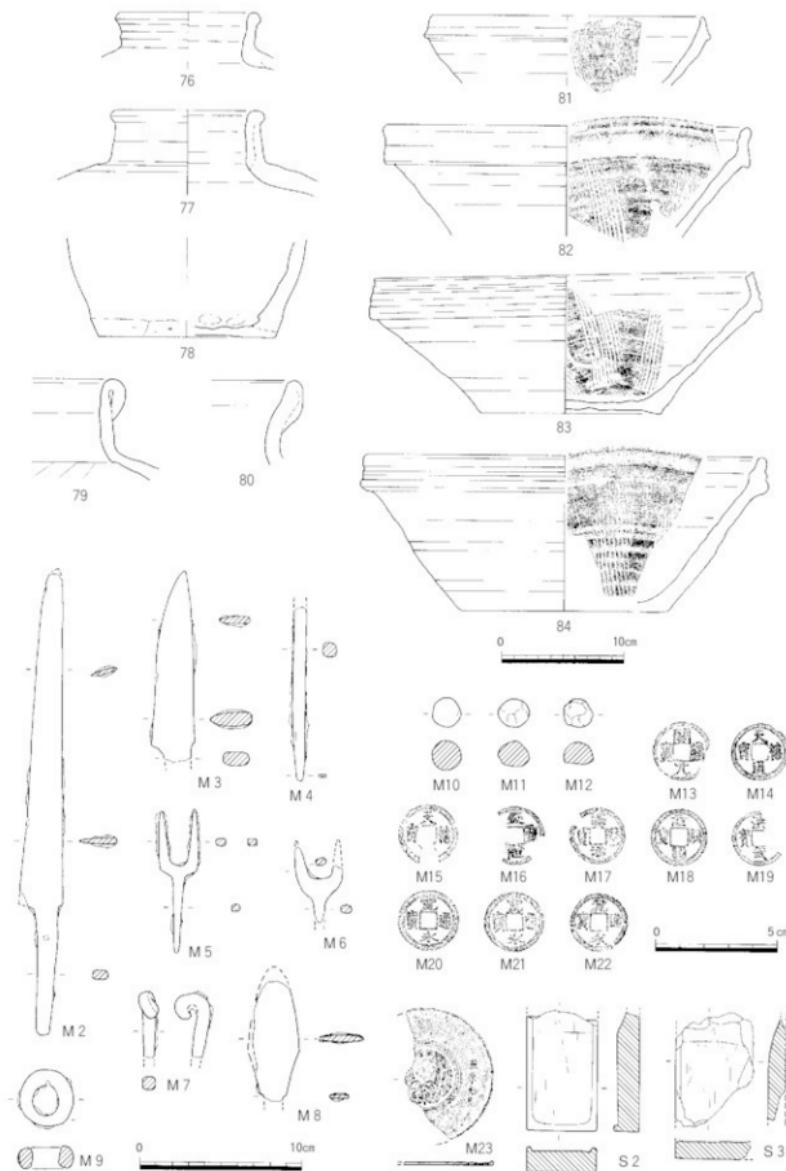
## 9 その他の遺物（第73図・第74図）

ピットや包含層からの出土遺物を示した。53～58は中国産の青磁で、B区からの出土が多い。59・60は肥前系の染付で、いずれも近世後期のものである。染付磁器はこのほかにも多く出土している。61～63は漸戸・美濃の天目茶碗で16世紀代、64・65は肥前の陶器で17世紀後半から18世紀前半のものであろう。66～70は土師器の皿で口縁に煤が付着するものがある。71は備前焼の皿で近世後期、72・73は瓦質土器の香炉である。74・75は備前焼の甕およびその蓋でいずれも完形品である。A区南部の包含層から出土したが、藏骨器などに用いられた可能性がある。75の底部には刻印がある。近世後期のものである。76～78は備前焼の壺で中世後期、79・80は備前焼の甕で14～15世紀代であろう。81～84は備前焼の擂鉢で中世後期から近世まである。M2～M9は鐵器で、刀M2、刀子M3、鐵鎌M5・M6・M8などがある。M2の刀は刀身が途中で少しねじれている。鐵鎌のうちM5とM6は鎌身が「U」字形をなすもので、M8は残りが悪いが柳葉形であろう。M4は不明鐵器で、何かの茎かと思われるが、間はない。M7も不明だが鉄釘の可能性があり、M9は用途不明の鐵環である。M10～M12は銅製弾丸である。M13～M22は銅錢で、開元通宝M13、天祐通宝M14・M15、元聖元宝M16、治平元宝M17、元祐通宝M18、洪武通宝M19、寛永通宝M20～M22がある。M16とM17は同一のピットから出土した。M23は「藤原光長」銘のある柄鏡である。S2・S3は石硯で、S2が流紋岩製、S3が粘板岩製である。

(尾上)



第73図 その他の遺物① (1/4)



第74図 その他の遺物2 (1/4・1/2・1/3)

## 第5章 立道遺跡

### 第1節 調査区の概要

立道遺跡は、来光寺跡、来光寺遺跡と一連の山麓北向き斜面に位置している。来光寺跡からの距離はおよそ300m、来光寺遺跡からの距離はおよそ200mと近い（第4図）。来光寺遺跡との間には「清水谷」と呼ばれる谷をはさんでいる。

立道遺跡は当初、分布調査の結果から「立道A遺跡」「立道B遺跡」という2つの遺跡として認識されていたが、確認調査の結果、両遺跡の範囲は広がり、本来一連の遺跡であった可能性も考えられるようになった。このため、本書では「立道遺跡」として一括し、旧「立道A遺跡」をA区、旧「立道B遺跡」をB区として記述している。A区が標高100～105m付近、B区が標高85～90m付近にある。A区とB区の間には近年まで屋敷地があり、造成によって大きく削平を受けているものと推測された。本来はA区とB区をつなぐように遺跡が広がっていた可能性がある。

調査地の字名は、A区が「河原畠」、B区が「立道」および「湯須木段」である。3つの字にまたがっているが、「立道」はこの付近の広い範囲にある地名であり、遺跡名として採用されている。

なお、周辺には「立道C散布地」（第4図）もあったが、調査の結果、遺跡とは認めがたい状況であり本書では省略した。「立道古墳群」（第4図）については、4基の小規模墳からなる古墳群とされ、このうち1号墳、2号墳、4号墳が路線予定範囲内にあったが、調査の結果、いずれも古墳ではないことが判明した。その概要は本章第5節で紹介する。

立道遺跡では、縄文・弥生時代の遺物がごく少量出土しているが、その時期の遺構は確認していない。主体をなすのは古代・中世・近世の遺構・遺物である。

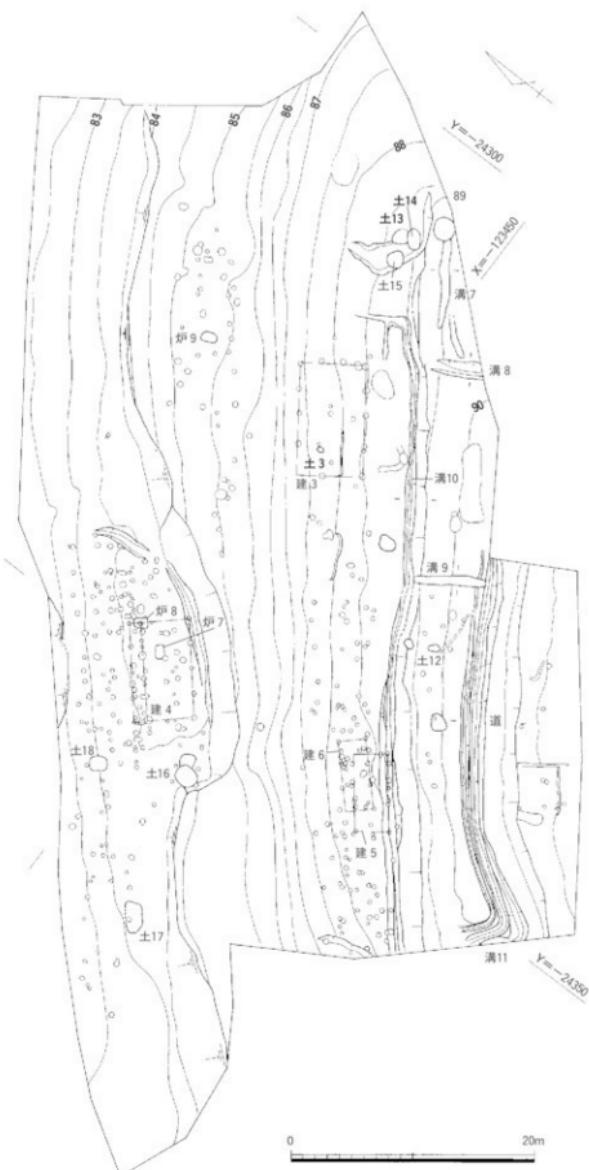
A区では、斜面上に古代・中世の遺構が多く検出された。特に注目されるのは、古代の鍛冶関連遺構であり、鍛冶炉と考えられる炉やそれに伴う溝、段状遺構などが検出された。出土鉄滓の分析から精鍊鍛冶と鍛錬鍛冶が行われていたことが判明している（付載2）。土器類も比較的多く伴い、それにより平安時代のものと推定され、鍛冶炉出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果もそのことを裏付けている（付載1）。

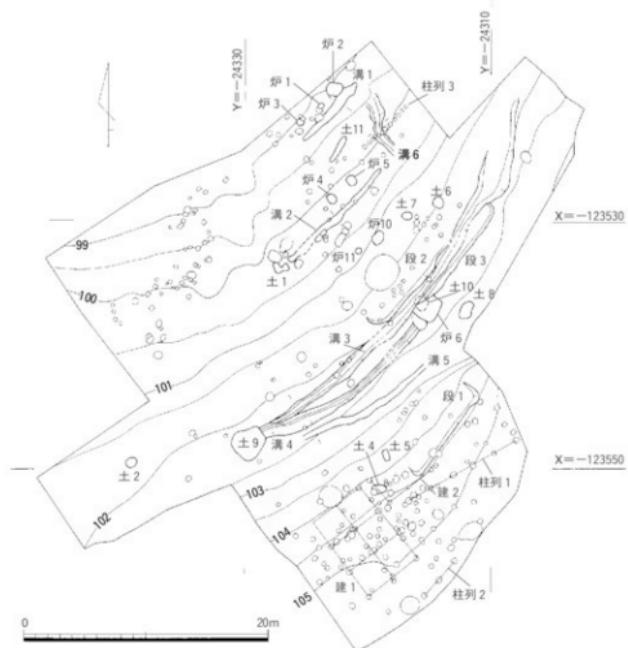
B区では、古代の遺構は少なく、包含層等からの出土遺物も古代のものは少ない。中・近世の遺構が中心になり、斜面を造成した平坦面に掘立柱建物などが検出された。

### 第2節 縄文・弥生時代の遺物

縄文・弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物が包含層等から出土した。ただし出土量はわずかで、図化可能なほぼすべての遺物を第77図に示した。遺物の出土量からしても、立道遺跡において縄文・弥生時代の集落が展開していたとは考えにくい。

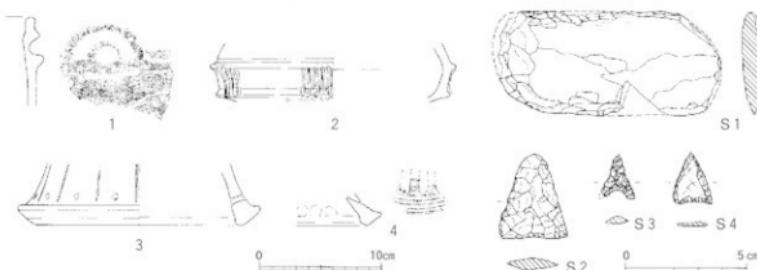
縄文土器は1点の破片が出土したのみである（1）。縄文時代後期の深鉢で、口縁の半円形に突出し





第76図 遺構配置図②A区 (1/400)

た部分に同心円状の文様があるほかは無文である。2～4は弥生土器で、来光寺遺跡で確認された集落跡と同様に中期後半を中心とする。2は壺の胴部で2条の突帯の間に棒状浮文を付す。図の天地が逆になるかもしれない。3・4は高杯の脚部で、3は小円形透かしと沈線を交互に配し、4は多数の透かしがみられる。S 1は泥質片岩製の石包丁で、一部に自然面を残す。石材の特性上、剥離による欠損が周縁に認められるが、おおよその形態を保っていると思われる。S 2～S 4はサヌカイト製の石鎌で、S 2は全長34.5mm、重量4.46gの大形品である。



第77図 繩文・弥生時代の遺物 (1/4・1/2)

## 第3節 古代の遺構と遺物

## 1 概要

古代の遺構はA区を中心に検出された。特に鍛冶関連遺構が注目され、鍛冶がとみられるが<sup>1</sup>～5とそれに伴う溝1・2、精錬鍛治溝と鍛羽口を出土した土壙2などがある。そのほかに木炭層を伴う段状遺構1基、土器が多く出土した土壙2基などが確認された。時期は幅があるが、9～10世紀代が中心になると考えられる。

(尾上)

## 2 段状遺構

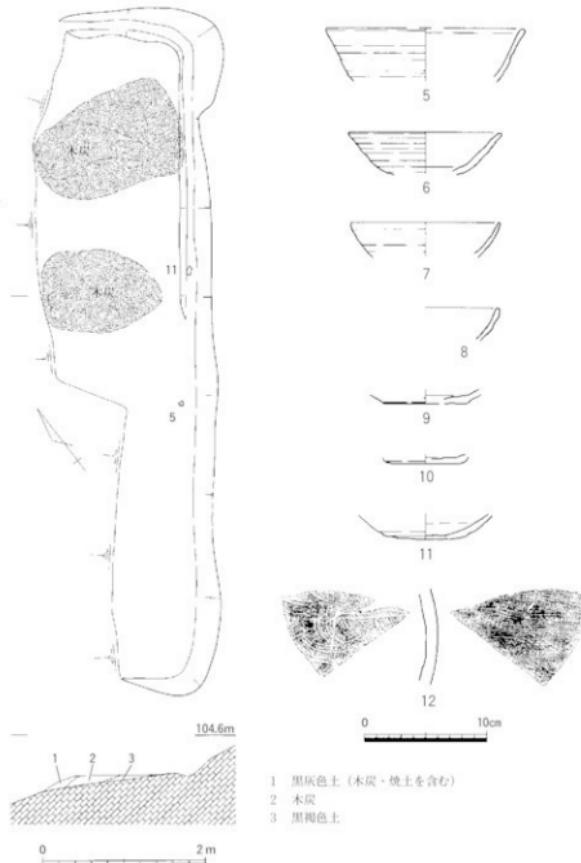
段状遺構1 (第78図)

A区上段の上位に位置して検出され、長辺を北東～南西に掘られた竪穴状遺構の一部で、「段状遺構」と呼称される遺構である。

遺構は丘陵斜面部を段切りに造成し、住居として利用できるように造り出された遺構であると考えられる。

現状で検出、確認された遺構の規模は、長辺8.5mを測り、北東部の壁際には浅い壁体溝が掘り込まれている。床面には貼り床と考えられる層が確認でき、一部ではあるが炭化物の集中する部分が検出されている。

この段状遺構の埋積土内から、須恵器・土師器の杯5～11、須恵器甕12が出土。古代に比定されよう。(二宮)



第78図 段状遺構1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

### 3 炉

#### 炉1 (第79図)

A区北側で確認され、一部に後世の削平を受けている。規模は、現状で長軸42cm、短軸30cm、深さ7cmを測り、炉上面の西側では長さ25cm、厚さ10cm程度の石が埋没していた。また、炉底部にあたる第2・3層では、被熱痕跡と硬化がみられた。一方、炉下部では深さ55cmを測り、断面形が袋状を呈する地下構造が検出された。乾燥と防湿の目的か、第10層では木炭が厚く充填されており、また、第9層が示すように、内壁面で被熱痕跡と硬化が認められた。

なお、第10層の炭化材を用いて、放射能炭素年代測定と樹種同定を実施した(付載1)。その結果、C14年代測定値は補正年代で1190BPであり、曆年較差した値はcalAD722-742、770-897、922-943であった。出土遺物はないが、この成果と周辺の調査状況からみて、遺構の時期は8~10世紀代と想定される。樹種同定ではノグルミ、コナラ節、モモ、サクラン属、ネジキの広葉樹材が確認された。

#### 炉2 (第80図)

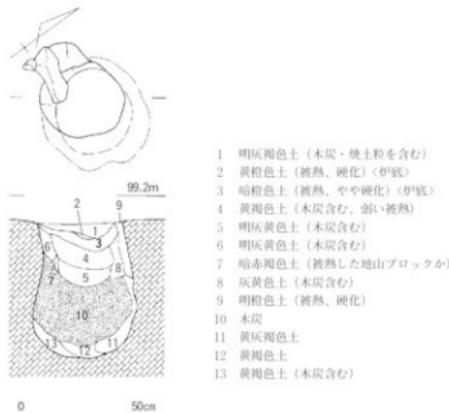
A区北側で確認され、炉1の北東約1mに位置する。後世の削平で炉底は完存していなかったが、長軸径42cm、短軸径30cmの範囲で強い被熱痕跡と硬化が認められた。

また、約1.0~1.4mの範囲で弱い被熱痕跡がみられたが、その中心からは、南側より標高の低い北側に広がる傾向を示す。地下構造はない。時期は古代と思われる。

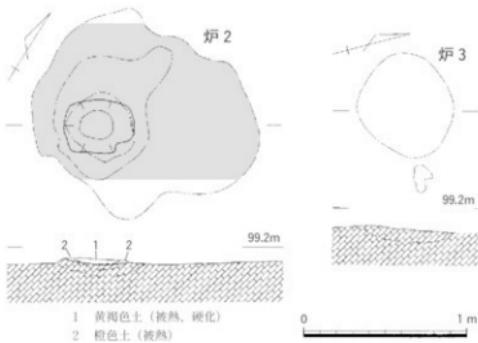
#### 炉3 (第80図)

A区北側で確認され、炉1の南西約1.6m、炉2の南西約3.0mに位置する。後世による削平によって、炉底は判然とせず、平面形態が長軸径68cm、短軸径60cmの楕円形の範囲で、弱い被熱痕跡が認められたのみであった。地下構造はみられなかった。

遺物は出土していないが、周辺遺構と包含層遺物の状況から、時期は古代と思われる。



第79図 炉1 (1/20)



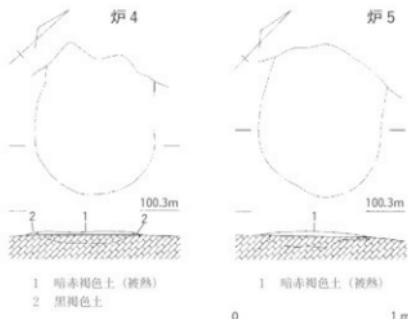
第80図 炉2・3 (1/30)

## 炉4 (第81図)

A区北側で検出したが、後世の削平によりが<sup>4</sup>底は判然とせず、長軸98cm以上、短軸72cmの範囲で被熱痕跡を確認した。地下構造はない。周辺遺構と包含層遺物の状況から、時期は古代と思われる。

## 炉5 (第81図)

A区北側で検出し、が<sup>4</sup>4の北東約1.4mに位置する。後世の削平によりが<sup>4</sup>底は判然とせず、長軸96cm以上、短軸76cmの範囲で被熱痕跡を確認した。地下構造はない。時期はが<sup>4</sup>4と同様に古代と思われる。 (澤山)



第81図 炉4・5 (1/30)

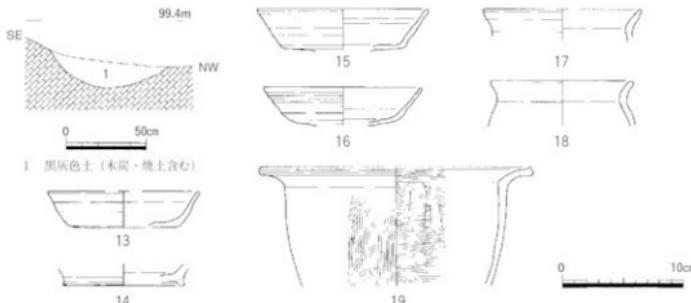
## 4 溝

## 溝1 (第82図)

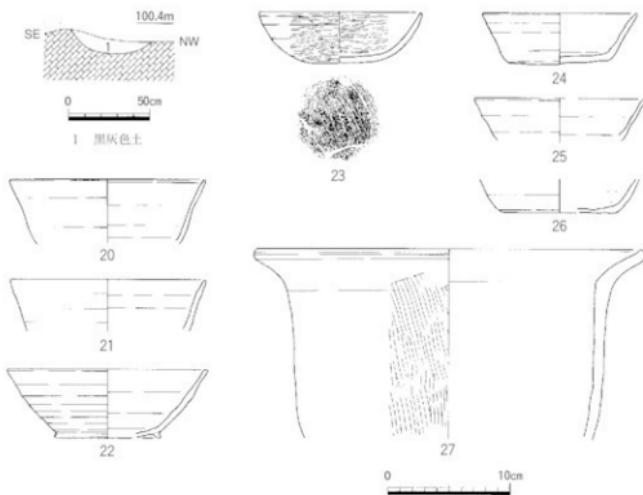
A区北側に位置し、等高線とほぼ平行となる北東—南西方向へ直線的に延びる状況で確認された。規模は現状で幅74cm、深さ22cm、長さ6.8mを測るが、溝の両端の状況が判然としないため全長は不明である。埋土は黒灰色土で木炭・焼土を含むことから、溝の北西側下方で検出されたが<sup>1</sup>～3の製鉄遺構との関係も想起される。出土遺物は須恵器杯13・14、土師器杯15・16、土師器鉢17、土師器甕18・19などがみられる。時期は古代後半と思われる。

## 溝2 (第83図)

A区中央付近に位置し、等高線とほぼ平行となる北東—南西方向へ直線的に延びる状況で確認された。しかし、南西端にあたる土壤1との関係から、平面形は「L」字状か「コ」字状を呈する可能性がある。規模は現状で幅48cm、深さ18cm、長さ10.8mを測る。埋土は黒灰色土で、溝の北西側下方で検出されたが<sup>4</sup>4・5の鍛冶遺構との関係も想起される。出土遺物は須恵器杯20・21、土師器碗22、黒色土器碗23、土師器杯24・25・26、土師器甕27などがみられる。時期は古代後半と思われる。 (澤山)



第82図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第83図 溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 5 土 壤

### 土壤1 (第84図)

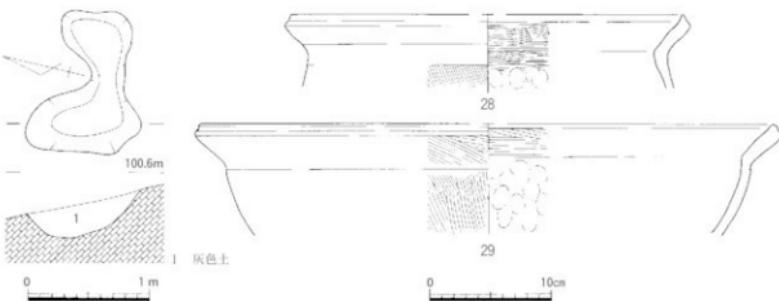
A区中央付近に位置し、先述の溝2の南西端に近接する。平面形は「L」字状を呈し、規模は現状で長さ86cm、幅74cm、深さ22cmを測る。出土遺物は土師器甕28、土師器鉢29などがみられる。時期は古代と思われる。

(澤山)

### 土壤2 (第85図)

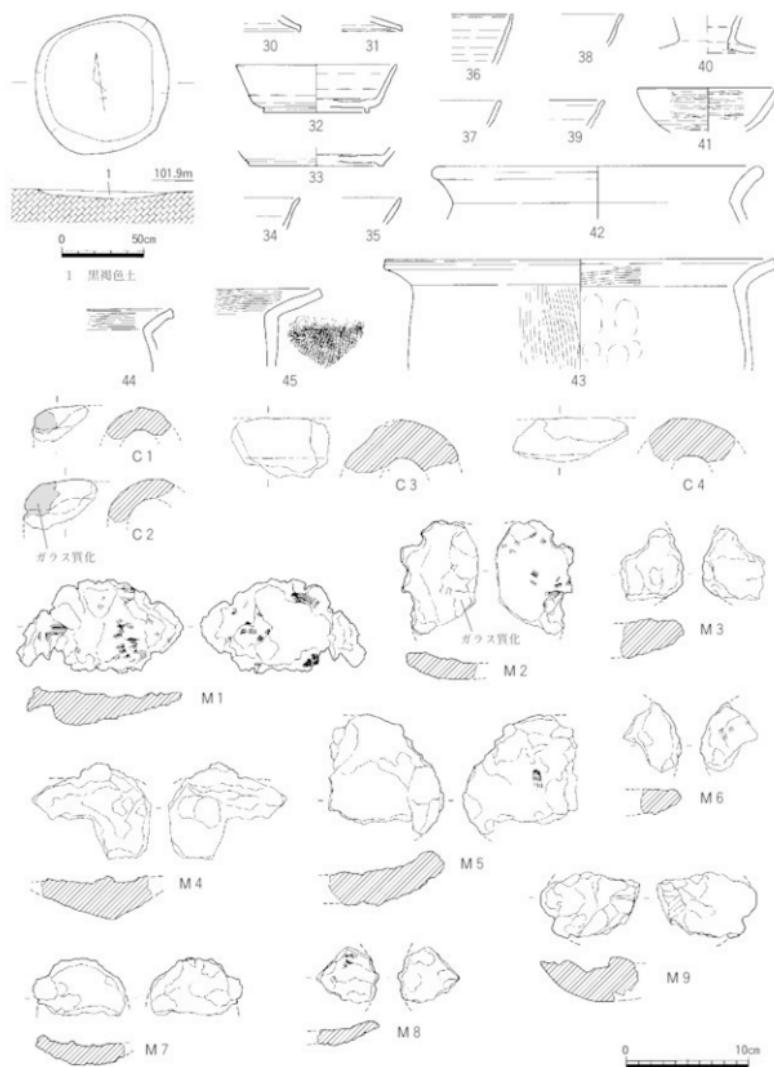
A区中段の南西部に突出した調査区域に位置して検出された遺構である。

検出された遺構の平面形状は隅丸方形を呈し、その規模は東西85cm、南北80cm、深さは5cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。土壤は小形で浅いものであるが、その壇内の埋積土内



第84図 土壤1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

には多量の遺物が混入し埋まっていた。遺物は須恵器・土師器の杯・椀・甕・壺、輪羽口・鉄滓等が出土している。鉄滓は椀形鍛冶津と考えられる。時代的には古代が妥当と思われる。(二宮)



第85図 土壌2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第86図 土壌3 (1/20)・出土遺物 (1/4)

## 土壤3 (第86図)

B区中段の中程において検出された土壤で、検出時点での平面形態は楕円形を呈し、南北に長径を示し、その規模は57.5 cm、短径は47.5 cm、深さは最大で10 cmを測り、断面形は椀形を呈する。丸味をもった底部に掘られ、壇内には須恵器、土師器の杯・甌が埋まっていた。

土壤の時期は、出土遺物から古代と考えられる。

(二宮)

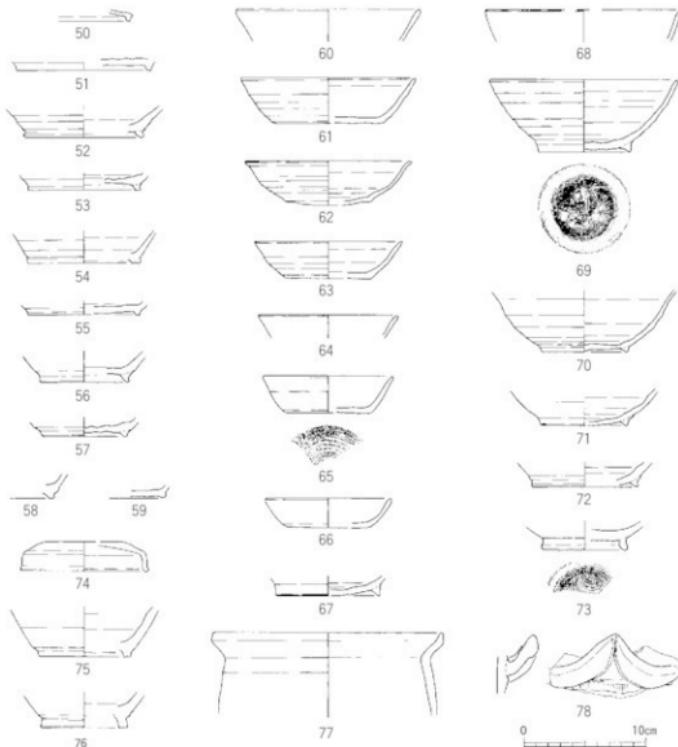
## 6 その他の遺物 (第87図・第88図)

ピットや包含層等から出土した古代の遺物を示した。出土場所は、58・59・61・66の4点がB区で、他はすべてA区である。B区出土の3点はいずれも小片であり、古代については遺構・遺物とともにA区に著しく偏っていることが分かる。

50は須恵器の杯蓋、51~59は須恵器の高台付杯身、60は須恵器の杯身だが高台の有無は不明である。61は土師器の杯である。62~66は須恵器の杯で高台は付かない。65は底部に同心円の条線が見られる。67は土師器の高台付椀である。69~72は須恵器の高台付椀で、いずれも断面三角形の高台が付く。69や70は深い器形のもので、69は高台内にヘラ記号が認められる。73は愛知県猿投窯の製品とみられる灰釉陶器で、椀または皿である。底部は糸切りで、貼付高台を有する。施釉は内面全体になされており、器形が不明だが9世紀代に位置づけられよう。外面は部分的に炭素が吸着し、黒味を帯びるところがある。74は須恵器の蓋、75・76は須恵器の壺と思われる。77は土師器の甌である。78は土師器の甌等に付く把手で、縁を折り曲げ三角形につくっている。

以上土器を示したが、これ以外に鉄器などがあり、時期が特定しにくいために中・近世の遺物として示したが(第108図)、古代にさかのぼる可能性のあるものも含んでいる。

また、溝2に隣接する小ピットの埋土を水洗したところ、多数の小鉄滓、粒状滓、鍛造剥片が検出された(図版27-2)。これらについては大澤正己氏に分析を依頼し、玉稿をいただいているので参照いただきたいが(付載2)、小鍛冶に関する遺物であることが明らかになっている。近接する桟4・5などにおける鍛冶作業によって生じたものであろう。



第87図 その他の遺物① (1/4)

第88図 その他の遺物②  
(2/3)

79は、「立道1号墳」調査区からの出土品である。立道遺跡A区から西へ約50mの位置になるが、立道遺跡との関連が考えられるため、ここで紹介する。丸底土器の底部の小片であるが、内面に溶けたような金属質が貼り付いている。一見鉄分のように見えるが明確でない。土器は厚さ1cm弱で、被熱して細かなひび割れが見え、断面にも金属分がしみこんで酸化している。このような特徴から、金属の溶融に用いる坩堝あるいはとりべの可能性が考えられる。大澤正己氏に実見いただき意見を求めたところ、土器が薄いため鉄の溶融は無理で、銅合金など非鉄金属の溶融を行ったのではないかとの教示をいただいた。時期は小片であるため明確でないが、胎土や色調が古代の土師器甕などと似ていることから古代と推定している。古代の立道遺跡では、鍛冶の他に金属器の鋳造も行っていた可能性がある。

(尾上)

## 第4節 中・近世の遺構と遺物

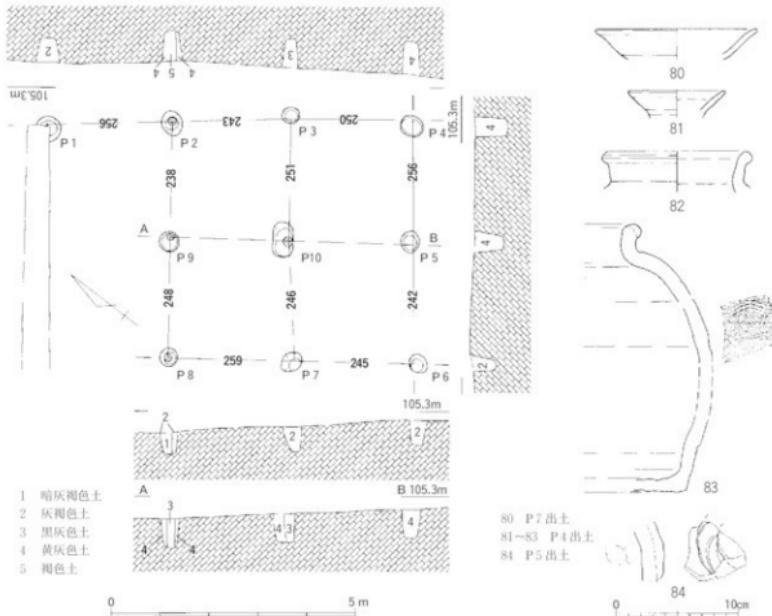
## 1 概要

中・近世の遺構は、A区、B区の全域にわたって検出された。掘立柱建物6棟、柱穴列3列、段状遺構2基、炉6基、土壙多数、溝9条、道1条などがある。B区では階段状の造成が顕著で、形成された平坦面に掘立柱建物や炉、土壙などの遺構が認められる。土壙は大小のもののが多数あり、そのうち15基を個別に掲載した。遺物を伴わない小形の土壙や浅い土壙については省略したものもあるが、第75・76図にはすべてを示している。遺構の時期は明確にし得ないものが多いが、掘立柱建物には中世末期の遺物を伴うものがあり、土壙では中世末期のものから近世後期のものまである。(尾上)

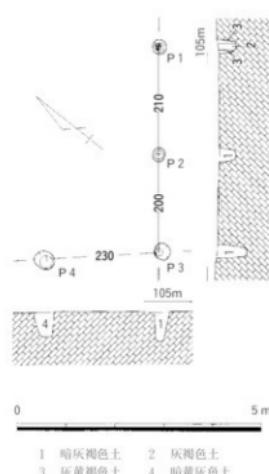
## 2 掘立柱建物

## 掘立柱建物1 (第89図)

A区南東部の上段で検出した掘立柱建物で、北西部の一部が消滅してはいるが、現状で確認できた建物の規模は3×2間である。建物の棟方向は北西—南東で45°振る。規模は桁行全長7.49m、梁間4.98m、柱穴掘り方はほぼ円形を呈し径は40~50cm程度、深さは50~70cmと若干の差がある。柱穴内より



第89図 掘立柱建物1 (1/100)・出土遺物 (1/4)



第90図 掘立柱建物 2 (1/100)

備前焼の皿・壺・甕が認められている。出土遺物から時期は中世に比定されよう。

(二宮)

## 掘立柱建物 2 (第90図)

A区掘立柱建物1の北東部に接して検出された、現状で1×2間の掘立柱建物である。建物1に直交する棟方向を呈する柱穴の配列を示す建物である。

(二宮)

## 掘立柱建物 3 (第91図)

B区中段の中程やや北寄りに位置して検出された3×4間の掘立柱建物で棟方向は等高線に並行する構築状況を示している。建物の桁行全長は9.15m、梁間5.5mを測り、柱穴の掘り方はほぼ円形、径は40~55cm、柱痕も確認できた。

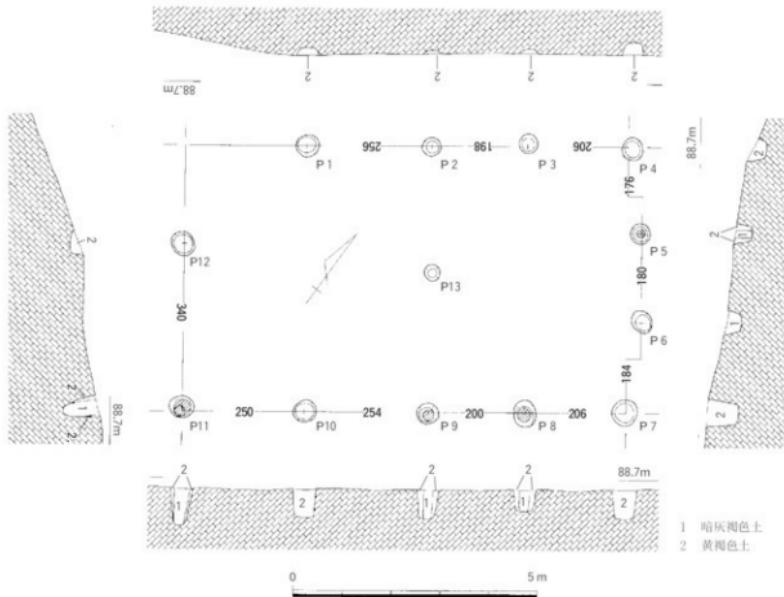
(二宮)

## 掘立柱建物 4 (第92図)

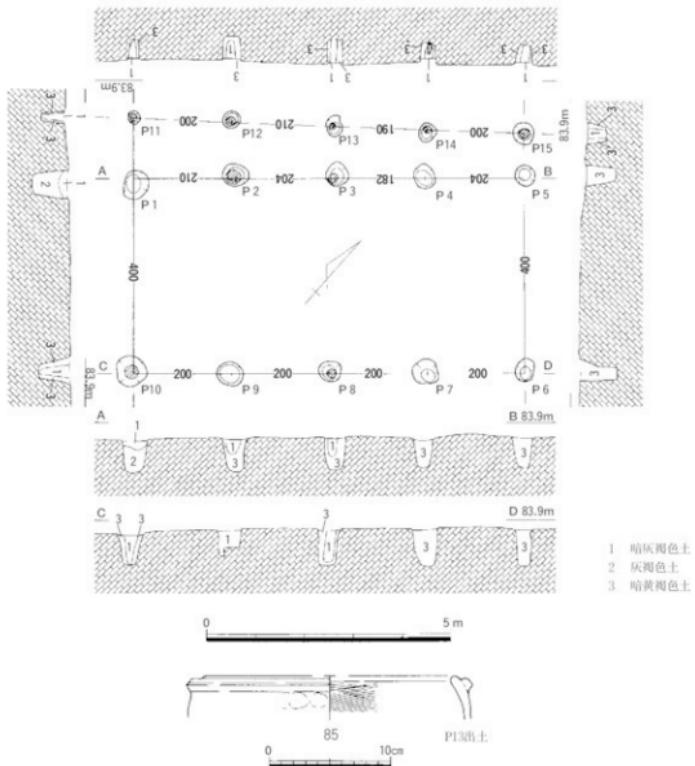
B区最下部の平坦面にある。4×1間の建物であるが、北西辺には竪状にやや小規模な柱穴が並ぶ。建物の規模は約8m×約5mで、柱間距離は平均しておよそ2mである。

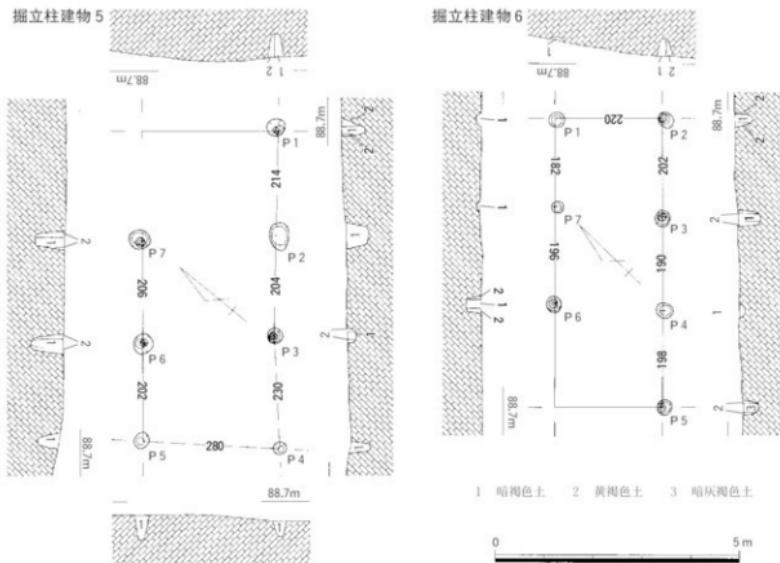
遺物は、柱穴より瓦質土器の羽釜85が出土している。中世後期と考えられる。

(尾上)



第91図 掘立柱建物 3 (1/100)





第93図 挖立柱建物5・6 (1/100)

### 3 柱穴列

#### 柱穴列1 (第94図)

A区の掘立柱建物1の北東に位置する、北東—南西方向の柱穴列である。掘立柱建物1の北東辺との距離は2.5mである。柱穴列1の北西下位には掘立柱建物2が近接して存在している。柱穴の規模は径35×55cmの長楕円形から50cm前後の円形まで、深さは30~45cmと差が認められた。

(二宮)

#### 柱穴列2 (第95図)

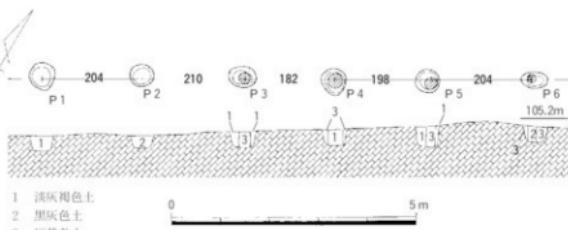
掘立柱建物1の南東上方に位置する南西—北東方向の柱穴列である。柱穴の規模は径50cm前後とほぼ一定で、深さ20~40cmを測る。掘立柱建物1に付属する辦などの施設の可能性がある。

(二宮)

#### 柱穴列3 (第76図)

A区北側に位置し、等高線と平行となる北東—南西方向に延びる。直径25cm、深さ10cm程度の合計12個の柱穴が、それぞれ近接して配されていた。性格は不明である。

(澤山)



第94図 柱穴列1 (1/100)

#### 4 段状遺構

段状遺構2（第96図）

A区中段でやや北東によった位置である。検出された竪穴状遺構の一部で、「段状遺構」と呼称される遺構である。

この段状遺構は等高線に沿って丘陵斜面を段掘りに切り込み造成された建物の一部と考えられ、また壁際には浅い壁体溝が掘り込まれている。壁体溝からわずかであるが床面とねぼしき平坦面を認め、数個の柱穴も確認。P2・P4・P8の3本が直線的に検出され、平面は円・楕円形で差はあるが深さは50~65cm、柱間は1.8m~2.15mを測る規模であった。（二宮）

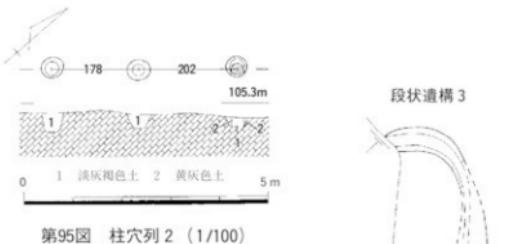
段状遺構3（第96図）

A区の段状遺構2の上段部に位置して検出された竪穴状遺構の一部と考えられる遺構である。

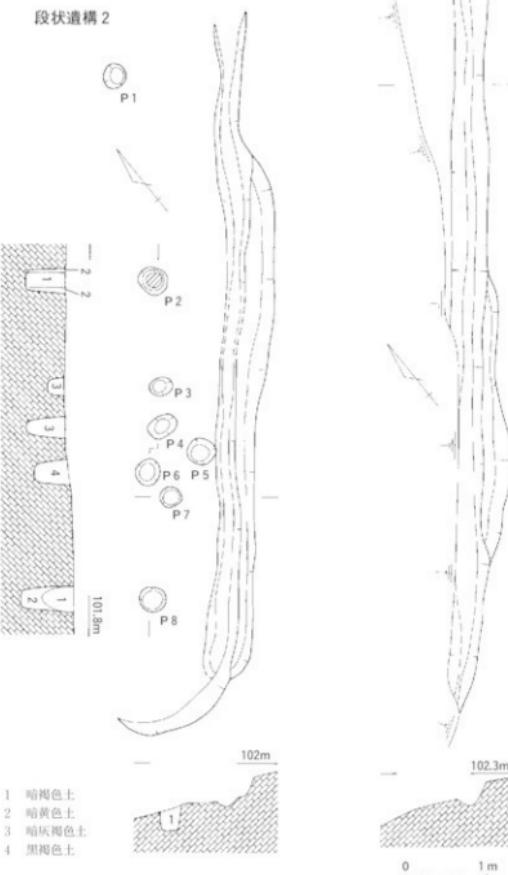
検出された遺構の南東辺は直線的になり、北東隅で下方方向に直角に屈曲するが、遺構の大部分は後世の掘削で消滅している。

段状遺構は丘陵斜面部を段状に切り込み造成し、建物遺構の一部であったであろう。さらに壁際には浅い壁体溝が掘り込まれている。

全体的に開墾・流失等により、壁体溝以外は何ら確認されていない。（二宮）



第95図 柱穴列2 (1/100)



第96図 段状遺構2・3 (1/60)

## 5 炉

## 炉6（第97図）

A区の中段で中程よりやや北東に位置する遺構で、検出時の平面形が方形を呈した土壙である。遺構は段状遺構3の南西部分で重複し、その西側は開墾により消滅している。

遺構の規模は長辺200cm、短辺約190cm、底面までは25cmで平坦な作り、底面中程に円形の窪みを伴っている。  
(二宮)

## 炉7（第98図）

B区の掘立柱建物4と重複する位置にある。来光寺跡B区の炉1～3と同様で、隅丸方形の浅い掘り方をもち両小口付近がよく被熱する。掘り方は長辺約120cm、短辺約90cm、深さ約10cmで、壁に沿って炉壁とみられる灰色土（第5層）が方形にめぐる。灰色土に囲まれる炉の規模は、長辺約100cm、短辺約85cmである。  
(尾上)

## 炉8（第98図）

炉7と同様の遺構である。B区の掘立柱建物4と重複し、その柱穴に切られていることから、建物より古いことが分かる。炉7とは約2.5m離れ、直交する関係にある。この位置関係も来光寺跡B区の炉1・3の関係とよく似ている。掘り方の規模は炉7とほぼ同じであるが、炉7に比べて被熱が弱く、炉壁が明瞭には認められない。埋土には被熱した角礫数点が含まれていた。

時期は、掘立柱建物4との切り合い関係から中世と考えられ、炉7・9も同様であろう。  
(尾上)

## 炉9（第98図）

炉7・8と同様の炉であるが、やや離れたB区北方にある。掘り方の規模は炉7・8とほぼ同じだが、深さは20～30cmとよく残っている。壁と床に貼り付くように黄褐色土（第2層）が認められ、その上面が被熱していることから、炉床および炉壁に相当するものと推定された。

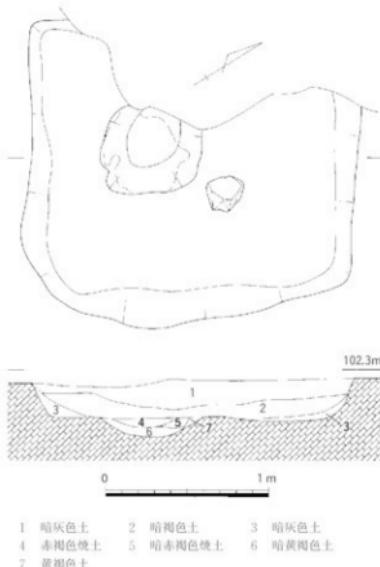
時期は、炉8と同様に中世であろう。  
(尾上)

## 炉10（第98図）

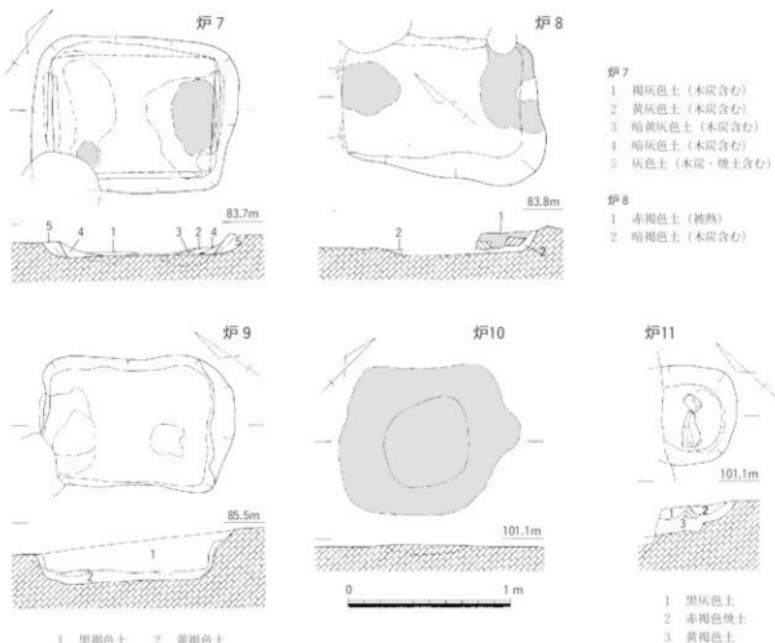
A区中段で、段状遺構2の下方に位置して検出できた遺構であるが、全体が開墾の削平により掘り込みが進行しているため、残存性が悪く、被熱部分を確認したのみであった。  
(二宮)

## 炉11（第98図）

A区で、炉10の南西に接する位置で検出された平面形が楕円形と推定される遺構である。丘陵斜面部に位置しているため、開墾等により斜面下方にあたる部分は消滅しているが、現状では中央部で15cmの深さを測る浅い窪みを有した土壙として残存し、上層部に角礫の混入を認める。  
(二宮)



第97図 炉6（1/30）



第98図 炉 7~11 (1/30)

## 6 土 壤

### 土壤4 (第99図)

A区上段中央付近に位置して検出された土壤で、掘立柱建物2の南西梁行の下に位置するが時期差があるものである。楕円形の平面形を呈し、平坦な底面で緩やかな壁で立ち上がる。

(二宮)

### 土壤5 (第99図)

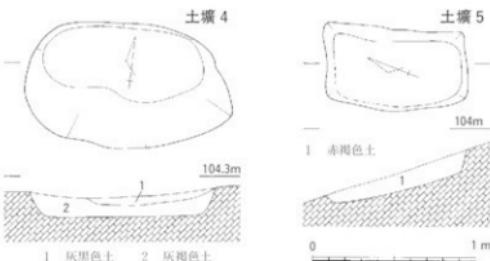
土壤4の北2mに位置する。平面形は長方形を呈し85×50cmを測る。底面は丘陵上方へ高まり、逆台形状の断面を示す。

(二宮)

土壤6 (第100図)

A区中段の北東部に位置する。楕円形の平面を呈し、80×95cmを測り、丸底を示した底面となっている。出土遺物は皆無である。

(二宮)



第99図 土壌 4・5 (1/30)

## 土壤7 (第100図)

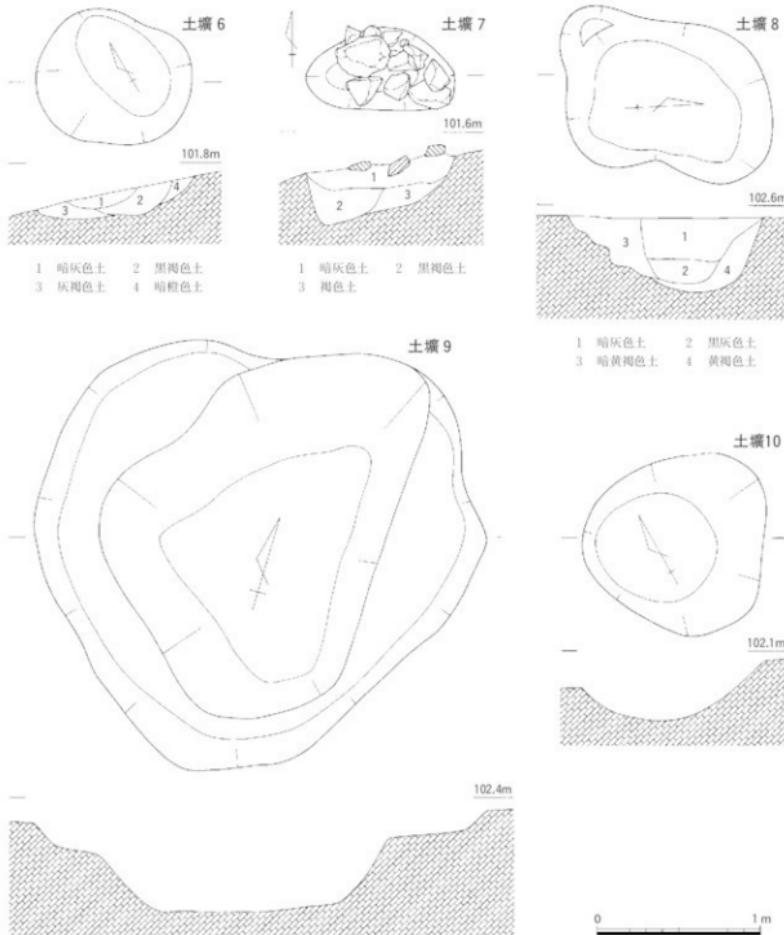
土壤6の南西2mに位置して検出された土壤である。土壤の長軸は丘陵斜面に対して約45度振って掘り込まれている。平面は梢円形で95×50cm、上面には角縁を配置しているかのようである。(二宮)

## 土壤8 (第100図)

A区中段中程の東側で丘陵を掘り切りし平坦に開墾した面で検出された土壤で、段状遺構3の南東に位置している。検出された平面形は正な梢円形を呈する。規模は130×85cm、深さは45cmを測る。

出土遺物は皆無であるが、検出状況から近世に属すると考える。

(二宮)



第100図 土壌 6～10 (1/30)

**土壤9（第100図）**

A区で土壤2の東8mの位置で検出された平面形が不整椭円形を呈した土壤である。土壤は溝3・4が合流した南西端を切って掘り込まれ、2段に掘り込まれた形状をなす。出土遺物は皆無。（二宮）

**土壤10（第100図）**

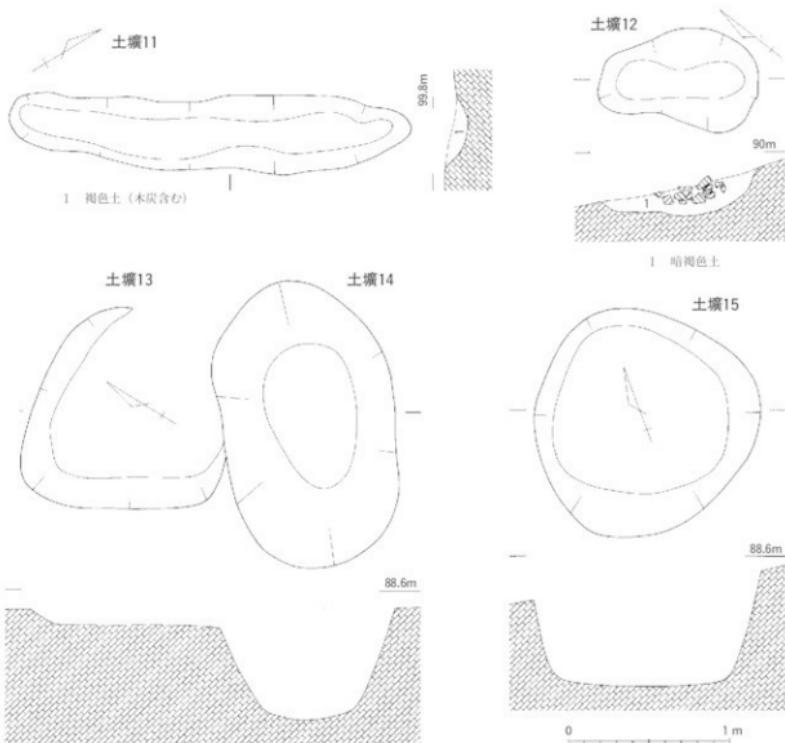
炉6に重複して検出されている土壤で平面は楕円形を呈し、底面径70cm、深さ35cmを測り、丸底を呈した断面となっている。出土遺物は皆無、検出状況から近世に属すると考える。（二宮）

**土壤11（第101図）**

A区北側に位置する。平面形は等高線と平行となる北東—南西方向に長軸をとる長楕円形を呈し、規模は現状で長さ248cm、幅44cm、深さ14cmを測る。遺物は出土しなかった。（澤山）

**土壤12（第101図）**

B区の中程やや南よりにて検出された土壤で、上段と中段の境界部分に位置している。土壤は長辺を南東—北西に向けて掘り窪められた楕円形の平面を呈している。検出された土壤内部の中央には拳大の角礫の流入が認められている。出土遺物は皆無で、時期は特定しえない。（二宮）



第101図 土壌11～15 (1/30)

**土壤13 (第101図)**

B区の中段北東部に位置し、土壤2基が重複して検出されている。土壤13は平面方形と推定され平坦な底面を呈し緩やかな壁面をした掘り上げとなる。

出土遺物は皆無であり、遺構の時期の特定は困難である。

(二宮)

**土壤14 (第101図)**

土壤13と重複して検出された土壤であり、検出面での平面形は梢円形を呈する。上面での径は180×105cm、底径90×55cm、断面は逆台形で、深さ70cmを測る。土壤2基が重複するが、前後関係は不明である。出土遺物は皆無で、遺構の時期の特定は不能であった。

(二宮)

**土壤15 (第101図)**

B区中段で、重複した土壤13・14の西に近接して検出した土壤であり、平面形態はほぼ円形で径140cm、底径100~105cmを測る。断面形態は逆台形で、深さ70cmを測る。

出土遺物は皆無であり、遺構の時期を特定するには困難を要するが、近世が妥当であろう。(二宮)

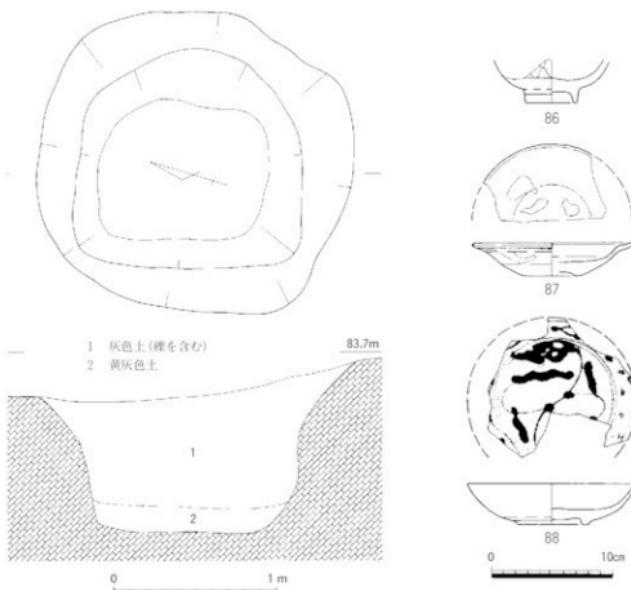
**土壤16 (第102図)**

B区の掘立柱建物4の南側にある。底径約100cm、深さ約100cmの土壤である。遺物は陶磁器86~88が出土しており、17世紀前半~中葉の年代を示す。

(尾上)

**土壤17 (第103図)**

B区南西端部付近にある。大形だが、浅いたわみ状の土壤である。土壤内西端から土器片がまとまっ



第102図 土壌16 (1/30)・出土遺物 (1/4)

て出土しており(89~91)、中世末期のもとのと考えられる。(尾上)

#### 土壤18 (第104図)

B区西端付近で検出された、径約130cm、深さ約25cmの不整円形土壙である。陶器92・93が出土しており、17世紀代の年代を示している。(尾上)

## 7 溝

#### 溝3 (第105図)

A区の中段中程に位置する。全体的に削平を受け全容は不明。底面は緩やかに傾斜する。出土遺物は皆無。(二宮)

#### 溝4 (第105図)

溝3の上方に位置し、両端部は土壙に切られ、南西部では溝3を切る。溝3より新しいが時期は断定しがたい。(二宮)

#### 溝5 (第105図)

溝3・4の上位に方向をほぼ同じくする溝であり、削平で両端は消滅。底面は緩やかな傾斜の浅い溝である。(二宮)

#### 溝6 (第105図)

A区北側に位置し、南東—北西方向へ延びる。規模は幅57cm、深さ12cmを測る。性格は不明である。(澤山)

#### 溝7 (第105図)

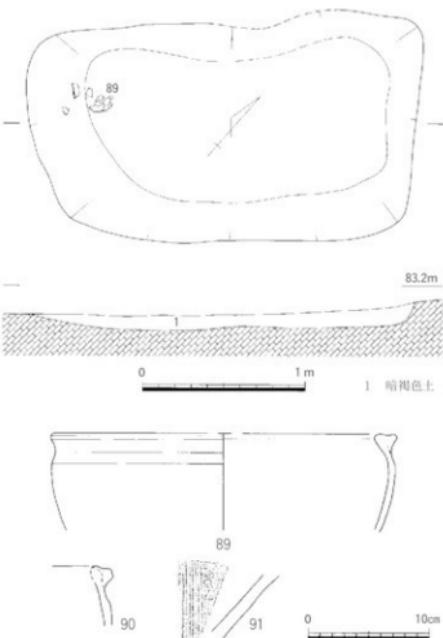
B区中段北西部に位置し、等高線に沿い、北東部は土壙に切れ消滅、他方は削平により自然消滅する。(二宮)

#### 溝8 (第105図)

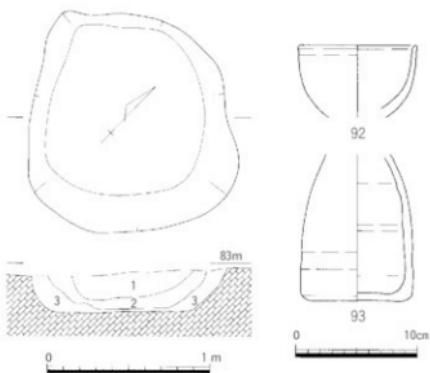
溝7の南西部に位置し、直交する形状で調査区外へと続く。溝の断面も「U」字形・逆台形状を呈し一定しない。(二宮)

#### 溝9 (第105図)

溝8からさらに南西へ16mの位置で同一方向の溝で、両側は削平で切られ約6m存在する。底面はなだらかに傾斜する。近世が妥当と考えられる。(二宮)



第103図 土壙17 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 暗褐色土 (木炭・焼土含む) 2 暗黄褐色土  
3 暗灰褐色土 (木炭含む)

第104図 土壙18 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 溝10（第105図）

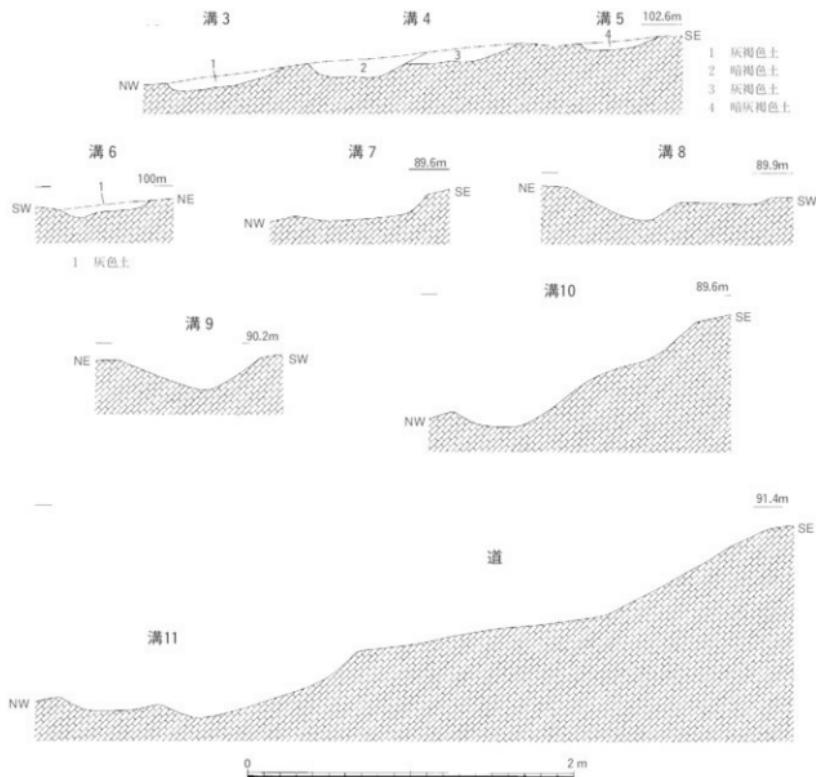
B区中段の上方部に位置して検出され、総延長53mを測り南西へ続いていくものと考えられる。北東部は直角に折れ曲がり消滅する。検出された状況から開墾に伴う溝の可能性が考えられる。（二宮）

## 溝11（第105図）

B区の上段の中位に位置し、現代の畑の境界に沿った状況で検出された遺構である。溝は数条を認めるが、開墾によるものと考えられる。出土遺物は皆無といえる。時期は近世以降が妥当。（二宮）

## 8 道（第105図）

B区上段の溝11に併走して検出され、調査区内では約31mを確認できたが、調査区外へと続いているものであるが条件的に調査が不能であった。遺構は緩やかに掘り窪められながら、路面は若干傾斜する。また路面は補修がなされていた。時代的には近・現代に機能していたと考えられる。（二宮）



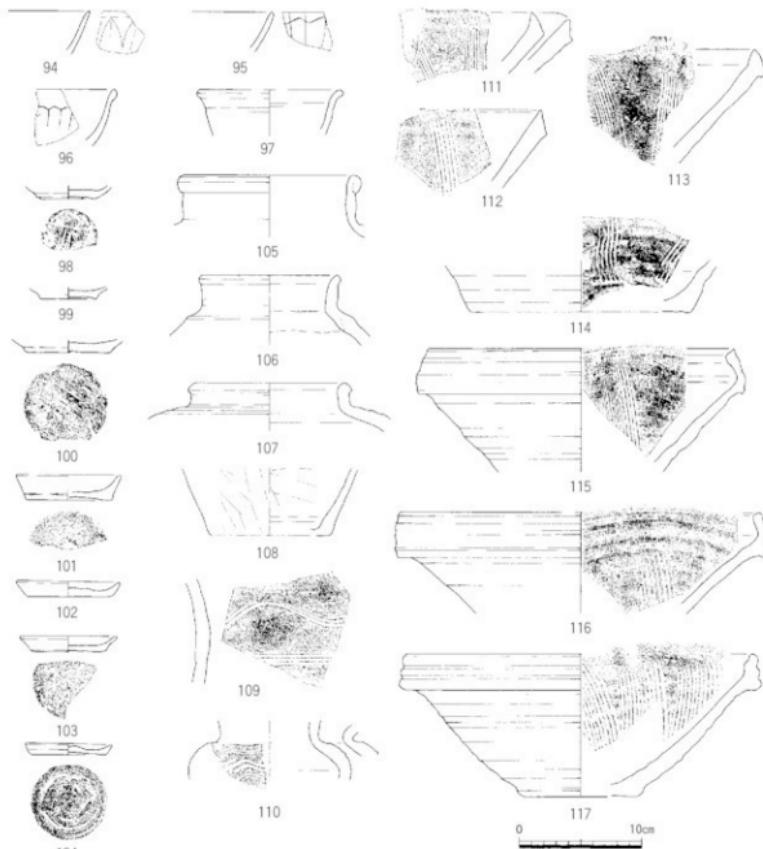
第105図 溝3～11・道 (1/30)

## 9 その他の遺物（第106図～第108図）

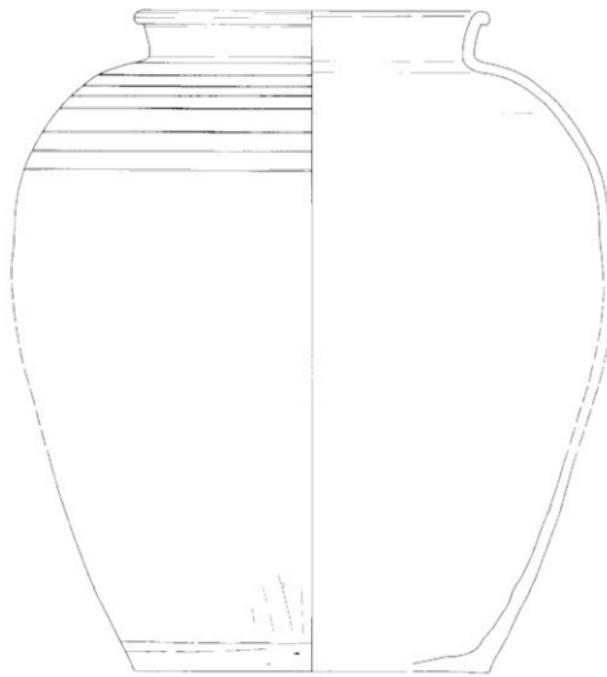
ピットや包含層等から出土した中・近世の遺物を示した。詳細は観察表（付載3）にゆずるが、中国龍泉窯系の青磁94～97、土師器皿98～104、備前焼の壺105～110、擂鉢111～117、甕118～121、土師質ないし瓦質の鉢122、羽釜123～127、鍋128～131、香炉132、ガラス小玉G1、鐵器M10～M22、煙管M23、銅錢M24～M26などがある。鉄器については時期を特定しにくく、時期不明のものはここで取り上げた。M10は炭焼きの可能性があり、古代の鍛冶遺構に伴うものかもしれない。M11～M15の刀子についても古いものを含んでいる可能性がある。

なお、近世の陶磁器については、備前焼以外は省略した。

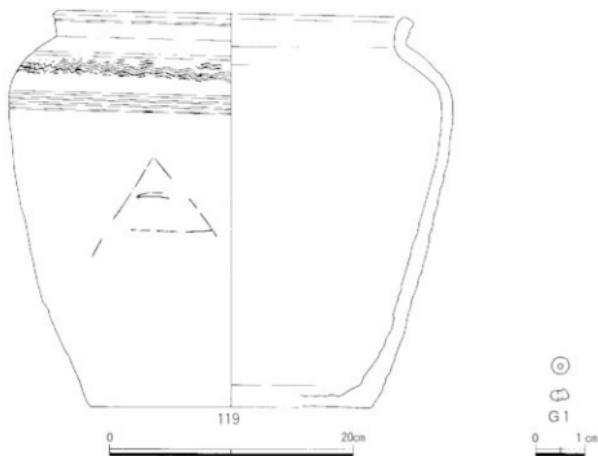
(尾上)



第106図 その他の遺物① (1/4)



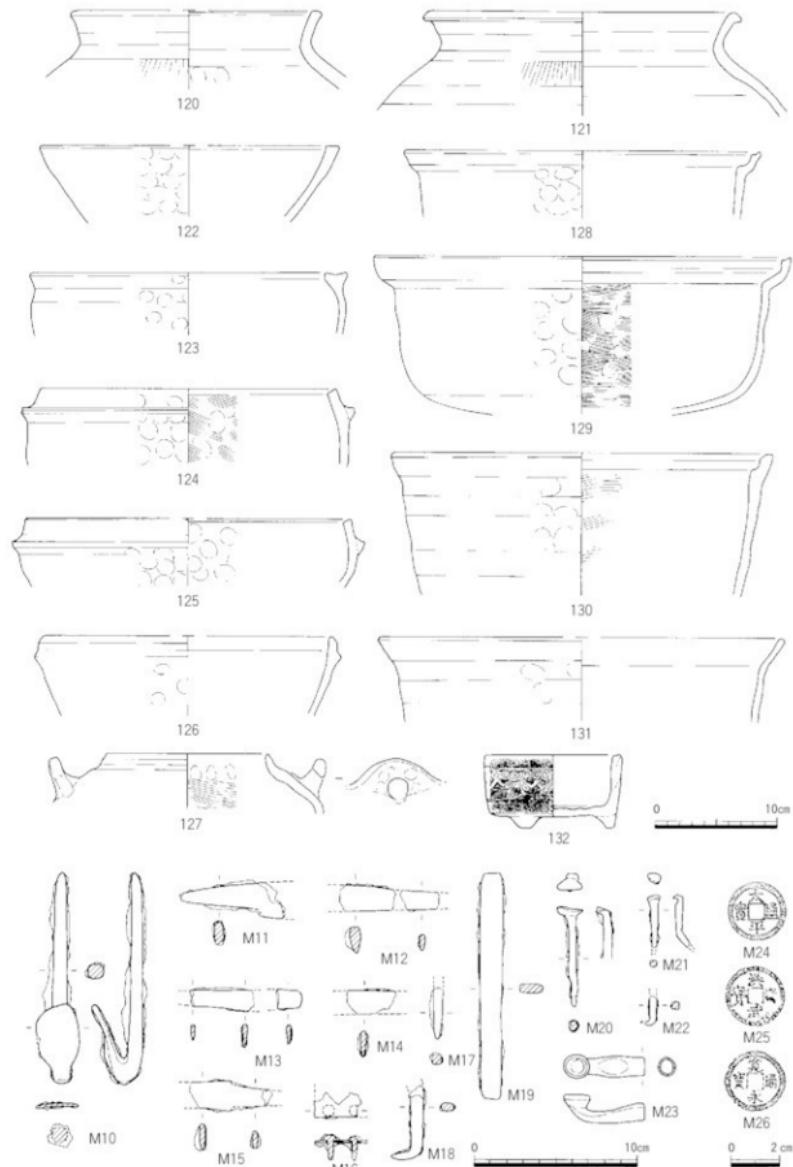
118



119

◎  
○  
G1  
0 1 cm

第107図 その他の遺物② (1/4・1/1)



第108図 その他の遺物③ (1/4・1/3・1/2)

## 第5節 「立道古墳群」について

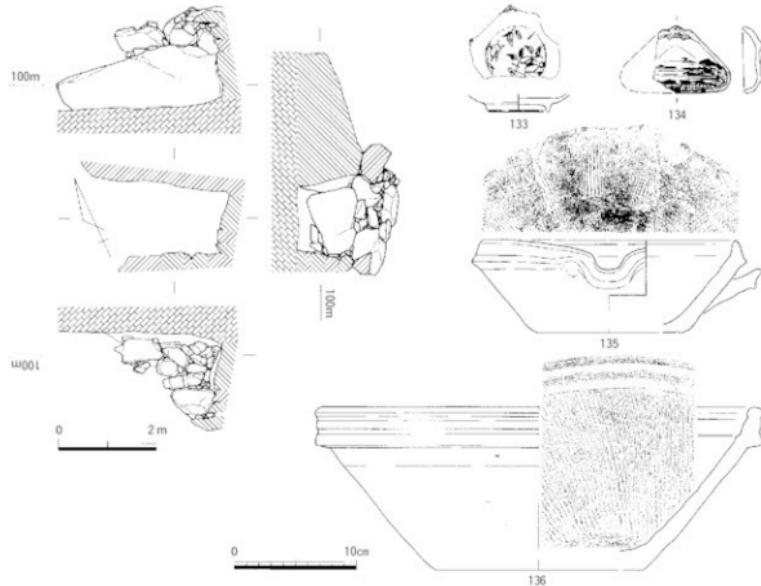
「立道古墳群」については、平成5年度に行われた分布調査の結果から、4基の古墳からなる古墳群とされていた（第4図）。このうち1・2・4号墳が路線予定範囲内にあったが、調査の結果、いずれも古墳ではないことが判明した。また3号墳は路線に近接し、路線内の確認調査では遺構は確認されなかった。以下に各古墳の概略を示す。

「1号墳」（第109図） 横穴式石室風の石組遺構があったが、北側壁が巨大な露岩をそのまま利用しているなど不自然な点があり、また、側壁や奥壁の裏込め部分から中・近世の陶磁器133～136が出土したことから、近世以降に築かれた石組遺構であることが判明した。なお、133・134は肥前の染付で19世紀前半、135は備前焼の擂鉢で15世紀代、136は関西系陶器の擂鉢で近世後期のものであろう。

「2号墳」 巨石が集積し、横穴式石室が崩壊したものと推定されていたが、地権者の話で壠を埋めた石であることが判明した。発掘調査は行っていない。

「3号墳」 径約10m、高さ約1mの高まりをなし、頂部に享保11年銘「万頭供養石」がある。用地外にあり、「立道古墳群」内で古墳の可能性が残された唯一のものであるが、現状で積極的に古墳と評価すべき点は認められない。

「4号墳」 石室風の石組があったが、調査の結果、1号墳と同様に古墳ではないことが判明した。



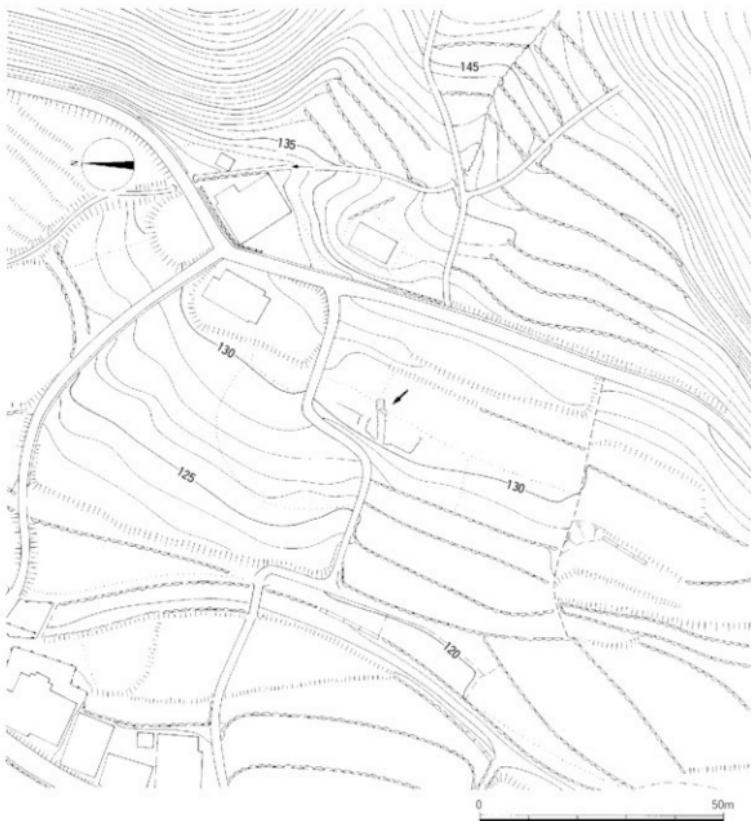
第109図 「立道1号墳」(1/100)・石組裏込め出土遺物(1/4)

## 第1節 立地と調査前の状況

## 第6章 平岩古墳

## 第1節 立地と調査前の状況

平岩古墳はほぼ南北に延びる丘陵の西斜面の下位で赤磐市周囲から菊ヶ峰へ向かう国道を光木で南へ折れ曲がり、二軒屋谷を石、八島田、暮田あるいは赤磐市堀切方面に向かう道路が、谷の西裾をはうように登っている。この谷の中ほどの石字二軒屋に谷を挟んで2基の横穴式石室をもつ古墳時代後



第110図 周辺地形図 (1/1,000)



第111図 調査前の状況（1/200）

## 第2節 調査の概要

### 1 墳丘と周溝（第112～114図）

墳丘は調査開始時点において確認できるものではなく、現況から墳丘盛土はすべて除去され石室の石材が露出するまでになっていたが、削平移動された土砂を除去することにより、石室構築に伴って盛り上げられた墳丘の一部が確認された。

この古墳の石室は掘り方を基盤層を深く掘削せず、墳丘自体の幅を石室に沿うように狭く傾斜を急なものにすることで墳丘の規模を大きく見せることができるようになる。これは視覚的な効果を上げることを考慮したものといえよう。

さらに墳丘の北側には石室に並行するように角礫がかなり整然と配石され、墳丘盛土流失を防ぐ目的をもっている。

周溝はこのような地形を利用し、古墳自体を区画するための溝としての目的で構築したものと思われるが、古墳自体は西側を失っているが、周溝自体は東・南の2辺のみが掘られ、北辺は自然地形を利用してしたものと考えられる。石室掘り方は地山から掘り込まれ、平面形態が長方形を呈し最大幅が4.4m、奥壁の深さが2.2mを測る。床面はほぼ平坦であるが、奥壁部が一段高まる。石室の壁から掘り方までは南北が40cm前後、奥壁は上段で1.9m、下部が20cm、地形と配石によるものと考える。

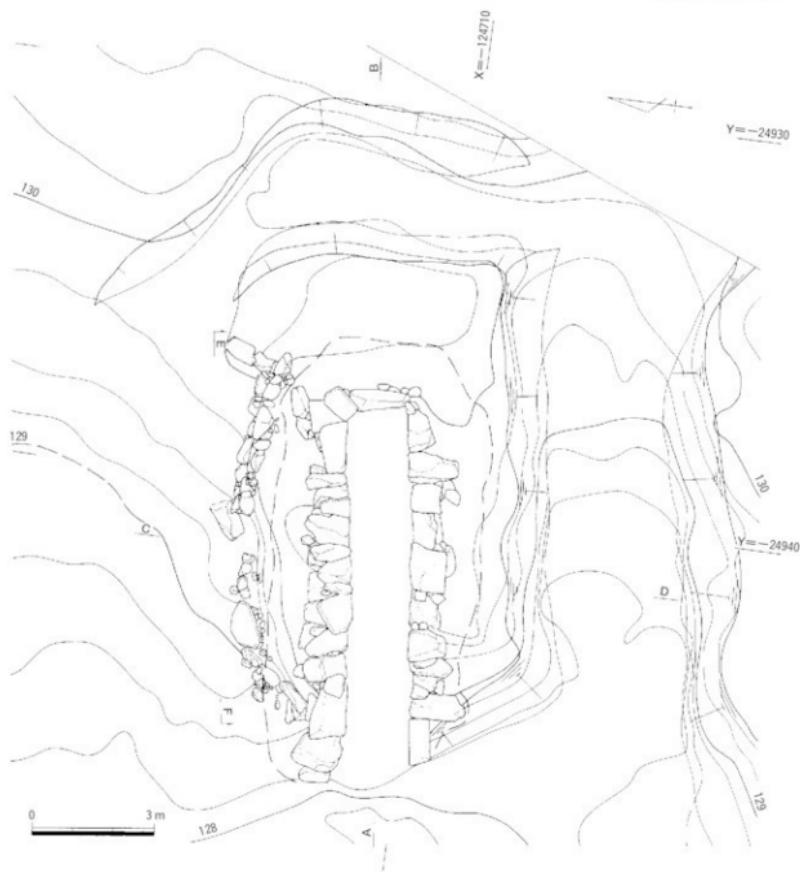
### 2 横穴式石室（第115図）

石室の主体部は西南西方向に開口する無袖と想定される横穴式石室である。現存する石室の全長は9.1mを測り脛張りを呈している。

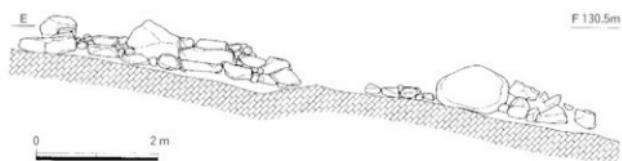
期の古墳が築かれている。

今回報告の古墳は谷川に向かって西に開口している横穴式石室の古墳である。

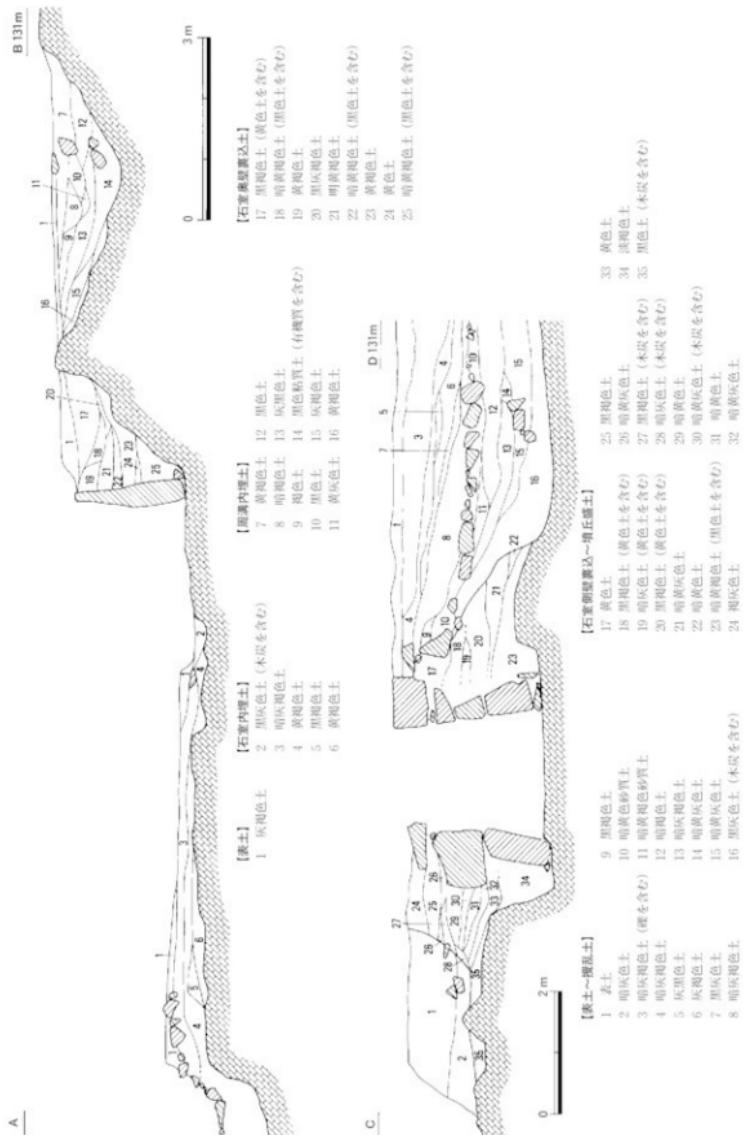
調査前の状況は、西に向いて開口する横穴は確認できたが、全体が雑草、竹藪となり、うつそうとした状況であった。さらに近隣に住宅が存在していた時期に、この石室南側の段に物置小屋、牛舎等が建てられ、石室内を堆肥場所として利用していたとのことであった。しかし、調査時には竹藪となり古墳とは思われない状況をうかがわせていた。



第112図 填丘 (1/120)



第113図 填丘内列石 (1/80)



第114図 墓丘断面 (1/80)

現存する石室の幅は、開口部で1.7m、中央部付近で2.1m、奥壁幅は1.6mを測るがいずれも基底部での数値である。また石室の高さは最も残存性の良い位置で2.4m、奥壁部分で1.9mを測ることができた。石室の主軸線は若干南に振っているが構造が立地する地形に規制されているものであると思われる。

石室の残存度は良好とはいえないが、基底部はほぼ全容を残しているものと思われる。また玄室内の中程より奥側には天井石とおぼしき石材が落し込まれていた。

このような後世に移動した石材を除去していく過程で、新たな所見があった。すなわち、石材の下から近代に葬られたと考えられる遺物が発見された。さらにその後この石室を利用して物置小屋の一部として利用されていた。

現存している古墳の石室の構築過程をみると、地山を掘り込み、基底石を置いていくが、北辺部のみに溝状の窪みを作っている。石室の掘り方は南北辺はほぼ垂直に、奥壁にあたる東辺はゆるやかに段掘りをなし、最後に垂直の掘り方をする。このような東辺の掘り方は石材配石に対しての考えがあるての可能性が窺い知れるところである。

石室の構築は、奥壁が縱長の一枚石を用いるが、南北壁は基本的に横積みを行っているが、石材の配石上において数個が縦置きとなっている。2石目からは小形の石や板状の石を用いて整然とした南壁に対して北壁の乱雑さが目立つ構築である。また開口部で左右の基底石が横積みであることに注目すれば、この石材を玄室との境界部分にあたり、石室の内外とに区別することができるものと考えられる。

第114図の断面図を参考に石室の構築方法をみると、基底石から順次構築するが、1石目ごとに裏込め層が版築状に土層の交互の叩き締めを認めることができるが、石材を裏込めとして用いている部分は認められなかった。しかし、C-Dの南北断面において、南側の墳丘外に水平に板石状の石材が配石されていた。しかしながらこの石材は周溝埋土内であることから、当古墳には直接的に関係はないものと考えられる。

さらに石室は持ち送りの構築がなされており、北壁に対して南壁の角度が急になっているが面は揃っている。奥壁は南北両壁にもたせかけるように構築されている。

石室は胴張り、持ち送りの工法が行われているが、主軸線に対して若干の差が認められるが大差はない。しかし、北壁側の1石目は内傾するが2石目以降はほぼ垂直に構築している。

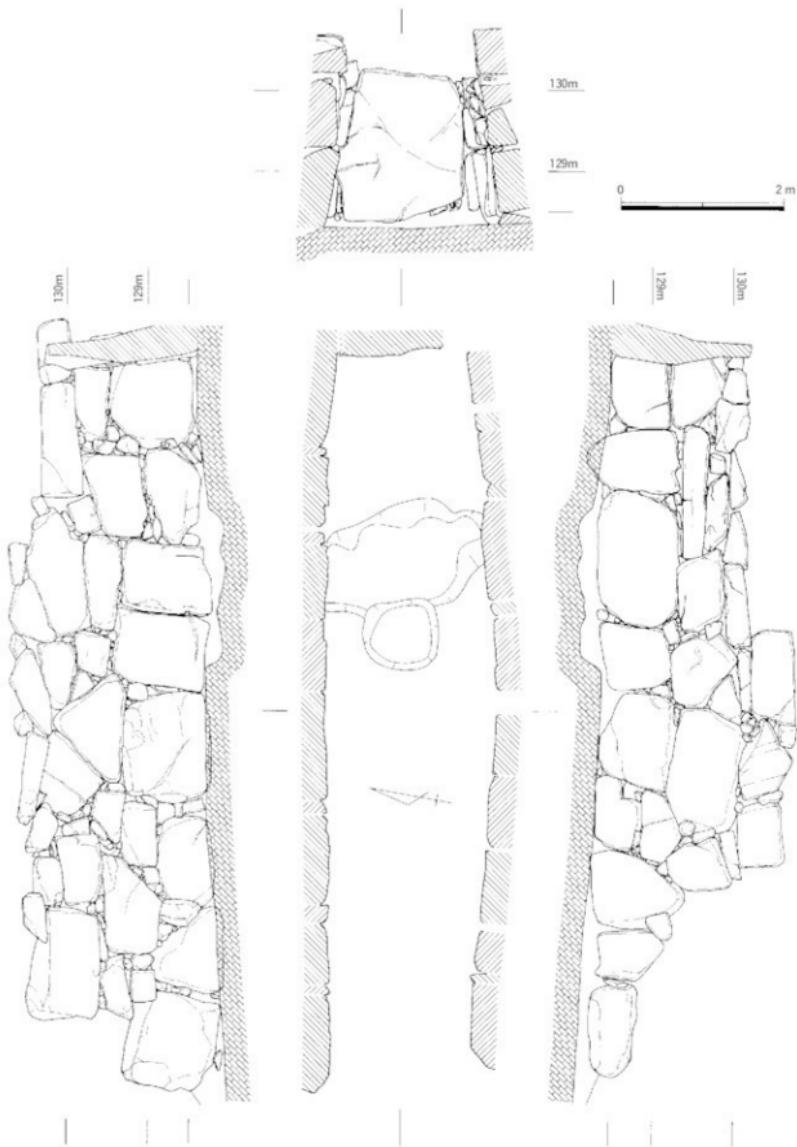
石室内の中央やや奥まった位置に存在している窪みは近代の墓地として掘られたもので、そのためには掘削された墓穴の跡である。

### 3 遺物出土状況（第116図）

遺物は須恵器、土師器、金属製品、装飾製品などが出土している。

須恵器、土師器の出土状況を見ると、すべての遺物は石室内の攪乱により原状をとどめることなく、大部分が入口部の方へ掻き出され、数個の破片が奥壁の北側壁部分で確認された。しかし元位置をとどめる個体は1点も存在していない。

金属製品についても同様の事である。しかしながら耳環M110は主軸線上に位置するが、元位置とは考えがたい。M11・M15・M16の鎌、さらにM34・M36の留金具、M39・M40・M49の刀子、M54・M64の釘などはほぼ同一箇所に散在していた状況である。唯一完形品であったものはM110の耳環であ



第115図 横穴式石室 (1/60)

る。北東隅に鉄滓も検出されている。

装飾製品はG1・G5・G8のガラス小玉、S1の碧玉製品がある。

以上が奥壁付近の床面直上において検出されているがすべて元位置ではない。

#### 4 出土遺物

##### 土器（第117図）

古墳石室内から出土し固化された土器は31点で、29点が須恵器、土師器が2点である。

須恵器29点の器種別には、1・3・5～10の8点が杯蓋、2・4・11～16の杯身8点、17～22の高杯6点、23・24の台付壺2点、25壺1点、平瓶26・27、甕29、甕の口縁部1点、さらに土師器の椀2点30・31である。

出土した遺物すべてが内部攪乱により掘り出されたもので完形品は数点であった。

須恵器では、杯蓋1は口径13.3cm、器高4.5cm、杯身2は口径11.6cm、器高4.3cm、受部14.4cm、杯蓋3は口径12.8cm、器高4.3cm、杯身4は口径11.6cm、器高3.9cm、受部14.2cm、杯蓋5は口径14cm、6は口径13.4cm、器高4.3cm、7は口径12.8cm、8は口径12.8cm、9は口径12cm、器高4.3cm、10は口径11.4cm、器高4.2cm、杯身11は口径12cm、受部14.8cm、12は口径12cm、受部14.6cm、13は口径11.8cm、受部14.2cm、15は口径11.4cm、受部14cm、16は口径11.4cm、受部14cm、器高3.7cm、高杯21の口径10.3cm、器高10.3cm、底径8.5cm、17～20・22は部分的なものである。26の平瓶は口径5.8cm、器高16.7cm、底径7cm、甕29は口径が12.1cm、器高14.9cm、椀30は口径11cm、31の口径9.8cm、その他24の底径15.5cm、壺25の口径3.9cm、内面に貼り付け痕跡がみられる。27は口径4.7cm、28は口径8.4cm、また23の体部最大径は17.8cm、26の頸部にはヘラ記号が付けられている。

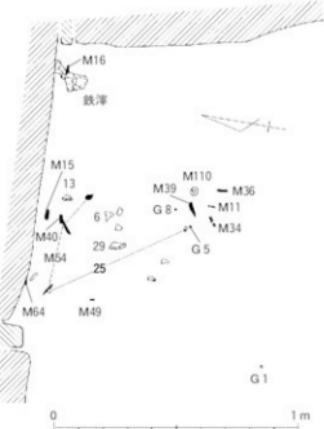
平瓶は扁球体の体部に斜め上方に立ち上がる口縁部を有し、26の体部上半には沈線がある。

古墳に伴う土器であるが、胎土は精製されたものや、粗砂粒を含むがしっかりし、焼成も良好なものである。

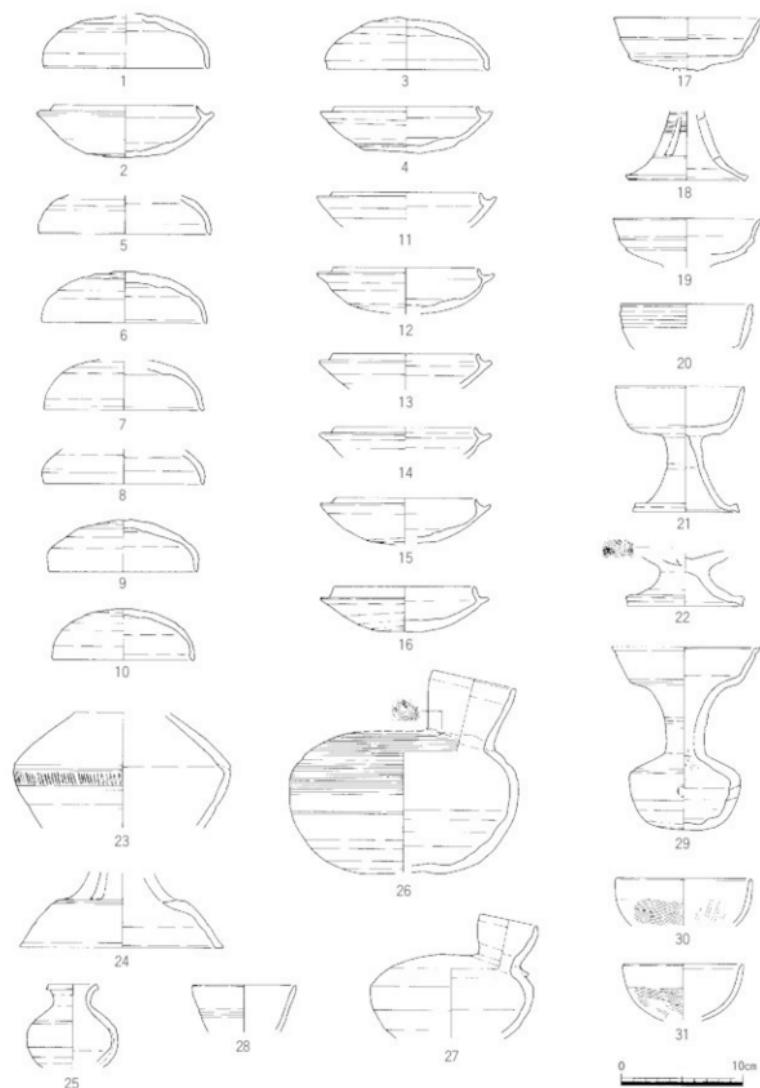
##### 武器（第118図・第119図）

鉄製品の大部分は石室内の攪乱を受けた層より出土し、10種類が確認できた。ここでは武器について記する。

M1・M2は刀の外装具でM1は柄頭であり、地金が鉄で表面に銀象嵌が施されている。M2は刀の鞘尻に付属する石突きと呼称されている製品である。M3は刀身の一部、M4～M29が鉄鎌であるが、M4～M7は尖根式の細身の鎌で、茎部分に木質が残存するものもある。M8～M12は鎌身以下で茎部との境には突起を有する。M13～M19は平根式の鎌である。まずM13は広根両丸造定形式である。M14は同形式の先端部分と思われる。M15～M18の鉄鎌は、広根斧箭式鉄鎌である。M16の鎌身下部はきわめて細く、段で茎部に移行する。鎌身長が6cm、先端の幅3cm、関部の幅1cm、茎部は丸く6mmで4.2cmで先細りで終る。他のM15・M17・M18は身の一部欠損、あるいは先端部分のみであ



第116図 奥壁部床面遺物出土状況（1/20）



第117図 出土遺物① (1/4)

る。M19の鐵は先端と茎以下を欠損している。M20～29の鐵は、先端あるいは茎部のみのものである。

#### 馬具(第119図)

M30～M38は鉄製馬具である。

M34・M36は主軸線上の奥壁に近い位置の床面直上で検出されたが、いずれも元位置をとどめている遺物ではない。他の遺物は石室内からの出土であるが、すべて攪乱層中からの出土である。

出土遺物はM30・M31が辻金具で同一のものである可能性がある。M32～M37は留金具で、M32・M34は完形品と見られる。

M38は鞍具の一部、これ以外の馬具関連遺物の出土はなかった。

#### 刀子(第119図)

M39～M53の15点は刀子とそれに付属する鉄製品である。

M39はほぼ完形品で全長10.5cm、最大幅1.2cm、厚さ0.4cm。M40～M50は刃部先端、茎部の一部、その両方を欠損したものである。M51～M53は鋸と称される部品と考えられる。

当古墳石室内から検出された鋸と称される遺物は、M39～M50までの刀子には部品の大きさが合致しづらく、おそらくM3の刀に用いられていた鋸と考えるのが望ましいものであろう。

#### 釘(第120図)

M54～M107は鉄釘であり、釘の断面形状は方形・長方形・円形を呈する棒状製品である。大部分の製品に木質が付着しており、木棺に使用されていた釘であることが明らかなものである。

釘を大別して3種類に分類できる。まず最大で全長15.5cm、幅1.6cm、厚さ0.8cmのものから、最小の全長1.8cm、幅0.6cm、厚さ0.2cmまで、検出できた数は破片を含めて54点であった。

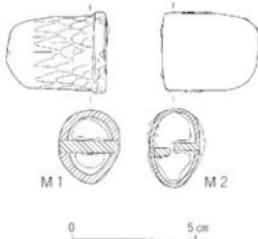
#### 不明鉄製品(第120図)

M108・M109の2点が石室内攪乱層から検出されたものの中に含まれていたが、このように屈曲あるいは弓のように彎曲した形状から推測し、馬具に関連する遺物であろうと思われるが、このような断片であるため断定することは困難なものである。

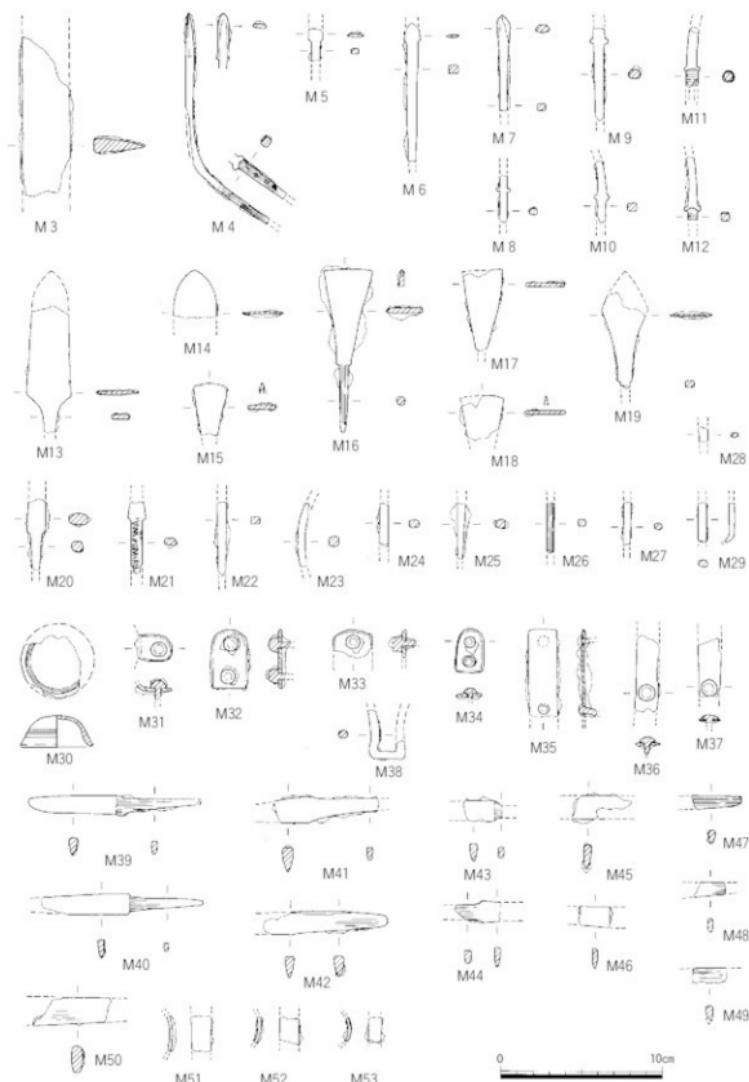
第4表 県内出土の象嵌刀装具

古墳名	所在地	旧国	象嵌部位	象嵌文様	石室全長(m)	石室袖	時期	文献
緑山17号墳	総社市上林	備中	柄頭 鋸	花文ほか唐草文	9.8	左片	6C末～7C中葉	1
柳谷古墳	津山市瓜生原	美作	柄頭 鋸尾	亀甲繋文鱗状文	3.3	無	6C末～7C初	2
平岩古墳	赤磐市石	備前	柄頭	鱗状文	9	無	6C末～7C前半	
道上古墳	新見市上神代	備中	鋸 頭	心葉文、耳に満文心葉文	5.5	無	6C末～7C初	3
平瀬2号墳	岡山市平瀬	備前	鋸	耳に「C」字文	?	?	6C後半～7C初	4
西山2号墳	岡山市柏谷	備前	鋸	耳に「C」字文	9.3	右片	6C後半～7C初	5
奥田古墳	真庭市中原	美作	鋸	耳に「C」字文	7	右片	6C末～7C初	6
川戸2号墳	美作市川戸	美作	鋸	耳に「C」字文	12.4	左片	6C後半～7C初	7

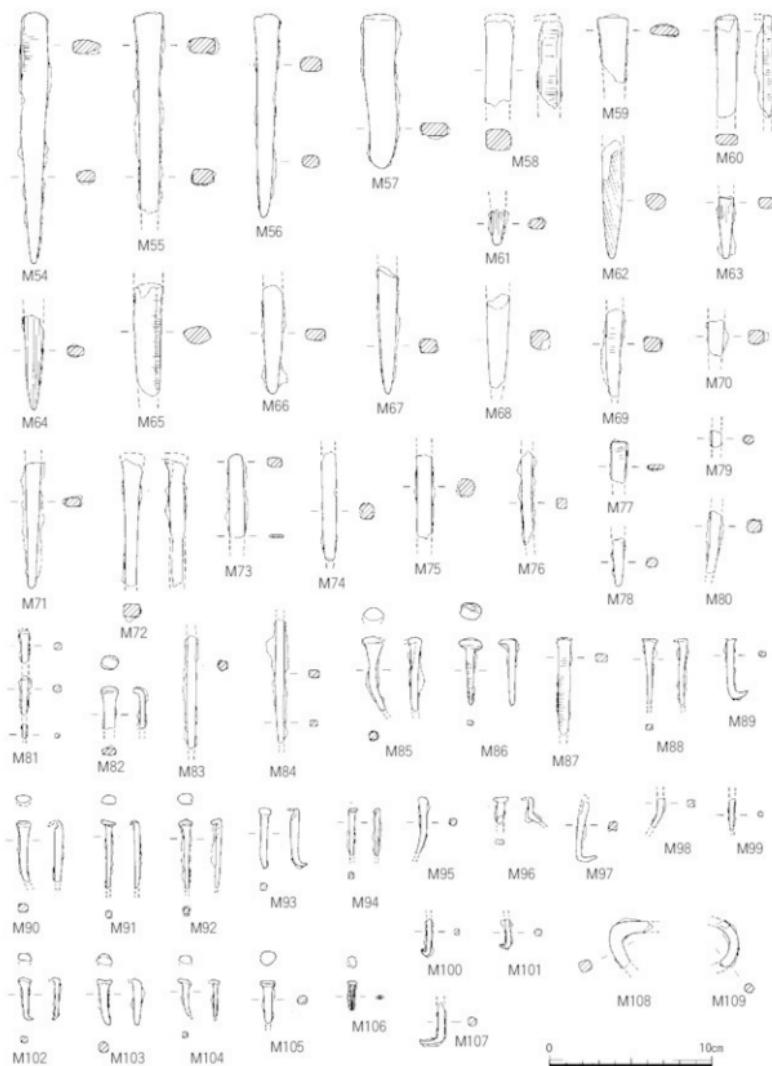
(文献) 1 総社市埋蔵文化財発掘調査報告1 2 津山市埋蔵文化財発掘調査報告24  
 3 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告23  
 4 同報告83 5 同報告109 6 同報告136 7 大原町教育委員会1995  
 \* 道上古墳の象嵌は報告書刊行後の発見



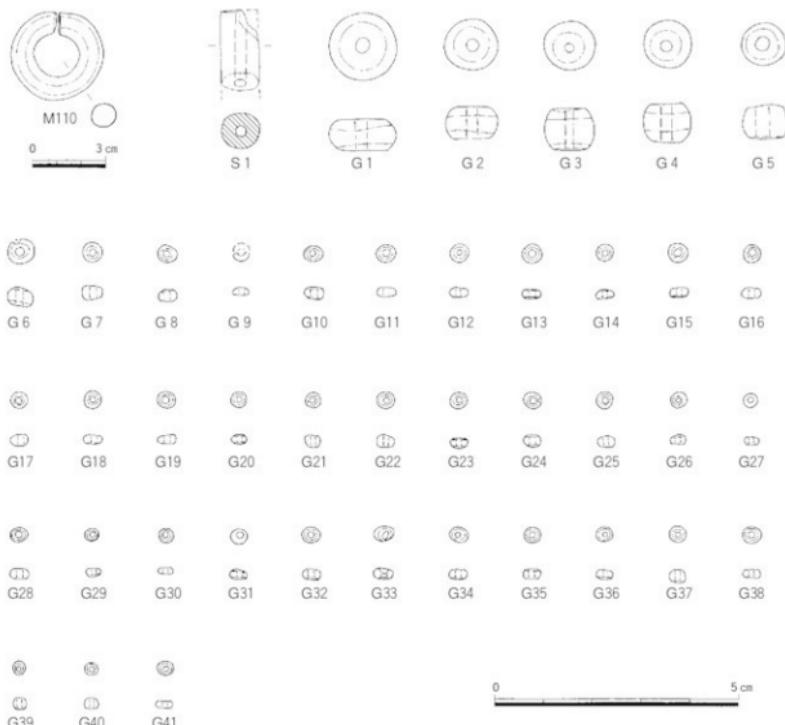
第118図 出土遺物②(1/2)



第119図 出土遺物③ (1/3)



第120図 出土遺物④ (1/3)



第121図 出土遺物⑤ (1/2・1/1)

## 装身具 (第121図)

石室床面上と石室内攪乱層中から検出された装身具は総数43点である。M110は耳環で質は銀で、中空となっている。S1は碧玉製の管玉で欠損している。G1～G41はすべてガラス製品である。G1～G5は丸玉、G6～G41は小玉で1点が欠損、青色を呈す。

## 鉄 津 (図版34-2)

第116図の石室奥壁の北東隅の床面上近くで検出されたが、元位置とは考えられないが、埋葬時に供獻されたものと思われる。

この古墳が構築されるにあたって、近隣で鉄の生産が営まれていたものと推測されうる。

## 5 小 結

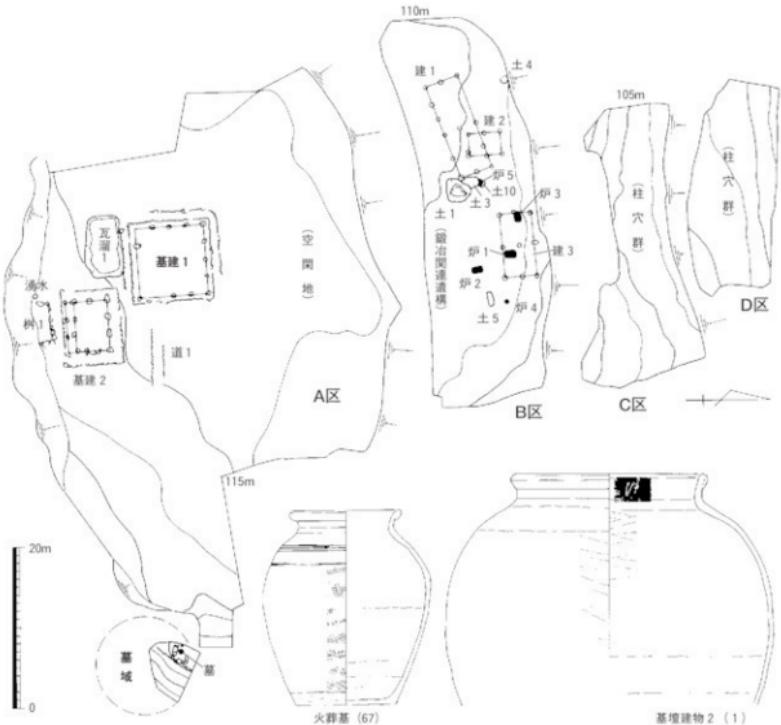
今回調査を実施した平岩古墳は、地形的な立地は、狭い谷を挟んで東西に2基の横穴式石室をもつた古墳時代後期の古墳が築かれている。ここでは西に開口する横穴式の古墳であり、墳形は長方形を呈す。さらに墳丘では、北辺側に貼石状に見受けられる角礫が配石されている。盛土崩落防止のため墳丘端部に立てられ、墳端を明示している。鉄津から近隣に関連構造も考えられる。

## 第7章 考察

### 第1節 中世の来光寺と瓦

#### 1 中世来光寺の主要な遺構と遺物

中世来光寺の主要な施設は、A区において近接して建てられた2棟の基壇建物であり、その規模や位置から、基壇建物1が中心仏堂であったと考えられる。それに石組枠などが付属し、やや外れには墓域が營まれた。また下段のB～D区では、柱穴が多数あり掘立柱建物などが存在した。B区では、軌跡や鉄滓、鋳造剝片、粒状滓などの存在から、寺院付属の鍛冶工房があったと考えられる。寺院建



第122図 中世の主要遺構 (1/600) と遺物 (1/8・1/10)

築に多量に使用された鉄釘などを製作したのかもしれない。また周辺から出土している鉄鎌（第47図M37、第60図M1、第74図M5・M6・M8）などの武器を製作した可能性もある。

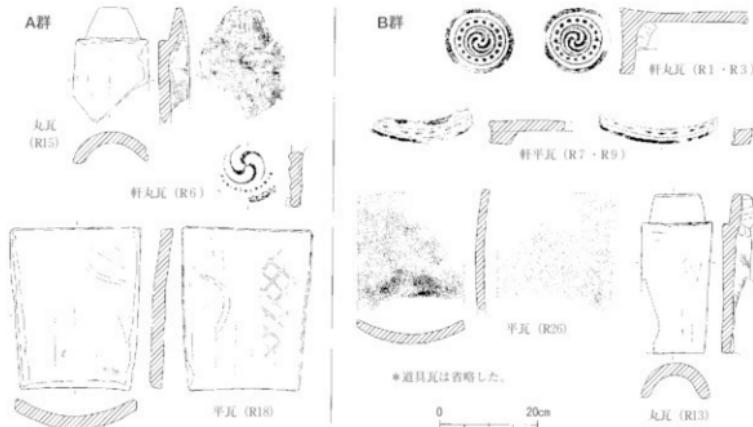
僧坊等の所在を思わせる字名「東ノ坊」「西ノ坊」はさらに下段、調査範囲外の丘陵断面近くに見られ、A区基壇建物との直線距離は約200m、比高差約30mの所である。

中世来光寺の存続時期を示す出土遺物は、瓦溜1の遺物（第13図～第20図）や、基壇建物2周辺出土の備前焼甕（第11図）、火葬墓出土の藏骨器（第37図）などがある。

瓦溜1出土の上器類のうち時期のわかりやすい器種をみると、最も古いのは備前焼の皿で13世紀代、土師質高台付椀はそれより新しく14世紀前半頃であろう。土師質ないし瓦質の鍋釜類はさらに新しい時期のものを含んでいる可能性がある。また、基壇建物2の周辺から出土した備前焼甕は14世紀代、火葬墓出土の藏骨器（備前焼甕）は最も古いものが14世紀代でそれ以降近世にいたるまでのものがある<sup>(1)</sup>。

瓦溜1の遺物を寺院廃絶時の一括遺物とみるならば、少なくとも13～14世紀代に寺院が存在し、14世紀以降に廃絶したことになろう。詳細な廃絶時期は、瓦溜1の中から最も新しい遺物を抽出する必要がある。鍋・羽釜など年代比定の難しい上器があるが、近世に降らないことは確実であろう。なお火葬墓については、14世紀以降現代にいたるまで周辺が墓地として利用され続けたために、新しい遺物を含んでいる。

中世の瓦は、大部分が瓦溜1から出土しており、共伴土器からおおむね13～14世紀代に位置づけられる。大きく2群が認められ（第3章第3節参照）、瓦の厚みや瓦当文様などを比較すると、A群の方が古い要素をもっている。A、B両群には時期差があり、ある段階で堂舎の改修が行われたと考えられる。量を比較するとB群の方多く、A群の軒平瓦は未確認であり、また鬼瓦、熨斗瓦などの道具瓦はB群該当資料のみが確認されるなど、B群の方が量・種類ともによくそろっている。



第123図 来光寺跡出土の中世瓦（1/10）

## 2 来光寺中世瓦の年代

### A群瓦

A群軒丸瓦の瓦当文様は三巴文である。珠文帯外側の圈線がない点で若干新しい要素をもつが、全体的には巴瓦の中でも古い部類に属し、鎌倉時代のものと推定される。しかしながら、巴文の編年は困難で必ずしも単一に移行していないと言われており<sup>(1)</sup>、他の特徴を合わせ考える必要がある。

この軒丸瓦の類例として、岡山県瀬戸内市服部庵寺<sup>(2)</sup>出土資料がある。拓本を重ね合わせるとうまく整合し、珠文配置の不均等な部分も一致することから、同范と考えられる（第124図）。服部庵寺例は井戸の下層出土で鎌倉時代の土器を伴っている。来光寺のものも同様の時期であろう。

また、A群瓦の製作技法を示す特徴として、丸瓦凹面の吊り紐痕（R15・R16）がある。直線的な刺し縫い（破線）状をなすもので、法隆寺では13世紀から14世紀中頃まで見られるとされている<sup>(3)</sup>。山崎信二氏が編年の基準とする<sup>(4)</sup>、紐が布目に隠れる部分と表に出る部分の長さの割合は、箇所によって異なるがおむね1：1であり、13世紀代の特徴とされる。巴文の年代観と矛盾しない。

以上のことから、A群瓦については鎌倉時代を想定したい。来光寺の創建瓦であろう。

### B群瓦

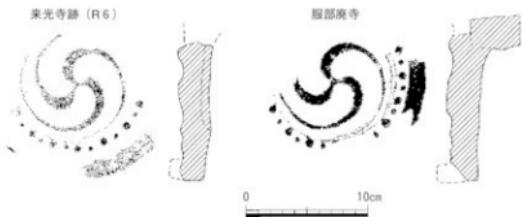
B群瓦はA群に比べ新しい要素をもっている。A群より薄手で、軒丸瓦瓦当の径も小さい。軒丸瓦の瓦当文様は三巴文で、型式的にA群より新しい。製作技法では、丸瓦玉縁端の凸面側に面取りが見られる点などが新しく、法隆寺では室町以降に見られるとされる<sup>(5)</sup>。また不完全ながら焼し焼きがなされ、表面を黒く焼き上げるのも新しい要素であろう。

この軒丸瓦の瓦当文様について同型式の例はないが、岡山市百間川米田遺跡例<sup>(6)</sup>（第125図⑩）が似ている。太めの圈線の間に大粒、横長梢円の珠文を配し、巴の形状もよく似る。ただし百間川米田遺跡例は圈線が3条あり特異である。土壤出土で土器を伴い、14世紀前半とされる。

軒平瓦の瓦当文様は、圈線内に菱形が3つセットで連続するものである。類例は、岡山県内東半部、備前・美作地域で知られている。津市中山神社<sup>(7)</sup>、久米郡久米南町仏教寺<sup>(8)</sup>、岡山市清水庵寺<sup>(9)</sup>で出土しており、これら寺社間の緊密な関係が想定されている<sup>(10)</sup>。この軒平瓦の年代について、根木修氏は「鎌倉末ないし室町初頭」<sup>(11)</sup>、行田裕美・小郷利幸・平岡正宏各氏は「鎌倉時代、より限定すると13世紀初頭頃」としており<sup>(12)</sup>、見解の相違がある。

不明確な点もあるが、軒丸瓦瓦当文様の類例や製作技法の特徴から、B群瓦の年代は室町前期（南北朝期）頃を考えておきたい。基壇建物2周辺および火葬墓出土の備前焼と同様の時期と思われる。

以上の検討から、来光寺の創建は鎌倉期（A群瓦）で、瓦の葺き替えないし改修が室町前期（B群瓦）に行われたと考えられる。ただしこの年代は、最終的には当地域の中世瓦の編年の中に位置づけ、検証する必要があるだろう。



第124図 同范瓦（1/4）

### 3 東備地方における中世瓦の変遷

上で推定した来光寺瓦の年代観を用い、またそれが矛盾なく妥当なものであるかどうかを検証するため、東備地方における他の資料と比較し中世瓦の変遷を整理しておきたい。ここで東備地方としたのは、おむね備前地域のうち旭川以東の地域を言い、来光寺跡の所在する赤磐市のほか、備前市、瀬戸内市、和気郡、岡山市東部などを含んでいる。

#### 編年の視点

中世瓦の編年は、畿内地域でかなり整理されてきている。奈良県元興寺<sup>(10)</sup>、薬師寺<sup>(11)</sup>における整理のほか、法隆寺における佐川正敏氏の研究<sup>(12)</sup>、大阪府日置莊遺跡における市本芳三氏の研究<sup>(13)</sup>、山崎信二氏の総括的研究<sup>(14)</sup>によって、中世瓦の変遷が明らかになってきた。佐川、市本、山崎三氏の研究は、従来の瓦当文様に加え、詳細な製作技法の観察に重点を置いているところが大きな特徴であり、近年の中世瓦編年の大きな柱となっている。畿内では年号をヘラ書きする瓦も豊富で、実年代観も安定してきているようである。

一方、岡山県下では中世寺院等の発掘調査事例も少なく、瓦の資料も断片的なものが多いため作業が進んでいるとはいえない。本項では、畿内の編年を参考にしながら、東備地方の資料を整理してみたい。当地域においても瓦当文様は多岐にわたり、また文様が必ずしも型式学的に安定した変遷を示さない場合がある。したがって、編年の視点として文様は中心に据えないことにした。東備地方の中世瓦を検討し、比較的安定した変遷を示す要素を探してみると、次のものが候補として考えられた。軒丸瓦では、畿内の編年でも多用されている瓦当径と外縁の幅である。すなわち瓦当径の大きいものから小さいものへ、外縁幅の狭いものから広いものへという変化である。これに吊り紐などの技法的要素を加えるが、吊り紐痕の判明する資料は少ない。軒平瓦では、市本氏が重視する顎の形態である。顎の裏面が曲線的なものから直線的なものへ、また顎が深く重厚なものから浅く華奢なものへという変化が認められる。ただし編年作業の結果、市本氏が扱った日置莊遺跡の状況とは年代的に若干異なる結果となった。

以上の視点をもって以下に編年を整理する（第125図）。おむね半世紀ないし1世紀を単位に記述するが、実年代を特定できる資料はほとんどなく、およそその目安として想定したものである。

#### 鎌倉前期（12世紀末～13世紀前半）

軒丸瓦に巴文を多用、軒平瓦は段顎、丸瓦凹面には糸切り痕と細かな布目が付き、平瓦凸面には瓦専用の粗大な斜格子タタキが付く。このような中世風の瓦が当地方に登場する最初の例は、赤磐郡瀬戸町万富東大寺瓦窯跡<sup>(15)</sup>の瓦であろう。東大寺大仏殿等の再建に用いられた瓦で、建久四年（1193）に備前国が東大寺造営料国になってから重源没年（1206）頃まで東大寺に瓦を供給したと考えられており、12世紀末から13世紀初頭に時期を限定できる。軒丸瓦①は瓦当径が20cmを超える大きなもので、外縁の幅は狭い。軒平瓦②は顎形態に特徴がある。下方に大きく張り出す顎をヨコナデ・ヨコハケによって丸く仕上げ平瓦部に曲線的につながるもので、万富周辺地域に独特のものという指摘がある<sup>(16)</sup>。瓦当文は軒丸・軒平とともに「東大寺大仏殿」銘の文字文である。

万富東大寺瓦に続く時期の資料として、備前市大明神窯跡<sup>(17)</sup>の瓦がある。軒丸瓦③は三巴文で、巴の頭部は尖り、珠文は多数が密に配される。瓦当の径は15cmを超えるのである。外縁の幅は狭く突出は大きい。軒平瓦④は唐草文で、顎の形態や外縁の突出が大きい点は万富例によく似るが、瓦当の



第125図 東備地域における中世瓦の変遷（一部他地域の資料を含む、1/6）

高さは万富例より若干小さい。伴う備前焼の年代観からも、万富例とそれほど違わない鎌倉前期頃が想定される。なお、同型式の軒平瓦が赤磐市靈山寺跡からも出土している<sup>(22)</sup>。

#### 鎌倉中～後期（13世紀後半～14世紀初頭）

続く時期の例として、来光寺A群瓦やそれと同范の軒丸瓦をもつ瀬戸内市服部庵寺の瓦がある。軒丸瓦⑤の様は大明神窯跡例とほぼ同じで、外縁が狭く突出が大きい点も共通する。巴の頭部がつながり尾が長いなど古い巴文の特徴をもち、珠文は小粒で密に配される。瓦当文様は大明神窯跡例よりも古い雰囲気をもっているが、服部庵寺において組み合う軒平瓦⑦の顎形態などから、大明神窯跡例より新しいものと推定した。軒平瓦⑥⑦は唐草文で、顎の断面形が曲線を描きながら平瓦部につながる点で鎌倉前期の例と似ている。瓦当の高さは若干縮小しているが、それでも5cmを超え、以後の瓦に比べると高い。

和気郡和氣町泉瓦窯跡<sup>(23)</sup>の瓦もこの時期の可能性がある。軒丸瓦⑧は珠文帯を伴う菊丸瓦で、瓦当径は14.5cm、外縁幅は狭い。法隆寺では「室町中期Ⅱ」（1436～1495年）を菊丸瓦の初源とするが<sup>(24)</sup>、泉瓦窯跡例は法隆寺例より珠文が密で外縁が狭く二重の圈線をもつなど古相で、法隆寺例より大きくなるのがぼらせて考える。軒平瓦⑨は蓮華唐草文である。瓦当の高さが高く、唐草に蓮華の葉やつぼみを写実的に描く点で古い雰囲気をもつ。瓦当に圈線をもたない点や、顎裏面と平瓦部の境が直角に近い点は新しいが、顎の後端を丸く仕上げる点は鎌倉期の他例と共通する。技法的には、これまでの顎貼り付け技法とは異なり瓦当貼り付け技法が採用されている。この技法は13世紀中葉以降に出現すると言われているが<sup>(25)</sup>、当地域ではあまり一般的ではない。

#### 室町前期（南北朝期、14世紀）

百間川米田遺跡例、来光寺B群瓦を該当資料と推定しているが、鎌倉末期までさかのぼる可能性もある。軒丸瓦⑩⑪はいずれも三巴文である。瓦当径は前代に比べ縮小し、これ以降近世にいたるまであまり変化しない。外縁幅はいまだ狭いが、突出は低くなっている。巴の頭部は尖り近接する。巴の尾は前代に比べ短くなる。珠文は大粒で少数になる傾向がある。

来光寺において組み合う軒平瓦⑫は、圈線内に菱形文が連続する文様である。顎貼り付け技法によるもので、顎は深く、断面形は直線的に角張り顎後端の角が明瞭になる。瓦当高は縮小し、これ以降近世にいたるまであまり変化しない。同型式の菱形文軒平瓦は、ほかに県内3遺跡で出土しており、いずれも顎貼り付け技法による。断面形態においては相違がみられ、顎が深く外縁の高い来光寺例⑫が古相、逆に顎が浅く外縁の低い伝教寺例⑬が新相といえる。清水庵寺、中山神社例はその間に位置づけられるが、これを単純に時期差と考えてよいかどうかはさらに検討が必要である。

#### 室町中期（15世紀）

軒丸瓦では、赤磐市寂光寺跡<sup>(26)</sup>の例⑭がある。外縁は前代に比べて幅広になるが、突出度はあまり変わらない。巴の頭部は丸くなり、珠文は少数で珠文間の間隔が広い。寂光寺跡の丸瓦凹面にはループ状をなす吊り紐痕がみられ、法隆寺では室町中期以降に認められるとしている<sup>(27)</sup>。また、寂光寺跡の一角には明応5年（1496）銘をもつ五輪塔があったといわれ、このことからも室町中期に位置づけてよいと思う。

軒平瓦では、赤磐市備前国分寺跡<sup>(28)</sup>の連珠文軒平瓦⑮や泉瓦窯跡の唐草文軒平瓦⑯をこの時期に想定する。顎は浅くなり、その結果断面形は継長の長方形ないし台形をなすようになる。備前国分寺例⑮の瓦当文様は圈線の省略された連珠文であり、畿内においてもおおむね室町中期頃に位置づけられ

ている。なお製作技法をみると、備前国分寺例<sup>⑮</sup>は顎貼り付け技法、泉瓦窯例<sup>⑯</sup>は瓦当貼り付け技法による。南都（法隆寺）や鎌倉では13世紀中葉から瓦当貼り付け技法に変化、15世紀末まで続き、再び顎貼り付け技法に戻るとされるが、一方、瓦当貼り付け技法がみられず一貫して顎貼り付け技法を保持する地域も知られている<sup>⑰</sup>。東備地域では泉瓦窯跡（⑨⑩）や備前国分寺跡などに瓦当貼り付け技法がみられるが、それほど一般的ではなく、一貫して顎貼り付け技法の方が多い。

#### 室町後期（16世紀）

和気郡佐伯町天神山城<sup>⑲</sup>などの山城や寺社の瓦が知られており、この時期の瓦については乗岡実氏の諸論考に詳しい<sup>⑳</sup>。軒丸瓦は外縁がさらに幅広になり、軒平瓦では顎の形態変化がさらに進む。また軒平瓦瓦当の側区が幅広なものが増えてくる。赤磐郡瀬戸町江尻大郷山墓出土の瓦<sup>㉑</sup>⑪⑫は、軒丸瓦瓦当の外縁が非常に幅広で、軒平瓦瓦当の側区も広い。巴文は巴の後頭部どうしが接近するタイプで、16世紀後半のものであろう。

東備地方の中世瓦は以上のような変遷を想定することができるが、瓦当文様、特に軒平瓦の瓦当文様についてはあまり触れてこなかった。唐草文を中心としながら菱形文、蓮華文、連珠文など多様で、文様の変遷を追いくためであるが、上の編年に従って文様を比較した場合にも大きな矛盾は生じていないと考えている。

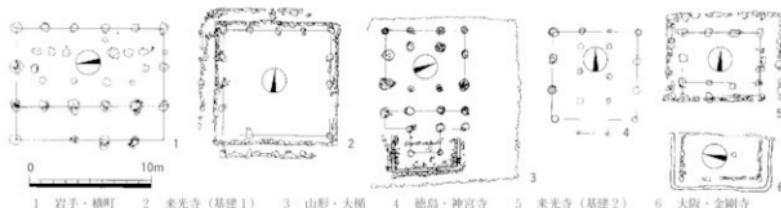
また、地域的には東備地方という狭い範囲に限定した。当地域では、万富東大寺瓦窯跡、服部庵寺、来光寺跡、泉瓦窯跡など発掘調査事例が多く、軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせや共伴土器など詳細が判明する資料に恵まれている。上の編年が、備中地域など他地域にも当てはまるものかどうかは資料の増加を得て必要があるが、例えば中世須恵器の窯跡として著名な倉敷市亀山遺跡<sup>㉒</sup>や、倉敷市浅原寺跡<sup>㉓</sup>の瓦は、軒平瓦の顎形態や面調整などに若干違いがあるようである。両遺跡では鎌倉期の瓦も見られるが、東備地域のような重厚な顎をもつ軒平瓦は見あたらず、また亀山遺跡では甕などに用いる細かい格子目タタキが中世瓦にも多用されている。

## 4 中世仏堂の比較

中世の寺院遺跡は、その地が現在も寺院として機能していることが多く、古代寺院のように広範囲の発掘調査を行うことが困難な場合がほとんどである。そのため、中心仏堂や伽藍配置が発掘調査で明らかになっている例は少ない。岡山県下も例外ではなく、中世の仏堂およびその周辺の全容が明らかになったのは、来光寺跡が初めての事例であろう。

中世末期になると、県下でも建築物として現存する仏堂が多く存在するが、来光寺の創建された鎌倉期の例はなく、宝町前・中期のものもほとんどない。発掘調査事例としては、全国的に見てもそれほど数多いものではないが、いくらかの例がある<sup>㉔</sup>。これらを見ると、規模的には一辺10m以下のものが多く、基壇や地業を伴うものもあって、来光寺基壇建物との共通点が多い。仏堂規模からすれば、一般的な中世寺院であったといえる<sup>㉕</sup>。その中でも来光寺の基壇建物は礎石や基壇の残りがよく、重要な資料になると思われる。2基の基壇建物のうち、規模が大きく正方形をなす基壇建物1が中心的な仏堂と考えられ、それに近接する基壇建物2は性格不明だが、庫裏などの付属施設であろう。

仏堂の間数を見ると、他の遺跡では3間堂あるいは5間堂がほとんどで、中世末以降の現存建築物も同様である。4間堂となる来光寺の基壇建物1は特異な存在といえる。間数が偶数になると堂の正面中央に柱が位置するため、入口や向拝は中央でなく偏った位置に付くと思われるが、残存する遺構



第126図 古代末～中世の寺院遺跡における礎石建物 (1/400)

から明らかにすることはできない。正面のみ柱の配置を変えている可能性もあるが、礎石が失われてその可能性を残すのは南辺のみであり、立地からすれば南面することは考えにくい。建築構造についてはさらに検討が必要である。なお、基壇建物1の内部の礎石は後世の改変で失われており、内外陣の区別なども不明である。

本節の作成に関し、津山弥生の里文化財センター平岡正宏氏には中山神社・仏教寺等出土瓦の実見に際して便宜を図っていただいた。記して謝意を表する次第である。

## 註

- (1) 備前焼の年代については、間壁忠彦・間壁葭子両氏の編年を参照した。また備前焼の観察にあたっては重根弘和氏に教示をいただいた。  
間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート（1）～（4）」『倉敷考古館研究集報』第1・2・5・18号  
1966・1968・1984
- (2) 森郁夫・古田恵二・巽淳一郎・山崎信二「第Ⅰ章 考察 2. 遺物」『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1987  
市本芳三「浜河泉における古代末・中世瓦の様相—堺市日置莊遺跡出土瓦を中心に—」『大阪文化財センター研究助成報告書 研究紀要』Vol.1 (財) 大阪文化財センター 1993  
市本芳三「日置莊遺跡出土瓦の分析」「日置莊遺跡」大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター 1995
- (3) 池田浩・大谷博志編「服部庵寺」「長船町埋蔵文化財発掘調査報告」2 長船町教育委員会 1997
- (4) 小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊豆留我法隆寺昭和資財帳調査概報10』 小学館 1989
- (5) 山崎信二「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所 2000
- (6) 小林・佐川註4文献
- (7) 山磨康平・物部茂樹ほか「百間川米田遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164 岡山県教育委員会 2002
- (8) 行田裕美・小郷利幸・平岡正宏「美作一宮中山神社の出土遺物をめぐって—特に軒平瓦を中心に—」『古代古備』第15集 古代古備研究会 1993
- (9) 行田・小郷・平岡註8文献
- (10) 玉井伊三郎「古備古瓦図譜」1・2 吉備考古会 1929・1941  
倉敷市教育委員会「板谷コレクション図録(其編)」1987
- (11) 根木修・出宮徳尚「中世・近世」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987、行田・小郷・平岡註8文献
- (12) 根木・出宮註11文献
- (13) 行田・小郷・平岡註8文献

- (14) 藤澤典彦『中・近世瓦の研究—元興寺篇—』元興寺文化財研究所 1982
- (15) 奈良国立文化財研究所『慈師寺発掘調査報告』1987
- (16) 小林・佐川註4文献  
佐川正敏「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究—よみがえる中世の瓦—」「奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢Ⅱ」同朋社出版 1995
- 花谷浩・毛利光俊彦・佐川正敏「瓦の変遷」「法隆寺の至宝—昭和資財帳—」第15巻 小学館 1992
- (17) 市本註2文献
- (18) 山崎註5文献
- (19) 岡本寛久「泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」37 岡山県教育委員会 1980  
岡本芳明「史跡万富東大寺瓦窯跡確認調査報告」「瀬戸町埋蔵文化財発掘調査報告」1 瀬戸町教育委員会 2003
- (20) 岡本註19文献、山崎註5文献
- (21) 間壁註1文献
- (22) 瀬戸町史編纂委員会『瀬戸町史料集』瀬戸町 1985
- (23) 岡本寛久註19文献
- (24) 花谷・毛利光・佐川註15文献
- (25) 佐川註16文献
- (26) 伊藤晃「考古編」「古井町史」第2巻 1991
- (27) 小林・佐川註4文献
- (28) 伊藤晃ほか「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」10 岡山県教育委員会 1975
- (29) 佐川註16文献
- (30) 乗國実「中世山城の瓦三題—山城の近世化と天正の瓦師たち—」「古備 されど古備」古代古備国を語る会 2000
- (31) 乗國註30文献  
乗國実「瓦について」「史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告」岡山市教育委員会 2001
- (32) 瀬戸町史編纂委員会註22文献
- (33) 正岡勝夫ほか「亀山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」69 岡山県教育委員会 1988
- (34) 福本明・鍵谷守秀「浅原寺跡」「倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告」第1集 倉敷市教育委員会 1984  
倉敷市教育委員会註10文献 ほか
- (35) 笹生衛「考古学から見た中世寺社—中世寺院遺跡の分類と変遷を中心に—」「帝京大学山梨文化財研究所研究報告」第8集 帝京大学山梨文化財研究所 1997 に主要な遺跡がまとめられている。  
第126図に使用した図は次の文献から引用し、一部を改変した。  
・横町遺跡：福野裕介・大渡賢一「岩手県北上市横町遺跡」「日本考古学年報」46 日本考古学協会 1995  
・大橋遺跡：伊藤邦弘他「大橋遺跡第2次発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書」第139集 山形県教育委員会 1989  
・神宮寺遺跡：菅原康夫編「神宮寺遺跡」「徳島県埋蔵文化財センター調査報告書」第11集 徳島県教育委員会 1994  
・金剛寺遺跡：田中龍男「金剛寺遺跡」「(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書」第16輯 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
- (36) 仏堂規模についても註35文献に整理されている。

## 第2節 近世以降の来光寺跡

### 1 文献資料にみえる「来光寺」

来光寺に関する文献資料<sup>(1)</sup>は非常に少なく、中世における史料は皆無である。近世になると、「来光寺村」という村名がほぼ一貫して文献に登場する<sup>(2)</sup>。家数10~15戸、60人前後の小さな村で、1875年に「来光寺村」と「塩木村」が合併して「光木村」となるまで、村名として残存していた。現在では大字「光木」と称し、わずか「光」の字にその名残をとどめるのみである。

一方、寺院としての来光寺に関する記録は、近世においても見あたらない。「寛文年中亡所仕古寺跡書上帳」には、寛文6年（1666）から行われた池田光政による寺院淘汰政策によって廃寺となった寺院の状況が記録されている。赤磐市内でも多くの寺院が淘汰されているが、その中にも来光寺は見えない<sup>(3)</sup>。おそらく来光寺はこの頃すでに廃絶しており、村名としてのみ残っていたのであろう。

しかしながら、小堂や石碑の存在から、近世以降現代にいたるまで来光寺跡での信仰、祭祀が続けられていたことは確かであり、以下ではこれらの信仰に関して考えてみたい。

なお、赤磐市内の大松山妙光寺縁起（天保10年・1839）に「来光寺」の名前が登場するが、このたび調査対象となった来光寺跡と関連があるかどうかはわからない。

### 2 近世における来光寺跡

近世には、多くの石組遺構が築かれる。中世に築かれた基壇建物1の基壇は近世にも引き続いて利用され、そのほかに石組枠、立石列、石組の溝、盛土遺構、池、道などがつぐられた。

近世の出土遺物のうち、近世前半期のものは比較的少なく、大部分は18世紀後半~19世紀代のものである。それらは、瓦溜2の遺物によって代表される。

ところで、中世の基壇建物1の基壇上中央には、「釈迦堂」と呼ばれる東向きの小堂が近世以降に建てられ、発掘調査時まで残っていた（第5図）。「釈迦堂」周辺には2基の石碑があり、一方には「南無 正徳院 観光院 意照院 歴代先師」と刻み（石碑A、第5図）、もう一方には「役行者大菩薩 施主角南重三郎并講中 明和七庚寅天四月七日」（1770年）と刻まれる（石碑B、第6図）。

「釈迦堂」内には木製の家形があり、その中に木製の小仏像が、さらにその奥には白木に墨書きされた題目文字曼荼羅がおさめられていた。家形の裏には「弘化四年」（1847年）、曼荼羅には「慶応元年」（1865年）とあり、いずれも近世末期に作られている。また「釈迦堂」には、「記録」と題する棟札があり、それによれば昭和3年の修理の際に倒壊、昭和5年に改築したという。板材や柱、瓦の半分は「古物ヲ利用シ」、「旧堂ヨリ高サヲ五寸縮少シ」たというから、昭和初年頃には現存「釈迦堂」とほぼ同規模で老朽化した小堂が存在したことになる。また、現存「釈迦堂」は桟瓦葺であり（第5図）、「記録」の内容と合わせると、昭和3年に倒壊した「釈迦堂」にも桟瓦が葺かれていたことになる。幕末期の瓦溜2の瓦は本瓦であるから、仮に瓦溜2が「釈迦堂」の改築と関連するものとすると、現存した「釈迦堂」は幕末期に改築、建立され、その際に本瓦を投棄、桟瓦に葺き替えられたことになる。瓦溜2の瓦は、幕末まで存在した堂舎（「釈迦堂」の前身）に葺かれていたものだろう。その建立時期は難しいが、瓦溜2出土陶磁器の中にそれほど古いものを含まないことなどから、近世後期に建立さ

れたものと思われる。石碑B（1770年）と近い頃であったかもしれない。

### 3 二つの伝承

発掘調査中、何人かの地元の方から来光寺についての伝承を聞いた。いずれも寺院廃絶の契機に関するものだが、大きく分けて2種類に整理できる。一つは、中世に栄えた寺院だったが、宇喜多直家によって焼かれ廃絶したというものである。1577年の天神山合戦以降、東備地方を平定した宇喜多直家は熱烈な法華宗の外護者であったため、領内の寺院に改宗を命じ、応じない寺院を破却した。そうした動きと関連する伝承といえる。今一つは、日蓮宗不受不施派の寺院であったために、近世岡山藩によって激しい弾圧を受け、ついに廃絶したというもので、寛文年間の寺院淘汰政策と関連する。前者は中世末に絶滅したという伝承、後者は近世の伝承である。

中世の来光寺については、上でみたように鎌倉期に創建、室町前期以降に廃絶したと思われる。廃絶時期が宇喜多直家の頃まで降るかどうかは疑問だが、中世に栄え中世のうちに廃絶したという点では発掘調査成果と合致する。

一方、近世の来光寺跡における信仰の中心は、中世の基壇上に建てられた「釈迦堂」（その前身を含む）である。この中には小仏像の奥に隠すように毘陀羅題文字曼荼羅がおさめられていた。この曼荼羅には石碑Aと同じ文句も書かれており、石碑Aとの関連が深い。近世岡山藩の下では日蓮宗不受不施派に対する徹底的な弾圧が行われ、赤磐市域においても数々の事件が伝えられている。信者は役人の目を逃れ内信と呼ばれる信仰形態をとるようになった。来光寺跡の「釈迦堂」は、そうした不受不施派信仰の拠点として機能していた可能性がある。このように考えると、地元の伝承のうち後者についても、ある程度歴史的事実を伝えていることになるだろう。ただし、遺構・遺物・石碑の年代は近世後半期を中心とし、寛文年間の動きとはかなりずれがある。

また、石碑Bについては、「釈迦堂」や石碑Aと異なって西向きに立てられており、時期も「釈迦堂」内の家形や曼荼羅より1世紀近く古い。役行人供養塔である点も性格が異なるようで、不受不施派信仰とは別の契機を考えた方がよいだろう。石碑Bの立てられた明和年間は、「明和の旱害」（明和6年・1769～）で知られ、特に明和9年には全国的な被害となって「明和九の年」とも言わされた。このような中、各地で行われた祈禱や供養の一つとして来光寺跡が利用された可能性もあるだろう。

このように、来光寺跡は、寺院廃絶後もさまざまな信仰の拠点として機能したと考えられる。その過程で「釈迦堂」周辺に石組の造構や池、盛土造構といった庭園的な性格をもつ施設もつくられ、周辺には墓地が営まれた。来光寺跡における信仰は性格を変えながら現代にまで続き、「釈迦堂」前の広場は「観音院の踊り場」と言って<sup>(1)</sup>盆踊りなども行われていたという。

#### 註

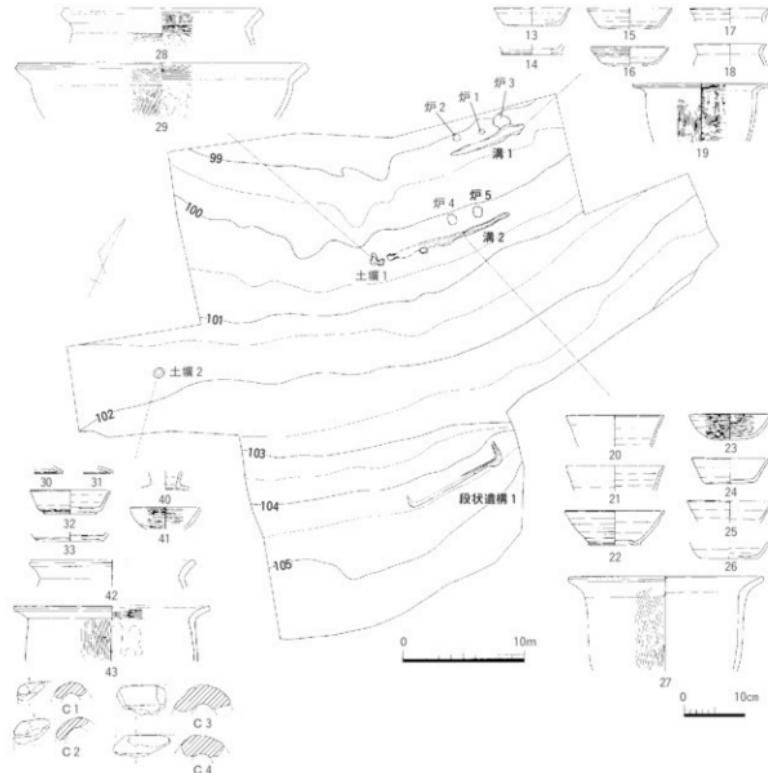
- (1) 本節全般にわたって、吉井町史編纂委員会『吉井町史』第1巻・第2巻 1991・1995を参照した。
- (2) 正保期（1644～48年）の『備前国九郡之帳』では「来迎寺村」と表記され、また慶長年間の文献には村名が見えない。
- (3) 『赤磐郡誌』（赤磐郡教育会1912）では、来光寺は金川妙国寺（現岡山市）の末寺で寛文7年に本寺とともに廃寺となったとし、寺院淘汰との関連を示唆するが、金川妙国寺の末寺とする根拠は不明である。
- (4) 岡山県赤磐郡教育会『改修 赤磐郡誌』1940

## 第3節 立道遺跡における古代の鍛冶

## 1 鍛冶関連遺構の概要について

立道遺跡の古代の鍛冶関連遺構は、丘陵北側斜面に位置するA区で確認された。遺構は大きく削平を受けているが、炉5基、土壙2基、溝2条、段状遺構1軒を検出した。このうち溝1および溝2と土壙1は、段状遺構の一部の可能性も考えられる。

遺物は段状遺構1、溝1・2、土壙1・2から、9世紀代前後を主体とする土師器、須恵器、黒色土器が出土した。検出状況からもこの時期と思われる。器種構成は供膳具、煮炊具とともに認められ、周辺での一定の生活実態が想定された。しかし、竪穴遺構や掘立柱建物などの遺構は確認できず、集落構造において、鉄生産域と居住域の明確な区分は把握できなかった<sup>(1)</sup>。なお、炉1については、地



第127図 立道遺跡A区古代の遺構（1/400）・遺物（1/8）

下構造の炭化材を用いて放射性炭素年代測定を実施した結果、3時期が示されたが周辺の出土遺物の時期を踏まえると、calAD770—897が妥当であると考えている。この結果は、各地に鍛冶技術が拡散して、鍛冶遺構が増加するという時期と一致している<sup>(3)</sup>。

## 2 精鍊鍛冶炉と鍛錬鍛冶炉について

今回の調査では、土壤2から羽口、精鍊鍛冶津、鉄塊系遺物を、溝2およびその周辺では鍛錬鍛冶津、鍛造剥片、粒状津を確認した。これらの鍛冶関連遺物は、集落内での精鍊鍛冶から鍛錬鍛冶までの一連の操業を証明している。このあたりは、古代の鍛冶炉が当初精鍊・鍛錬の機能が未分化であったものが、9世紀以降になって精鍊鍛冶炉が出現するという状況に、軌を一にしている<sup>(3)</sup>。なお、調査区やその周辺では製鍊津が認められないので、現状では立道遺跡に供給された鉄素材を生産した製鉄炉は確認できていない。

ところで、鍛冶炉は一遺跡で小型と大型の炉が一对をなした使用が確認された場合に、前者を鍛錬用、後者を精鍊用と考えられるという<sup>(4)</sup>。しかし、立道遺跡では、炉の規模以上にその構造の違いに着目したいと思う。炉の構造をみると、深い掘り方の内壁を焼き締めて、その中に木炭を充填した地下構造の上に掘窪みをもつ<sup>1</sup>、地下構造はないが、浅い掘窪みを残す<sup>2</sup>、地下構造も掘窪みも認められず、床面に被熱痕跡がみられる<sup>3</sup>～<sup>5</sup>の3種類がある。ただし、遺構の削平状況から<sup>3</sup>～<sup>5</sup>については本来、炉<sup>2</sup>程度の掘窪みをもっていた可能性がある。

炉<sup>1</sup>の地下構造は、近世の大鍛冶炉<sup>6</sup>と共通点がある。のことから<sup>1</sup>は精鍊鍛冶炉<sup>7</sup>、炉<sup>2</sup>～<sup>5</sup>は鍛錬鍛冶炉<sup>8</sup>であった可能性も考えられる。ただし、古代と近世とで時期が離れており、炉内出土の鉄津もないので断定できない。また、古代末から中世の島根県・広島県西部から鳥取県西部の範囲では、「板屋型」や「檜原型」と呼ばれる精鍊鍛冶炉<sup>9</sup>が確認されており<sup>(3)</sup>、これらの遺構との検討も必要であろう。なお、岡山県で地下構造をもつ鍛冶炉としては、平遺跡<sup>(10)</sup>（勝田郡勝央町）の鍛冶炉<sup>1</sup>・<sup>6</sup>などがあるが、地下構造には埋め土のみがなされており、これが炉<sup>1</sup>と同じ機能かは不明である。

## 3 鍛冶工房について

炉の配置をみると、等高線とほぼ平行で直線的に延びる溝1の北西側に炉<sup>1</sup>～<sup>3</sup>が、同じく溝2の北西側に炉<sup>4</sup>・<sup>5</sup>が、それぞれ一群をなすように位置する。また、段状遺構1も床面付近で木炭の集中部を確認していることから、これも含めて3か所の鍛冶関連工房が展開していたと思われる。

こうした遺構配置の状況の立道遺跡と美作国の官営鍛冶遺跡と考えられる、領家遺跡<sup>(11)</sup>（久米郡衙）（津山市）、平遺跡<sup>(12)</sup>（勝田郡衙）（勝田郡勝央町）や、公的施設と思われる久田原遺跡<sup>(13)</sup>（苦田郡鏡野町）などのものと比較すると、両者とも複数の鍛冶炉<sup>9</sup>は存在するが、後者は竪穴建物や掘立柱建物といった工房は伴わず、炉もそれぞれ散在している<sup>(10)</sup>。のことから、官採、私採は別として、立道遺跡の方が美作国の官営鍛冶遺跡より、集約性の高い生産形態であることを見いだせる。

## 4 古代における備前国の中の鉄生産について

立道遺跡は備前国磐梯郡の佐伯郷に位置している。文献史料をみると、備前国では745（天平17）年10月20日に佐伯郷と北接する赤坂郡周匝郷から、「調鍊十口」を貢進したとされる<sup>(14)</sup>。一方で、「日本後紀」の796（延暦15）年には、元来、備前国は鉄を生産しなかったので、調は鐵や銅を「比国」から

買い取って貢納していたが、以後は絹または糸に改めたと記されている。そして、927（延喜5）年に完成した『延喜式』においても、鉄・鎌貢納国として、備前国は挙げられていないのである。

しかし、発掘調査によって9世紀初頭の操業が推定される石生天皇遺跡<sup>(12)</sup>（和気郡和気町）や12世紀以前でも早い時期が推定される八ヶ奥製鉄遺跡<sup>(13)</sup>（和気郡佐伯町）などは、この時期の備前国での製鉄の事実を示しており、先の官符の記述について、整合性を検討する必要がある。また、『延喜式』によれば、備前国は甲2領、横刀10口、弓20張、征箭20具、胡鍔20具の武具生産が規定されており、こうした「用度物」の生産・調達実態も注視すべきであろう<sup>(14)</sup>。

## 5　まとめ

立道遺跡の鍛冶生産をまとめると、操業時期は備前国での鉄・鎌による調貢納が停止した後の、9世紀代頃であると思われる。操業形態は鉄生産域と居住域の明確な区分は把握できなかったが、精鍊鍛冶炉と鍛鍊鍛冶炉で構成される鍛冶工房は高い集約性を示しているといえる。また、掘り方の内壁を焼き締め、木炭充填の地下構造の上に掘竪みをもつ炉が確認され、精鍊鍛冶炉の可能性を指摘した。

律令期の官営工房の工人の生活形態をみると、工房では手工業生産に従事する工人であるとともに、本質は班田農民であったとされる。また、私的な手工業生産であっても、郡司・土豪層の関与を受けない限り、その生産の維持は困難であったとされる<sup>(15)</sup>。今後の問題点として、こうした操業を支えた鍛冶工人の活動や生活実態について、明らかにすることであろう。

## 註

- (1) 八幡浩二「鉄・鎌貢進に関する考古学的検討」「たたら研究」第43号　たたら研究会　2003
- (2) 安間拓巳「古代の鍛冶遺跡」「製鉄史論文集」たたら研究会　2000
- (3) 安間拓巳「古代の鍛冶炉」「考古学研究」第42巻第2号（通巻166号）考古学研究会　1995
- (4) 訂3文献
- (5) 角田徳幸「中国地方における古代末から中世の精鍊鍛冶遺跡」「考古論集」河瀬正利先生退官記念事業会　2004
- (6) 田仲満雄・井上弘「平遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」8　岡山県教育委員会　1975
- (7) 栗野克己ほか「領家遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」8　岡山県教育委員会　1975
- (8) 訂6文献
- (9) 江見正己「久田原遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」184　岡山県教育委員会　2004
- (10) 訂2文献
- (11) 吉田晶「第四章　律令国家の成立と人々の生活　第二節　律令体制の成立」吉井町史編纂委員会「吉井町史」通史編　吉井町　1995
- (12) 近藤義郎「石生天皇遺跡」和気町　1980
- (13) 光永真一「八ヶ奥製鉄遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」178　岡山県教育委員会　2004
- (14) 吉田晶「第四章　民衆生活と律令制　第三節　莊園の形成と諸産業の発達」「岡山県史」第三巻　古代　II　岡山県　1989
- (15) 浅香年木「第四章　平安期の在地における手工業生産」「日本古代手工業の研究」　財政大学出版局　1971

## 付 載

付載 1 立道遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

バリノサーヴェイ株式会社

付載 2 立道遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

株式会社九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己

付載 3 遺物観察表

付載 4 新旧遺構名称対照表

## 付載1 立道遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回の立道遺跡の発掘調査において、北西向きの斜面で炉、土壙、ピット等の遺構が検出されている。等高線に平行する2条の溝があり、その前面にそれぞれ2～3基の炉が確認されている。炉は被熱面が検出されるだけのものと、下部構造をもつものとがあり、炉周辺から鉄滓、粒状滓、鍛造剝片等が出土することから鍛冶炉と考えられている。これらの炉の時期については、溝から平安時代の土器が出土することからその時期に該当する可能性があるが、炉そのものに伴う遺物が無いため、正確な時期は不明である。そこで、今回の分析調査では、下部構造をもつ炉より出土した炭化材について、放射性炭素年代測定および樹種同定を行い、炉の構築・使用時期および炭化材の樹種に関する情報を得る。

### 1 試 料

分析調査を行う炉は、炉1である。本遺構は深い袋状の掘り込みを持ち、上部が被熱する。掘り方の中程に木炭を詰めた層（第10層）があり、炉の下部構造をなしている（図1）。分析試料は、この第10層から採取された木炭である。木炭は一括で取り上げられていたため、分析に先だって実体顕微鏡による予備観察を行い、組織構造に基づくタイプ分類を行った。組織構造から5タイプ（タイプ1～5）に分けられ、このうち、最も量が多かったタイプ1を年代測定用試料とした。樹種同定は、各タイプについて同定を行った。

### 2 分析方法

#### （1）年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、 $\beta$ 線計数法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,570年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION

PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986–2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、いずれの試料も北半球の大気圈における曆年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

#### （2）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

### 3 結 果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を表1に示す。炭化材の年代測定値は、同位体効果の補正

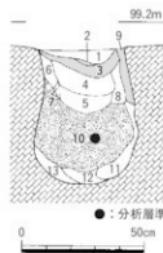


図1 試料採取層準

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構	層位	試料の質	試料名	樹種	補正年代 BP	$\pm 13 C$ (‰)	Code.No.
が1	第10層 (がの下部)	炭化材	タイプ1	モモ	1190±70	-24.1	IAA-519
			タイプ2	サクラ属	—	—	—
			タイプ3	ノグルミ	—	—	—
			タイプ4	ネジキ	—	—	—
			タイプ5	コナラ属コナラ亜属コナラ節	—	—	—

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5570年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表2 歴年較正結果

遺構	層位	試料の質	試料名	補正年代 (BP)	歴年較正年代 (cal)		相対比	Code No.
が1	第10層 (がの下部)	炭化材	タイプ1	1196±68	calAD 943-922	calBP 1007-1028	0.093	IAA-519

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.1(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

2) 計算是表に示した丸める前の値を使用している。

3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

を行った値で1190BPであった。また、歴年較正結果はcal AD722-742,770-897,922-943であった。

一方、炭化材の樹種は、5タイプ全てで樹種が異なっていた。これらの炭化材は、全て広葉樹で、ノグルミ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、モモ、サクラ属、ネジキの5種類に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・ノグルミ (*Pratycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.) クルミ科ノグルミ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じ、塊状に複合し斜方向へ火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-30細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。

・モモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

環孔性を帶びた散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が4-5列配列し、やや急激に管径を減じた後、晚材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-60細胞高。柔組織は周囲状および散在状。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-8個が複合し、晚材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-30細胞高。

・ネジキ (*Lyonia ovalifolia* (Wall.) Drude Subsp. *neziki* Hara) ツツジ科ネジキ属

散孔材で、管壁は中庸、横断面では角張った円形～多角形、ほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有している。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高で、

辺縁部に直立細胞からなる長い單列翼部をもつ。

## 4 考 察

### (1) 年代について

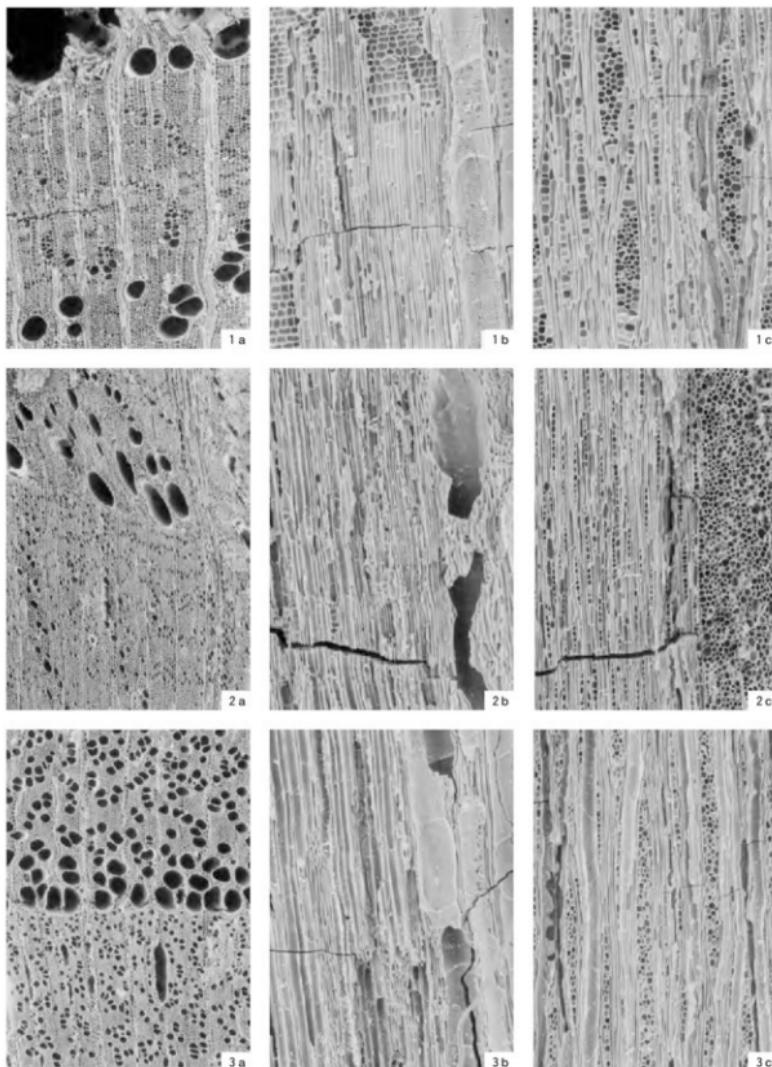
炉<sup>1</sup>の下部構造をなす10層から出土した炭化材の14C年代測定値は、補正年代で1190BPであった。また、この年代値を曆年較正した値はcal AD722–742,770–897,922–943であった。これらの結果から、炭化材の年代観として、おおよそ8世紀から10世紀前半頃が示唆される。本遺構の年代観については、発掘調査から平安時代に帰属する可能性が推定されていることと同調する結果といえる。ただし、今回の結果は1試料の測定結果に基づくものであるため、今後、複数の資料の放射性炭素年代測定による検討が望まれる。

### (2) 炭化材の組成について

炉<sup>1</sup>の下部構造をなす10層中の木炭試料からは、ノグルミ、コナラ節、モモ、サクラ属、ネジキの合計5種類の広葉樹材が確認された。これらの樹種は、いずれも陽樹である。ノグルミは生育に強い日照と水分を必要とするので、斜面が崩壊した跡地や急傾斜地、時折伐採される斜面下部などに生育することが多い。ネジキはアカマツ二次林に多く生育し、コナラ節やサクラ属もまたアカマツ二次林やコナラ二次林などで普通に認められる種類である。一方、モモは中国から渡来した栽培種である。これらのことから、炉<sup>1</sup>の下部構造に利用されている木炭の樹種は複数種類からなり、いずれも二次林を構成する要素であることが窺える。木炭の由来に関する検討が必要ではあるが、周辺に生育していたものを利用したのだとすれば、当時の調査地点周辺の植生は、人間活動など攪乱の影響を受けた植生であった可能性がある。本地域では植生史情報がほとんどないため、今後の古植生情報の蓄積をもって再評価する必要がある。なお、これら木材の材質は、コナラ節、モモ、ネジキが重硬な部類に入り、ノグルミやサクラ属も比較的重硬な部類に入る。

上記したように今回の鍛冶<sup>1</sup>が機能していた時期は、炭化材の年代測定結果からは古代の可能性がある。岡山県内では、古代の鍛冶<sup>1</sup>、炭窯、製鉄<sup>1</sup>から出土した炭化材の樹種同定結果は、筆者らの知る限り、奥津町に所在する久田原遺跡の例だけである（未公表）。久田原遺跡ではアカガシ亜属を中心とした炭化材組成が確認されている。本遺跡と久田原遺跡では、立地および植生・気候などが大きく異なることから、単純に比較することはできないが、いずれの地域においても古植生情報との比較検討が当時の木材利用のあり方を考える上で課題となると考える。

図版1 炭化材(1)

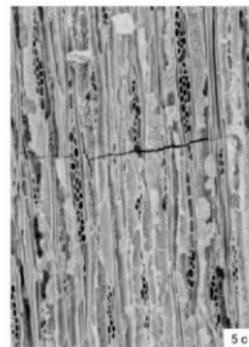
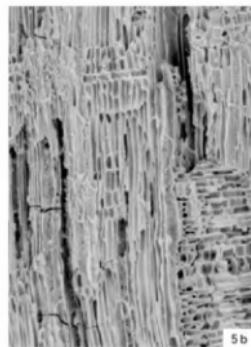
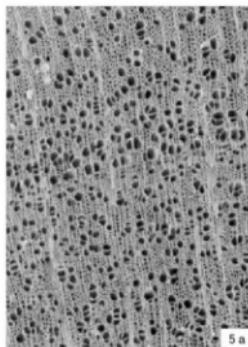
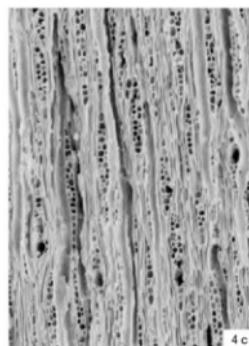
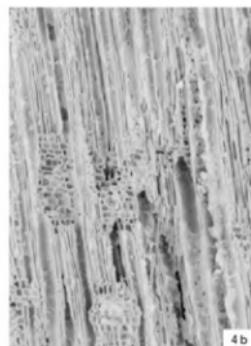
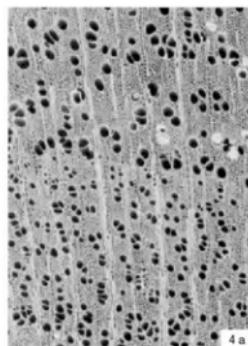


1. ノグルミ (炉1 10層 炭化材)
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (炉1 10層 炭化材)
3. モモ (炉1 10層 炭化材)

a:木口, b:柾目, c:板目

— 200 μ m:a  
— 200 μ m:b,c

図版2 炭化材(2)



4. サクラ属 (炉1 10層 炭化材)

5. ネジキ (炉1 10層 炭化材)

a:木口, b:柾目, c:板目

— 200  $\mu$  m:a  
— 200  $\mu$  m:b,c

## 付載2 立道遺跡出土鍛治関連遺物の金属学的調査

(株)九州テクノリサーチ・TACセンター  
大澤正己

### 概要

平安時代（9～10世紀頃か）に属する立道遺跡から出土した鍛治関連遺物（鉄滓、鉄塊系遺物、再結合滓、粒状滓、鍛造剥片）を調査して、次の点が明らかになった。

土壤2出土の遺物は、鍛冶原料鉄及び鉄器製作の高温沸かし鍛接から低温素延べ・火造り鍛錬鍛治滓が存在する。更に鍛冶工房内の二次的に堆積した再結合滓には、砂鉄製鍊滓から精鍊鍛治滓までが内蔵されていた。一方、鍛冶炉数基が検出された個所からの微細鉱物は、鍛打作業で派生した粒状滓と鍛造剥片に認定できた。立道遺跡は鍛冶の一連作業が操業されている。なお、平岩古墳の石室内出土の鉄滓も調査したが、こちらは6世紀後半代の鉱石製鍊滓であった。

### 1 いきさつ

立道遺跡は岡山県赤磐市光木に所在する古代から中世の集落遺跡である。美作岡山道路建設に伴う発掘調査で出土した鍛冶関連遺物について、当時の鉄器製作の実態を把握する目的から金属学的調査の運びとなった。なお、赤磐市内では過去の調査事例として、7世紀代の猿喰池製鉄遺跡の鉱石製鍊滓<sup>①</sup>、前内池古墳出土の砂鉄製鍊滓<sup>②</sup>、齋富遺跡からは砂鉄系と鉱石系の両方製鍊滓<sup>③</sup>などの報告があり、古墳時代より鉱石と砂鉄を原料とした鉄生産の行われた土地柄がであることが再確認できた。

### 2 調査方法

#### 2-1 供試材

Table 1に示す。立道遺跡出土の鉄滓等11点に、平岩古墳出土鉄滓1点を加えた計12点である。

#### 2-2 調査項目

- (1) 肉眼観察 (2) マクロ組織 (3) 頸微鏡組織 (4) ピッカース断面硬度
- (5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査 (6) 化学組成分析

### 3 調査結果

#### 3-1 立道遺跡出土品

##### (1) TTM-1 梶形鍛治滓

平面が扇状を呈する楕形鍛治滓の欠損品である。上下面と弧を描く1つの側面は生きており、残る2面の直線状側面は破面となる。色調は光沢をもつ暗灰色で、上面は連続凹凸と局部的な気孔露出はあるものの平滑性を保ち、下面は木炭痕による肌荒れは激しい。緻密で重量感をおぼえる滓である。頸微鏡組織をPhoto 1の①～③に示す。主要鉱物組成は①にみられる淡灰色盤状から長柱状結晶のファイアライト (Fayalite: 2 FeO · SiO<sub>2</sub>) と、微量の白色粒状結晶のウスタイト (Wustite: FeO) であり、

これに②に示した非晶質暗黒色ガラス質スラグから構成される。③はファイアライト結晶の硬度測定の圧痕で、値は670Hvと文献硬度値の600～700Hvの範囲に収まる<sup>(1)</sup>。以上の晶癖は素延べ・火造りといった鉄器製作時後工程となる低温型鍛錬鍛治津に分類される。

#### (2) TTM-2 楠形鍛治津

本来の平面形は楕円形を呈するのが、側面の一部を欠いた不整台形状の楢形鍛治津である。色調は無光沢の灰黒色、上面は中央が僅かに窪み、肌荒れは少ない。弱く10mm前後の木炭痕を刻む。下面は全面に粉炭痕を残す偏平津である。破面は気孔少なく緻密質で重量感を与える。

Table 2に化学組成を示す。鉄分(Total Fe)は51.91%とやや高めで、ガラス質成分( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )29.84%とほどほどに含み、塩基性成分(CaO+MgO)も1.84%と特別多くない。更に砂鉄特有成分の二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )0.25%、バナジウム(V)0.03%は砂鉄系鉄素材の鍛錬鍛治津レベルであり、酸化マンガン(MnO)の0.08%もこれを裏付ける。鉄に有害な硫黄(S)0.03%、五酸化磷( $\text{P}_2\text{O}_5$ )0.19%なども低めで鍛錬鍛治津組成を傍証する。

顕微鏡組織をPhoto 1の④～⑥に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のウスタイト主体で、これに淡灰色長柱状結晶のファイアライトから構成される。白色粒状結晶の硬度圧痕は④にあり、値は509Hvと、ウスタイト文献硬度値450～500Hvの上限を僅かに超えるがウスタイトに同定される。該品は、鉄器製作に際して高温沸し鍛接時の鍛錬鍛治津に分類される。

Table 2に化学組成を示す。全鉄分(Total Fe)58.18%と高めでガラス質成分22.31%とやや少なめで、塩基性成分(CaO+MgO)も1.27%留まりとなる。砂鉄特有成分の二酸化チタン0.32%、バナジウム(V)0.04%など少なく、酸化マンガン0.10%も低値である。沸し鍛接鍛錬鍛治津としての組成として矛盾のない値である。銅(Cu)の0.01%も妥当である。

#### (3) TTM-3 楠形鍛治津

平面が不整五角形となった楢形鍛治津の破片である。上下面と側面の1面が本来の資料面で残る側面4面は破面となる。45g弱の小型品で偏平状、色調は半光沢で暗灰色を呈する。上面は平坦で表層に茶褐色の錆化物が目につく。下面是細かい木炭痕を残し、破面に中小の気孔を発するが緻密質。

顕微鏡組織をPhoto 1の⑦に示す。鉱物組成はウスタイトとファイアライト、沸し鍛接鍛錬鍛治津の晶癖である。硬度圧痕は492Hvで白色粒状結晶はウスタイトに同定される。

化学組成をTable 2に示す。全鉄分59.41%、ガラス質成分20.38%、二酸化チタン0.21%、バナジウム0.04%、酸化マンガン0.10%など前述したTTM-2楢形鍛治津に近似する。

#### (4) TTM-4 再結合津

再結合津とは、鍛冶工房内の作業床面の2次堆積層である。鍛冶操業に際して派生した微細遺物(各種鉄滓、鉄塊屑や粒状滓、鍛造剥片)を内蔵しており、鍛冶作業を検討する上で貴重な情報源となりうる。該品の平面は不整六角形を呈して、64g弱で偏平な小剥片である。再結合津を形成する茶褐色の酸化上砂中には肉眼的に銀灰色で光沢質の鍛造剥片が多数混在し、これに微細な鉄滓が加わる。

顕微鏡組織をPhoto 2の①～⑨に示す。①～④は赤熱鉄素材から鍛打により剥落した鍛造剥片である<sup>(2)</sup>。外層ヘマタイト(Hematite :  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、中間層マグнетাইト(Magnetite :  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )、内層ウスタイト(Wustite :  $\text{FeO}$ )の3層で構成された鉄の酸化膜片である。内層はウスタイトが粒状で観察されて鍛打作業の前半段階での派生物を表わす。後半段階になるとウスタイトは非晶出化する。④は錆化鉄となった鉄素材の残片である。フェライト地に初析セメンタイトの針状組織の痕跡を留める。刃物

の刃先などに使用される高炭素鋼の存在を知ることができる。⑥⑦は砂鉄系鉄塊の不純物除去に際して排出された精鍛鋳治滓の屑片である。鉱物組成はウスタイトとその粒内に茶褐色Fe-Ti化合物を析出する。また⑦はFe-Ti化合物は結晶化していて、この鉱物相はウルボスピネル (Ulvöspinel:  $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_3$ ) であって、精鍛鋳治工程のあったことが推定できる。

次に⑧⑨は砂鉄製鍊滓の鉱物相が観察される。茶褐色多角形結晶のウルボスピネルとファイヤライトの晶出滓である。製鍊系鉄素材の搬入があって、鋳治の事前処理として表皮スラグの叩き落しの残片が想定される。

供試材として選出し切れなかった過共析鋼 ( $>0.77\%$ C) や精鍛鋳治滓、製鍊滓の検出は貴重な情報源となりえた。

#### (5) TTM-5 鉄塊系遺物

平面が不整長方形状を呈する18g弱と小型の鉄塊系遺物である。表面は黄褐色の酸化土砂に覆われるが一部に暗灰色の表皮スラグが顔を出し、鋳化による割れや黒錆の滲み出しが認められた。見掛けは小塊ながら重量感をもち、金属鉄の遺存度は良好で、金属探知機でも強く反応する資料であった。

顕微鏡組織をPhoto 3 の①～⑧に示す。①は鉄中の非金属介在物である。球状の暗黒色ガラス質スラグ中にはウルボスピネルの小結晶が晶出している。②は表皮スラグを示す。鉱物組成は茶褐色の片状結晶であるシードブルーカイト (Pseudobrookite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{TiO}_2$ ) やルチル (Rutile:  $\text{TiO}_2$ ) の晶出があり、製鍊は砂鉄原料で高温個所での生成物と想定された。この表皮スラグの鉱物相を正確に知るためにEPMA調査を行った。Photo11の1段目に分析個所の反射電子像 (COMP) と定量分析結果を示す。濃淡色調差をもつ2の番号をつけた茶褐色片状結晶は、 $72.5\%\text{TiO}_2$ - $22.0\%\text{FeO}$ 組成でルチル系であり、3の番号のつく白色針状結晶は、 $43.5\%\text{FeO}$ - $49.3\%\text{TiO}_2$ 組成からイルミナイト (Ilmenite:  $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ) が同定された。顕微鏡観察からの鉱物相の鑑定と矛盾するものではない。

次はPhoto 3 の③～⑤の金属鉄組織に触れる。基地は過共析鋼 ( $>0.77\%$ C) で、パーライト基地に針状結晶の初析セメンタイトと斑点状不整三角帶で、構成鉄 (Fe,P) が観察される。構成鉄は字の如く構と鉄が結合したもので、鍛打加工に際して亀裂を生じ易く、常温脆性的原因となる。この部分は硬くて、硬度測定の圧痕を⑥に示すが、値は955Hvが測定された。他の部分と硬さを比較すると、⑦の過共析鋼のパーライト基地では380Hv、また、⑧の共析鋼 ( $0.77\%$ C) パーライト基地で389Hvなどで、構成鉄部分は実にこれらの2.5倍程度の硬さが確認された。

ここで構成鉄のEPMA調査を述べておく。Photo11の2段目に構成鉄部分を $10\mu\text{m}$ 平方エリアで5の番号をつけて定量分析を行った。組成は $125\%\text{FeO}$  ( $100\%$ Fe) - $17.9\%\text{P}_2\text{O}_5$ が測定された。まさしく構成鉄に同定される。構成鉄の存在も製鍊時の高温操業を裏付ける。

#### (6) TTM-6 鉄塊系遺物

棒状に伸びた10gと小型の鉄塊系遺物である。該品は錆化面に内付きが認められて、大型鉄塊突起部からの剥離した様子を窺わせる。なお、僅かな滓の付着を通して黒錆の滲み出から金属鉄の遺存が予測された。また、金属探知機からの反応も捉えられた。

Photo 4 の①～⑤に顕微鏡組織を示す。①は酸化土砂に取り込まれた鍛造剝片である。3層分離は明瞭で、内層ウスタイトは非晶質となる。鍛打段階も仕上げに近い時期での派生品である。②は表皮スラグを示す。鉱物組成は白色粒状のウスタイトから鍛治系鉄塊に分類される。③～⑤は金属鉄組織である。炭素量は大きくバラツキをもつ。③は極低炭素鋼のフェライト単独組織であり、硬度値は98Hv

を指す。④は僅かにパーライトを含むフェライトの極軟鋼で、硬度値は127Hv。⑤は全面パーライトの共析鋼で硬度値は180Hvであった。⑥のみは炭素量に対して若干低めの硬度値である。しかし、鉄中の炭素量の増加は硬度値を上昇してゆく傾向は捉えられた。

#### (7) TTM-7 鉄塊系遺物

平面が不整六角形を呈する14g強の小型鉄塊系遺物である。表面の大部分が破面からみて、鋳造亀裂により弾けた鉄塊系遺物か含鉄鉄滓の破片だろう。局部的に表層付近で細かい気孔が散在する個所が滓の付着である。内部には金属鉄が遺存して金属探知機で反応をみた。

顕微鏡組織をPhoto 4の⑥～⑧に示す。⑥は付着鋳造剥片である。外層ヘマタイトと中間層マグネタイトの分離は明瞭で、内層ウスタイトは非晶質である。鍛打作業の後半段階での派生物と想定される。⑦は表皮スラグで、鉱物相はウスタイトとファイアライトで構成されて鍛治系鉄塊に分類される。金属鉄は⑧にみられる全面パーライト組織の共析鋼(0.77%C)だった。硬度値は228Hvと、共析鋼レベルが確認できた。

#### (8) TTM-8 羽口溶融物

平面が不整六角形を呈する溶融黒色ガラス質スラグ破片である。羽口先端付着の小破片であろうか。内側の胎土残存は僅かで穿孔部痕跡は不明瞭。胎土は粗い粘土質で長石主体の砂粒が目につく。精錬鍛治羽口もしくは他の被熱遺物の可能性も看過できまい。

顕微鏡組織をPhoto 5の①に示す。粘土鉱物のセリサイトは完全に溶融非晶質化し、表層側には微細な樹状晶のマグネタイトが晶出する。なお、石英、長石類に高温クラックが見られるので、1200°C前後の温度上昇が推定される。

#### (9) TTM-9 鍛治滓

平面が台形状で8mmと薄手の鍛治滓端部破片である。側面2面が直線状の破片で、他は生きる。地の色調は無光沢の灰黒色を呈するが、上面表層は滑らか肌で酸化雰囲気に曝されたのか若干赤味を帯びる。下面には小刻みの木炭痕を残す。破面は細かい気孔が散在し、ややガラス質の勝った軽質滓を感じさせる。

顕微鏡組織をPhoto 5の②に示す。鉱物組成はファイアライトとウスタイトで、後者は左程密な晶出ではない。高温沸し鍛接滓よりも低温型素延べ鍛錬鍛治滓側に傾く組成である。白色粒状結晶の硬度値は、472Hvでウスタイトに同定される。

Table 2に化学組成を示す。全鉄分51%台、ガラス質成分33%台と増えて、二酸化チタン0.30%、バナジウム0.04%、酸化マンガン0.12%、銅<0.01%などTTM-1楕円形鍛治滓に近似した成分値であり、分析結果からも低温型素延べ鍛錬鍛治滓としての傾向をもつ。

#### (10) TTM-10 粒状滓

粒状滓は鍛冶鍛打作業において鍛造剥片より先発して派生する微細遺物である。鉄素材の凹凸部が赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊の酸化防止に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した遺物である。

##### (10-1) TTM-10-1 6.8mm径粒状滓

形状はほぼ端正な球状を保ち、色調は無光沢の黒褐色を呈する。

表面には2次的な付着物が散在するため微細な凹凸をもち、細かい気孔が発生する。磁着は強い。マクロ組織をPhoto 5の③に示す。粒状滓断面内部は大きく空洞化し、右下片間に直径1mm程度白色

線状の輪郭をもつ小鉄粒の鉄化物が捉えられた。④は粒状津外周を形成する白色粒状結晶で凝集気味のウスタイトが左側視野の約半分を占め、右側に不定形で白色部が鉄化鉄である。⑤に鉄化鉄の拡大を示した。フェライト基地に初析針状セメンタイトを析出する過共析鋼が観察される。再結合津TTM-4 (Photo 2 の⑤) に提示した過共析鋼に共通する素材である。なお、⑥は④左のウスタイトの拡大組織を示している。該品は6.8mmと大粒ながら粒状津と認定できる。

(10-2) TT M-10-2 3.0mm径粒状津

僅かに歪な球状の粒状津である。色調は光沢質の黒灰色で、表層の一部に茶褐色の貴い錫を付着する。表面は微細な棘状突起や気孔が散在するが肌は平滑で磁着は強い。

マクロ組織をPhoto 6 の①に示す。断面内部は大きく空洞化し、1mm弱の鉄粒を内蔵する様子は前述粒状津TT M-10-1 に近似する。

顕微鏡組織を②③に示す。外周皮膜層は凝集ウスタイトであり、内臓鉄粒は過共析鋼で、針状セメンタイトとレデブライ特（Lebedulite：オーステナイトとセメンタイトの共晶）化しつつある高炭素鋼の痕跡が観察された。こちらも粒状津に分類できる試料であった。

(10-3) TT M-10-3 2.3mm径粒状津

歪な球状の粒状津である。色調は光沢質の暗灰色で、僅かに微細突起をもつが平滑肌である。磁着も強い。

マクロ組織をPhoto 6 の④に示す。断面内部はやはり大きく空洞化するが独立した鉄粒の塊は認められない。但し、粒状津外周を形成するウスタイト側に30μm程度の超微小鉄粒が観察できる。⑤～⑧に顕微鏡組織を示す。主要鉱物相はウスタイト類であるが、これは2層に分かれ外周表層側は風化により黒く侵されて、その内部になると正常なウスタイトが存在する。このウスタイトの中に擬似金属鉄粒が1点のみ晶出していった。白色粒子は通常メタルでナイタル（5% HNO<sub>3</sub>アルコール液）を施すとフェライト結晶粒界が表われるが、該品は既に酸化されており、腐食液を受けなかった。擬似金属鉄とも称すべきだろう。なお、0.01～0.1mm径の黒色円形の気孔が数多く発生している。

(10-4) TT M-10-4 1.1mm径粒状津

光沢質暗灰色の端正な小粒球状の粒状津である。表面は平滑で磁着は強い。マクロ組織をPhoto 7 の①に示す。断面は球状、外周部は肉厚の薄い白色鉱物相で形成される。顕微鏡組織をPhoto 7 の②③に示す。主要鉱物は淡灰白色多角形結晶のマグネタイトで、最表層は僅かに白色化してヘマタイト気味である。これも粒状津に分類される。

(11) TT M-11 鍛造剥片

赤熱鉄素材の表面酸化膜が鍛打により、飛散剥落した小剥片が鍛冶作業を証明すると、TT M-4 再結合津で述べた。本稿ではピットから出土した鍛造剥片グループについて触れる。鍛造剥片は、一般に5mm平方以下で厚みも0.5mmを越える剥片はあまり無い。この微細さ故に、希ではあるが類似異物の紛れ込みがある。例えば鉄津皮、鉄化鉄剥片、黒鉛化木炭などは過去に遭遇した事例である。<sup>(1)</sup> 今回も鉄津皮の混入があった。

(11-1) 鉄津皮 50×38×0.9mm

波状に彎曲して0.9mmと厚手の剥片である。表面は黒灰色光沢質で平滑肌をもつ。裏面は無光沢淡褐色で微細な凹凸の剥離肌である。全く平坦度を有しないのは鍛打派生物が否定される。マクロ組織をPhoto 7 の④に示す。剥片は純角状に曲がり白色鉱物と共に0.2～0.3mm径の気孔を発する状況は通常の

鍛造剥片では認められず、ここでは鉄滓皮が想定される。⑤～⑧に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は白色粒状結晶が密に晶出したウスタイトで占められる。⑥の中央上面から左下へ層分れのラインが走る。2層構造をもつ高温沸し鍛接の鍛錬鍛冶津の皮である。⑧は王水腐食の組織を示した。最表層に白色帶があるのはヘマタイト、内層は一部黒く侵されたウスタイトである。全体に風化気味の結晶となる。

(11-2) 摳似鍛造剥片 79×58×0.5mm

表皮に大きく2ヶ所のガス抜け孔をもつ不均等厚みの剥片である。表面は光沢質暗灰色、裏面は無光沢暗灰色に黄褐色酸化土砂を付着する。0.5mmと厚手で、鍛打作業から派生した酸化膜要素に欠ける。特にガス抜け孔は鉄滓皮と見做されよう。Photo 8 の⑦にマクロ組織を示す。断面は僅かに波打ち、左端1/3は厚みを酷く低減させる。顕微鏡組織はPhoto 8 の①～③である。外層は白色微厚のヘマタイト層を析出するが、中間層と内層は不明瞭で長柱状に伸びたウスタイトが密集する。更に同一長柱状ウスタイト結晶は同一結晶が王水腐食で明暗2層に分かれれる。不可解な現象である。何れにせよ、鉄酸化膜としての3層分離型から外れて鍛造剥片には分類し難い皮膜構成である。やはり該品は鉄滓皮とみておきたい。

(11-3) 複合鍛造剥片(2枚重着) 65×51×0.3mm

小皺をもつが平坦度を保つ剥片である。表裏共に半光沢で黒灰色を発する。マクロ組織をPhoto 8 の⑧に示す。断面は僅かに起伏があるが、ほぼ水平である。厚みは0.3mm前後であろう。顕微鏡組織は④～⑥にある。王水腐食の⑤で断面をみると、0.1mmと0.2mm程度の剥片の重なりである。理由は定かでないが、後者の中間層の肥大が特徴的である。該品は鍛造剥片に認定できる。

(11-4) 鍛造剥片 40×30×0.3mm

表裏ともに半光沢黒灰色の剥片である。小皺があるが平坦度を保つ。Photo 9 の⑥にマクロ組織を示す。断面はほぼ水平で亀裂や気孔の少ない剥片である。①は顕微鏡組織で、外層ヘマタイトが点列状に僅かに観察される。これは風化による欠落だろう。中間層は極薄で内層ウスタイトは凝集気味である。鍛打作業の後半段階の派生品と判別できる。

(11-5) 鍛造剥片 43×30×0.15mm

薄手で平坦度を保つ剥片である。表面は暗灰色光沢質、裏面は暗灰色無光沢、両面ともに僅かに波打ち凹凸肌である。マクロ組織をPhoto 9 の⑦に示す。断面は水平で気孔や亀裂は少ない。顕微鏡組織は②～④である。王水腐食が効いて3層分離が明瞭に表われた。白い表層ヘマタイトは極薄ながら連続し、中間層のマグネタイトは一定厚みで黄変し、内層ウスタイトは凝集結晶が黒変する。該品は鍛打仕上げに近い段階での派生品である。

(11-6) 鍛造剥片 33×28×0.12mm

厚みを減じた小割り剥片である。表面は光沢質の銀灰色、裏面は半光沢で暗灰色を呈する。肌は表裏面ともに微かにうねる。マクロ組織をPhoto 9 の⑧に示す。断面はほぼ水平で気孔や亀裂は認められない。顕微鏡組織は⑤である。外層ヘマタイトは風化されて不鮮明ながら3層分離型は判別できる。内層ウスタイトは非晶質に近く、鍛打作業も最終仕上げ段階での派生品である。

### 3-2 平岩古墳出土品

(1) H R I - 1 鉱石製鍛津

平面が不整三角形で、100g未満の鉄滓破片である。黄褐色酸化土砂の付着で表面観察がし難いが、側

面は破面で色調は灰褐色、表面には20mm程の木炭痕が残る。なお、表面破面には細かい気孔が発生し、やや軽質澤の感触が得られた。顕微鏡組織をPhoto10の①～⑨に示す。鉱物組成は淡灰色短柱状から盤状結晶のファイアライト主体で、微細な白色粒状ウスタタイトで構成される。鉱石製錬滓の晶癖で、これを裏付ける様に③④は白色塊状の未還元磁鉄鉱粒を残存させる。⑧⑨は淡灰色盤状結晶の硬度測定の圧痕である。値は771Hv、751Hvであった。ファイアライトの文献硬度値は600～700Hvで、この上限を超えるが、未還元鉱石塊の検出でファイアライトに同定できる。Table 2に化学組成を示す。全鉄分(Total Fe)が32.61%と低く、ガラス質成分が54.54%と多く、更に脈石成分も高めである。例えば酸化マンガン(MnO)0.29%、鉱石系であり二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)0.55%、バナジウム(V)0.05%など妥当な値である。また、銅(Cu)の0.02%も鉱石系製錬滓の傾向を表わす。

## まとめ

調査結果のまとめをTable 3に示す。立道遺跡は9～10世紀の集落遺跡である。ここより出土した鍛冶関連遺物は砂鉄系原料鉄を準備して不純物除去の精鍛鍛冶から鉄器製作の高温沸し鍛接・低温素延べ・火造りを含めた鍛鍊鍛冶までの一連操業を証明するものだった。鍛冶炉が推定できるが1～5個では粒状滓や鍛造剥片など微細遺物を残して清浄され、鉄滓や羽口類の大型品は上壇2へと集中廃棄された形跡を残す。古代における公害防止の先駆けであろうか。ともかくも鍛冶炉に滓が伴わない事例として注目しておきたい。

一方、平岩古墳石室から出土した鉄滓は鉱石製錬滓であった。当地の製鉄が6世紀後半から始まることを示す物的証拠である。

## 註

- (1) 大澤正己「猿喰池出土製鉄関連遺物の金属学的調査」「猿喰池製鉄遺跡－町道4番奥吉原線改良工事に伴う発掘調査～」熊山町教育委員会 2004
- (2) 大澤正己「前内池10号墳出土鉄滓の金属学的調査」「前内池遺跡・前内池古墳群・佐古遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告174 岡山県教育委員会 2003
- (3) 大澤正己「斎富遺跡と周辺古墳出土製鉄関連遺物の金属学的調査」「斎富遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105 岡山県教育委員会 1996
- (4) 日刊工業新聞社「焼結鉱組織写真および識別法」1968  
磁鉄鉱(鉱石)は530～600Hv、ウスタタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイアライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピニルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン(Ti)を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピニルと同定している。それにアルミニナ(Al)が加わり、ウルボスピニルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピニルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。
- (5) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を発する)へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる<sup>(6)</sup>。

この鍛造剥片や粒状滓は極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは

難しい。通常は鍛冶趾の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調査に当たっては、鍛冶炉を中心にはメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗選別、秤量により分布状態を把握できれば、工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる重要な遺物である<sup>(7)</sup>。

鍛造剝片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite:Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、中間層マグнетイト (Magnetite: Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)、大部分は内層ウスタイト (Wustite: FeO) の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450°Cを超えると存在しなく、ウスタイト相は570°C以上で生成されるのはFe—O系平衡状態図から説明される<sup>(8)</sup>。鍛造剝片を王水（塩酸3：硝酸1）で腐食すると、外層ヘマタイト (Hematite: Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) は腐食しても侵されず、中間層マグネットイト (Magnetite: Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>) は黄変する。内層のウスタイト (Wustite: FeO) は黒変する。

鍛打作業前半段階では内層ウスタイト (Wustite: FeO) が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非品出化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

- (6) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報15』(平成3年度) 千葉県房総風土記の丘 1992
- (7) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金屬学的調査」『奈良尾遺跡』今宿バイパス関連埋蔵文化財 調査報告書 第13集 福岡県教育委員会 1991
- (8) 森岡進ら「鉄鋼腐食科学」「鉄鋼工学講座」11 朝倉書店 1975
- (9) 大澤正己「山陰地方における弥生・古墳時代の鉄」—金屬学的見地からのアプローチ—「山陰における鉄・鉄器生産の諸問題」第11回フォーラム講演会(社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学会「鉄の歴史～その技術と文化」フォーラム 和銅博物館 2003

Table 1 供試材の履歴と調査項目

標名	原標名	地點	標定年代	計測值		測量員	備註
				大約(m)	精度(%)		
TM-1	樹木剖面	樹木剖面	1985/9/30	37.63	0.1	張敏	X軸直角
TM-2	樹木剖面	樹木剖面	1985/9/30	108.4	0.1	張敏	Y軸直角
TM-3	樹木剖面	樹木剖面	1985/9/30	44.7	0.1	張敏	Y軸直角
TM-4	樹木剖面	樹木剖面	1985/9/30	63.6	0.1	張敏	Y軸直角
TM-5	土壤	土壤	1985/9/30	12.5	1.0	張敏	Y軸直角
TM-6	土壤	土壤	1985/9/30	10.0	1.0	張敏	Y軸直角
TM-7	土壤	土壤	1985/9/30	10.0	1.0	張敏	Y軸直角
TM-8	土壤	土壤	1985/9/30	10.0	1.0	張敏	Y軸直角
TM-9	土壤	土壤	1985/9/30	—	—	張敏	Y軸直角
TM-10	土壤	土壤	1985/9/30	—	—	張敏	Y軸直角
TM-11	路邊樹(1.5m)	路邊樹(1.5m)	1985/9/30	35.34	0.1	張敏	Y軸直角
TM-12	路邊樹(1.5m)	路邊樹(1.5m)	1985/9/30	35.34	0.1	張敏	Y軸直角

Table 2 供試材の組成

Table 3 出土遺物の調査結果のまとめ

所見	測定測定値									
	Total Fe		電導率 度		MnO <sub>2</sub>		MnO <sub>2</sub> 量 %		Cu	
	Fe	Cr	V	Mo	Al	Si	Ca	Mg	Na	K
TNM-1 極稀釗泥岩	7.7±0.1-0.1±0.2±0.2±0.1 少量のカーボナイト	51.91	14.44	1.82	0.25	0.13	0.06	25.84	-0.01	無品質-基盤-水-火成岩の鉱物岩石
TNM-2 極稀釗泥岩	9.3±0.1-0.1±0.2±0.1 少量のカーボナイト	38.16	14.00	1.27	0.32	0.14	0.10	22.31	0.01	無品質-基盤-水-火成岩の鉱物岩石
TNM-3 極稀釗泥岩	7.8±0.1-0.1±0.2±0.1 少量のカーボナイト	50.41	11.06	0.80	0.21	0.14	0.10	20.38	-0.01	無品質-基盤-水-火成岩の鉱物岩石
TNM-4 硫酸系物質	7.7±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
TNM-5 硫酸系物質	9.1±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
TNM-6 硫酸系物質	9.1±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
TNM-7 硫酸系物質	9.1±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
TNM-8 硫酸系物質	9.1±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
TNM-9 硫酸系物質	9.1±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
TNM-10 硫酸系物質	9.1±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
乙子 利村砂岩 (4)	7.7±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
石室 高瀬砂岩 (6)	6.6±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
乙子 利村砂岩 (4) 硫酸系物質	7.7±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質
石室 高瀬砂岩 (6) 硫酸系物質	6.6±0.1-0.1±0.2±0.1±0.1±0.1 硫酸系物質	-	-	-	-	-	-	-	-	硫酸系物質-硫酸系物質-硫酸系物質

1:Herseyite(FeO·Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) ,M:Magnetite(FeO<sub>4</sub>) ,W:Wastite(FeO) ,U:Uhöspind(2FeO·TiO<sub>2</sub>)

TTM-1

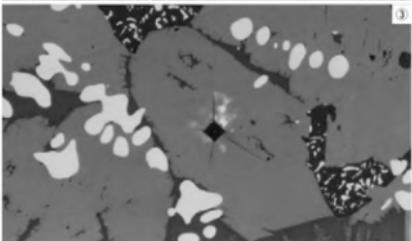
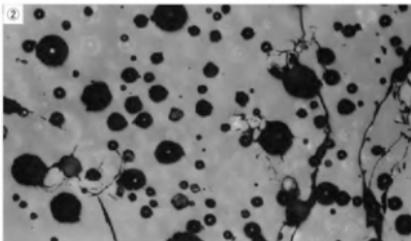
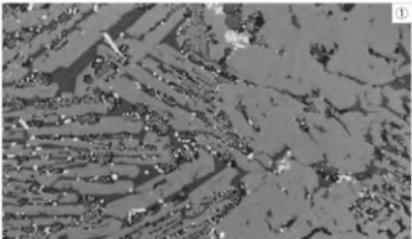
楕形鍛治滓

①×100 ファイヤライト

②×100 ガラス質

③×200 硬度圧痕

670Hv：ファイヤライト



TTM-2

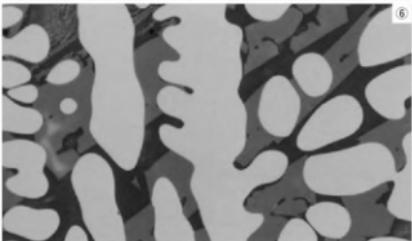
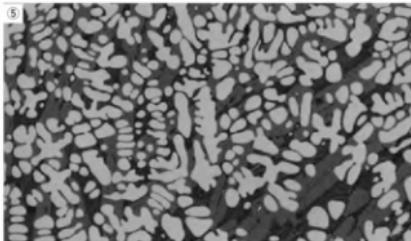
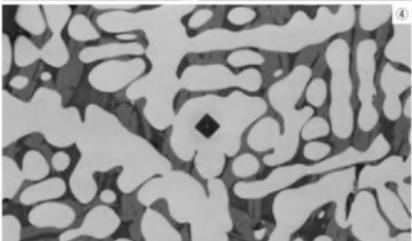
楕形鍛治滓

④×200 硬度圧痕

ウスタイト：509Hv

⑤×100 ⑥×400

ウスタイト＋ファイヤライト



TTM-3

楕形鍛治滓

⑦×200

ウスタイト＋ファイヤライト

硬度圧痕

ウスタイト：492Hv

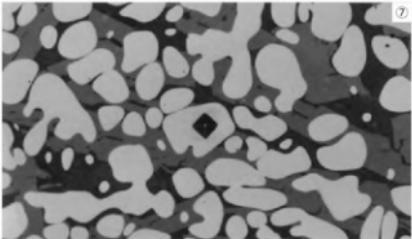
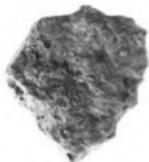


Photo 1 楕形鍛治滓の顕微鏡組織

T T M - 4

再結合滓

- ①×100 付着鍛造剥片
- ②×100 ③×400 王水 etch
- ④×100 鉄滓皮
- ⑤×100 過共析鋼層
- ⑥×400 ⑦×200  
精鍛鍛冶滓層
- ⑧×400 製鍛滓層
- ⑨×100 製鍛滓層

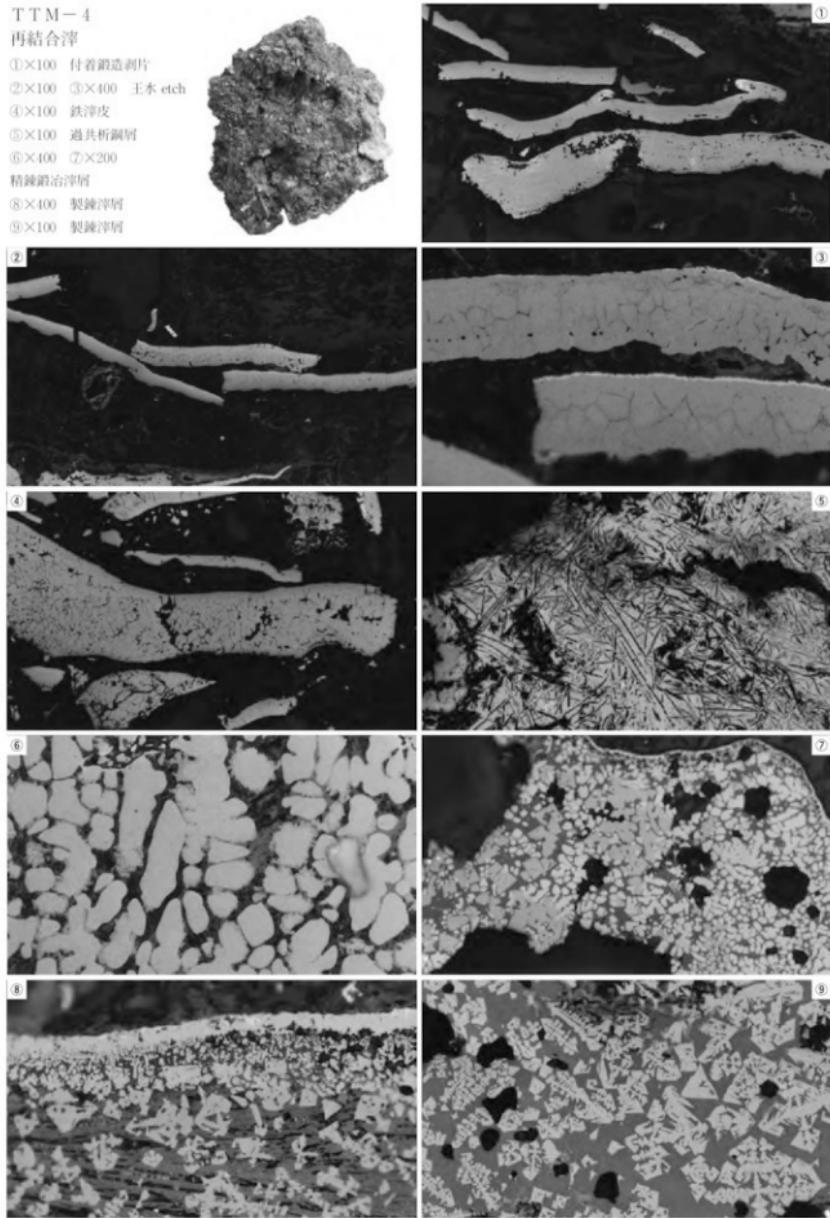


Photo 2 再結合滓の顕微鏡組織

T T M - 5

鉄塊系遺物

①×400 非金属介在物

②×100 表皮スラグ

シュードブルーカイト

③×100 ④×400

過共析鋼 中央横偏析

⑤～⑧硬度圧痕

⑥955Hv ⑦380Hv

⑧389Hv

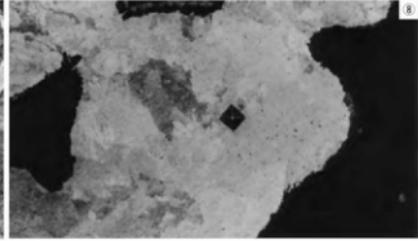
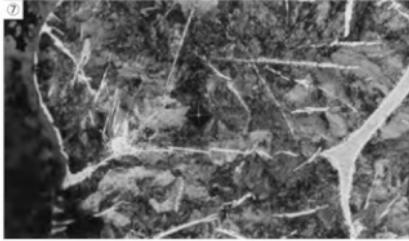
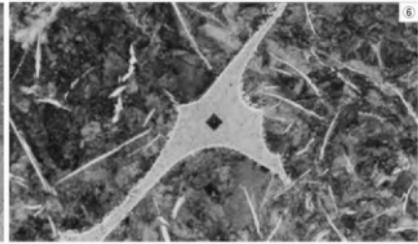
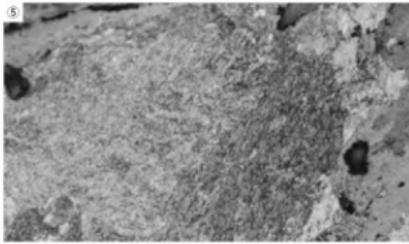
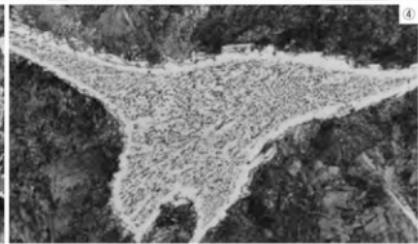
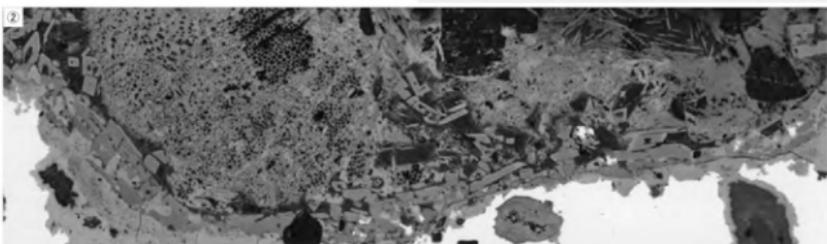
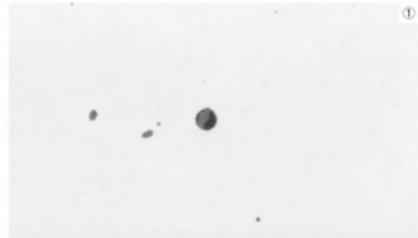
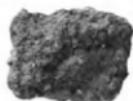


Photo 3 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

TTM-6

鉄塊系遺物

①×400 付着鍛造片

②×100 表皮スラグ

ウスタイト+ファイヤライト

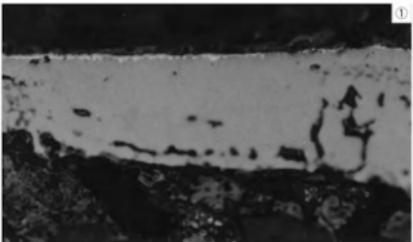
③~⑤×200 硬度圧痕

③98Hv: フェライト

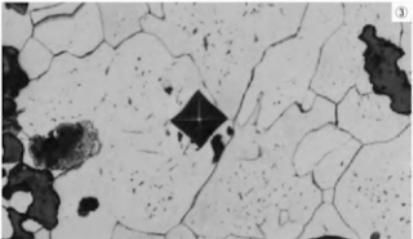
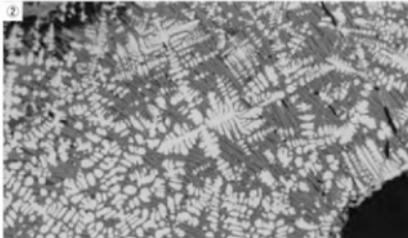
④127Hv

フェライト・パラライト

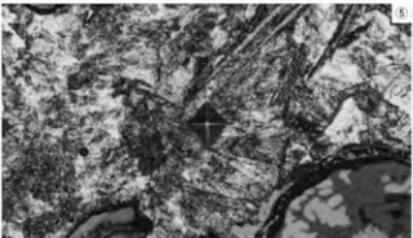
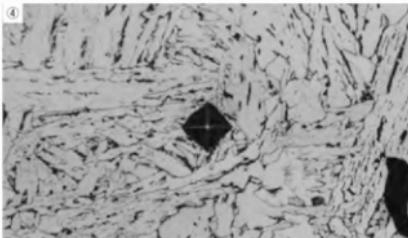
⑤180Hv: 共析域



②



④



TTM-7

鉄塊系遺物

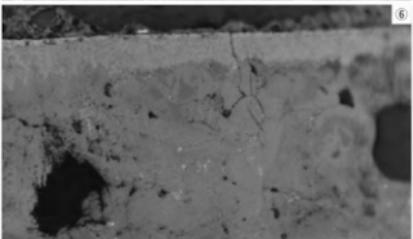
⑥×400 付着鍛造片

⑦×400 表皮スラグ

ウスタイト+ファイヤライト

⑧×200 硬度圧痕

228Hv: 共析域



⑦

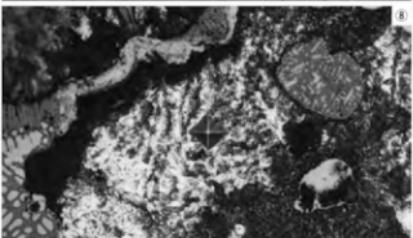
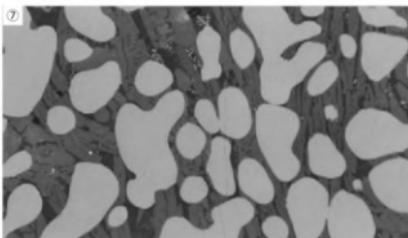


Photo 4 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

TTM-8

羽口

①×100

溶融ガラス中の微小

マグネタイト



TTM-9

鍛冶津

②×200

ウスタイト+ファイヤライト

硬度圧痕

47Hv: ウスタイト



TTM-10-1

粒状津

③×20 (縮小0.7)

マクロ組織

④×50 ウスタイトと錫化鉄

⑤×400 錫化鉄拡大

⑥×400 ウスタイト

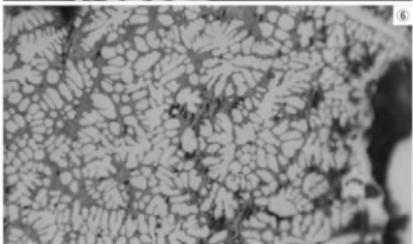
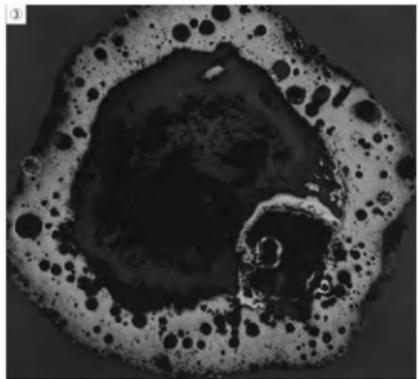
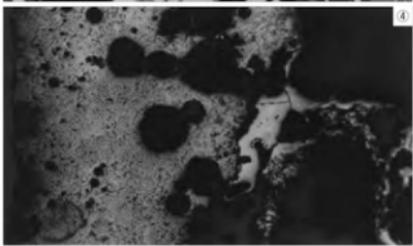
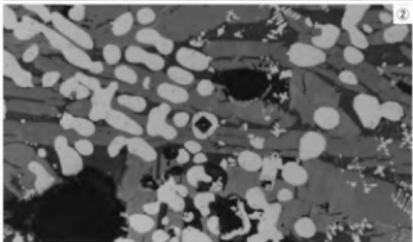
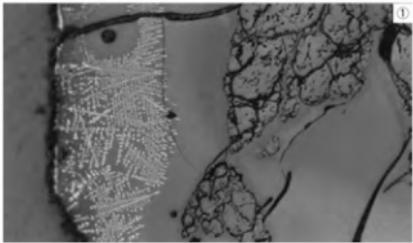


Photo 5 羽口、鍛冶津、粒状津の顕微鏡組織

TTM-10-2

粒状滓

①×20 マクロ組織

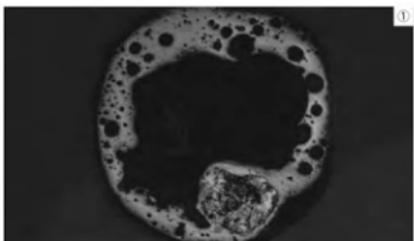
②×100

左下：ウスタイルト・鉄化鉄

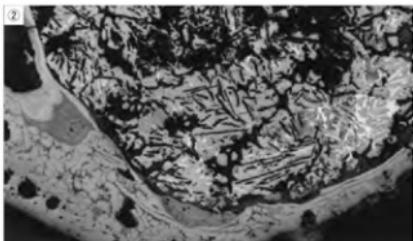
③鉄化鉄

過共析鋼から亜共晶組織

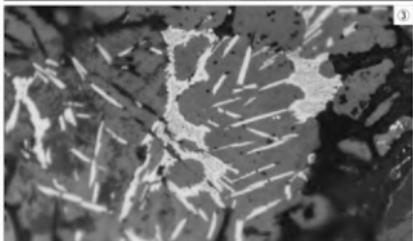
白鉄鉄なりかけ



②



③



TTM-10-3

粒状滓

④×20 マクロ組織

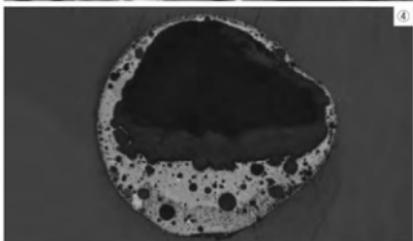
⑤×50 ⑥×100 ⑦×400

ウスタイルト・金屈鉄粒

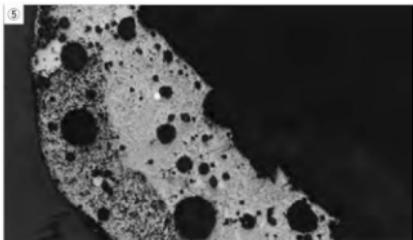
⑧×400 ナイタル etch

金屈鉄粒変化なし

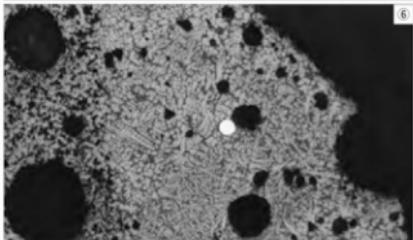
酸化を受けている



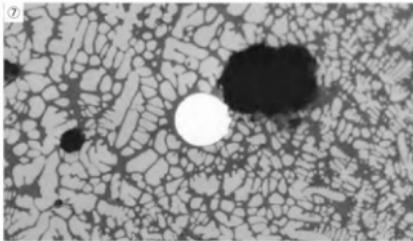
⑤



⑥



⑦



⑧

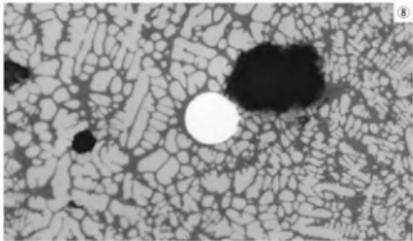


Photo 6 粒状滓の顕微鏡組織

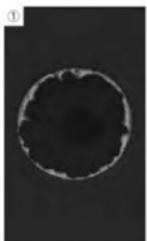
T TM-10-4

粒状滓

①×20 マクロ組織

②×50 ④×400

マグネタイト



参考資料

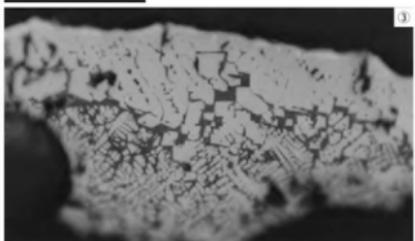
鋳造剥片 3 層分離型模式図



②



③



T TM-11-1

擬似鋳造剥片

(鐵滓皮)

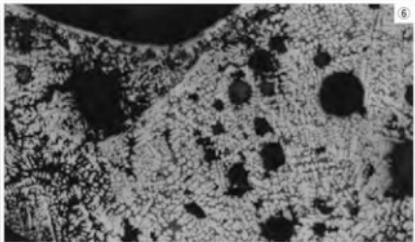
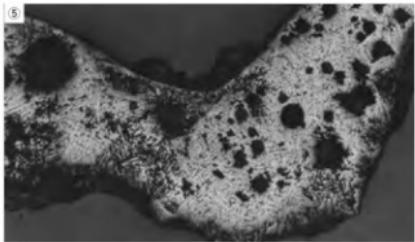
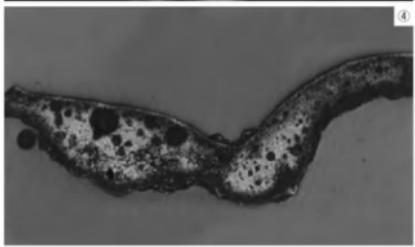


④×20 マクロ組織

⑤×50 ⑥×100 ⑦×400

ウスタイト+ファイヤライト

⑧×400 王水 etch



⑦

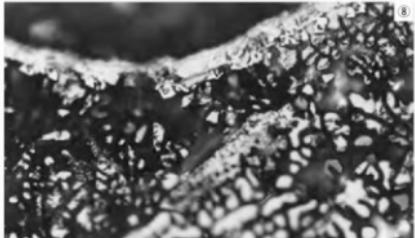
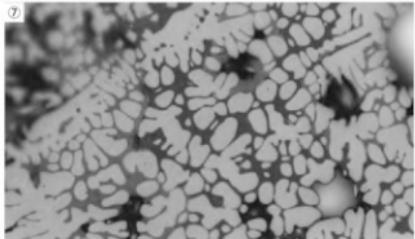


Photo 7 粒状滓と擬似鋳造剥片の顕微鏡組織

T T M - 11 - 2

擬似鍛造剥片

(鉄滓皮か)

⑦×20 マクロ組織

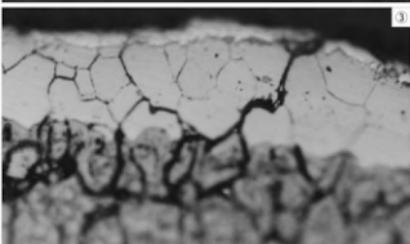
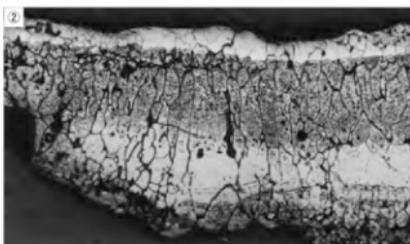
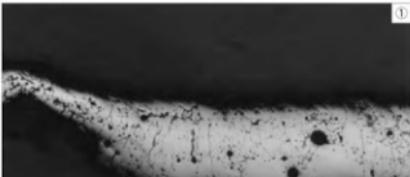
①×50 no etch

②×100 ③×400

王水 etch

外層ヘマタイト、中間層マグ

ネタイト、内層ウスタイト



T T M - 11 - 3

複合鍛造剥片

(2枚圧着か)

⑤×20 マクロ組織

④×100 no etch

⑥×100 ⑦×400

王水 etch

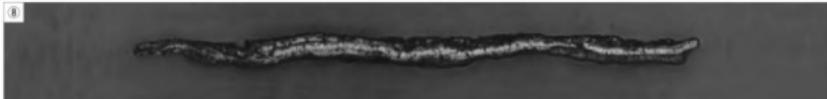
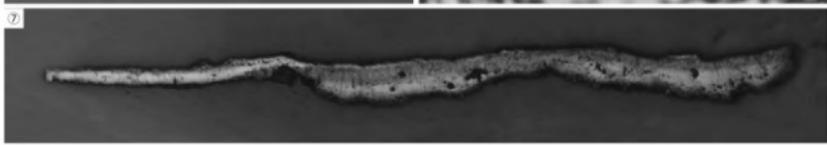
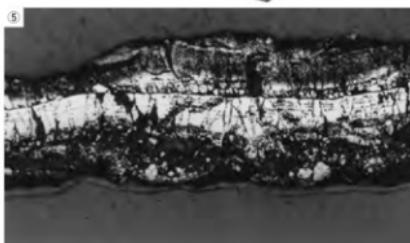
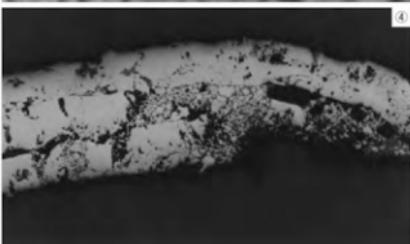


Photo 8 擬似鍛造剥片と複合剥片の顕微鏡組織

T TM-11-4

鍛造剥片

⑥×20 マクロ組織

⑦×400 王水 etch

3層分離型剥片



T TM-11-5

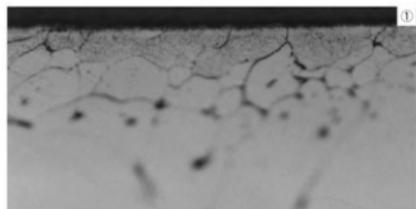
鍛造剥片

⑥×20 マクロ組織

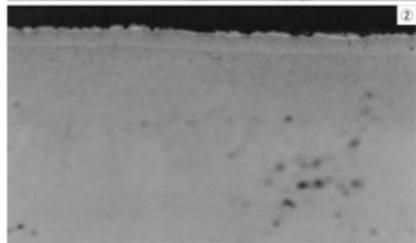
②×400 no etch

③×100 ④×400 王水 etch

3層分離型剥片



①



②

③



③



④

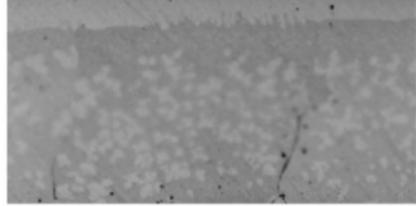
T TM-11-6

鍛造剥片

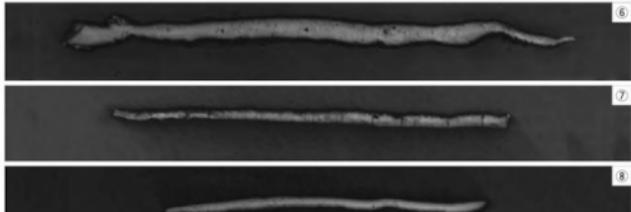
⑧×20 マクロ組織

⑤×400 王水 etch

3層分離型剥片



⑤



⑥

⑦

⑧

Photo 9 鍛造剥片の顕微鏡組織

HR I - 1 (平岩古墳)

鉱石製鍊滓

- ①×50 ②×100 木炭  
③×100 ④×400 白色：鉱石  
短柱状灰色：ファイアライト  
⑤×100 ⑥×400  
⑦×200 硬度圧痕  
⑧771Hv：ファイアライト  
⑨752Hv：ファイアライト

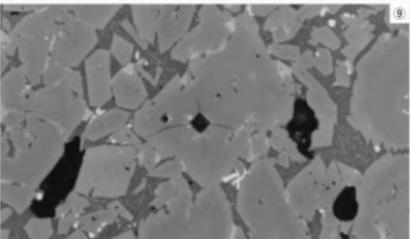
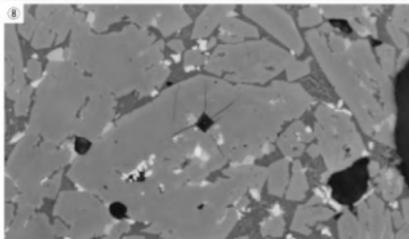
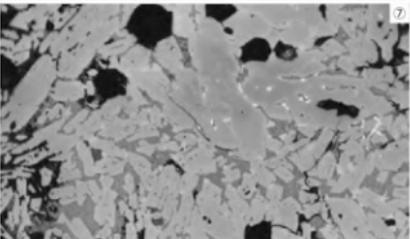
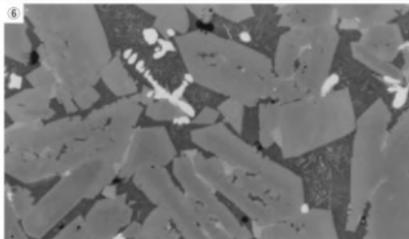
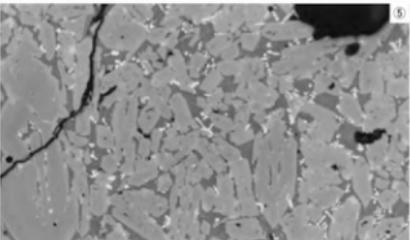
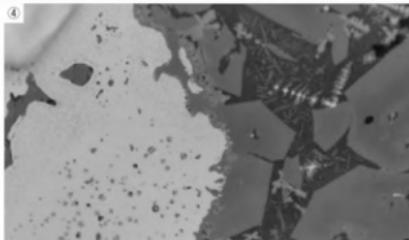
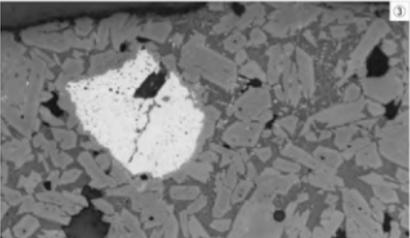
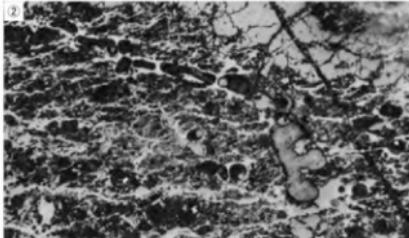
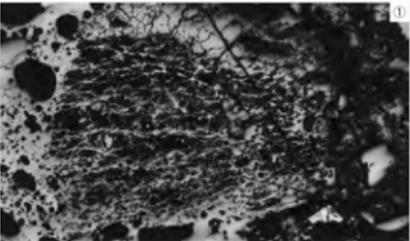
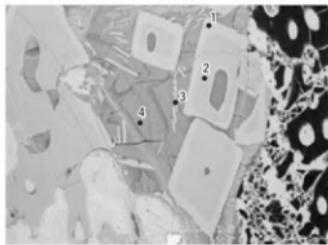


Photo10 平岩古墳出土鉱石製鍊滓の顕微鏡組織

COMP  
×700



Element	1	2	3	4
MgO	1.354	1.581	1.898	1.772
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.147	1.129	1.025	9.143
SiO <sub>2</sub>	0.075	0.074	0.878	52.835
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.013	-	0.019	0.255
S	-	0.097	-	0.040
K <sub>2</sub> O	0.016	0.017	0.241	1.450
CaO	0.031	0.059	0.601	6.799
TiO <sub>2</sub>	53.745	72.470	49.302	2.742
FeO	0.833	0.266	0.907	0.617
ZrO <sub>2</sub>	43.713	21.580	43.473	24.442
CuO	-	0.140	0.064	0.115
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.059	-	-	0.035
Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.562	3.916	1.359	0.119
As <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.056	0.033	-	-

Total 101.596 102.042 104.787 100.372

TTM-5-1

COMP  
×1000



Element	5
MgO	-
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	-
SiO <sub>2</sub>	0.009
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	17.888
S	0.521
K <sub>2</sub> O	0.015
CaO	-
TiO <sub>2</sub>	-
FeO	125.911
ZrO <sub>2</sub>	0.010
CuO	0.045
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.044
As <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.049

Total 144.391

Photo11 鉄塊系遺物(TTM-5)のEPMA調査結果

### 付載3 遺物観察表

#### 来光寺跡出土遺物

土器

番号	出土 地区	構造・土層名	種別	器種	計測値 (cm)	寸法 底径 器高	色調	状態	形態・手法の特徴など
									口縁 内縁
1	A区	基壇建物2 周辺	陶器(備前)	甕	(38.0)	97.5YR4/2(灰褐色) P2.5YR3/1(黒褐色) P2.5YR4/4(にじみ黒)		口縁斜り返し、玉縁 口縁部内縁ヘラ記号 内縁無	
2	A区	基壇建物2 周辺	陶器(備前)	甕	(40.0)	外: 内: 10YR4/2(灰褐色) ~ 10YR4/1(褐褐色) P2.5YR5/1(褐褐色)		口縁斜り返し、玉縁 内縁部内縁ハケ痕 内縁部内縁ヘラケズリ	
3	A区	瓦踏1	土師器	碗	(8.8)	10YR8/3(浅黄褐色)			わずかな内縁斜り台面
4	A区	瓦踏1	土師器	碗	(3.8)	10YR8/3(浅黄褐色)			わずかな内縁斜り台面
5	A区	瓦踏1	土師器	碗	(4.0)	10YR7/3(にじみ黄褐色)			わずかな内縁斜り台面
6	A区	瓦踏1	須恵器(備前)	皿	7.7	1.9 P2.5Y6/1(黄褐色) P2.5Y6/1(灰)		ほぼ底部赤切り 定形	口縁部に埋付着
7	A区	瓦踏1	須恵器(備前)	皿	(7.6)	1.9 5Y6/1(灰)		底部赤切り 口縁部に埋付着	
8	A区	瓦踏1	須恵器(備前)	皿	7.8	15.0 1.5~1.8 10Y5/1(灰)		底部赤切り 口縁部に埋付着	
9	A区	瓦踏1	須恵器(備前)	皿	(7.4)	1.9 7.5Y5/1(灰) P2.5Y5/1(灰白)		底部赤切り 口縁部に埋付着	
10	A区	瓦踏1	須恵器(備前)	皿	(7.2)	1.8 5Y6/1(灰)		底部赤切り 口縁部に埋付着	
11	A区	瓦踏1	須恵器(東洋系)	鉢		外: 5Y5/1(灰) 内: 5Y5/6/2(灰オリーブ)			
12	A区	瓦踏1	土師器	皿	(12.6)	(5.2) (3.8) 10YR7/3(にじみ黄褐色)		定形 復元	底部赤切り 底部赤切り
13	A区	瓦踏1	土師器	皿	(7.6)	外: 10YR6/4(にじみ黄褐色) 内: 5Y5B5/4(にじみ黄褐色) P2.5Y6/3(にじみ黄褐色)			底部赤目板
14	A区	瓦踏1	土師器	皿	(9.8)	(7.4) (1.4) 外: 10YR6/3(にじみ黄褐色) 内: 10YR5/3(にじみ黄褐色)			底部ヘラ切り
15	A区	瓦踏1	土師器	皿	7.4	5.8 1.3~1.4 10YR6/3(にじみ黄褐色) 10YR5/3(にじみ黄褐色)		ほぼ 定形	底部ヘラ切り 底部ヘラ切り
16	A区	瓦踏1	土師器	皿	(7.6)	(6.0) (2.0) 10YR7/3(にじみ黄褐色) P2.5Y8/4(にじみ黄褐色)			底部ヘラ切り
17	A区	瓦踏1	土師器	皿	(7.4)	(5.4) 1.4 10YR7/4(にじみ黄褐色)			底部ヘラ切り 口縁部に埋付着
18	A区	瓦踏1	土師器	皿	(4.4)	10YR7/3(にじみ黄褐色)		底部ヘラ切り 口縁部に埋付着	
19	A区	瓦踏1	瓦質土器	鉢	(20.2)	(10.0) (6.7) 5Y5/1(灰) 5Y5/2(灰) 5Y5/7(灰)		定形 復元	外面部指輪正直
20	A区	瓦踏1	瓦質土器	鍋	(34.0)	内: 5Y5/6/3(にじみ黄褐色) 内: 5Y5B5/3(にじみ黄褐色)			胴部に指輪压痕
21	A区	瓦踏1	瓦質土器	羽釜	(34.0)	5.1 P2.5Y5/3(にじみ黄褐色) H2.5Y5/2(暗紅褐色)			胴部に指輪压痕
22	A区	瓦踏1	瓦質土器	羽釜	(27.4)	5.1 P2.5Y5/2(暗紅褐色) H2.5Y6/2(灰)			胴部に指輪压痕
23	A区	瓦踏1	瓦質土器	羽釜	(20.8)	外: 5Y6/1(灰) H5Y6/2(灰オリーブ)			外面部横ハケ残る
24	A区	瓦踏1	瓦質土器	羽釜	(24.4)	9.5 YR6/2(黄褐色) H2.5Y6/2(灰)			胴部に指輪压痕
25	A区	瓦踏1	瓦質土器	羽釜		5.1 H5Y6/1(灰) H2.5Y7/3(灰)			脚部貼付
26	A区	瓦踏1	瓦質土器	火鉢	(29.4)	5.1 P2.5Y5/1(暗紅褐色) H2.5Y7/3(灰)			口縁部露文
27	A区	瓦踏2	染付(肥前)	蓋		2.6			船束文、1780~1840年代
28	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	蓋	9.6	2.8 白			船束文、サギ文 1780~1810年代
29	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	蓋	(9.0)	2.7 NS/0/灰白			1820~1860年代
30	A区	瓦踏2	染付(肥前)	蓋	(9.4)	2.8 NS/0/灰白			外面部指輪灰色印 コニャック印判、18C後半
31	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	碗	11.2	6.3 NS/0/灰白			丸彫形
32	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	碗	10.5	6.5 NS/0/灰白			1780年代~19C前半
33	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	碗	10.1	5.1 NS/0/灰白			1780~19C前半
34	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	碗	9.7	4.9 NS/0/灰白			二重捺印文、18C前半
35	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	碗	14.4	5.7 NS/0/灰白			焼織、高台内側擦痕、藤木
36	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	小碗	9.6	3.6 5.6 7.5Y8/1(灰白)			1780~1810年代
37	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	小碗	8.8	5.0 10Y7/1(灰白)			1780~1810年代
38	A区	瓦踏2	染付(肥前系)	小碗	6.5	5.3 NS/0/灰白			1820~1860年代
39	A区	瓦踏2	陶器(窓西系)	小碗	8.6	4.4 NS/1(灰白)			18C後半~19C初期
40	A区	瓦踏2	染付(肥前)	小碗	7.4	4.1 NS/0/灰白			18C
41	A区	瓦踏2	染付(肥前)	小碗	7.5	4.2 NS/0/灰白			雨落文移入、18C前半
42	A区	瓦踏2	染付(肥前)	小碗	7.2	4.4 白			18C
43	A区	瓦踏2	染付(肥前)	小碗	6.8	2.6 3.5 2.5GY(灰白)			18C
44	A区	瓦踏2	白磁(肥前系)	小碗	6.4	2.8 2.5 5Y8/1(灰白)			18C
45	A区	瓦踏2	白磁(肥前系)	小皿	5.8	2.6 1.7 10Y8/1(灰白)			江戸後期
46	A区	瓦踏2	白磁(肥前)	紅皿	(4.4) (1.0)	1.3 10Y8/1(灰白)			18C後半~19C前半
47	A区	瓦踏2	白磁(肥前)	紅皿	(4.2) (1.2)	1.5 10Y8/1(灰白)			18C後半~19C前半

来光寺跡出土遺物

土器

掘番号	出土 地区	遺構・土器名	種別	器種	計測値 口径 底径		高さ	色調	状態	形態・手法の特徴など
					(cm)					
48	A区 瓦礎2	陶器(焼前)	皿		9.0		外・内10YR8/1 (にじいろ・黄褐色)		19C	
49	A区 瓦礎2	陶器(焼前)	皿		(10.0)		内2.5YR4/4 (にじいろ・黄褐色) 内・外2.5YR4/3 (灰褐色)			
50	A区 瓦礎2	陶器(窯西系)	土瓶蓋	(6.4)	(3.8)		9.5YR4/4 (にじいろ・黄褐色) 9.5YR4/3 (にじいろ・黄褐色)		19C	
51	A区 瓦礎2	瓦質土器	大鉢				9.5YR4/2 (にじいろ・黄褐色)			側面部外露面
52	A区 瓦礎2	陶器(焼前)	圓盤蓋				2.5YR5/3 (にじいろ・赤褐色)			
53	A区 瓦礎2	陶器(焼前)	平鉢	19.1	12.1	4.0	9.5YR3/2 (灰褐色) 新10YR5/1 (灰褐色) - 2.5YR4/3 (にじいろ・赤褐色)			内外面に重ね焼き痕
54	A区 瓦礎2	陶器(窯西系)	深鉢	(27.5)			9.5YR4/2 (灰褐色) 内2.5YR4/2 (灰褐色) - 5YR3/1 (黒褐色) 新10R5/8 (赤)			
55	A区 池	染付(有田)	角鉢	(13.2)			10YR8/1 (灰白色)			内面草文、燒成不良 18C末-19C初期
56	A区 池	染付(有田)	鶴首瓶				10YR8/1 (灰白色)			鶴首草文 18C末-19C初期
57	A区 道2	染付(波佐見)	碗				10YR8/1 (灰白色)			19C初期
58	B区 立石造標	陶器(焼前)	皿	(10.0)	(6.0)		5YR6/4 (にじいろ・褐色)			直筋足切り
59	A区 濟	染付(肥前系)	小碗	(9.6)	(4.0)	5.2	5Y7/1 (灰白色)			明治リープ灰色釉 18C後半
60	A区 濟	染付(肥前)	小碗	(6.4)	(2.6)	3.6	NS8/0 (灰白色)			18C
61	A区 濟	陶器(焼前)					外・内2.5YR4/2 (灰褐色) 新2.5YR4/4 (にじいろ・黄褐色)			肩部に菊花文貼付
62	A区 濟	陶器(肥前系)	深鉢	4.2			11.4 5YR4/3 (にじいろ・黄褐色)			対称形 18C後半-19C前半、肩輪
63	A区 濟	磁器(肥前系)	皿	12.4~ 13		3.5~3.7	5Y7/1 (灰白色)			対称形 高台内うす幅 燒成不良、18C前半-中葉
64	A区 濟	染付(肥前)	香炉	12.3		6.2	N9/1 (白)			はば 18C後半
65	B区 桜ヶ枝建物3	土師器	皿	(8.8)	(5.8)		9.5YR2/4 (にじいろ・褐色) 内・外10YR4/3 (にじいろ・褐色)			底部板目痕
66	B区 炉1	土師器	皿	(13.0)	(9.0)		9.5YR2/3 (にじいろ・褐色) 内・外10YR7/3 (にじいろ・黄褐色)			
67	A区 火葬墓	陶器(焼前)	壺	21.6	20.6	39.4~ 39.6	9.5YR4/2 (灰褐色) 内10YR4/2 (灰褐色) 外2.5YR2/2 (烟灰褐色)			口縁折り返し、玉縁 対称形 微元 側面部外縁に焼け残る 外側底部附近へラケズリ
68	A区 火葬墓周辺	陶器(焼前)	壺	(11.0)	13.0	(27.9)	9.5YR4/3 (にじいろ・褐色) 新10YR4/2 (灰褐色)			対称形 内外面ナデ 微元 外側底部附近へラケズリ
69	A区 火葬墓周辺	陶器(焼前)	壺				9.5YR3/1 (烟灰褐色) 内・外5YR2/2 (灰褐色)			内外面ナデ 内側底部附近自燃釉
70	A区 火葬墓周辺	陶器(焼前)	壺	(11.4)			9.5YR4/1 (黒褐色) 内2.5YR4/2 (灰褐色) 新10R3/1 (烟灰褐色)			内外面ナデ 明治に彌縫き波状文
71	A区 火葬墓周辺	陶器(焼前)	壺	(11.0)	(11.0)		9.5YR3/1 (烟灰褐色) 新2.5YR3/2 (灰褐色)			内外面ナデ 明治に彌縫き波状文 微元 口縁に自然釉
72	A区 火葬墓周辺	陶器(焼前)	壺	13.1	12.3	17.5	外 (赤褐色) 内 (赤褐色) 内・外 (灰褐色)			対・斜面部3か所の沈線帶 対称形 外側底部附近へラケズリ
73	A区 火葬墓周辺	陶器(焼前)	壺	(8.6)	10.3	15.1	9.5YR4/3 (灰褐色) 内・外 (灰褐色) 内・外 (灰褐色)			はば 対・斜面部附近へラケズリ
74	B区 土塼1	土師器	碗	(13.0)	4.9	(5.6)	9.5-10YR7/3 (にじいろ・黄褐色) 新2.5YR4/2 (灰褐色)			内外面ナデ 内側底部附近へラケズリ
75	B区 土塼1	土師器	皿		(10.0)		9.5-10YR6/3 (にじいろ・褐色) 新10YR6/3 (にじいろ・褐色)			底部へラ切り
76	B区 土塼1	土師器	皿		(9.0)		9.5-10YR6/4 (にじいろ・褐色) 内10YR6/3 (にじいろ・褐色) 新5YR6/4 (にじいろ・褐色)			底部へラ切り
77	B区 土塼1	土師器	皿		(10.2)	(9.4)	9.5- 内10YR5/3 (にじいろ・黄褐色) 新7.5YR6/4 (にじいろ・褐色)			底部へラ切りか
78	B区 土塼1	土師器	皿	(8.2)	(6.2)	L. 17	10YR6/3 (にじいろ・褐色) 内10YR6/3 (にじいろ・褐色)			底部へラ切りか
79	B区 土塼1	土師器	皿	(8.0)	(5.4)	1.1	10YR6/3 (にじいろ・黄褐色)			底部へラ切り
80	B区 土塼3	土師器	皿		(6.3)		9.5YR5/3 (にじいろ・黄褐色) 内・外7.5Y7/4 (にじいろ・褐色)			底部へラ切りか
81	B区 土塼4	陶器(焼前)	壺		(45.0)		9.5YR5/4 (にじいろ・黄褐色) 内10YR6/3 (にじいろ・褐色) 新10YR6/2 (灰褐色)			内外面ナデ 外側に自然釉
82	B区 土塼5	瓦質土器	羽釜	(31.6)			外・内N2/1-4/1 (灰) 新7.7/1 (灰褐色)			内外面ナデ及び指揮さえ 内側にハマスが残る
83	B区 土塼5	瓦質土器	羽釜	25.1			9.5Y5/6/1 (灰褐色) 内9.5/1 (灰) 新7.7/1 (灰褐色)			はば 対称形 微元 内側にハマスが残る
84	B区 柱穴	土師器	皿	(7.4)	(5.6)		10YR6/3 (にじいろ・褐色) 内・外10YR6/3 (にじいろ・黄褐色) 新10YR4/1 (烟灰褐色)			底部へラ切り
85	B区 柱穴	土師器	皿	(7.4)	(5.8)	1.4	10YR6/4 (にじいろ・褐色)			底部へラ切り
86	B区 柱穴	土師器	皿	6.9	5.6	1.1~1.3	7.5YR6/4 (にじいろ・褐色)			底部へラ切り
87	B区 包含層	土師器	皿	(9.8)	(6.4)	(L. 15)	7.5YR7/4 (にじいろ・褐色)			底部へラ切り

## 来光寺跡出土遺物

### 土器

番号	出土 地区	遺構・土層名	器種	計測値 (cm)	色調			状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高		
88	B区 柱穴	土師器	皿	(10.8) (8.0)	(12.6)	10YR6/4 (くろい・黄褐色)			底部斜切り
89	D区 柱穴	土師器	皿	(9.6) (5.6)	2.9	902.5YR6/3 (黒)			底部斜切り 内面にヘラ模様
90	A区 柱穴	土師器	灯明皿	9.4		9-10YR6/3 (くろい・黄褐色)			
91	A区 柱穴	土師器	灯明皿	8.9	3.5	1.4 902.5YR6/3 (くろい・黄褐色)			底部斜切り 底部内側上げナデ
92	A区 柱穴	土師器	灯明皿	11.2	1.5	902.5YR6/3 (くろい・黄褐色)			口縁部に堆付着
93	A区 柱穴	土師器	灯明皿	8.4	1.6	902.5YR6/3 (くろい・黄褐色)			口縁部に堆付着
94	D区 柱穴	土師器	盤跡			902.5YR6/3 (くろい・黄褐色)			
95	A区 柱穴	土師器	盤跡			902.5YR6/3 (くろい・黄褐色)			
96	D区 柱穴	陶器 (焼成)	盤跡	(13.0) (12.8)	(8.0)	10YR6/4 (灰褐色)			
97	A区 柱穴	陶器 (焼成)	盤跡	(33.9)	13.8	902.5YR6/4 (くろい・灰褐色)			口縁部に重ね焼き痕 底部内側ヘラケズリ 貼付高台、内面擦耗
98	A区 柱穴	陶器 (焼成)	甕	(18.5)		902.5YR6/3 (くろい・灰褐色)			口縁部に自然釉
99	A区 柱穴	瓦質土器	香炉			902.5YR6/3 (くろい・灰褐色)			外面部神聖文 内面ナデ
100	B区 柱穴	瓦質土器	鍋	21.2		902.5YR6/3 (くろい・灰褐色)			内外面ナデ
101	B区 柱穴	瓦質土器	羽釜	(29.2)		902.5YR6/3 (くろい・灰褐色)			内外面ナデ 外面上に堆付着

### 石製品：S

番号	出土 地区	遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			石材	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	A区 瓦面1	玉		径11.8		11.2	水晶	中世	数珠玉か
S2	B区 土壤1	玉		径11.0		11.0	1.86 水晶	中世	数珠玉か
S3	B区 ピット1	砾石		80.5	36.0	8.0	36.44 泥岩	中古世	全面使用
S4	B区 ピット2	砾石		(57.5)	31.0	20.0	38.00 泥灰岩	中古世	4面使用
S5	B区 ピット3	砾石		(48.0)	30.0	12.0	29.11 泥岩	中古世	上端切削面、最低2面削明

### 土製品：C

番号	出土 地区	遺構・土層名	器種	計測値 (cm)			色調	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
C1	A区 瓦面1	土鍤		6.0	1.5	1.5	7.5YR7/3<くろい・黄褐色>	中世	
C2	A区 瓦面1	土鍤		4.5	1.7	1.7	7.5YR6/3-3<くろい・黄褐色>	中世	
C3	A区 瓦面2	漿皿		4.2		底白		近世	肥前系染付。堅神成形、10C初-幕末

### ガラス製品：G

番号	出土 地区	遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	時期	備考
				最大径	最大厚	孔径				
G 1	B区 柱穴	混合型	玉(数珠玉)	14.5	12.0	4.5	3.56 緑色	中古世	クロムガラス、被熱している	

## 来光寺跡出土遺物

金属製品：M

番号	出土地点	構造・土器名	器種	計測値 (mm)				重さ (g)	材質	時期	備考	
				最大長	最大幅	最大厚	量 (g)					
M1	A区	基盤部物2切刃	刀	(73.0)	21.0	19.0	25.49	鉄	中世			
M2	A区	基盤部物2切刃	刀	(91.0)	13.0	12.0	16.08	鉄	中世			
M3	A区	基盤部物2切刃	刀	(35.0)	(11.0)	8.0	5.26	鉄	中世			
M4	A区	基盤部物2切刃	刀	(54.0)	11.0	8.0	6.28	鉄	中世			
M5	A区	基盤部物2切刃	刀	(44.0)	10.0	17.0	2.83	鉄	中世			
M6	A区	基盤部物2切刃	刀	(39.0)	13.0	8.0	2.73	鉄	中世			
M7	A区	基盤部物2切刃	刀	(26.0)	—	—	1.40	鉄	中世			
M8	A区	刀	刀	(117.0)	(10.0)	11.0	13.17	鉄	中世			
M9	A区	刀	刀	(57.0)	—	7.0	7.05	鉄	中世			
M10	A区	刀	刀	(65.0)	—	12.0	15.0	9.67	鉄	中世		
M11	A区	刀	刀	(56.0)	—	12.0	13.0	15.04	鉄	中世		
M12	A区	刀	刀	(40.0)	14.0	11.0	6.46	鉄	中世			
M13	A区	刀	刀	(32.0)	—	5.0	1.29	鉄	中世			
M14	A区	J-022	鍔	(117.0)	26.5	7.5	102.22	鉄	中世	柄の木質保存		
M15	A区	J-022	鍔	(31.0)	(5.5)	3.0	4.47	鉄	中世			
M16	A区	J-022	鍔	(41.5)	(12.0)	8.0	3.81	鉄	中世			
M17	A区	立石彌模	刀	(50.5)	9.0	7.5	2.98	鉄	中世			
M18	A区	立石彌模	刀	(24.0)	9.0	6.0	1.45	鉄	中世			
M19	A区	立石彌模	刀	(48.8)	6.0	2.7	2.29	鉄	中世			
M20	A区	立石彌模	刀	(50.0)	4.0	5.0	5.50	鉄	中世	先端が削り曲面		
M21	A区	立石彌模	刀	(59.0)	4.4	5.0	4.65	鉄	中世			
M22	A区	立石彌模	刀	(41.0)	6.0	4.4	2.99	鉄	中世			
M23	A区	立石彌模	刀	(19.0)	4.0	3.3	0.56	鉄	中世			
M24	B区	鍔2切目物1	鍔	往 23	—	1.3	2.05	銅	中世	輪郭丸足		
M25	B区	鍔2切目物1	鍔	往 23	—	1.2	2.44	銅	中世	圓弧丸足		
M26	B区	印	刀	(65.0)	13.0	9.0	8.18	鉄	中世			
M27	B区	印	刀	(49.0)	13.0	8.0	5.76	鉄	中世			
M28	B区	印	刀	(24.0)	2.0	6.0	3.14	鉄	中世			
M29	B区	印	刀	(32.0)	6.0	3.0	2.53	鉄	中世			
M30	B区	印	刀	(18.0)	—	3.0	1.00	鉄	中世			
M31	B区	上彌模	鍔	(23.0)	21.0	6.5	4.14	銅	中古世			
M32	B区	上彌模	鍔	(17.0)	15.5	3.9	1.61	銅	中古世			
M33	B区	上彌模	鍔	(102.0)	12.0	15.5	28.13	鉄	中世			
M34	B区	上彌模	鍔	(41.5)	16.0	4.5	8.86	鉄	中世	先端が鋸齿状に削曲		
M35	B区	上彌模	小形	(44.0)	6.0	1.5	3.52	鉄	中世	平たい表面		
M36	B区	上彌模	鍔	往 24	—	1.3	2.05	銅	中世			
M37	A区	包合型	鍔	(102.0)	36.0	4.5	25.56	鉄	中古世	方頭式		
M38	B区	ピット	鍔?	—	37.0	20.0	21.70	銅	中古世	基部折り返し		
M39	A区	包合型	小形	—	42.0	21.0	13.16	鉄	中古世	基部折り返し		
M40	A区	包合型	小形	—	39.0	17.0	20	37.55	鉄	中古世	両端折り返し	
M41	A区	包合型	小形	—	31.0	16.0	1.0	11.43	鉄	中古世		
M42	B区	包合型	鍔	—	29.8	34.7	9.2	14.72	鉄	中古世		
M43	B区	包合型	鍔	—	26.5	28.5	6.5	6.68	鉄	中古世		
M44	A区	包合型	小形	—	25.0	9.0	9.0	3.07	鉄	中古世	右空状、合せ口あり	
M45	A区	包合型	針?	—	21.0	2.0	2.0	0.18	鉄	中古世		
M46	A区	包合型	鍔	—	65.0	110.0	9.0	112.35	鉄	中古世		
M47	A区	包合型	鍔	—	(181.0)	15.0	15.0	37.55	鉄	中古世		
M48	B区	包合型	鍔	—	(75.0)	15.5	6.5	38.94	鉄	中古世	平たい表面	
M49	B区	ピット	鍔	—	(29.0)	17.0	10.5	5.75	鉄	中古世		
M50	B区	強張型	鍔	—	(70.2)	9.0	7.5	11.11	鉄	中古世		
M51	B区	強張型	鍔	—	(72.2)	6.8	5.9	1.80	鉄	中古世		
M52	B区	強張型	鍔	—	(102.0)	14.0	11.0	10.00	鉄	中古世		
M53	B区	強張型	鍔	—	(35.5)	14.0	11.0	6.76	鉄	中古世		
M54	B区	強張型	鍔	—	(35.0)	13.0	7.5	3.26	鉄	中古世		
M55	B区	ピット	鍔	—	(54.7)	10.5	10.5	5.32	鉄	中古世		
M56	C区	包合型	鍔	—	(58.0)	10.5	11.0	9.09	鉄	中古世		
M57	A区	包合型	鍔	—	(50.0)	9.5	10.0	9.12	鉄	中古世		
M58	A区	包合型	鍔	—	(37.0)	8.0	5.0	4.65	鉄	中古世		
M59	A区	包合型	鍔	—	(54.0)	7.5	10.0	6.43	鉄	中古世		
M60	A区	包合型	鍔	—	(64.0)	8.0	10.0	7.84	鉄	中古世		
M61	A区	包合型	鍔	—	(57.0)	9.5	8.0	4.24	鉄	中古世		
M62	D区	ピット	鍔	—	(37.0)	10.5	(5.5)	3.17	鉄	中古世	屈曲	
M63	A区	包合型	鍔	—	(37.0)	10.0	5.0	2.64	鉄	中古世	屈曲	
M64	A区	包合型	鍔	—	4.8	8.5	(4.0)	4.50	鉄	中古世	先端が溝状に屈曲	
M65	D区	ピット	鍔	—	(29.0)	10.0	6.5	2.36	鉄	中古世		
M66	A区	包合型	鍔	—	(41.5)	(12.0)	8.0	3.81	鉄	中古世		
M67	D区	包合型	鍔	—	(43.2)	6.1	7.3	3.02	鉄	中古世		
M68	A区	包合型	鍔	—	(87.2)	5.0	4.9	7.50	鉄	中古世		
M69	A区	包合型	鍔	—	(62.0)	8.0	4.5	4.26	鉄	中古世		
M70	A区	包合型	鍔	—	(24.0)	8.0	(6.0)	1.38	鉄	中古世		
M71	A区	包合型	鍔	—	(31.0)	8.5	(5.0)	1.87	鉄	中古世		
M72	B区	ピット	鍔	—	(35.0)	7.0	4.5	2.21	鉄	中古世		
M73	B区	ピット	鍔	—	(53.5)	4.0	6.0	4.48	鉄	中古世		
M74	B区	包合型	鍔	—	(72.0)	11.0	10.5	1.80	鉄	中古世	屈曲	
M75	A区	包合型	鍔	—	最大径 16.2	—	8.1	8.45	鉄	中古世	つぶれた形状	
M76	A区	包合型	鍔	—	最大径 13.1	—	10.0	3.10	鉄	中古世		
M77	A区	包合型	鍔	—	最大径 11.1	—	10.3	6.75	鉄	中古世		
M78	C区	包合型	鍔	—	最大径 11.2	—	6.8	4.45	鉄	中古世	つぶれた形状	
M79	A区	包合型	鍔	—	24	—	1.2	2.66	銅	中古世		
M80	A区	包合型	鍔	—	24	—	1.6	3.22	銅	中古世	天竺丸足	
M81	C区	ピット	鍔	—	24	—	1.2	2.40	銅	中古世	亞宋通足	
M82	C区	ピット	鍔	—	25	—	1.5	1.28	銅	中古世	亞宋通足	
M83	B区	包合型	鍔	—	24	—	1.5	2.54	銅	中古世	輪郭丸足	
M84	A区	包合型	鍔	—	24	—	1.2	2.71	銅	中古世	輪郭丸足	
M85	A区	包合型	鍔	—	23	—	1.1	2.47	銅	中古世	輪郭丸足	
M86	A区	包合型	鍔	—	23	—	1.3	3.25	銅	中古世	元貧通足	
M87	C区	包合型	鍔	—	24	—	1.5	2.21	銅	中古世	元貧通足	
M88	B区	包合型	鍔	—	24	—	1.2	2.35	銅	中古世	元祐通足	
M89	A区	包合型	鍔	—	24	—	1.1	2.22	銅	中古世	致和通足	

## 来光寺跡出土遺物

金属製品：M

番号	出土 地点	造形・土層名	器種	計測値 (mm)	重量 (g)	材質	時期	備考
				最大長 幅	最大厚			
M90	A区	瓦含鉢	鉄	径 25	1.4	2.41	銅	中古世 水素通電
M91	A区	瓦含鉢	鉄	径 21	1.0	1.62	銅	中古世 水素通電
M92	A区	瓦含鉢	鉄	径 24	1.1	1.46	銅	中古世 銅(?)
M93	A区	瓦含鉢	鉄	径 24	1.3	2.77	銅	中古世 銅水通電(古鏡赤)
M94	A区	瓦含鉢	鉄	径 23	1.2	3.20	銅	中古世 銅水通電(古鏡赤)
M95	A区	瓦含鉢	鉄	径 25	1.3	2.97	銅	中古世 銅水通電(古鏡赤)
M96	A区	瓦含鉢	鉄	径 24	1.0	1.49	銅	中古世 銅水通電(古鏡赤)

瓦：R

番号	出土 地点	造形・土層名	器種	計測値 (cm)	色調	時期	備考
				最大長 幅	最大厚		
R1	A区	瓦組1	軒丸瓦	(26.0) 13.4	瓦当様 13.4	四・G26.5/1<灰> 四10Y37.5/2<灰白>	中世 白面ナデ 瓦面赤切り刷、布日、輪縁面取り
R2	A区	瓦組1	軒丸瓦	13.3	瓦当様	四・G26.5/1<灰> 四10Y37.5/2<灰白>	中世 白面ナデ 瓦面赤切り刷、布日、輪縁面取り
R3	A区	瓦組1	軒丸瓦	13.3	瓦当様	四2.5Y5/2<灰黄> 四2.5Y5/3<にい黄> 四2.5Y7/1<灰白>	中世 白面ナデ 瓦面赤切り刷、布日 瓦当面ハレ秒
R4	A区	瓦組1	軒丸瓦	13.4	瓦当様	四・G2.5Y5/2<暗灰黄> 四2.5Y6/2<灰黄>	中世 白面ナデ、瓦当面ハラレ秒
R5	A区	瓦組1	軒丸瓦	13.4	2.5Y7/3<浅黄>	中世 白面ナデ、瓦当面ハラレ秒	
R6	A区	瓦組1	軒丸瓦	13.4	5Y7/1<灰白>	中世 白面ナデ	
R7	A区	瓦組1	軒平瓦	24.3	四・G23.3/1<暗灰> 四N6/1<灰>	中世 白面布日、ナデ消し 白面格子目タキキ、ハナレ秒	
R8	A区	瓦組1	軒平瓦	24.3	1.9	四・G23.3/1<暗灰> 四N6/1<灰>	中世 白面布日、ナデ消し 白面格子目タキキ、ハナレ秒
R9	A区	瓦組1	軒平瓦	24.3	四・G23.3/1<暗灰> 四10Y8/2<灰白>	中世 白面ナデ 上端合面に布日、格子目タキキ残る	
R10	A区	瓦組1	軒平瓦	24.3	四・G2.5Y7/1<灰白>	中世 白面ナデ 上端合面に格子目タキキ残る	
R11	A区	瓦組1	軒平瓦	24.3	四・G23.3/1<暗灰> 四N7/1<灰>	中世 白面ナデ 上端合面に格子目タキキ残る	
R12	A区	瓦組1	軒平瓦	24.3	四・G2.5Y7/2<灰白>	中世 白面ナデ	
R13	A区	瓦組1	丸瓦	32.3	14.5	3.5 四・G27.7/1<灰白>~N5/1<灰> 四2.5Y7/1<灰白>	中世 白面系切り刷、布日 白面ナデ
R14	A区	瓦組1	丸瓦	(33.0)	2.2	2.5Y7/3<浅黄>	中世 白面系切り刷、布日 白面ナデ、玉縁に鉄穴
R15	A区	瓦組1	丸瓦	35.5	3.5	四・G26/1<灰> 四N5/1<灰>	中世 白面系切り刷、布日、吊り緑痕 白面ナデ
R16	A区	瓦組1	丸瓦	(35.4)	2.6	四GY6/2<灰オリーブ> 四・GY6/1<灰>	中世 白面系切り刷、布日、吊り緑痕 白面ナデ
R17	A区	瓦組1	丸瓦	35.5	2.0	四・G2.5Y5/2<灰黄> 四・GY6/1<灰>	中世 白面系切り刷、布日 白面ナデ
R18	A区	瓦組1	平瓦	33.1	26.6	2.7 四・G2.5Y5/3<黄黒> 四GY6/2<灰オリーブ>	中世 白面格子目タキキ、ナデ 四面系切り刷、ナデ
R19	A区	瓦組1	平瓦	32.3	26.2	2.4 四・G2.5Y5/1<黄黒> 四2.5Y6/1<黄黒>~GY6/3<にい黄>	中世 白面格子目タキキ、ナデ 四面系切り刷、ナデ、貫通しない穴2 白面ナデ
R20	A区	瓦組1	平瓦	32.3	25.4	2.3 N6/1<灰>~N4/1<灰>	中世 白面側面压痕 白面系切り刷、格子目タキキ、一部ケズリ 白面ナデ
R21	A区	瓦組1	平瓦	32.4	2.9 四・G26/5/1<灰> 四N6/1<灰>	中世 玉縁に鉄穴 白面ナデ	
R22	A区	瓦組1	平瓦	33.1	24	四・G26/5/1<灰> 四N6/5/1<灰>	中世 白面格子目タキキ、ハナレ秒 白面ナデ
R23	A区	瓦組1	平瓦	22.2	2.2 N5/1<灰>	中世 白面格子目タキキ、鉄穴 白面ナデ	
R24	A区	瓦組1	平瓦	32.3	2.1 四・G2.5Y6/2<灰黄> 四2.5Y7/3<灰黒>	中世 白面布日、ナデ 白面格子目タキキ、ハナレ秒	
R25	A区	瓦組1	平瓦	32.5	1.9 四・G26/4/1<灰>~10YIG/2<にい黄> 四2.5Y6/1<灰>	中世 白面布日、ナデ 白面格子目タキキ、ハナレ秒	
R26	A区	瓦組1	平瓦	21.9	2.9 四・G2.5Y6/1<灰> 四2.5Y6/1<灰>	中世 白面布日、ナデ 白面格子目タキキ、ハナレ秒	
R27	A区	瓦組1	鬼瓦	33	1.9 四・G2.5Y4/1<黄黒> 四2.5Y7/3<浅黄>	中世 タテ棒格子目タキキ、ハナレ秒	
R28	A区	瓦組1	鬼瓦	9.3	1.9 四10YIG/2<灰黄> 四2.5Y4/1<黄黒> 四2.5Y7/3<にい黄>	中世 斜筋5.5cm、高さ約6.5cmの突起 上端は弧を描く	
R29	A区	瓦組1	契斗瓦	22.0	2.2 四・G2.5Y5/0<灰> 四10YIG/4<にい黄>	中世 手丸分筋、2点の複合 白面布日、ナデ 白面格子目タキキ、ハナレ秒	
R30	A区	瓦組1	契斗瓦	12.7	1.9 四・G2.5Y4/0<灰> 四2.5Y5/1<灰白>	中世 手丸分筋 白面布日、ナデ 白面格子目タキキ、ハナレ秒	
R31	A区	瓦組1	契斗瓦?	14.1	1.8 外・G2.5Y3/1<オリーブ黒> 四10YIG/2<にい黄>	中世 両面コピキ板	
R32	A区	瓦組2	軒丸瓦	27.5	13.6 外・G2.5Y7/1<灰白>	近世 瓦当三巴文 珠文帶に「束頭」状陽刻	
R33	A区	瓦組2	軒丸瓦	27.5	外・G2.5Y4/1<黄黒> 四2.5Y6/2<灰黄>	近世 瓦当三巴文	
R34	A区	瓦組2	軒平瓦	3.9	外・GY6/1<オリーブ黒> 四GY5/2<灰オリーブ>	近世 瓦当唐草文	
R35	A区	瓦組2	軒平瓦	4.0	外・GY6/1<オリーブ黒> 四GY5/2<灰オリーブ>	近世 瓦当唐草文	
R36	A区	瓦組2	軒平瓦	3.8	外・GY6/2<灰オリーブ黒> 四GY6/2<灰オリーブ>	近世 瓦当唐草文	

## 来光寺遺跡出土遺物

土器

掘削番号	出土地区	造構・土層名	器種	計測値(cm) 口径 底径 器高	色調	状態	形態・手法の特徴など	
1	A区	聖穴住居1	弥生土器	高杯	16.5	内・新25YR6/6(赤橙) 黒芯2N2/1(黒)		
2	A区	聖穴住居1	弥生土器	高杯		95Z5YR5/6(明赤闇) 内25YR6/6(橙) 黒10R3/6(赤)	外輪沈縫文	
3	A区	聖穴住居1	弥生土器	高杯		7.5YR6/5/4(に赤い橙)	外輪ハラミガキ 内面横方向のヘラケズリ	
4	A区	聖穴住居1	弥生土器	器台		外・内25YR6/6(橙) 黒7.5YR6/2(灰黒)	外輪ハラミガキ後文、円縫文	
5	A区	聖穴住居1	弥生土器	器台		外・9R2.5YR6/6(橙) 内5YR7/6(橙)	外輪沈縫文 空孔	
6	A区	聖穴住居2	弥生土器	壺		5YR5.5/6(明赤闇)	口縁部凹縫文、新目文、円形浮文 頭部に削出突葉	
7	A区	聖穴住居2	弥生土器	壺	14.7 6.0 (27.2)	97Z5YR6/4(12.5cm・橙) 内10YR4/2(灰黒) 黒2N2.5/1(黒)	完形 復元	口縁部削り目文 外輪ハラミガキ 内面下ナダ、下手ハラケズリ
8	A区	段状造構2	弥生土器	壺	36.0	95YR6/6(橙) 内10YR6/3(に赤い黄橙) 黒7.5YR6/4(に赤い橙)	L壁ハラミガキ	外輪ハラミガキ 内面カメラ、剥落文 内面ナダ
9	A区	段状造構2	弥生土器	壺または甕	7.2	外・内10YR6/3(に赤い黄橙) 黒7.5YR5/3(に赤い橙)	外輪ハラミガキ 内面カメラ	
10	A区	土塹3	弥生土器	壺または甕	5.0	97.5YR6/4(12.5cm・橙) 内・新10YR4/1(灰黒)	外輪ハラミガキ 内面ハラケズリ	
11	A区	土塹3	弥生土器	壺または甕	5.0	97.5YR5/1(灰黒) 内10YR5/1.5(黒) 黒10R6/6(赤)	外輪ハラミガキ 内面ナダ	
12	B区	包含層	弥生土器	壺	11.7	97.5YR6.5/6(橙) 内・新10YR6/4(に赤い黄橙)	口縁部凹縫文 外輪鉢化、内面ナダ	
13	B区	柱穴	弥生土器	壺		95YR6/5.5/6(橙) 内NA1/1(灰) 黒5YR7/4(に赤い橙)～10YR7/3(に赤い黄橙)	外輪ハラミガキ後、沈縫文、彌縫文 内面頭部ナダ、脚部ヘラケズリ	
14	B区	包含層	弥生土器	器台		7.5YR6/4(に赤い橙)	外輪ハラミガキ 内面壓押さえ、ヘラケズリ	
15	B区	柱穴	弥生土器	壺		外・内10YR6/4(に赤い黄橙) 黒10YR5/2(灰黒)	外輪ハラミガキ 内面ハラケ	
16	B区	包含層	弥生土器	壺		10YR6/3(に赤い黄橙)	外輪ハラミガキ 内面ナダ	
17	B区	包含層	弥生土器	甕	11.0	2.5YR6/6(明赤闇)	内輪部付近指揮さえ	
18	B区	包含層	弥生土器	甕	13.8	5YR6/6(橙)	外輪ハラ 内面壓押さえ、ナダ	
19	B区	包含層	弥生土器	壺	6.7	92.5Y5/2(暗黄橙) 内2.5Y6/1(黄灰) 黒*	外輪ハラ 内面壓押さえ、ナダ	
20	B区	包含層	弥生土器	壺	5.2	外10YR7/4(に赤い黄橙) 内・新10YR5/3(に赤い黄橙)	外輪ハラミガキ 内面ハラケズリ、ナダ	
21	B区	包含層	弥生土器	高杯	18.8	5YR6/6(橙)	外輪ハラ 内面壓押さえ、ナダ	
22	B区	包含層	弥生土器	高杯	23.2	外・新10YR7/4(に赤い黄橙) 内10YR6/4(に赤い黄橙)	外輪ハラミガキ 内面ナダ	
23	B区	包含層	弥生土器	高杯	(28.0)	10YR6/4(に赤い黄橙)	外輪ハラミガキ 内面ナダ	
24	B区	包含層	弥生土器	高杯		10YR6/4(に赤い黄橙)	外輪ナダ 内面ハラケズリ	
25	B区	包含層	弥生土器	器台		10YR6/4(に赤い黄橙)	内輪部ナダ 外輪ハラミガキ	
26	A区	包含層	弥生土器	器台	(30.0)	9.0YR8/2(灰白) 内10YR8/2.5(淡黄橙) 黒NS5/1(赤)	外輪凹縫文、ハラミガキ後文	
27	A区	段状造構5	須恵器	杯	(12.4)	5Y7/1(灰白)		
28	C区	土塙4	土塙器	甕	18.0	外5YR7/4(に赤い橙)～25YR7/6(橙) 内7.5YR6/3(に赤い・黄) 黒2.5YR6/6(橙)	外輪赤い縫ハケ 口縁部内面縫・横・横ハケ 脚部凹縫模ナダ	
29	C区	土塙4	土塙器	甕	20.5	95YR6/6(橙) 内7.5YR6/4(に赤い・橙) 黒2.5YR6/6(橙)	外輪ハラ 口縁部内面縫ハケ 脚部内面縫ナダ	
30	C区	土塙4	土塙器	甕	28.0	94YR6/4(に赤い・黄橙) 内・新10YR3/3(に赤い・黄橙)	外輪赤い縫ハケ 内面ナダ	
31	B区	包含層	須恵器	杯	(12.0) (4.0)	9.5Y5/1(灰) 黒NS5/1(灰)	底部凹縫ハラケズリ	
32	B区	包含層	須恵器	蓋		95Y6/1(灰) 内・新8Y7/1(灰白)	端部所り返し不規則	
33	C区	包含層	須恵器	杯	(14.0)	5Y6/1(灰)		
34	B区	包含層	須恵器	杯		2.5Y6/1(黄灰)	貼付高台	
35	C区	包含層	須恵器	杯	(9.6)	95Y5/1(灰) 内・新2.5Y6/2(灰黄)	貼付高台	

来光寺遺跡出土遺物

土器

番号	出土 地区	遺構・土層名	器種	器種	計測値(cm)			色調	状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	高さ			
36	C区	包含層	須恵器	杯		(8.8)	外2.5Y6/3(にぶい黄)	内・外2.5Y6/3(灰黄)		貼付高台
37	C区	包含層	須恵器	杯		(14.4)	外2.5Y7/3(灰黄)	内・外2.5Y7/2(灰黄)		
38	B区	包含層	須恵器	甕			外・内2.5Y7/2(灰黄)	内・外2.5Y7/2(灰黄)		
39	C区	包含層	土師器	甕	(14.6)	(6.2)	(4.4)	10Y8R/2(灰白)		
40	A区	獨立建物1	土師器	甕	11.2	6.2	2.6	10Y8R/4(にぶい黄澄)		
41	A区	獨立建物1	陶器(瀬戸)	擂鉢				外5Y4R/5/3(にぶい赤褐)	底部赤切り	
42	B区	獨立建物4	青磁(瀬戸京窯系)	盤			2.5Y7/1(灰白)	内NS5/5/1(灰)	口端部に削付着	
43	B区	獨立建物4	青磁(瀬戸京窯系)	瓶?	(24.0)		5Y7/1(灰白)	内NS5/5/1(灰)	口端部に自然崩	
44	B区	獨立建物4	陶器(瀬戸)	甕	(12.0)		外10R3/1(暗赤灰)	内10R3/2(暗赤灰)	口端半-15C中垂	
45	B区	獨立建物4	陶器(瀬戸)	甕	(18.6)		外・内5Y4R/2(灰褐)	内5Y4R/2(灰褐)	オーリーブ灰色輪	
46	B区	獨立建物4	陶器(瀬戸)	甕	19.6~ 20.7		7.5Y4R/1(暗赤灰)	内5Y4R/1(暗赤灰)	14C後半-15C中垂	
47	B区	獨立建物4	陶器(瀬戸)	擂鉢			外5Y4R/5/1~5Y4R/1(赤灰)	内NS4/1(灰)	口端部花卉形	
48	A区	柱穴列2	土師器	甕	(10.7)	(6.0)	3.8	10Y8R5/6(明褐色)		内角張ナデ
49	A区	土壤5	陶器(瀬戸)	甕	22.0	10.4	10.4~ 10.5	5Y4R/4(にぶい赤褐)	外表面磨付面ハラケズリ	
50	A区	土壤5	陶器(瀬戸)	把手付口注	11.2	11.0	10.6~ 10.8	外2.5Y8R/2(灰赤)	外表面磨付面ハラケズリ	外表面磨付面毛目化、地成不良
51	A区	たわみ	陶器(瀬戸)	甕	(9.0)		外・内5Y4R/2(灰褐)	内5Y4R/4(暗赤灰)	17C後半-18C前半	
52	A区	たわみ	陶器(瀬戸)	甕	(12.6)		外10Y8S/5/4(にぶい黄澄)	内2.5Y5/2(灰黄)	把手、注口	外表面磨付面ハラケズリ
53		包含層	青磁(瀬戸京窯系)	甕			2.5Y7/1(灰白)			内角張ナデ
54	A区	包含層	青磁(瀬戸京窯系)	甕			2.5Y7/1(灰白)			外表面磨付面ハラケズリ
55	B区	包含層	青磁(瀬戸京窯系)	甕	(12.0)		NS5/1(灰)			内角張ナデ
56	B区	包含層	青磁(瀬戸京窯系)	甕			5Y7/1(灰白)			外表面磨付面、15世紀前半
57		包含層	青磁(瀬戸京窯系)	甕			5Y7/1(灰白)			内角張ナデ
58	B区	包含層	青磁(中国)	甕			NT/1(灰白)			外表面磨付面、15世紀後半
59	B区	包含層	染付(瀬戸系)	蓋	8.7	2.9	NT/7(灰白)			内角張ナデ
60	B区	包含層	染付(瀬戸系)	甕	10.6		10Y7/1(灰白)			内角張ナデ
61	B区	包含層	陶器(瀬戸美濃)	天日茶碗	11.8	3.8	6.5	2.5Y8R/1(灰白)	注口	黒釉高台、玉だらけ調
62	B区	柱穴	陶器(瀬戸美濃)	天日茶碗	(11.7)	(5.6)	5.3	2.5Y8R/2(灰白)	内張り無	16C中垂
63	A区	柱穴	陶器(瀬戸美濃)	天日茶碗	13.7		2.5Y7/2(灰白)			16C中垂
64	B区	包含層	陶器(瀬戸)	甕	11.7		8.0	2.5Y8/2(灰白)		内張り無
65	B区	包含層	陶器(瀬戸)	甕	13.6		4.0	10Y8R/1(灰白)		内張り無、地成不良
66	B区	柱穴	土師器	甕	(12.0)	(6.4)	2.4	10Y8R/2(灰白)		内張り無
67	B区	柱穴	土師器	甕	(10.0)	(6.0)	1.9	外・内10Y8R/2/2(にぶい黄澄) 内10Y8R/8/2(灰白)		底部板目痕
68	A区	柱穴	土師器	甕	7.1	5.0	1.2	外7.5Y8R/7/2(明褐色) 内10Y8R/2(灰黄)	注口	底部赤切り
69	B区	柱穴	土師器	甕	7.2	5.1	1.3	外7.5Y8R/6/2(灰白)		底部赤切り
70	B区	柱穴	土師器	甕	(9.0)	(5.8)	1.0	外・内5Y8R/5/4(にぶい灰) 内5Y8R/6/2(灰)		器皿風化
71	B区	包含層	陶器(瀬戸)	甕	(8.7)	4.0	1.2	外・内5Y8R/4/1(灰白) 内5Y8R/1(灰)		底部赤切り
72	C区	包含層	瓦質土器	香炉	(12.4)			外・内5Y8Y3/1(オーリーブ) 内5Y8/2(灰ホリゾン)		外表面磨
73	B区	包含層	瓦質土器	香炉	(12.0)			外・内5Y4/1(灰) 内5Y5/1(灰)		外表面磨
74	A区	包含層	陶器(瀬戸)	蓋	10.0		1.4	外・内10R4/4(赤褐色) 内10R6/6(赤褐色)	完形	つまみ四脚に満巻文
75	A区	包含層	陶器(瀬戸)	甕	10.6	6.5	13.7	外・内10R4/4(赤褐色)	完形	底部に焼付、74とセット
76	B区	包含層	陶器(瀬戸)	甕	10.9			内・外5Y8R/7/1(灰白)		外表面自然釉
77	B区	包含層	陶器(瀬戸)	甕	10.4			2.5Y8R/2(灰黄)		外表面自然釉

来光寺遺跡出土遺物

土器

掘 番 号	出土 地 区	造 模 ・ 土 器 名	器 種	計 測 値 (cm)	色 調	状 態	形 態 ・ 手 法 の 特 徴
				口 徑	底 径	器 高	
78	A区	包含型	陶器(縦前) 瓢	(14.4)	外N4/1(灰) 内10Y5/1(灰) 底7.5Y6/1(灰)		底端付近外側へテケズリ
79	A区	包含型	陶器(縦前) 壺		外・P9.5Y9S/4(にじみ窓) 底10Y5/1(灰黄褐色)	玉縁、外面自然釉 側面内部へテケズリ	
80	A区	包含型	陶器(縦前) 壺		外・P9.4/0(灰) 底5Y6/1(灰)	自然釉	
81	B区	柱穴	陶器(縦前) 楠鉢	(21.8)	外2.5Y4/1(黄灰) 内7.5Y5S/3(にじみ窓) 底7.5Y5S/2(灰褐色)		内面自然釉
82	B区	包含型	陶器(縦前) 楠鉢	29.3	5Y8S/3(にじみ窓)		
83	B区	柱穴	陶器(縦前) 楠鉢	30.8 14.7 11.7	外・内N4/0(灰) 底N4/0(灰)～2.5Y4/4(にじみ窓)		
84	B区	包含型	陶器(縦前) 楠鉢	32.0 17.0 12.7	外・P9.5Y9S/2(灰褐色) 底5Y7/1(灰綠)	口縁外側自然釉 口縁下端に並ね焼き痕	

石製品：S

掘 番 号	出土 地 区	造 模 ・ 土 器 名	器 種	計測値 (mm)			石材	時 期	備 考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	A区	包含型	石斧	139.5	48.0	21.5	ホルンフェルス	弥生	大型船形石斧の再利用か
S2	B区	包含型	硯	110.0	64.0	23.0	流纹岩	中古世	
S3	B区	包含型	硯	105.0	70.5	18.0	流纹岩	中古世	

金属製品：M

掘 番 号	出土 地 区	造 模 ・ 土 器 名	器 種	計測値 (mm)			材質	時 期	備 考
				最大長	最大幅	最大厚			
M1	A区	劍・柱建物2	劍	140.0	28.0	6.3	22.33 鋼	中古世	鍔又式。茎状間
M2	B区	土塙	刀	91.0	14.0	10.1	18.25 鋼	中古世	
M3	B区	ピット	刀子	(116.3)	27.5	11.7	42.80 鋼	中古世	
M4	B区	ピット	刃?	105.0	10.0	10.5	15.30 鋼	中古世	
M5	A区	土塙	劍	88.0	24.5	5.0	13.40 鋼	中古世	
M6	B区	ピット	劍	(45.0)	(29.0)	7.0	7.34 鋼	中古世	
M7	A区	包含型	刃?	(40.0)	22.0	8.8	9.68 鋼	中古世	端部圓弧に屈曲
M8	B区	土塙	劍	(72.5)	(28.2)	14.3	18.88 鋼	中古世	
M9	B区	土塙	劍	36.5	34.3	13.5	18.62 鋼	中古世	
M10		包含型	弾丸	被大径 11.9	12.1	9.11 鋼		中古世	
M11	B区	包含型	弾丸	被大径 12.3	9.9	7.53 鋼		中古世	
M12	A区	包含型	弾丸	被大径 12.4	9.0	6.01 鋼		中古世	
M13	B区	ピット	鋼鉄	径 24	1.3	2.14 鋼		中古世	開丸頭室
M14	B区	ピット	鋼鉄	径 24	1.2	1.66 鋼		中古世	天橋通室
M15	B区	包含型	鋼鉄	径 24	1.3	1.22 鋼		中古世	天橋通室
M16	B区	ピット	鋼鉄	径 24	1.4	1.18 鋼		中古世	元形元室
M17	B区	ピット	鋼鉄	径 23	1.4	1.20 鋼		中古世	治平元室
M18	B区	包含型	鋼鉄	径 23	1.4	2.60 鋼		中古世	元形元室
M19	B区	包含型	鋼鉄	径 22	1.6	0.98 鋼		中古世	治式通室
M20	C区	包含型	鋼鉄	径 25	1.2	3.07 鋼		中古世	裏水溝室
M21	C区	包含型	鋼鉄	径 24	1.3	3.49 鋼		中古世	裏水溝室
M22	B区	包含型	鋼鉄	径 24	1.0	2.38 鋼		中古世	裏水溝室
M23	C区	包含型	鋼鉄	径 (84.0)	2.5	26.45 鋼		中古世	「施原光長」鉄

## 立道遺跡出土遺物

土器

地 番 号	出 土 地 区	遺構・土層名	器種	器種	計測値(cm) 口径 底径 器高	色調	状態	形態・手法の特徴など	
1	A区	混合層	绳文土器	深鉢	外・P7.5YR6/6(赤)				
					内・7.5YR6/4(赤・黄)				
2	A区	混合層	弥生土器	壺	外・P6.0YR7/6(赤)～YR6/6(赤)	外面部ハラミガキ			
					内・P6.0YR5/3(赤・黄)	移帆式文			
3	A区	混合層	弥生土器	高杯	(16.9)	SYR6/5(に赤・黄)	内筋有しと板状縫を交互に配す		
4	A区	混合層	弥生土器	高杯	外・P7.5YR6/3(赤・黄)				
					内・P7.0YR1/1(黒灰)	脚端部外縁引継文			
5	A区	段状遺構 I	須恵器	杯	(16.0)	N6.1(赤)			
6	A区	段状遺構 I	須恵器	杯	(12.4)	(6.4)	N6.5/1(赤)	口縁部に重ね焼き痕、底部へア切り	
7	A区	段状遺構 I	須恵器	杯	(12.1)	N6.5/1(赤)			
8	A区	段状遺構 I	須恵器	杯		2.5Y7/1(赤白)			
9	A区	段状遺構 I	須恵器	杯	(6.6)	N6.1(赤)	底部へア切り		
10	A区	段状遺構 I	須恵器	杯	(6.7)	N7.1/1(赤)	内筋面黒化、底部へア切り		
11	A区	段状遺構 I	土師器	杯	(7.0)	外・INGYR7/7(赤)	底部へア切り		
					内・7.5YR8/4(淡黄褐色)				
12	A区	段状遺構 I	須恵器	壺		外・PN4.5/1(赤)	外面部平行タッカ、カキ目		
					内・PDR7/1(赤白)	内筋面円当瓶のちナダ			
13	A区	溝 I	須恵器	杯	12.3	8.9	3.0	外・P7.5YR6/6(赤)	
					内・IN6.0(赤)	底部へア切り			
14	A区	溝 I	須恵器	杯	(13.8)	N5.0(赤)	内筋面重ね焼き痕	點付高台	
15	A区	溝 I	土師器	杯	(9.7)	9.5YR5/4(に赤・黄)	完形復元	底部へア切り	
					内・P6.5YR6/5(に赤・黄)				
16	A区	溝 I	土師器	杯	12.8	(8.0)	3.2	SYR7/6-6/6(赤)	
					内・P6.5YR6/5(に赤・黄)	完形復元	底部へア切り		
17	A区	溝 I	土師器	鉢	(12.6)	7.5YR5/3(に赤・黄)	表面黒化		
18	A区	溝 I	土師器	壺	11.5	9.5YR5/6(明赤系)			
					内・P7.5YR5/4(に赤・黄)	器面黒化			
19	A区	溝 I	土師器	壺	(22.0)	9.5YR5/7(明赤系)			
					内・P6.5YR6/6(赤)	外面部・腹ハケ			
20	A区	溝 2	須恵器	杯	15.8	N5.0(赤)	内筋相い模ハケ、押彫痕	口縁部内面に焼迹様	
21	A区	溝 2	須恵器	杯	15.9	外・IN5Y6/1(赤)			
					内・IN7.0(赤白)				
22	A区	溝 2	土師器	碗	16.2	6.7	外・P2.5YB6/2(赤黄)	完形復元	點付高台
					内・N6.0(赤)				
23	A区	溝 2	黒色土器	椀	(13.1)	6.2	4.2	9.5YR6/1(黒)	
					内・PDR7/4(に赤・黄)	完形復元	内・黒、外面部ハラミガキ		
24	A区	溝 2	土師器	杯	12.4	8.2	4.2	9.5YR6/2(に赤・黄)	
					内・PDR6/3(淡黄褐色)	底部へア切り			
25	A区	溝 2	土師器	杯	(13.8)	9.5YR6/2(赤)			
					内・PDR5/3(に赤・黄)				
26	A区	溝 2	土師器	杯	9.6	9.5YR6/4(に赤・黄)	完形復元	底部へア切り	
					内・PDR7/2(に赤・黄)				
27	A区	溝 2	土師器	壺	31.3	9.5YR6/4(に赤・黄)	外面部・腹ハケ		
					内・PDR6/3(に赤・黄)	内筋相い模ハケ			
28	A区	土壤 I	土師器	壺	(32.0)	7.5YR5/3(に赤・黄)	口縁部内面模様、以下ナダ		
29	A区	土壤 I	土師器	鉢	(49.1)	外・P7.5YR6/6(赤)	外面部・腹ハケ		
30	A区	土壤 2	須恵器	壺		PDRYR6/4(に赤・黄)	内筋相い模ハケ		
31	A区	土壤 2	須恵器	壺		N5.5/1(赤)	口縁部内面模様、以下ナダ		
32	A区	土壤 2	須恵器	杯	(12.9)	3.9	N5.5/1(赤)	完形復元	點付高台
					2.5Y6/5(赤)				
33	A区	土壤 2	須恵器	杯		2.5Y6/1(黄赤)			
34	A区	土壤 2	須恵器	椀		N5.5/1(赤)			
35	A区	土壤 2	須恵器	杯		N6.1/1(赤)			
36	A区	土壤 2	須恵器	椀		9.5ZYR2/2(赤黄)		口縁部重ね焼き痕	
					IN5/5/1(赤)				
37	A区	土壤 2	須恵器	杯		IN7/1/1(赤白)			
38	A区	土壤 2	須恵器	椀		SY6/1(赤)			
39	A区	土壤 2	須恵器	椀		N5.5/1(赤)	口縁部重ね焼き痕		
40	A区	土壤 2	須恵器	壺?		N7/1(赤白)～N6/1(赤)			
					外・PN5/1(赤)	口縁部點付			
41	A区	土壤 2	土師器	椀	(11.2)	PDRYR7/2(に赤・黄)	外面部・腹ハケ		
42	A区	土壤 2	土師器	壺	(26.0)	10YR6/4(に赤・黄)	内筋相い模ハケ		
43	A区	土壤 2	土師器	壺	(31.4)	10YR6/4(に赤・黄)	口縁部内面模様		
44	A区	土壤 2	土師器	壺		SYR6/4(に赤・黄)	外面部・腹ハケ		
45	A区	土壤 2	土師器	壺		2.5YR5/6(明赤)	口縁部内面模様		
46	B区	土壤 3	須恵器	杯	(13.0)	(7.2)	(3.7)	2.5Y7/1(赤白)	
47	B区	土壤 3	土師器	壺	(17.2)	8.8	10YR4/2(赤黄)	外面部・腹ハケ	
					内・PDR5/3(に赤・黄)	内筋相い模ハケ			
48	B区	土壤 3	土師器	壺	(21.8)	外・PDR4/2(赤黄)	外面部・腹ハケ		
					内・PDR4/2(赤黄)	内筋相い模ハケ			

## 立道遺跡出土遺物

土器

掘削番号	出土 地区	造様・土器名	種別	器種	計測値(cm)			状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高		
49	IV区	土塗3	土師器	甕	(35.2)		10Y35/2(灰黄褐色)	外面細いコサケ 内面細いコサケ	
50	A区	包含層	須恵器	蓋			N6/1(灰)		
51	A区	包含層	須恵器	杯			5Y1/1(灰)	貼付高台	
52	A区	包含層	須恵器	杯			2.5Y6/2(灰黄)	貼付高台	
53	A区	包含層	須恵器	杯			9.5・内N6/0(灰)	貼付高台	
							9.5Z2Y7/2(灰黄)	貼付高台	
54	A区	包含層	須恵器	杯			N6/0(灰)	貼付高台	
55	A区	包含層	須恵器	杯			9.5・内N5/1(灰)	貼付高台	
							9.5Z2Y7/2(灰黄褐色)	貼付高台	
56	A区	包含層	須恵器	杯			9.5Z2Y7/1(灰白)	貼付高台	
57	A区	包含層	須恵器	杯			2.5Y7/2(灰黄)	貼付高台	
58	IV区	包含層	須恵器	杯			5Y6/1(灰)	貼付高台	
59	IV区	包含層	須恵器	杯			5Y7/1(灰)	貼付高台	
60	A区	包含層	須恵器	杯	(14.8)		外・内2.5Y8/1.5(灰白)		
							9.5Y10Y7/2(灰白・黄褐色)		
61	IV区	包含層	土師器	杯	14.2		5Y7/1(灰白)		
62	A区	包含層	須恵器	碗	13.2 (7.2)		N6.5/1(灰)	底面へラ切り、底面内面にヒナテア 1.5倍強度化被膜	
63	A区	包含層	須恵器	杯	11.9	6.9	3.0 外・内SY6/1(灰) 9.5Z2Y7/2(灰黄)	底部へラ切り	
64	A区	包含層	須恵器	杯	(11.2)		N6/1(灰)		
65	A区	包含層	須恵器	杯	(10.4)	(7.0)	3.1 M6/1・G1/1(灰)	底面に同心円カキメ状態	
66	IV区	包含層	須恵器	杯	(10.0)	(6.4)	(2.4) 9.5Z2Y7/2(灰褐色) 内・外SY6/1(灰)		
67	A区	包含層	土師器	碗			2.5Y8/3 (灰黄)	貼付高台	
68	A区	包含層	須恵器	碗			N6.5/1(灰)		
69	A区	包含層	須恵器	碗	15.4	15.5	5.9 N6/0(灰)	貼付高台、表面内にハラ模様	
70	A区	包含層	須恵器	碗			2.5Y7/2(灰白)	貼付高台	
71	A区	包含層	須恵器	碗			9.5Y17/1(灰白)	貼付高台	
72	A区	包含層	須恵器	碗			5Y6/1(灰)	貼付高台	
73	A区	包含層	須恵器	碗			N7.5/1(灰白)	箱型包装品、貼付高台 底面へラ切り、内面施釉	
74	A区	包含層	須恵器	蓋	(10.2)		N6/1(灰)	1.5倍強度化被膜	
75	A区	包含層	須恵器	杯				貼付高台	
76	A区	包含層	須恵器	壺			外・内NA5/1(灰) 9.5Y10Y7/3(灰白・黄褐色)		
							9.5Y10Y7/3(灰白・黄褐色) P10Y9Y7/2(灰白・黄褐色) 9.5Z2Y7/4(淡米褐色)		
77	A区	包含層	土師器	甕	(18.5)				
78	A区	包含層	土師器	把手			7.5Y8/8.5/4 (灰白・橙)	三角形把手 前面外側面ハケ、内面横ナデ	
79	立道1号 表土	土師器	埋置 とりべ				10Y5/2(灰黄褐色)~2.5Y4/1(灰灰)	外側埋置 内面金網置付看	
80	A区	掘立柱建物1	陶器(微崩)	皿	(12.7)		9.5Y4/1(灰褐色) 内10Y6/1(灰灰) 埋10Y6/1(灰褐色)	口縁付近自然縫	
81	A区	掘立柱建物1	陶器(微崩)	壺	(7.7)		9.5・P10Y5/4(灰褐色) 内10Y6/1(灰褐色)	口縁付近自然縫	
82	A区	掘立柱建物1	陶器(微崩)	液	(11.2)		外・内10E3/1(暗赤) 9.5Y6/1(灰)		
83	A区	掘立柱建物1	陶器(微崩)	液	(19.6)		9.5・内10E4/1(暗赤灰) R2.5Y4/2(灰褐色)	肩部附近に輪埴淡灰 内面ナデ、底部へラ切り	
84	A区	掘立柱建物1	陶器(微崩)	水杓妻			9.5・P10Y5/4/2(暗赤褐色) P2.5Y4/2(灰褐色)		
85	IV区	掘立柱建物4	瓦質土器	羽釜	20.4		9.5Y7/4/1(灰) 内7.5Y3/1(オーラブ里) 10Y10Y4/4(灰白・黄褐色)	外面糊E・ナデ 内面コサケ	
86	IV区	土塗16	染付(肥前)	碗	4.3		N8/1(灰白)	明褐色色釉、外側網口支 1620~1660年代	
87	IV区	土塗16	陶器(肥前)	皿	(12.6) (4.8)		10Y8/4/2(灰黄褐色)	灰白・黄褐色色釉 刷毛目、17C前半	
88	IV区	土塗16	染付(肥前)	皿	(13.8)	5.6	3.4 10Y38/2(灰白)	燒成不良、1640~1650年代	
89	IV区	土塗17	瓦質土器	羽釜	(27.4)		9.5Z2Y7/1/1(灰白) 内・外SY6/1(灰)		
90	IV区	土塗17	瓦質土器	羽釜			9.5Z5/6/2(灰黃) 内・外7.5Y6/1(灰)	内外面ナデ	
91	IV区	土塗17	陶器(微崩)	擂鉢			外・内SY6/4(灰白・橙) 内10Y5/3(灰白・黄褐色)	明褐色色釉、外側網口支 1620~1660年代	
92	IV区	土塗18	陶器(肥前)	碗	(9.4)		2.5Y8/2(灰白)	黃白色釉、17C	
93	IV区	土塗18	陶器(微崩)	砂利	(7.6)		9.5Y10Y6/2(明黄褐色) -2.5Y3/4(暗赤褐色) 内・外10Y7/3/3(灰白・黄褐色)	内外面糊ナデ 火棒	
94	IV区	包含層	青磁(龍泉系)	碗			10Y8/1(灰白)	オリーブ灰褐色 外側網口支、13C前半	
95	IV区	包含層	青磁(龍泉系)	碗	(13.2)		5Y7/1(灰白)	オリーブ灰褐色 外側網口支、13C前半	
96	IV区	包含層	青磁(龍泉系)	碗			7.5Y7/1(灰白)	灰オリーブ色釉、内側印花文 14C後半~15C中葉	
97	IV区	柱穴	青磁(龍泉系)	碗または鉢	(11.4)		5Y7/1(灰白)	オリーブ灰褐色 14C後半~15C中葉	
98	A区	包含層	土師器	皿	8.5		7.5Y8/7/4(灰白・黄褐色)	底部へラ切り	
99	IV区	包含層	土師器	皿	(4.6)		9.5Y5/8/3(浅黄褐色) 内・外10Y7/2(灰白・黄褐色)		

立道遺跡出土遺物

土器

番号	出土 地区	遺構・土層名	器種	器種	計測値 口径 底径 器高	色調	状態	形態・手法の特徴など	
100	A区 包含層	土師器	皿	(6.6)	7.5YR5/5(YR(橙))		底部ハラ切り		
101	A区 包含層	土師器	皿	8.4	6.9	2.1 10RY6/4(にい・赤橙) 5YR7/6(橙)	底部ハラ切り 側面に深い凹線、切り離そうとした跡か		
102	A区 包含層	土師器	皿	8.3	6.9	1.4 5YR6/8(橙)	底部ハラ切り		
103	A区 包含層	土師器	皿	7.8	6.2	1.3 ~7.5YR7/4(にい・橙) 10YR6/3(にい・黄橙)	底部ハラ切り		
104	A区 包含層	土師器	皿	7.0	8.1	1.0 7.5YR7/4(にい・橙)	完形	底部ハラ切り、板口直	
105	B区 包含層	陶器(焼前)	壺	(13.8)	外・内4YR4/1(灰褐色) 10RY3/2(暗灰褐色)		玉縁		
106	B区 包含層	陶器(焼前)	壺	(11.0)	外・内2.5YR3/2(黒褐色) 10YR6/1(灰褐色)				
107	A区 包含層	陶器(焼前)	壺	12.1	9.5 7.5Y6/4(橙) ~10YR6/1(褐)	P2.5Y6/2(灰黃) 2.5Y6/2(灰黃) ~N5/0(灰)			
108	A区 包含層	陶器(焼前)	壺	9.9	9.5 7.5Y6/4(灰) 内・外2.5Y6/2(灰黃)		内外面工具ナメ		
109	B区 包含層	陶器(焼前)	壺	9.5	9.5 N5/0(灰) 内10YR6/3(にい・黄橙) 10YR4/2(灰赤)		側面擦接文		
110	A区 包含層	陶器(焼前)	壺	9.5	9.5 7.5Y5/1(灰) P2.5Y6/2(灰黃) ~N5/0(灰)		雀口 肩部擦接波状文		
111	B区 包含層	陶器(焼前)	擂鉢	9.5	9.5 2.5Y3/2(黒褐色) 内10YR5/2(灰黃) 2.5Y4/2(暗灰褐色)				
112	B区 柱穴	陶器(焼前)	擂鉢	9.5	9.5 7.5Y7/3(浅黃)				
113	A区 包含層	陶器(焼前)	擂鉢	9.5	9.5 9.5YR4/2(灰褐色) 内10RS/3(赤褐色) 7.5YR5/1(灰褐色)				
114	B区 包含層	陶器(焼前)	擂鉢	(18.0)	9.5 7.5YR6/4(にい・橙) 内・外N6/1(灰)				
115	B区 包含層	陶器(焼前)	擂鉢	(25.0)	9.5 7.5YR6/2(灰褐色)				
116	A区 包含層	陶器(焼前)	擂鉢	(29.1)	9.5YR4/2(灰褐色) 内・外N5/2(灰褐色)				
117	B区 包含層	陶器(焼前)	擂鉢	(28.4)	(9.0) 9.5 9.5YR4/3(赤褐色) 内10R4/2(灰赤) 10YR6/2(灰黃)				
118	A区 包含層	陶器(焼前)	甕	(27.6)	(29.0) 9.5 N6/1(灰) ~N5/1(灰) 内2.5YR4/2(灰赤)		肩部に7条の細縦線 内外面ナメ、底部付近ハケケツリ		
119	A区 包含層	陶器(焼前)	甕	28.1	23.0 (31.9- 32.4)	9.5 内10YR5/4(にい・黄橙) ~7.5YR3/1(黒褐色) 2.5YR4/2(灰赤)	定形 復元	肩部に擦接波状文、沈殿文 剥部に三角形状の擦接	
120	A区 混合層	陶器(焼前)	甕	(19.0)	9.5 内N6/0(N) 10YR7/2(にい・黄橙)		外面部タテハケ		
121	A区 混合層	陶器(焼前)	甕	24.7	9.5 内N6/0(N) 10YR7/2(にい・黄橙)		外面部タテハケ		
122	A区 包含層	瓦質土器	鉢	(22.4)	9.5 内N3/0(暗灰) 10YR6/1(灰白)		外面部擦接さえ		
123	B区 包含層	瓦質土器	羽皿	(25.4)	9.5 内N4/1(灰) 7.5Y8/1(灰白)		外面部擦接さえ		
124	A区 包含層	瓦質土器	羽皿	23.8	9.5 内N5/0(灰) 10YR8/1(灰白)		外面部擦接さえ 内面部コハケ		
125	A区 包含層	瓦質土器	羽皿	(26.3)	9.5 内N5/0(灰) 10N7/1-N8/1(灰白)		外面部擦接さえ		
126	B区 包含層	瓦質土器	羽皿	(23.2)	9.5 2.5Y7/2(灰黃) P2.5Y2/1(黑) 2.5YH7/3(深黃)		外面部擦接さえ		
127	B区 包含層	瓦質土器	羽皿	(13.0)	9.5 2.5Y5/2(暗灰黃) P2.5Y5/1(灰黃) 2.5Y7/1(灰白)		内面部コハケ 肩部に斜め耳		
128	A区 包含層	瓦質土器	鍋	(28.5)	9.5 N6/1(灰) P2.5Y4/3-3/1(灰~暗灰) 6.5Y8/1(灰白)		外面部擦接さえ		
129	A区 包含層	瓦質土器	鍋	33.7	9.5 内P5N4/0(灰) 7.5YR8/1(灰白)		外面部擦接さえ 内面部コハケ		
130	A区 包含層	土師器	鍋	(30.4)	9.5 7.5YR7/4(にい・橙) 内・外10YR7/3(にい・黄橙)		器頭黒化、外面部擦接さえ 内面部コハケのちナメ		
131	A区 包含層	土師器	鍋	(32.5)	9.5 内P7.5YR7/6(橙) 内N3/1(暗灰)		器頭黒化 外面部擦接さえ		
132	A区 包含層	土師器	香炉	9.9	6.0 10YR7/4(にい・黄橙)		外面部擦接文、底部3カ所に脚		
133	①道1 号墳	石組裏込	染付(肥前)	手皿皿	4.8	白		富士山形、1820~1860年代	
134	①道1 号墳	石組裏込	染付(肥前)	手皿皿	1.6	N8/0(灰白)		型押し成形、19C前半	
135	①道1 号墳	石組裏込	陶器(焼前)	擂鉢	(20.6) (11.6)	9.5YR4/3(にい・赤褐色) 内・外7.5YR4/2(灰褐色)			
136	①道1 号墳	石組裏込	陶器(開西系)	擂鉢	(35.4) (17.0) (13.3)	9.5 内2.5YR4/4(にい・赤褐色) 10R4/6<レ>			

### 立道遺跡出土遺物

#### 石製品：S

掘削番号	出土地区	遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
S1	国K 包含層	石鏡	石鏡	91.5	43.0	7.5	41.32	泥質片岩	弥生	欠損・剥落多い
S2	AIK ピット	石鏡	石鏡	17.5	(13.5)	3.3	0.43	サヌカイト	弥生	
S3	国K 包含層	石鏡	石鏡	34.5	28.0	5.5	4.46	サヌカイト	弥生	大形、表面風化
S4	AIK 包含層	石鏡	石鏡	21.0	16.0	2.0	0.71	サヌカイト	弥生	

#### 土製品：C

掘削番号	出土地区	遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	時期	備考
				最大長	外径	孔径				
C1	AIK 土塚2	吹子瓶1	吹子瓶1	145.0	(70.0)	(26.0)	46.03	黄褐色～灰色	古代	先端部ガラス質化
C2	AIK 土塚2	吹子瓶1	吹子瓶1	160.0	(76.0)	(30.0)	73.13	黄褐色～灰色	古代	先端部ガラス質化
C3	AIK 土塚2	吹子瓶1	吹子瓶1	180.0	(100.0)	(32.0)	225.71	淡黃褐色	古代	風化
C4	AIK 土塚2	吹子瓶1	吹子瓶1	193.0	(90.0)	(34.0)	94.96	黄褐色	古代	風化

\*最大長は現存値。外径・孔径は推定値

#### ガラス製品：G

掘削番号	出土地区	遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	時期	備考
				最大径	最小径	孔径				
G1	国K ピット	小玉	小玉	3.4	2.4	1.0	0.05	淡青色	中近世	ガラス網眼をもつて製作。縫接修上手端は未処理

#### 金属製品：M

掘削番号	出土地区	遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
M1	AIK 土塚2	鉄矛	鉄矛	76.0	133.0	28.0	302.88	鉄矛	古代	楕円錐形鉄矛、光形
M2	AIK 土塚2	鉄矛	鉄矛	92.0	(64.0)	16.3	202.72	鉄矛	古代	楕円錐形鉄矛、ガラス質化部分あり
M3	AIK 土塚2	鉄矛	鉄矛	58.0	(50.0)	18.0	127.33	鉄矛	古代	楕円錐形鉄矛
M4	AIK 土塚2	鉄矛	鉄矛	78.0	(96.0)	36.0	237.00	鉄矛	古代	楕円錐形鉄矛
M5	AIK 土塚2	鉄矛	鉄矛	97.5	(93.0)	29.0	378.61	鉄矛	古代	楕円錐形鉄矛、付載2のTTM-1
M6	AIK 土塚2	鉄矛	鉄矛	56.0	(47.0)	(21.0)	70.76	鉄矛	古代	楕円錐形鉄矛
M7	AIK 土塚2	鉄矛	鉄矛	45.5	75.0	19.5	108.43	鉄矛	古代	楕円錐形鉄矛、付載2のTTM-2
M8	AIK 土塚2	鉄矛	鉄矛	44.5	(50.0)	13.0	44.67	鉄矛	古代	楕円錐形鉄矛、付載2のTTM-3
M9	AIK 土塚2	鉄矛	鉄矛	50.3	(80.1)	36.0	180.97	鉄矛	古代	楕円錐形鉄矛
M10	AIK 包含層	皮接ぎ?	皮接ぎ?	129.0	25.5	13.0	48.28	鉄	中近世	
M11	AIK 包含層	刀子	刀子	(63.0)	(20.0)	(5.0)	17.00	鉄	中近世	圓の形には不明瞭
M12	BIK ピット	刀子	刀子	(33.5)	16.5	7.0	9.03	鉄	中近世	
M13	AIK 包含層	刀子	刀子	(39.0)	13.0	3.0	16.21	鉄	中近世	
M14	BIK ピット	刀子	刀子	(30.5)	14.5	3.5	3.74	鉄	中近世	圓の形には不明瞭
M15	BIK 包含層	刀子	刀子	(50.5)	16.5	4.0	13.41	鉄	中近世	圓の形には不明瞭
M16	AIK 包含層	留金具	留金具	(16.0)	(29.0)	1.3	3.01	鉄	中近世	釘2本が付属
M17	BIK 包含層	釘	釘	(31.0)	6.0	5.0	2.56	鉄	中近世	
M18	BIK ピット	釘	釘	(47.5)	8.8	7.0	8.51	鉄	中近世	
M19	BIK 包含層	釘?	釘?	137.5	13.5	5.0	41.15	鉄	中近世	平たい形状
M20	AIK 包含層	釘	釘	62.0	15.5	8.0	5.30	鉄	中近世	
M21	AIK ピット	釘	釘	(32.0)	8.0	5.5	1.83	鉄	中近世	
M22	BIK 包含層	釘	釘	(18.4)	5.0	3.1	0.90	鉄	中近世	
M23	AIK 包含層	便管	便管	56.0	14.0	17.0	10.26	鉄	近世	少しつぶれしている
M24	AIK 包含層	鉗	鉗	23.5	—	1.0	2.16	鉄	近世	太平通宝
M25	BIK 包含層	鉗	鉗	24.0	—	1.4	1.49	鉄	近世	洪武通宝
M26	BIK 包含層	鉗	鉗	25.0	—	1.2	2.28	鉄	近世	寛永通宝

## 平岩古墳出土遺物

土器

番号	出土 地区	造形・土器名	種別	器種	計測値 口径 底径 器高	色調	状態	形態・手法の骨格など
1	平岩古墳 石室内	須恵器	杯蓋	13.3	(4.5) 内25.7/1(灰白) 内25.7/3(にぶい櫻) 内25.7/4(にぶい櫻)	完形 復元	天井部全面へラケズリ 2セット	
2	平岩古墳 石室内	須恵器	杯身	11.6	4.3 内・底25.7/1(灰白) 内・底25.7/4(にぶい櫻)		底部へラケズリ未調整 1セット	
3	平岩古墳 石室内	須恵器	杯蓋	12.8	4.3 内5.5Y5/1(灰) 内・底2.5Y7/1(灰白)	完形 復元	天井部に緑色白色輪 天井部内面仕上げナデ 4セット	
4	平岩古墳 石室内	須恵器	杯身	11.6 (7.5) 3.9	9.5Y6/1(灰) 内・底5Y7/1(灰白)		1瓣附近に緑色自然輪 底部へラケズリ未調整 底面内面仕上げナデ 3セット	
5	平岩古墳 石室内	須恵器	杯蓋		25.7/5(灰白)			
6	平岩古墳 石室内	須恵器	杯蓋	4.3	9.5N4.5/1(灰) 内・底5N6/1(灰)		天井部へラケズリ未調整	
7	平岩古墳 石室内	須恵器	杯蓋	(12.8)	25.7/2(灰黄) 9.5Y6/1(灰)		天井部全面へラケズリ	
8	平岩古墳 石室内	須恵器	杯蓋	(12.8)	9.5Z5.6/4(灰黄) 内7.5Y8/3(にぶい櫻)			
9	平岩古墳 石室内	須恵器	杯蓋	4.3	9.5Z3.7/1(灰白) 内9.5Y6/2(灰黄) 内7.5Y8/3(にぶい櫻)		天井部へラケズリ未調整	
10	平岩古墳 石室内	須恵器	杯蓋	4.2	9.5・P25.7/2.5/1(灰白) 内25.7/1(灰白)		天井部ナデ仕上げ	
11	平岩古墳 石室内	須恵器	杯身	(12.0)	9.5・P5Y5/1(灰) 内5Y6/1(灰)			
12	平岩古墳 石室内	須恵器	杯身	3.8	9.5・P5Y5/1(灰白) 内25.7/2(灰)		底部全面へラケズリ	
13	平岩古墳 石室内	須恵器	杯身	(11.8)	10Y5/1(灰)			
14	平岩古墳 石室内	須恵器	杯身	(11.4)	9.5Z5.7/1(灰白) 内・底2.5Y7/2(灰黄)			
15	平岩古墳 石室内	須恵器	杯身	11.4	9.5Z5.6/1(灰白) 内・底2.5Y6/2(灰黄)		底部全面へラケズリ	
16	平岩古墳 石室内	須恵器	杯身	(11.4) (3.0) 3.7	5Y3/1(灰)		底部全面へラケズリ	
17	平岩古墳 石室内	須恵器	高杯	9.5~ 12.0	内2N2/1(黒) 内5N6/1~5/3(灰)		あらわし 外側全面に緑色自然輪 18℃同一個体と思われる	
18	平岩古墳 石室内	須恵器	高杯		外・底10Y7R4/1(黒灰) 内9DVR7/3(にぶい櫻)		内側全面に緑色自然輪 3方に透し 17と同一個体と思われる	
19	平岩古墳 石室内	須恵器	高杯	(11.8)	9.5Z3/3(く黒縞) 内・底2.5Y5/1(灰灰)			
20	平岩古墳 石室内	須恵器	高杯	(10.6)	25.7/2(灰黄)		杯部上半に沈2条	
21	平岩古墳 石室内	須恵器	高杯	10.3 8.5 10.3	9.5Y1/1(灰) 内5Y6/1(灰) 内2.5Y7/2(灰黄)		側面に緑色自然輪	
22	平岩古墳 G室内	須恵器	高杯	(9.4)			杯下部にヘラ記号	
23	平岩古墳 G室内	須恵器	台付壺		N5.5/1~N6.5/1(灰)		網文 24と同一個体と思われる	
24	平岩古墳 G室内	須恵器	台付壺		5Y6/1(灰)		3方に透し 23と同一個体と思われる	
25	平岩古墳 G室内	須恵器	壺	3.9	9.5N1/1(灰) 内10Y7R/2(にぶい櫻)		側面下半全面へラケズリ	
26	平岩古墳 G室内	須恵器	平瓶	5.8 (7.0) (16.7)	9.5D5/1(灰) 内7.5Y6/1(灰)		側面下半全面へラケズリ 「漏け根」にヘラ記号[X]	
27	平岩古墳 石室内	須恵器	平瓶	4.7	NS1/1(灰)	ほぼ 完形 復元	側面下半全面へラケズリ	
28	平岩古墳 石室内	須恵器	瓶頸	(8.4)	9.5Z5Y2/1(黒) P25.4/1(灰灰) 内2.5Y7/1(灰白)		外面に2条の沈縞	
29	平岩古墳 石室内	須恵器	はそう	12.1	14.9 外・内5S1/1(灰) 内2.5Y6/2(灰黄)		側部下半全面へラケズリ 側面全面に絞り縞	
30	平岩古墳 石室内	土師器	壺	(11.0)	7.5Y7/4(にぶい櫻)		外面ハラケ 内側全面ガタカ	
31	平岩古墳 石室内	土師器	壺	9.8	9.5・P25.5YR7/6(櫻) 内10Y7R/4(にぶい櫻)		外面下半ハラケ	

## 平岩古墳出土遺物

金属製品:M

番号	出土地区	遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M1	平岩古墳	石室内	網目	36.0	38.0	11.0	8.80	銅(銀象嵌)	古墳後期 鶴伏頭豪歌
M2	平岩古墳	石室内	網目	36.0	34.5	20.0	30.0?	銅	古墳後期
M3	平岩古墳	石室内	網目	(96.0)	28.0	7.0	38.0?	銅	古墳後期
M4	平岩古墳	石室内	網目	(122.0)	7.0	4.0	11.24	銅	古墳後期 云根、網目式、鍍狀況、系に木質・樹皮
M5	平岩古墳	石室内	網目	(120.0)	9.0	3.0	11.16	銅	古墳後期 云根、網目式
M6	平岩古墳	石室内	網目	(84.0)	8.0	5.0	9.92	銅	古墳後期 云根、網目式
M7	平岩古墳	石室内	網目	(59.0)	8.0	4.0	4.10	銅	古墳後期 云根、網目式
M8	平岩古墳	石室内	網目	(28.5)	8.0	4.0	1.79	銅	古墳後期 云根、網目式、鍍狀況
M9	平岩古墳	石室内	網目	(56.0)	11.0	7.0	6.33	銅	古墳後期 云根、網目式、鍍狀況
M10	平岩古墳	石室内	網目	(38.0)	9.5	4.5	2.16	銅	古墳後期 云根、網目式、鍍狀況
M11	平岩古墳	石室内	網目	(32.0)	7.0	7.0	3.0?	銅	古墳後期 小根式、鍍狀況、系に木質・樹皮
M12	平岩古墳	石室内	網目	(37.0)	10.0	5.0	3.70	銅	古墳後期 小根式、鍍狀況、系に木質・樹皮
M13	平岩古墳	石室内	網目	(77.0)	27.0	2.5	19.94	銅	古墳後期 小根式、鍍狀況
M14	平岩古墳	石室内	網目	(29.0)	26.0	1.5	5.37	銅	古墳後期 小根式
M15	平岩古墳	石室内	網目	(31.0)	19.0	4.0	8.49	銅	古墳後期 小根式、方頭火
M16	平岩古墳	石室内	網目	(98.0)	30.0	3.0	18.42	銅	古墳後期 小根式、方頭火
M17	平岩古墳	石室内	網目	(48.0)	23.0	2.0	8.01	銅	古墳後期 小根式、方頭火
M18	平岩古墳	石室内	網目	(26.0)	(26.0)	4.0	4.28	銅	古墳後期 小根式、方頭火
M19	平岩古墳	石室内	網目	(58.0)	25.0	4.0	11.00	銅	古墳後期 小根式、方頭火
M20	平岩古墳	石室内	網目	(43.0)	11.0	5.0	6.78	銅	古墳後期 小根式、方頭火
M21	平岩古墳	石室内	網目	(44.0)	11.5	(5.0)	4.09	銅	古墳後期 小の破片、系垂糸の跡
M22	平岩古墳	石室内	網目	(45.0)	6.0	4.0	4.32	銅	古墳後期 小の破片
M23	平岩古墳	石室内	網目	(39.0)	5.0	6.0	3.12	銅	古墳後期 小の破片
M24	平岩古墳	石室内	網目	(51.0)	9.0	4.0	8.43	銅	古墳後期 小の破片
M25	平岩古墳	石室内	網目	(34.0)	5.0	4.0	2.81	銅	古墳後期 小の破片
M26	平岩古墳	石室内	網目	(31.0)	4.0	3.7	1.69	銅	古墳後期 小の破片、本質付着
M27	平岩古墳	石室内	網目	(28.5)	4.0	3.0	1.46	銅	古墳後期 小の破片
M28	平岩古墳	石室内	網目	(28.5)	4.0	3.0	0.50	銅	古墳後期 小の破片
M29	平岩古墳	石室内	網目	(24.0)	5.0	3.0	1.53	銅	古墳後期 小の破片
M30	平岩古墳	石室内	金具	(36.0)	(36.5)	19.0	9.5?	黄銅金屬部	金具、圓柱合板小明
M31	平岩古墳	石室内	金具	(22.0)	(17.0)	(12.0)	3.00	黄銅金屬部	金具、圓柱合板
M32	平岩古墳	石室内	金具	31.0	22.5	15.0	2.82	黄銅金屬部	金具、圓柱合板
M33	平岩古墳	石室内	金具	(12.0)	(25.0)	(17.0)	3.90	黄銅金屬部	金具、圓柱合板
M34	平岩古墳	石室内	金具	26.0	18.0	3.0	3.82	黄銅金屬部	金具、圓柱合板
M35	平岩古墳	石室内	金具	(54.0)	17.0	(12.0)	9.23	銅	古墳後期 小の破片、本質付着
M36	平岩古墳	石室内	金具	(46.0)	15.0	4.0	4.66	銅	古墳後期 小の破片、本質付着
M37	平岩古墳	石室内	金具	(35.0)	14.0	5.0	3.35	銅	古墳後期 小の破片、本質付着
M38	平岩古墳	石室内	鍍金具	(30.0)	22.0	4.5	4.16	銅	古墳後期 小の破片
M39	平岩古墳	石室内	刀子	(105.0)	12.0	4.0	10.60	銅	古墳後期 刀子の破片
M40	平岩古墳	石室内	刀子	(99.0)	13.0	4.0	9.74	銅	古墳後期 刀子の破片
M41	平岩古墳	石室内	刀子	(117.0)	16.0	6.0	11.57	銅	古墳後期 刀子の破片
M42	平岩古墳	石室内	刀子	(76.0)	13.0	6.0	13.00	銅	古墳後期 刀子の破片
M43	平岩古墳	石室内	刀子	(21.0)	12.0	4.0	3.20	銅	古墳後期 刀子の破片、本質付着
M44	平岩古墳	石室内	刀子	(28.0)	12.0	4.0	3.23	銅	古墳後期 刀子の破片、本質付着
M45	平岩古墳	石室内	刀子	(36.0)	14.0	4.0	3.57	銅	古墳後期 刀子の破片
M46	平岩古墳	石室内	刀子	(20.5)	12.5	3.0	2.83	銅	古墳後期 刀子の破片
M47	平岩古墳	石室内	刀子	(31.0)	8.0	3.5	2.28	銅	古墳後期 刀子の破片、病の本質残存
M48	平岩古墳	石室内	刀子	(19.5)	(9.5)	3.0	1.36	銅	古墳後期 刀子の破片、病の本質残存
M49	平岩古墳	石室内	刀子	(21.0)	10.0	5.0	2.01	銅	古墳後期 刀子の破片、病の本質残存
M50	平岩古墳	石室内	刀子	(44.0)	17.0	4.0	10.57	銅	古墳後期 刀子の破片、病の本質残存
M51	平岩古墳	石室内	刀子	(21.5)	12.0	2.5	2.56	銅	古墳後期 刀子の破片、病の本質残存
M52	平岩古墳	石室内	刀子	(16.0)	12.0	2.0	1.69	銅	古墳後期 刀子の破片、病の本質残存
M53	平岩古墳	石室内	刀子	(16.0)	11.0	2.0	0.91	銅	古墳後期 刀子の破片、病の本質残存
M54	平岩古墳	石室内	刀子	(10.0)	12.0	2.0	3.66	銅	古墳後期 刀子の破片、病の本質残存
M55	平岩古墳	石室内	刀子	(12.0)	8.0	6.0	6.65	銅	古墳後期 刀子の破片、病の本質残存
M56	平岩古墳	石室内	刀子	135.5	12.0	6.0	26.58	銅	古墳後期 刀子の破片
M57	平岩古墳	石室内	刀子	94.0	20.0	7.0	48.64	銅	古墳後期 刀子の破片
M58	平岩古墳	石室内	刀子	(52.0)	12.0	13.0	27.43	銅	古墳後期 刀子の破片
M59	平岩古墳	石室内	刀子	(42.0)	18.0	3.0	9.31	銅	古墳後期 刀子の破片
M60	平岩古墳	石室内	刀子	(63.0)	13.0	6.0	19.85	銅	古墳後期 刀子の破片
M61	平岩古墳	石室内	刀子	(21.0)	7.0	4.0	2.68	銅	古墳後期 刀子の破片
M62	平岩古墳	石室内	刀子	(72.0)	12.0	9.0	15.47	銅	古墳後期 刀子の破片
M63	平岩古墳	石室内	刀子	(37.0)	10.0	5.0	4.88	銅	古墳後期 刀子の破片
M64	平岩古墳	石室内	刀子	(58.0)	20.0	5.0	9.95	銅	古墳後期 刀子の破片
M65	平岩古墳	石室内	刀子	(66.0)	37.0	17.0	25.17	銅	古墳後期 刀子の破片
M66	平岩古墳	石室内	刀子	(28.0)	11.0	8.0	14.50	銅	古墳後期 刀子の破片
M67	平岩古墳	石室内	刀子	(58.0)	(14.0)	9.0	23.45	銅	古墳後期 刀子の破片
M68	平岩古墳	石室内	刀子	(54.0)	30.0	7.0	11.82	銅	古墳後期 刀子の破片
M69	平岩古墳	石室内	刀子	(22.0)	7.0	8.0	3.74	銅	古墳後期 刀子の破片
M70	平岩古墳	石室内	刀子	(72.0)	11.0	8.0	19.33	銅	古墳後期 刀子の破片
M71	平岩古墳	石室内	刀子	(22.0)	9.0	5.0	13.65	銅	古墳後期 刀子の破片
M72	平岩古墳	石室内	刀子	(72.0)	11.0	8.0	19.33	銅	古墳後期 刀子の破片
M73	平岩古墳	石室内	刀子	(51.0)	9.0	4.0	8.43	銅	古墳後期 刀子の破片
M74	平岩古墳	石室内	刀子	(66.0)	8.0	7.0	10.07	銅	古墳後期 刀子の破片
M75	平岩古墳	石室内	刀子	(55.0)	10.0	17.0	10.88	銅	古墳後期 刀子の破片
M76	平岩古墳	石室内	刀子	(57.0)	7.0	7.0	7.43	銅	古墳後期 刀子の破片
M77	平岩古墳	石室内	刀子	(22.0)	9.0	3.0	2.10	銅	古墳後期 刀子の破片
M78	平岩古墳	石室内	刀子	(29.0)	7.0	5.0	2.61	銅	古墳後期 刀子の破片
M79	平岩古墳	石室内	刀子	(10.0)	6.0	4.0	0.98	銅	古墳後期 刀子の破片
M80	平岩古墳	石室内	刀子	(28.0)	2.0	7.0	4.62	銅	古墳後期 刀子の破片
M81	平岩古墳	石室内	刀子	(51.0)	6.0	3.0	2.21	銅	古墳後期 刀子の破片
M82	平岩古墳	石室内	刀子	(21.0)	11.0	2.0	2.21	銅	古墳後期 刀子の破片
M83	平岩古墳	石室内	刀子	(68.0)	5.0	5.0	8.65	銅	古墳後期 刀子の破片
M84	平岩古墳	石室内	刀子	(75.0)	5.0	4.0	6.65	銅	古墳後期 刀子の破片
M85	平岩古墳	石室内	刀子	(45.0)	12.0	8.0	4.32	銅	古墳後期 刀子の破片
M86	平岩古墳	石室内	刀子	41.0	15.0	11.0	2.55	銅	古墳後期 刀子の破片
M87	平岩古墳	石室内	刀子	(58.0)	9.0	4.0	6.78	銅	古墳後期 刀子の破片

## 平岩古墳出土遺物

金属製品：M

番号	出土地区	構造・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
				最大径	最小幅	孔徑				
M58	平岩古墳	石室内	釣	(40.0)	10.0	6.0	2.12	鉄	古墳後期	
M59	平岩古墳	石室内	釣	37.0	5.0	2.0	2.38	鉄	古墳後期	
M60	平岩古墳	石室内	釣	(37.0)	9.0	3.5	2.83	鉄	古墳後期	
M61	平岩古墳	石室内	釣	(42.0)	8.0	5.0	2.27	鉄	古墳後期	
M62	平岩古墳	石室内	釣	(42.0)	9.0	4.0	2.61	鉄	古墳後期	
M63	平岩古墳	石室内	釣	35.0	7.5	4.0	2.16	鉄	古墳後期	
M64	平岩古墳	石室内	釣	(28.0)	5.0	3.0	1.01	鉄	古墳後期	
M65	平岩古墳	石室内	釣	(34.0)	6.0	4.0	1.59	鉄	古墳後期	
M66	平岩古墳	石室内	釣	(17.0)	10.0	3.0	0.88	鉄	古墳後期	
M67	平岩古墳	石室内	釣	(36.5)	4.4	3.8	1.66	鉄	古墳後期	
M68	平岩古墳	石室内	釣	(20.0)	4.5	5.0	0.80	鉄	古墳後期	
M69	平岩古墳	石室内	釣	(20.0)	4.0	2.5	0.48	鉄	古墳後期	
M100	平岩古墳	石室内	釣	(21.0)	3.0	3.0	0.82	鉄	古墳後期	
M101	平岩古墳	石室内	釣	(18.0)	3.0	3.0	0.96	鉄	古墳後期	
M102	平岩古墳	石室内	釣	(26.0)	8.0	3.0	1.56	鉄	古墳後期	
M103	平岩古墳	石室内	釣	(42.0)	8.0	4.0	2.27	鉄	古墳後期	
M104	平岩古墳	石室内	釣	(22.0)	8.0	3.5	0.87	鉄	古墳後期	
M105	平岩古墳	石室内	釣	(26.0)	10.0	8.0	2.44	鉄	古墳後期	
M106	平岩古墳	石室内	釣	18.0	6.0	7.0	0.44	鉄	古墳後期	本質(横方向)付着
M107	平岩古墳	石室内	釣	(28.0)	4.0	3.0	1.79	鉄	古墳後期	
M108	平岩古墳	石室内	不明	(32.0)	9.0	6.0	4.88	鉄	古墳後期	
M109	平岩古墳	石室内	不明	(29.0)	5.5	5.0	2.45	鉄	古墳後期	
M110	平岩古墳	石室内	耳環	3.6	3.8	1.0-1.1	9.07	銀	古墳後期	中字

ガラス製品：G

番号	出土地区	構造・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	時期	備考
				最大径	最小幅	孔徑				
G1	平岩古墳	石室内	丸玉	18.17	6.29	2.25-2.52	1.74	褐色	古墳後期	
G2	平岩古墳	石室内	丸玉	10.35	6.46	2.25	1.12	褐色	古墳後期	
G3	平岩古墳	石室内	丸玉	10.20	8.60	1.64	1.36	褐色	古墳後期	
G4	平岩古墳	石室内	丸玉	9.98	7.88	2.05	1.52	濃緑色	古墳後期	
G5	平岩古墳	石室内	丸玉	8.76-9.23	6.25-7.10	2.74	0.84	褐色	古墳後期	
G6	平岩古墳	石室内	小玉	4.48-5.58	4.01	1.62	0.13	淡青色	古墳後期	
G7	平岩古墳	石室内	小玉	4.33	2.80	1.30	0.06	淡青色	古墳後期	
G8	平岩古墳	石室内	小玉	3.54-4.07	1.43	0.96	0.05	淡青色	古墳後期	
G9	平岩古墳	石室内	小玉	(4.00)	1.51	(1.00)	(0.01)	淡青色	古墳後期	欠損
G10	平岩古墳	石室内	小玉	3.53-4.0	2.32	1.13	0.05	淡青色	古墳後期	
G11	平岩古墳	石室内	小玉	3.82-4.65	1.72	1.26	0.03	淡青色	古墳後期	
G12	平岩古墳	石室内	小玉	4.02	2.03	0.86	0.04	淡青色	古墳後期	
G13	平岩古墳	石室内	小玉	3.92-4.19	2.15	1.24	0.05	淡青色	古墳後期	
G14	平岩古墳	石室内	小玉	3.77	1.74	1.13	0.03	淡青色	古墳後期	
G15	平岩古墳	石室内	小玉	4.07	1.93	1.40	0.05	淡青色	古墳後期	
G16	平岩古墳	石室内	小玉	3.80	2.14	1.08	0.04	淡青色	古墳後期	
G17	平岩古墳	石室内	小玉	3.48	2.22	1.00	0.04	淡青色	古墳後期	
G18	平岩古墳	石室内	小玉	3.86	1.65	0.91	0.03	淡青色	古墳後期	
G19	平岩古墳	石室内	小玉	3.86	1.36	1.15	0.03	淡青色	古墳後期	
G20	平岩古墳	石室内	小玉	3.52	1.63	0.80	0.03	淡青色	古墳後期	
G21	平岩古墳	石室内	小玉	3.09-3.40	2.30	0.83	0.03	淡青色	古墳後期	
G22	平岩古墳	石室内	小玉	3.95	2.34	0.67	0.05	淡青色	古墳後期	
G23	平岩古墳	石室内	小玉	3.33-3.81	1.95	0.86	0.03	淡青色	古墳後期	
G24	平岩古墳	石室内	小玉	3.81	2.00	1.05	0.03	淡青色	古墳後期	
G25	平岩古墳	石室内	小玉	3.55	2.34	1.06	0.03	淡青色	古墳後期	
G26	平岩古墳	石室内	小玉	3.40	1.79	0.71	0.03	淡青色	古墳後期	
G27	平岩古墳	石室内	小玉	3.24	1.74	1.00	0.02	淡青色	古墳後期	
G28	平岩古墳	石室内	小玉	3.27-3.92	2.10	1.08	0.04	淡青色	古墳後期	
G29	平岩古墳	石室内	小玉	3.07	1.49	1.15	0.01	淡青色	古墳後期	
G30	平岩古墳	石室内	小玉	3.42	1.45	0.94	0.02	淡青色	古墳後期	
G31	平岩古墳	石室内	小玉	3.75	1.97	0.90	0.02	淡青色	古墳後期	
G32	平岩古墳	石室内	小玉	3.39-4.20	1.97	0.90	0.03	淡青色	古墳後期	
G33	平岩古墳	石室内	小玉	4.24	2.10	1.40	0.03	淡青色	古墳後期	
G34	平岩古墳	石室内	小玉	3.80	2.36	1.14	0.04	淡青色	古墳後期	
G35	平岩古墳	石室内	小玉	3.78	2.00	1.32	0.03	淡青色	古墳後期	
G36	平岩古墳	石室内	小玉	3.32	1.81	0.96	0.02	淡青色	古墳後期	
G37	平岩古墳	石室内	小玉	3.32	2.36	0.78	0.05	淡青色	古墳後期	
G38	平岩古墳	石室内	小玉	3.94	1.79	1.44	0.03	淡青色	古墳後期	
G39	平岩古墳	石室内	小玉	2.61-3.17	2.16	1.03	0.03	淡青色	古墳後期	
G40	平岩古墳	石室内	小玉	2.74	1.92	1.04	0.02	淡青色	古墳後期	
G41	平岩古墳	石室内	小玉	3.05-3.60	1.46	1.30	0.02	淡青色	古墳後期	

石製品：S

番号	出土地区	構造・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	色調	時期	備考
				最大径	最小幅	孔徑					
S 1	平岩古墳	石室内	碧玉	7.90	(15.90)	1.90	1.52	碧玉	濃緑色	古墳後期	欠損

## 付載4 新旧遺構名称対照表

保管遺物に注記された地区名・遺構名は、下記「調査時地区名」「調査時遺構名」によるものである。

現遺跡名	現遺構名	調査年次	調査時地区名	調査時遺構名	現遺跡名	現遺構名	調査年次	調査時地区名	調査時遺構名
宋光寺跡					宋光寺道跡	土塁18	H11	宋光寺2区B	Sa12土塁
基礎建物1	H10 宋光寺1区A			基礎1、軒廊堂基壇	土塁19	H11	宋光寺2区L	Sa7土塁	
基礎建物2	H10 宋光寺1区A			基礎2	土塁20	H11	宋光寺2区L	Sa8土塁	
瓦窯1	H10 宋光寺1区A			土塁4	土塁21	H11	宋光寺2区L	Sa1土塁	
瓦窯2	H10 宋光寺1区A			東部瓦窯	土塁22	H11	宋光寺2区L	Sa2土塁	
石垣1	H10 宋光寺1区A			石垣1	土塁23	H11	宋光寺2区M	Sa3土塁	
石垣2	H10 宋光寺1区A			石垣2	土塁24	H11	宋光寺2区M	Sa7土塁	
池	H10 宋光寺1区A			池状遺構	たわみ	H11	宋光寺2区M	Sa4たわみ	
道1	H10 宋光寺1区A			通路状遺構1	道1	H11	宋光寺2区K	Sa3道	
道2	H10 宋光寺1区A			通路状遺構2	道2	H11	宋光寺2区K	Sa2道	
涌水遺構	H10 宋光寺1区A			水瓶	道3	H11	宋光寺2区K	Sa1道	
盛土遺構	H10 宋光寺1区A			柱状遺構	石列1	H11	宋光寺2区K	Sa7石列	
石列	H10 宋光寺1区A			柱状遺構	石列1	H11	宋光寺2区L	Sa7石列	
立石遺構	H10 宋光寺1区A			石立石遺構	石列5	H11	宋光寺2区B	Sa17石立	
溝	H10 宋光寺1区A			溝1	石列6	H11	宋光寺2区B	Sa15溝	
立石列	H10 宋光寺1区A			立石遺構	溝7	H11	宋光寺2区B	Sa18溝	
掘立柱建物1	H11 宋光寺1区B			N209掘立柱建物	溝8	H10	宋光寺2区D	Sa31溝	
掘立柱建物2	H11 宋光寺1区B								
掘立柱建物3	H11 宋光寺1区B				②道跡	段状遺構1	H11	立道1区	Sa1, 2, 3, 4, 5段状遺構
①1	H11 宋光寺1区B					段状遺構2	H11	立道2区	Sa2溝
①2	H11 宋光寺1区B					段状遺構3	H11	立道3区	Sa3, 4溝
①3	H11 宋光寺1区B					掘立柱建物1	H11	立道1区	
①4	H11 宋光寺1区B					掘立柱建物2	H11	立道1区	
①5	H11 宋光寺1区B					掘立柱建物3	H11	立道B	
火葬場	H10 宋光寺1区A					掘立柱建物4	H10	立道B	Sa9建物
土壤1	H10 宋光寺1区B					掘立柱建物5	H11	立道B	
土壤2	H11 宋光寺1区B					掘立柱建物6	H11	立道B	
土壤3	H11 宋光寺1区B					柱穴1	H11	立道1区	
土壤4	H11 宋光寺1区B					柱穴2	H11	立道1区	
土壤5	H11 宋光寺1区B					①1	H10	立道A	Sa12段治①
土壤6	H11 宋光寺1区B					①2	H10	立道A	Sa3段治①
土壤7	H11 宋光寺1区B					①3	H10	立道A	Sa12段治①
土壤8	H11 宋光寺1区B					①4	H10	立道A	Sa4段治①
土壤9	H11 宋光寺1区B					①5	H10	立道A	Sa5段治①
土壤10	H11 宋光寺1区B					①6	H11	立道A2区	Sa5土壤
土壤11	H11 宋光寺1区B					①7	H10	立道B	Sa1①
宋光寺道路						①8	H10	立道B	Sa2①
鶴穴住居1	H11 宋光寺2区K			No 6鶴穴住居	①9	H10	立道B	Sa10鶴	
鶴穴住居2	H11 宋光寺2区K			No 1鶴穴住居	①9①	H11	立道2区	Sa16鶴上面	
段状遺構1	H11 宋光寺2区K			No 10段状遺構	①9②	H11	立道2区	Sa12鶴上面	
段状遺構2	H11 宋光寺2区K			No 5段状遺構	土壤1	H10	立道A	Sa27	
段状遺構3	H11 宋光寺2区K			No 8段状遺構	土壤2	H11	立道2区	Sa17土壤	
段状遺構4	H11 宋光寺2区K			No 10段状遺構	土壤3	H11	立道B	Sa6土壤	
段状遺構5	H11 宋光寺2区K			No 4段状遺構	土壤4	H11	立道1区	Sa3土壤	
段状遺構6	H11 宋光寺2区K			No 10段状遺構	土壤5	H11	立道1区	Sa3土壤	
掘立柱建物1	H11 宋光寺2区K				土壤6	H11	立道2区	Sa6土壤	
掘立柱建物2	H11 宋光寺2区K				土壤7	H11	立道2区	Sa7土壤	
掘立柱建物3	H11 宋光寺2区B			N209掘立柱建物	土壤8	H11	立道2区	Sa11土壤	
掘立柱建物4	H11 宋光寺2区B				土壤9	H11	立道2区	Sa9土壤	
柱穴1	H11 宋光寺2区A				土壤10	H11	立道2区	Sa10土壤	
柱穴2	H11 宋光寺2区A				土壤11	H10	立道A	Sa8土壤	
柱穴3	H11 宋光寺2区A				土壤12	H11	立道B	Sa17土壤	
柱穴4	H11 宋光寺2区A				土壤13	H11	立道B	Sa13土壤	
土壤1	H11 宋光寺2区K			No 8土壤	土壤14	H11	立道B	Sa12土壤	
土壤2	H11 宋光寺2区K			No 9土壤	土壤15	H11	立道B	Sa14土壤	
土壤3	H11 宋光寺2区K			No 7土壤	土壤16	H10	立道B	Sa5土壤	
土壤4	H10 宋光寺2区D			No 19土壤	土壤17	H10	立道B	Sa6土壤	
土壤5	H10 宋光寺2区M			No 11埋納容器	土壤18	H10	立道B	Sa3土壤	
土壤6	H11 宋光寺2区A			No 4土壤	道1	H10	立道A	Sa10溝	
土壤7	H11 宋光寺2区A			No 2土壤	道2	H10	立道A	Sa1溝	
土壤8	H11 宋光寺2区A			No 3土壤	道3	H11	立道2区	Sa11溝	
土壤9	H11 宋光寺2区A			No 1土壤	道4	H11	立道2区	Sa13, 14溝	
土壤10	H11 宋光寺2区A			No 5土壤	道5	H11	立道2区	Sa15溝	
土壤11	H11 宋光寺2区A			No 13土壤	道6	H10	立道A	Sa7溝	
土壤12	H11 宋光寺2区A			No 8土壤	道7	H11	立道B	Sa6溝	
土壤13	H11 宋光寺2区B			No 10土壤	道8	H11	立道B	Sa8溝	
土壤14	H11 宋光寺2区B			No 8土壤	道9	H11	立道B	Sa20溝	
土壤15	H11 宋光寺2区B			No 3土壤	道10	H11	立道B	Sa9溝	
土壤16	H11 宋光寺2区B			No 5土壤	道11	H11	立道B	Sa10溝	
土壤17	H11 宋光寺2区B			No 4土壤	道12	H11	立道B	Sa5古道	

## 図 版



- |       |           |
|-------|-----------|
| 来光寺跡  | 図版1～図版14  |
| 来光寺遺跡 | 図版15～図版22 |
| 立道遺跡  | 図版22～図版30 |
| 平岩古墳  | 図版31～図版37 |



来光寺跡



1 来光寺跡ほか遠景（西から）



2 基壇建物1・2周辺（上が南）

図版 2

来光寺跡



1 基壇建物 1・2周辺（東から）



2 基壇建物 1・2周辺（南東から）

来光寺跡



1 基壇建物 1・瓦窯 1ほか（南から）



2 基壇建物 2・石組塀 1ほか（南から）

図版 4

来光寺跡



1 石組跡 2 (南西から)



2 道 2周辺 (北東から)



3 湧水遺構 (西から)

来光寺跡



図版 6

来光寺跡



1 立石遺構（北から）



2 火葬墓（北から）

## 来光寺跡



1 石列（北から）



2 炉1（東から）



3 炉2（西から）



4 炉3（南から）



5 土壤1（南から）



6 土壤2（東から）



7 土壤5（西から）



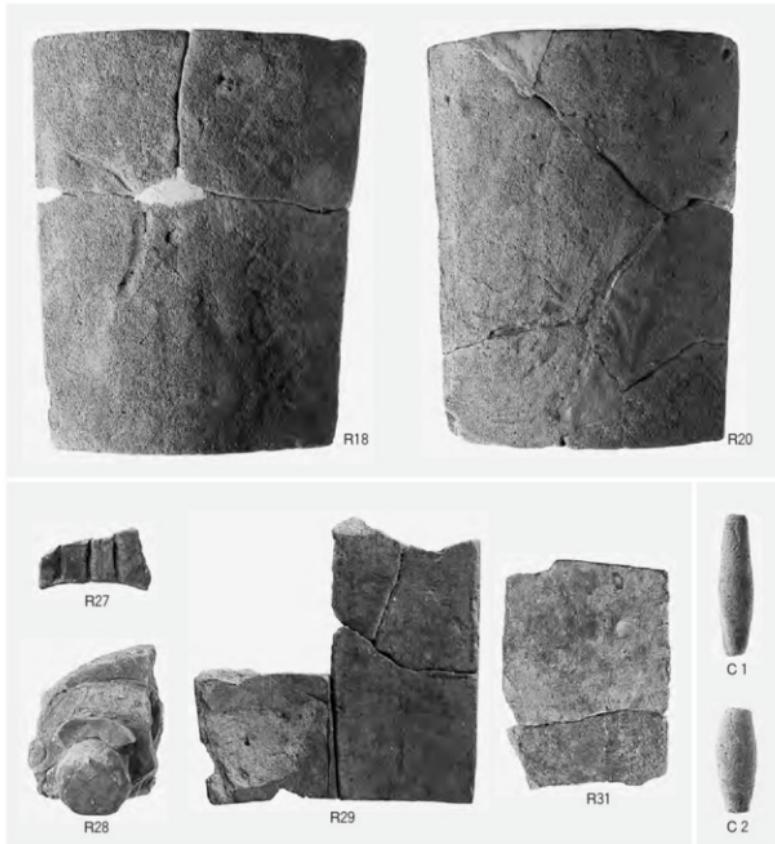
8 D区柱穴群（北から）

図版 8

来光寺跡



瓦溜 1 出土遺物①



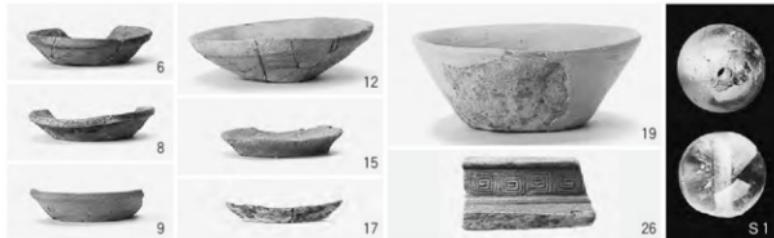
1 瓦溜 1 出土遺物②



2 軒丸瓦B類瓦當の主な范傷痕

図版10

来光寺跡



1 瓦溜1出土遺物③



2 瓦溜2出土遺物



火葬墓および周辺出土遺物

図版12

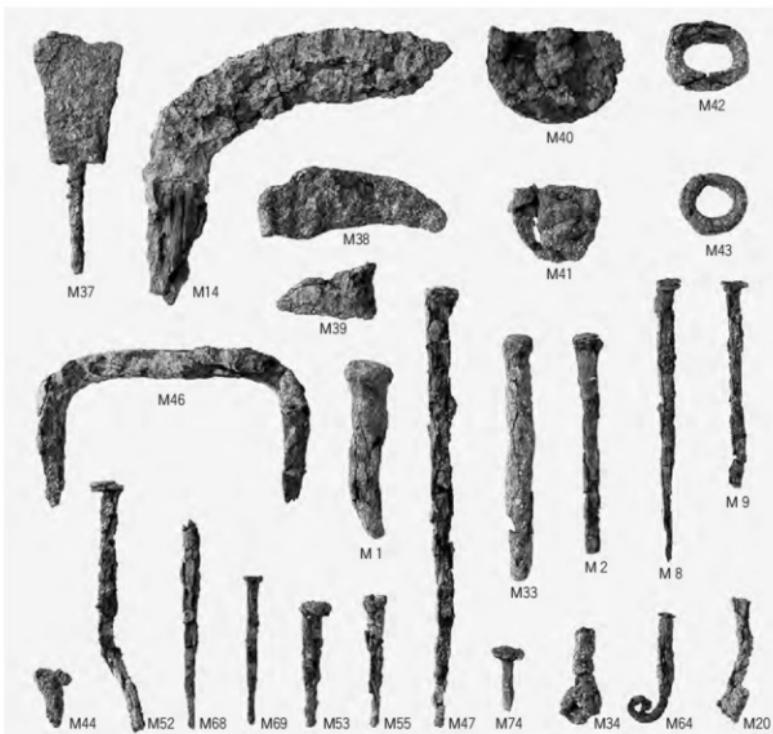
来光寺跡



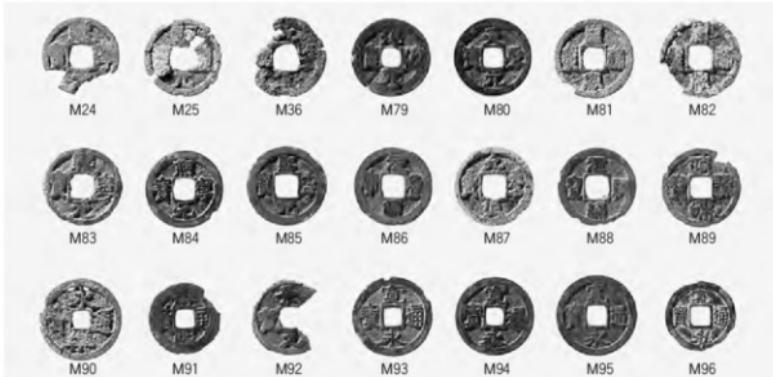
遺構出土遺物

(55・56：池 57：道2 59・62～64：溝 78・S2：土壤1 81：土壤4 82・83：土壤5)

## 来光寺跡



1 鉄製品 (M 1・M 2: 基壇建物 2 M 8・M 9: 瓦溜 1 M 14: 瓦溜 2 M 20: 立石遺構 M 33・M 34: 土壙 5)



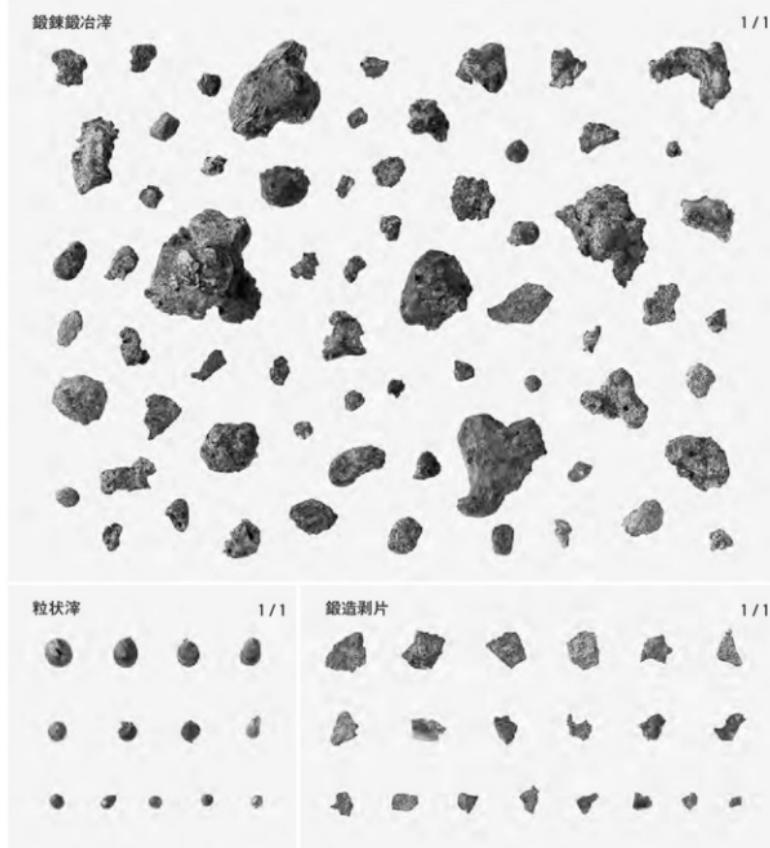
2 銅銭 (M24・M25: 挖立柱建物 1 M36: 土壙 5)

図版14

来光寺跡



1 砥石・ガラス玉



2 土壤5出土鍛冶関連遺物

来光寺遺跡

1 竪穴住居 1  
(北西から)



2 竪穴住居 2  
(北西から)



3 段状遺構 2・5  
(北から)



図版16

来光寺遺跡



1 土壌1（南から）



2 土壌2（北東から）



3 土壌4（北西から）

来光寺遺跡



1 挖立柱建物 1周辺（南西から）



2 挖立柱建物 3周辺（南東から）

図版18

来光寺遺跡



1 土壙 5 (北西から)



2 土壙 5 遺物出土状況 (北西から)

## 来光寺遺跡



1 炉（北西から）



2 土壌7（南東から）



3 土壌10（南から）



4 土壌12（北西から）



5 土壌15（南東から）



6 溝1～3・柱穴列3（南西から）



7 溝7（北から）



8 溝8（北から）

図版20

来光寺遺跡

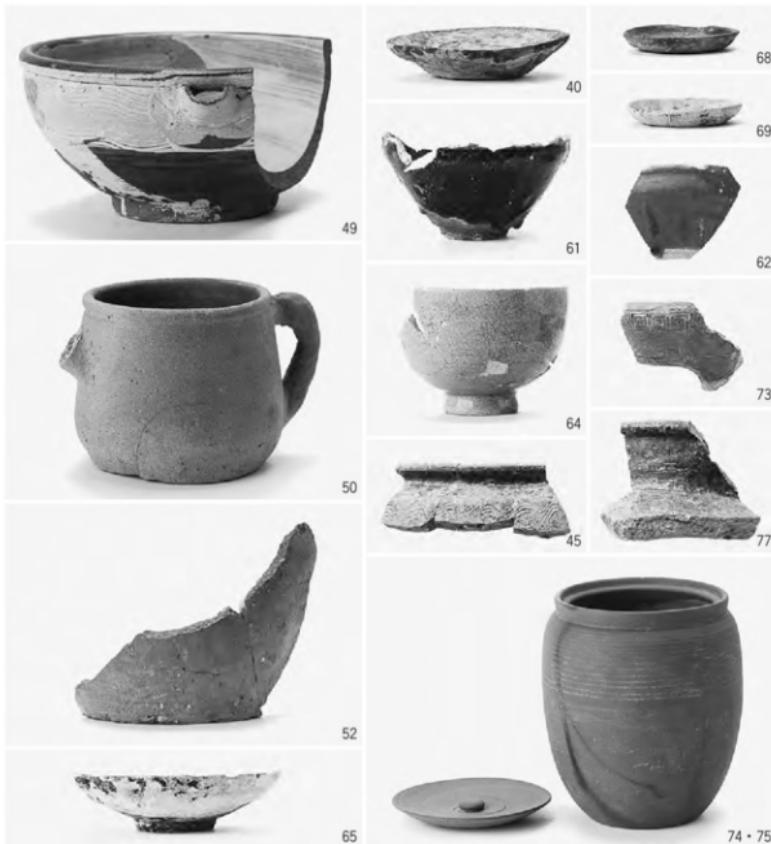


弥生時代の遺物 (1・3~5: 竪穴住居1 7: 竪穴住居2)

## 来光寺遺跡

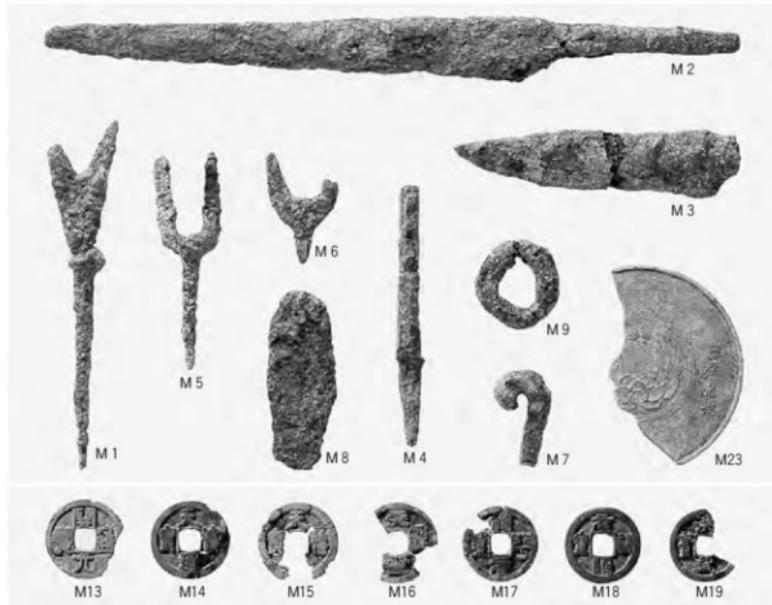


1 古代の土器（土壤4）

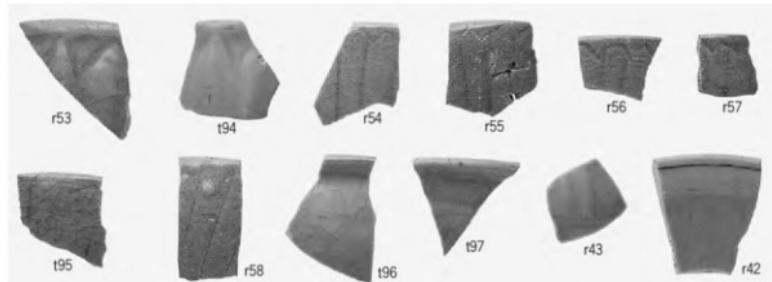
2 中・近世の土器類 (40: 捜立柱建物1 45: 捜立柱建物4 49・50: 土壤5 52: たわみ)  
65: 土壤5

図版22

来光寺遺跡・立道遺跡



1 鉄製品・銅製品 (M1 : 据立柱建物2)



2 来光寺遺跡・立道遺跡出土中国産青磁

r:来光寺遺跡 t:立道遺跡

立道遺跡

1 段状遺構 1  
(北西から)



2 炉 1 (南東から)



3 土壙 3 (西から)



図版24

立道遺跡



1 挖立柱建物 1 (南西から)



2 挖立柱建物 4 周辺 (北東から)

## 立道遺跡



1 堀立柱建物 5・6（西から）



2 段状遺構 2・3周辺（南西から）



3 炉 6（北西から）



4 炉 7（南東から）



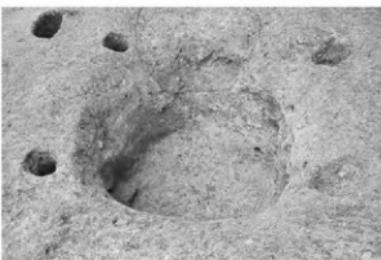
5 炉 9（北東から）



6 土壌 8（東から）



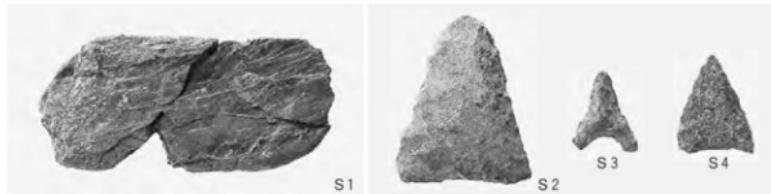
7 土壌 12（北西から）



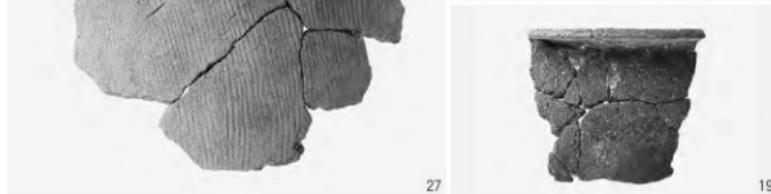
8 土壌 16（南西から）

図版26

立道遺跡



1 縄文・弥生時代の遺物

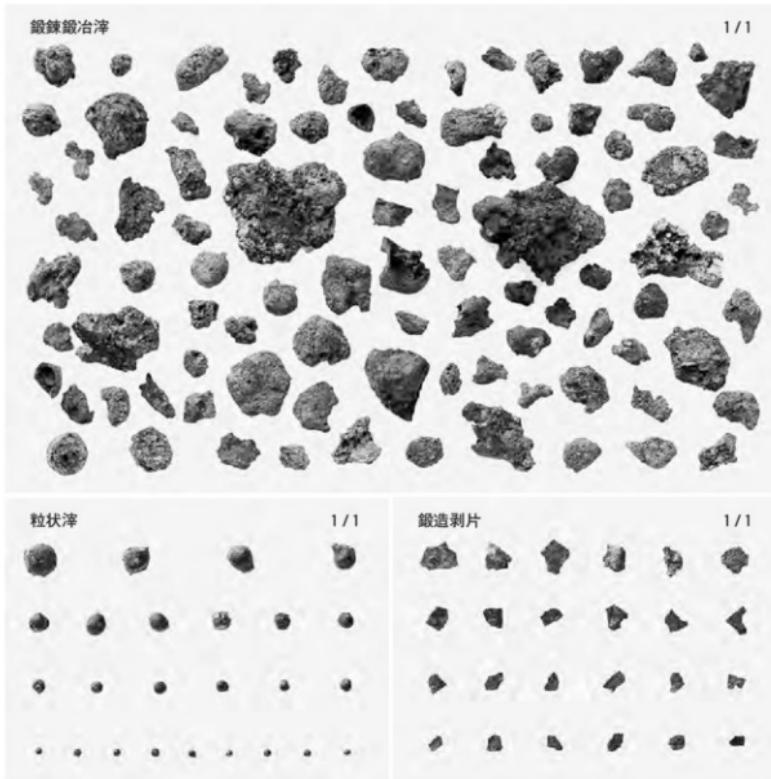


2 古代の土器① (15・16・19:溝1 20~24・27:溝2)

## 立道遺跡



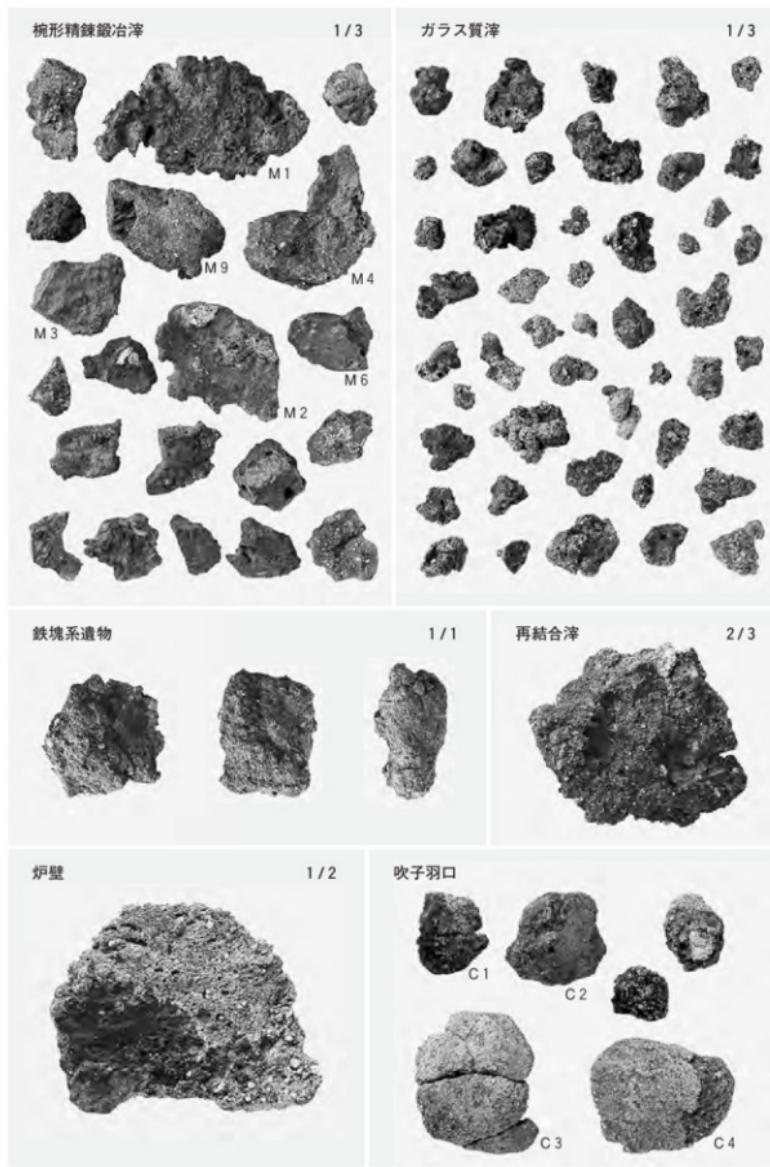
1 古代の土器② (28:土壤1 43:土壤2 48:土壤3)



2 古代の小鐵治関連遺物 (ピット出土)

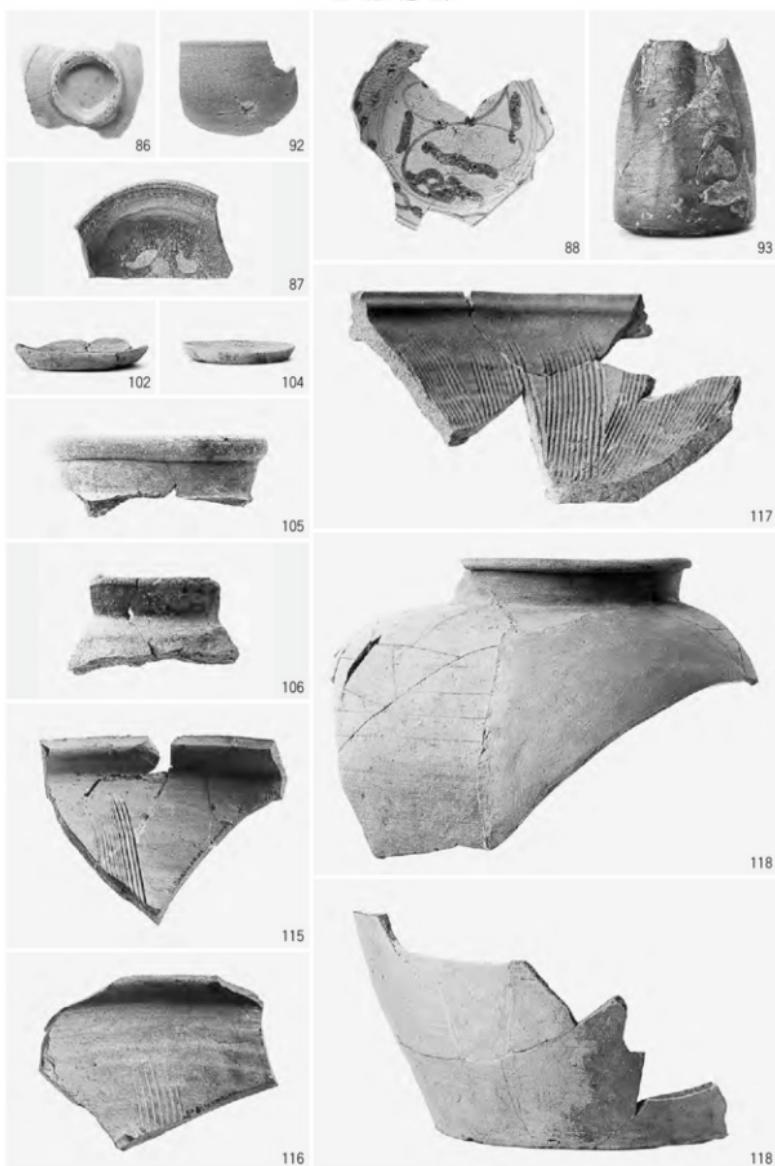
図版28

立道遺跡



土壤 2 出土大鋳冶関連遺物

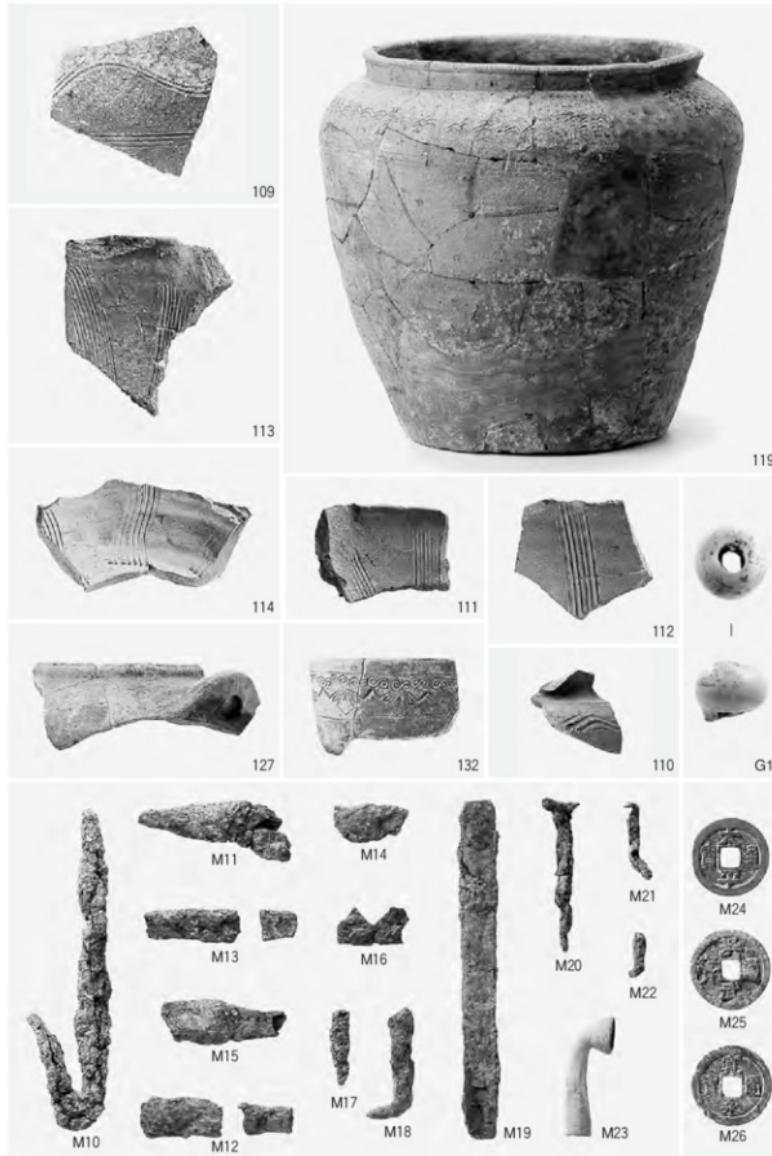
## 立道遺跡



中・近世の遺物① (86~88: 土壌16 92・93: 土壌18)

図版30

立道遺跡



中・近世の遺物②

平岩古墳



1 古墳遠景（南から）



2 横穴式石室（西から）

図版32

平岩古墳



古墳全景（西から）

平岩古墳

1 墳丘内の列石  
(北から)



2 石室南側壁  
(北西から)

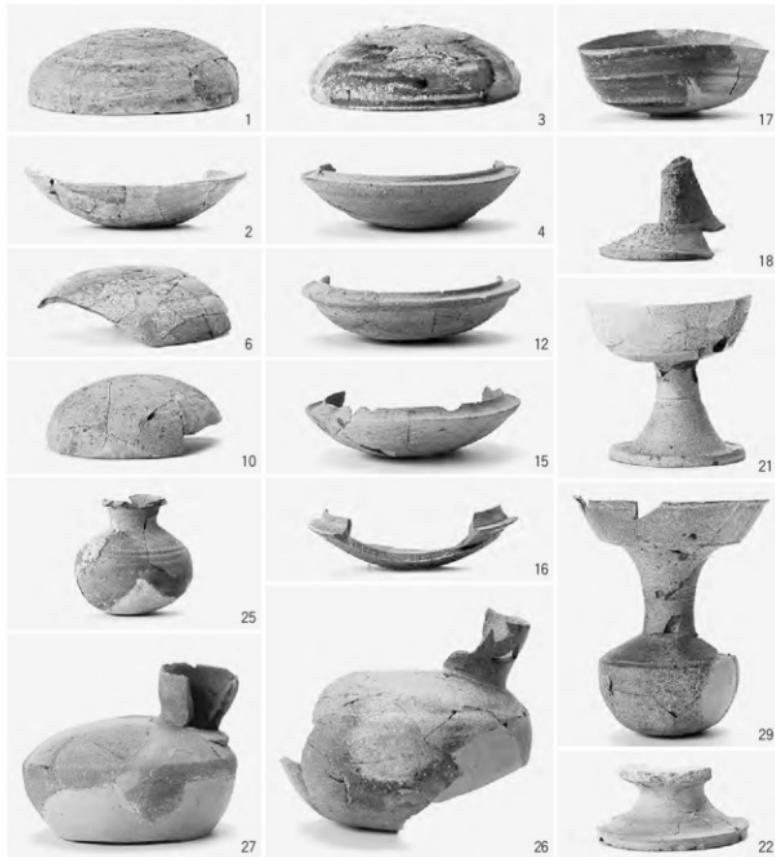


3 石室北側壁  
(南西から)

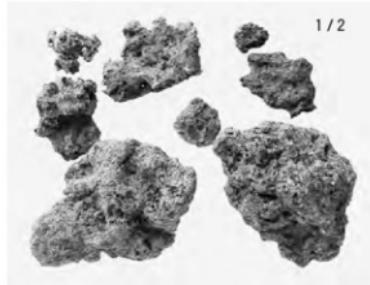


図版34

平岩古墳

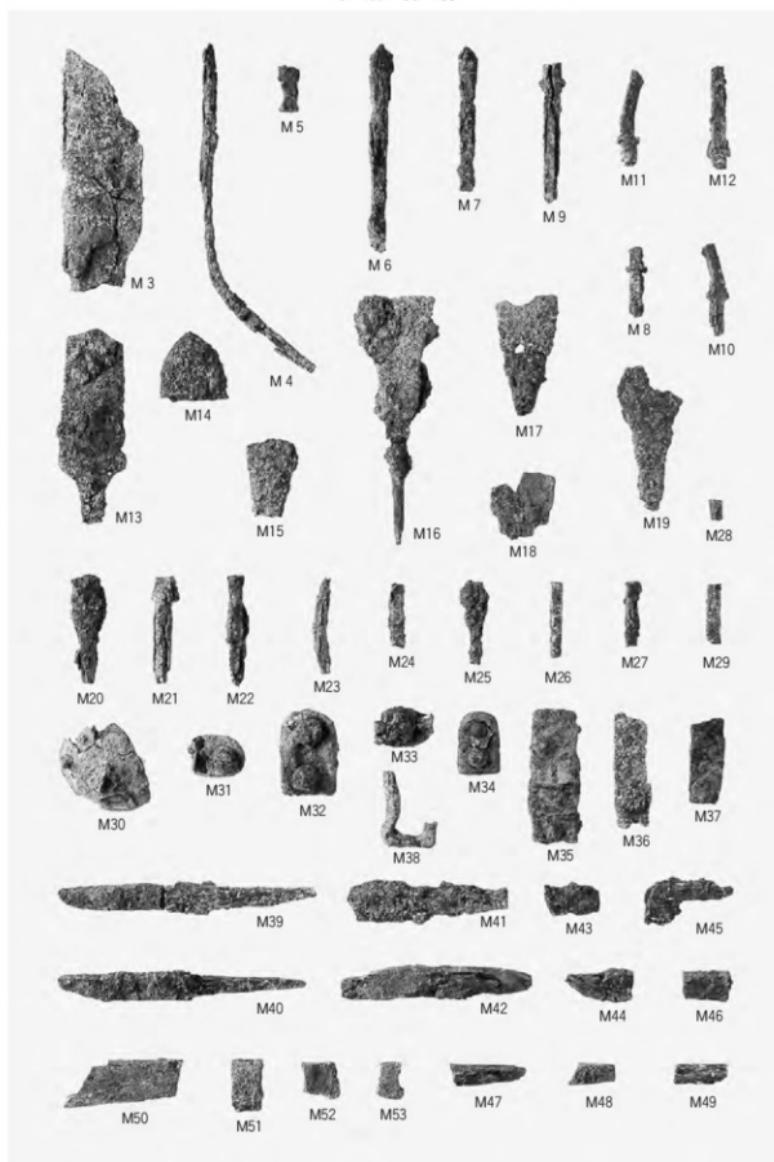


1 須恵器



2 鉄滓

## 平 岩 古 墓



武器・馬具・刀子

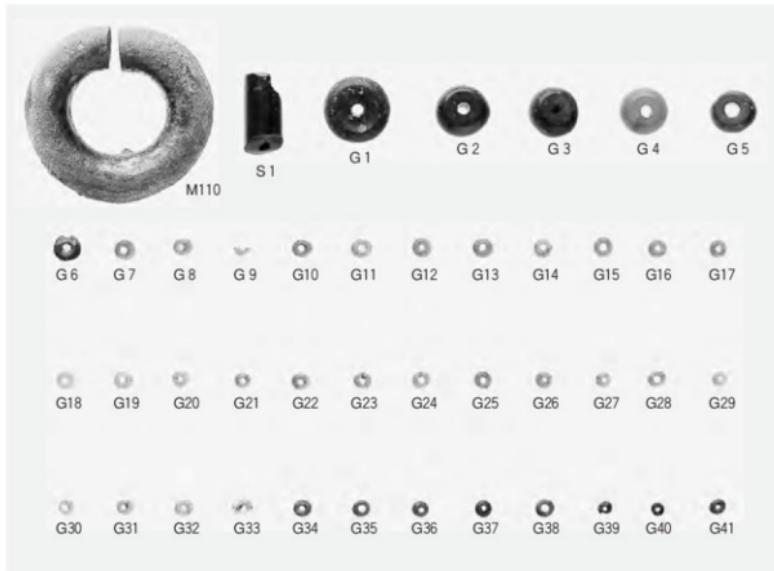
図版36

平 岩 古 墓



鉄釘ほか

## 平 岩 古 墓



装身具

# 報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 卷次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行機関 所在地 発行年月日	らいこうじあと・らいこうじいせき・たちみちいせき・ひらいわこふん 来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡・平岩古墳 美作岡山道路建設に伴う発掘調査 1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 199 尾上元規・二宮治夫・内藤善史・澤山孝之・大澤正己 岡山県古代吉備文化財センター 〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 岡山県教育委員会 〒700-8570 岡山市内山下2・4・6 西暦2006年2月28日						
ふりがな 所取遺跡名 ふりがな 所 在 地	ふりがな 市町村 所 在 地	コード 遺 跡 番 号	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
らいこうじあと 来光寺跡	あかいわしこうじ 赤磐市光木	332135 333250167	34° 53' 15"	134° 03' 43"	1998.9.1 ~1999.1.14 1999.4.1 ~1999.6.15	7,364	美作岡山 道路建設
らいこうじいせき 来光寺遺跡	あかいわしこうじ 赤磐市光木	332135 333250167	34° 53' 18"	134° 03' 49"	1998.9.1 ~1999.3.31 1999.5.12 ~1999.10.22		
たてみちいせき 立道遺跡	あかいわしこうじ 赤磐市光木	332135 333250160 333250162	34° 53' 23"	134° 03' 49"	1998.12.3 ~1999.3.12 1999.10.21 ~2000.3.31	4,937	
ひらいわこふん 平岩古墳	あかいわこふん 赤磐市石	332135 333250157	34° 52' 44"	134° 03' 28"	1999.12.6 ~2000.2.25		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
来光寺跡	寺院 集落	中・近世	基壇建物2・瓦溜2・ 道2・掘立柱建物3・ 池1・炉5・火葬墓1・ 立て石列1・石組柵2・ 盛土遺構1・立て石遺構1・ 石列1・湧水遺構1	須恵器・土師器・瓦・ 陶磁器・砥石・土鍤・玉・ 鉄器・銅錢・鉄津	中世の仏堂と瓦		
来光寺遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居2・段状遺構4	弥生土器			
		古 代	段状遺構1	須恵器・土師器			
		中・近世	掘立柱建物4・炉1	須恵器・土師器・陶磁器・ 鉄器・銅錢			
立道遺跡	集落	古 代	段状遺構1・炉5	須恵器・土師器・鉄津・ 吹子羽口	古代の鍛冶遺構		
		中・近世	掘立柱建物6・ 段状遺構2・炉6	須恵器・土師器・陶磁器・ 鉄器・玉・銅錢			
平岩古墳	古墳	古墳時代	古墳1	須恵器・土師器・玉・武器・ 馬具・釘・銀環	大形横穴式石室 銀象嵌刀装具		

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 199

来光寺跡 来光寺遺跡

立道遺跡 平岩古墳

美作岡山道路建設に伴う発掘調査 1

平成18年2月28日 印刷

平成18年2月28日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山県岡山市西花房1325-3

発行 岡山県教育委員会  
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷 株式会社 中野コロタイプ  
岡山県岡山市玉柏390



